
Muv-Luv ALTERNATIVE ~ 救済 ~

ヨシヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v A L T E R N A T I V E 〈救済〉

【Nコード】

N 0 8 8 9 L

【作者名】

ヨシヒロ

【あらすじ】

平行世界…。無限に等しい世界の中で、ある一つの世界が崩壊を起こしていた…。

これは、マブラヴ オルタネイティブの二次創作であり、M u v - L u v i f の題名を変えたものです。

《作者からの連絡です》

現在、救済はT E編に突入しております。

若干ネタバレかもしれませんが、かなりオリジナルなT Eになりそうなので、此方で全てが書き終わるまで更新をしないと勝手ながら決定しました。

理由としては、最後の最後で話を変えかねない可能性が非常に高いからです。

番外編のような形で投稿する可能性はありますが、かなりの不定期になるかと…。

作者の都合で決めてしまい、誠に申し訳ありません！ですが、必ずや更新しますので、それまでお待ちください。

第一話（修正）

「…これは、いくら何でも酷すぎるよ…」

僕は今、友達からやってみると勧められたゲーム、マヴラヴオルタネイティブをやっている。友達曰く、「中身はちとグロテスクだし、鬱になるシーンもあるけど基本面白い」ということでやってみた所……はまった。はまってしまいました。近年稀に見る程の大ヒットです。

佐渡島の戦いも終わった所で時計を見ると、既に一時を回っていた。ヤバイ、大学は休みでもバイトはあったんだ！！

僕はセーブを済ませると、直ぐにパソコンの電源を落として布団に潜り込んだ。

【……………】

ん？

【…ねがい…………タケ……ち…………を…………けて】

何だ、何で声が聞こえるんだ？僕は眠ったはずなのに…。

『ほう……。この声が聞こえるのかい、主は？』

ッ！？ 誰！？

『おっと、これは失礼した。我は………そうだな、主らの言うところの世界の管理者といったところかな？』

世界の…管理者？まさか、これは只の夢…

『違う。これは現実…ではないが本当の事だ。夢であればこのような会話が成り立つわけもあるまい？まあ、このような話、いきなり言われて信じるとは無理があるだろう。まず、これを見るがよい』

管理者と名乗った存在が何かを振るつたような気配がした。すると、次の瞬間には僕の目の前に地球が現れた。それもいくつもの…。

『これは我が管理している世界だ。まあ、世界と言っても数は無限に等しくてな、我は地球を中心とした世界を担当している。故に管理者と名乗らせてもらった。…さて、これで信じてもらえたかな、矢羽田君？』

「！？僕の…名前…。今の話、本当なんですね？」

『ああ。先程から本当だと言っていたであろうが…。まあよい。理解ができたところで、主にやってもらいたい事がある』

「…僕に、ですか？」

『ああ。実は我が管理している世界の一つがおかしくなってしまうてな、時が進まなくなってしまったのだ。主にはその原因解明、それと原因の排除を頼みたいのだ』

「…時間がループしている世界、ですか？ …まさかその世界、

宇宙人からの侵略を受けて人類滅亡の危機に晒されている世界では…？」

『ほう、よく知っておるな！主の言う通り、今言った世界はB E

TAと呼ばれる生物によって滅びかけておるのだ。滅びかけているのが原因か、はたまた別の管理者の介入か…。こちらが調べようにも世界には直接干渉出来ぬのだ。だから…」

「僕にやって欲しい、と…」

BETAの単語で確信した。間違いなくこれはマヴラヴの世界だ。でも、マヴラヴの世界があるなんて…。けど、今はそれどころじゃない。マヴラヴの話に介入出来るんだ。あの悲惨な物語を変えられるなら、やりたい！！でもその前に…

「管理者さん、その仕事受けてもいいですが、僕は一般人。特別力が強いわけでも、頭が良いわけでもありません」

「…つまり、何かしらの手助け、または力を与えよ、ということか？」

「はい」

「それなら任せよ。主には身体強化、治癒力強化、戦術機の操縦その他諸々は初めから授ける予定だった。それに、後一つ二つなら余程の事がない限り叶えてやれる。…どうする？やるか、やらぬか。全てはお主次第だ」

何を今更、ですよ。僕の答えは決まっています、管理者さん。

「やらせて下さい。その大役、僕が必ず成し遂げて見せます！！」

『……………』

僕が言い切ってから暫く、管理者さんは黙りになってしまった。…失敗しちゃった？

『…わかった。主に任せるぞ。…世界を頼む』

「……………はい！」

『よし、では主は何か他に必要な力はあるか？不老不死や、命を弄ることは出来ぬが、それ以外なら基本何でも叶えよう。我は主を気に入ったからな』

あ、ラッキー！これならアレとアレとコレを持っていける！！…かも。

「あの…管理者さん。今から行く世界に他世界の機動兵器を持つていくのは可能ですか？」

『……まあ、あまりよくはないのだが……まあ主なら大丈夫であろう。因みにどの兵器を持ち込みたいのだ？』

「えっと、ガンダムSEEDのハイペリオン核動力機、その改造パーツと予備パーツです。向こうで最低でも十機ぐらいは組み立てられるぐらいの。あと、そのハイペリオンを整備、組み立て出来る戦艦を」

『ちよつと待て………多過ぎだ馬鹿者。それでは残された技術で新たな争いの火種となる。ハイペリオンは一機。他はエース専用のワンオフ機以外なら何機かは許そう』

「ですよへえ…。わかりまし……。つて、ええええ！？何でハイペリオン知ってるのさ！？」

僕が驚いていると、管理者は深い深～いたため息をおつきになられました。何でさ？

『…はあ……。主は話を聞いていなかったのか？我は、地球を中心とした、世界を管理しているのだぞ？空想の話であろうが世界は世界。管理者が居るのは当然のことだ。当然、管理している以上その世界の事は全て知っておる』

管理者の冷たい視線が…。よ、予想外の事がわかって混乱しただ

けですよ！

『して、どうする？量産機ならば先の倍であろうと可能だが？』

「…では、汎用性が高いウインダムを三機、遠距離砲撃戦用にオリジナルでヴェルバスターの簡易量産機を造って、それを三機、近・中距離戦用にストライクEのノワールストライカー付きとI・W・S・P付きをそれぞれ二機づつ。あ、あとできればストライカーパックに消耗パーツも一通り……できますか？」

しばし無言の管理者さん。く、空気が重い…！

『…………ギリギリだな。戦艦の武装を一つ削ればなんとかなる。…それに主が最後の救い手、これくらいは容易い。それに、どの機体も予備パーツ込みでの数であろう？』

流石は管理者、見抜いていたか。それにしても最後の救い手…か。他にも何人も送ったんだろう……。ん？そういえば『地球を中心とした世界を管理している』って言ってたから…もしかして…！

「無理言つてごめんなさい。それで、あと幾つなら力を頂けますか？」

『構わぬ。本当にあの世界だけは消したくないのだよ…。そうだな、物によつては一つで、力を小さくしても二つが限界だ。何にする？』

『まず、とある魔術』に出てくる能力を一通り…」

『無理だ。それが一つの願いなら可能だが二つの枠で見ているなら大きすぎる。付与できても三つが限界だ』

「…では三つで。能力は、テレポート空間移動、アクセラレータ一方通行、精神感応・テレパス念話、をお願いします」

『…わかった。して、残りは？あまり時間が残されていないのだ。』

急いでくれ』

「わかりました。最後の一つは、僕の世界から物を呼び寄せる能力です。向こうは合成食料を使っているせいで、ご飯が最悪らしいので…。勿論、武器弾薬や資材も出しますが、戦術機には使えないと思うので食料・娯楽品がメインです」

『なら、大丈夫だ。よし、準備は全て整った。あの世界を頼む。』

消滅させるには惜しい世界だからな』

「はい、必ず…！」

そして、視界が白一色に染まったと同時に、僕・矢羽田宗一・は世界から消え、マヴラヴの世界に旅立った。

第一話（修正）（後書き）

感想、評価お待ちしておりますm（――）m

12月12日、修正しました。

第二話（修正）

「……………」

『艦長、いつまで寝ているのですか？早く起きてください！』

「う…………ん？……………あれ？ここどこ？　　ってそれより今の声は！？」

僕は、目が覚めると白い金属でできた見知らぬ部屋にいました。
ここはあれを言うべきなのかな？異世界トリップ定番の…。

『下らない事を考えていないで早くブリッジに来てください！』
「心を読んだ！？……………って、ブリッジ？　　ああ、ここってもしかして…」

『そう、管理者が用意した戦艦です。今艦長がいらっしゃるのは艦長室ですから、至急ブリッジに来てください。回りを囲まれているんですよ、BETAに』

……………は！？

「ちよつ、何でいきなり！？」

『この戦艦が高度な電子コンピューターでできているからでしょう。ひとまずディスプレインフィールドで対処していますが、このままでは何もできません。至急ブリッジにお越しください。ナビゲートはハ口を使って表示します』

「わかった！直ぐ行く！！」

部屋から出たら、すぐ目の前にハ口がいて地図が出てきて驚いた

けど、地図の指示通りにアークエンジェルに似た艦内を走り出す。一分位でブリッジに着けた。

『ようこそ艦長、戦艦「ガーディアン」へ。歓迎致します。私はAIの「ミスリル」。この艦を統括管理しています。今後ともよろしく願います』

ガーディアン：守護者か。世界を救おうとしている僕たちにはある意味ピッタリの名前だ。

「うん、こっちこそよろしく！　じゃあ早速、BETAに囲まれてるって言うてたけど、モニターに出してくれる？」

『了解。正面のメインモニターをご覧ください』

ブオン、という音と共にモニターが起動し、二、三秒したら映像が映し出された。

「……………」

……ガーディアンのブリッジはプトレマイオスと同じで、五人いれば艦は動かせるようだ。座席が五つしかないし。エンジンは相転位エンジンで、大気圏内でも安定した出力を得られるように改造されていて、艦のコントロールのほとんどはミスリルがやってくれているらしい。外見はアークエンジェルのリニアカノンがナデシコのフィールド・ブレードになっていて、MSのハッチは船体本部にプ

トレマイオスのリニアカタパルトを増設して三つ。武装はローエン
グリン二門、ゴッドフリート二門、イーゲルシュテルンがビームバ
ルカンに換装され艦底部も含めれば二十四門、艦尾のミサイル発射
管が左右十二基ずつの計二十四基。ヘルダートの十六基を含めれば
四十基だ。……………現実逃避はやめよう、うん。

態と逸らしていた視線をモニターに移す。そこには視界の八割を
埋め尽くすBETAの大群が映っていた。…気持ち悪いです。現実
逃避したくなるのわかるよね!?

デイストーションフィールドを破ろうとして突進してくる突撃級
は跳ね返され、それ乗り越えて進んでくる戦車級は喰い破ろうと
してフィールドに触れるも、フィールドに巻き込まれて地面に押し
つぶされた。要撃級は豪腕でフィールドを殴っているが効果はなく、
逆に腕を地面にぶつけて戦車級を潰している個体までいる。そして
更に後方には要塞級が何体も……………って、あれ?

「?何でデイストーションフィールド内に撃震二機と陽炎がもあ
るの?よく見たらプチモビみたいなのもちらほらと…」

『降下したときに戦闘中だった部隊です。既にあの状態ですて、
戦車級に集られて撃墜寸前だった所を、ハ口達が操るプチモビ部隊
で救助しフィールドの中に入れて保護していました』

「そうだったのか…。じゃあ急いで救助しないと! あ、ディ
ストーションフィールドって後どのくらい保つ?」

『このままの状態ですと一時間でフィールドは消滅。解除せずに
逃げれば三十分は飛行可能です』

「…半永久機関の相転移エンジンがあるのにどうしてそれぐらい
しか保たないのさ!?!」

『まず、相転位エンジンが大気圏内であるので出力不足だからで
す。高度を取れば問題ないのですが、今はその分すら出力できませ
ん。要は未調整が原因ですね』

な、何という中途半端な…！せめて調整済みのを付けてください
よ管理者！

『幸いこの艦は緊急用として核エンジンも搭載されています。艦長のハイペリオンの予備エンジンも加えればこの戦闘を乗り越えられる程度の出力は確保できます』

「わかった。もし無ければハイペリオンのを外して接続して！」

『……確認しました。コンテナ内に核エンジンを確認。すぐに接続します』

「よし。じゃあ後、外に出てるプチモビ達で戦術機達を回収。無理だったらダガーを自動制御で出して手伝わせて。そして回収完了後に浮上。光線級からのレーザー照射が来たらすぐに高度を下げてデイストーションフィールドを展開。イーゲルシュテルンは常時起動させてね。僕一人だとあの数はキツイから……。最後に僕のハイペリオンをリニアカタパルトに準備しておいて」

『了解。ですが、回収作業はハ口達のプチモビだけで十分でしょう。何より、彼らがやる気満々ですし、MSは何処に監視の目があるのかわからない以上、その姿を晒すのは得策ではありません。それと艦長は出撃前に撃震達のパイロットを救助してあげてください。ハ口達では新種のBETAと勘違いされる可能性が高いですから。では、準備に入ります……。核エンジン接続開始。……完了。正常に稼働中…出力安定…』

…うーん、やっぱりまだまだなあ。ミスリルにたくさん直されてしまった…。

おっと、ボンヤリしてる時間は無いんだった！ミスリルが準備を整えている間に僕もハンガーに向かわないと！（もちろん案内にハ口を使って）途中のロッカーでパイロットスーツに着替えて……ん？水色のハ口がこっちに飛んできた。

「戰術機全機回收完了，回收完了！」

「へえ、流石は八口！仕事が速いなあ」

「ホメラレタ！
ホメラレタ！」

ああ、こうして嬉しそうに飛び跳ねている八口達を見ると心が和む……。　　つて、今はそれより！

「うん、よしよし。じゃああの撃震からパイロット達を出してあげようか。人がいないと混乱しそうだから僕も手伝うよ」

でも口調は優しいまま。甘いなあ僕。

了解！
了解！

水色ハ口が答えると、すぐに色とりどりのハ口達が撃震に取り付いてハツチ解除にかかる。

「ダメ！ ダメ！ はっちガ 歪ンデテ 開閉不能 開閉不能！」

「じゃあカッターでコックピット周辺を切り裂いて！」

了解！
了解！

!!!

カッターが火花を撒き散らしながら第一世代機特有の頑丈な装甲を切り裂いていく。そして切り裂いた装甲をプチモビの腕力に物を言わせてこじ開けた…途端

[illegible]

一番損傷の酷かった機体から女性の絶叫が格納庫に響き渡った。
…そうだった。動かない機体に閉じ込められて、しかも周りはBETAだらけ。恐怖で恐慌状態に陥っててもおかしくないし、装甲を剥ぐ音をBETAだと勘違いしたんだ。こじ開ける前に声をかけるべきだったんだ……。

っ！後悔は後！今はパイロットを落ち着けないと……！
そう思い、こじ開けたハッチからコックピットに入り、泣き叫んでいる女性を安心させるよう力一杯抱きしめる。

「落ち着いて、落ち着いて下さい！！僕は味方です、BETAはもう居ません！！貴女は助かったんです！！！！だから落ち着いて……」

僕の声が聞こえたのか、女性はビクツ、と一度体を震わして僕の顔を見る。泣き叫ぶ事を止め、涙で濡れた瞳を僕に向けてきた。

「わ、わた、し……助かった……の？」

「ええ！！ギリギリでしたが間に合ったんです！後は僕達に任せて、今は休んでください」

「……うつ……あああ……！あああ……ああっ……！！うわあああああ……ん！！」

助かった事が余程嬉しかったのか、女性は二分程泣いてしまった。泣き止むと、唐突に意識を失ってしまい、彼女を八口に任せて他の撃震の。コックピットを覗いていく。

どうやら意識があつたのはさっきの女性だけみたいで、残りの二人は気絶していた。…ある意味この二人は幸せだったのかもしれない。意識があればさっきの女性みたいに恐慌状態になっていたかもしれないんだから……。

残りの二人も八口達に任せて僕は中央リニアカタパルトに向かう。そこには固定用のハンガーに一機だけ佇んでいる、白と赤の装甲を輝かせた機体：ハイペリオンが立っていた。機体に取り込みハイペリオンを起動させる。

機体は正常に起動し、問題は全く無かった。核エンジンも正常。ヴォアチュール・リュミエールも完璧。武装はザスタバ・ステイグマト二丁とロムテクニカが五本、増設した頭部イーゲルシュテルン二門、フォルファントリー二門の重武装だ。接近戦に弱い所はあるけど、基本スペックは全て武御雷ですら上回っている。

『艦長、浮上が完了しました。ですが、着陸時にディストーションフィールドを使い過ぎたせいでコンデンサー内のエネルギーが不足してしまい、展開していたミラージコロイドが艦全体ではなく上部だけの展開となりました。ご容赦下さい。尚、今のところ光線級によるレーザー照射はありません。底部イーゲルシュテルンでBETAを排除しながら移動中です』

「わかった。ミラージコロイドもあつたんだ……。（つくづく何でもありな戦艦だな）じゃあガーディアンはそのまま海：日本海に向かつて脱出。僕は出撃してBETAを叩く。……あんなことをしたBETAを許す訳にはいかない！！」

『……そうですね……。ガーディアンはイーゲルシュテルンでBETAを排除しながら海沿いまで前進します。艦長、後武運を……！』

「ありがとう。矢羽田　宗一、スーパーハイペリオン、出撃ます！！」

こうして、僕がこの世界に来てから初めてとなる戦闘が始まった。

第三話（修正）

ガーディアンから発進して直ぐ、周囲を確認するため機体を滞空させる。

今はまだガーディアンのディストーションフィールド内にいるから安全だけど、一步フィールドから出れば瞬く間にBETAに囲まれてやられてしまう。いくら機体が高性能でも、圧倒的な物量差の前では無意味なのだ。（それ以前に僕が戦闘に関してド素人だというのも原因の一つだったり…。）まあ、今のままなら、だけど…。

「うーん、いくらガーディアンに相転移エンジンと核エンジンがあるとは言え、出力不足があるのにバンバン使っている以上、長期戦は危ない…。かといってイーゲルシュテルンを止めるわけにはいかないし…。ま、ここはMSの力を見せてもらおうということでは…。ミスリル！」

『なんでしょうか艦長？』

「ジェットストライカーウィンドムとI・W・S・PストライクEをそれぞれ一機ずつ自動制御で出して。オートパイロットでもある程度の戦果は期待できる筈だし、情けないけどやっぱり僕一機だと危ないと思うんだ…」

『了解しました。無人機の制御は私も手伝いましょう』

「ありがとうございます！じゃ、発進が終わり次第戦闘を開始する！」

ミスリルとの通信を切ると、直ぐにガーディアンの左右のカタパルトが開き、ウィンドムとストライクEが出てくる。それを横目で確認した僕はペダルを踏みスラスターの出力を上げる。そして溜め込んだ力を一気に解放し、ハイペリオンを凄まじいスピードで目の前に展開しているBETAに突っ込ませた！

「うおりやあああ!!」

気合い一閃、とばかりに両手に持ったザスタバ・ステイグマトを撃ちまくる。発射されたビームは小さいながらもモース硬度十五を超える要撃級の腕を吹き飛ばし、突撃級の甲羅などないかのように穿ち蒸発させていく。

が、注意が正面に向いてしまい、左右から回り込んできた要撃級に気づかず囲まれてしまった。動きが速い…!

慌てて機体を浮上させて高度をとり、ザスタバ・ステイグマトとフォルファントリーで要撃級もろとも周りを通り抜けようとしていた戦車級も吹き飛ばす。

ガーディアンのイーゲルシュテルンによって戦車級は粗方片付けられ、左右から挟撃してくる群はウィンダムとストライクEの攻撃でその数をどんどん減らしていく。よし、このまま行けば……!

ビーツ! ビーツ! ビーツ!

突如鳴り響く警報。それと同時に機体は勝手に地上に降り立ち、アルミューレ・リュミエールを展開させた。周りを見ると、ガーディアンも高度を下げてディストーションフィールドを張り、中にウィンダムとストライクEを回収している。これは…

『艦長、光線級です。中には重光線級も多数確認されました』

「やつぱり出てきたか! (PS装甲はもちろん、通常装甲だとレーザー照射に耐えられない。高度を取ろうにも出力不足でディストーションフィールドが張れない…どうすれば…!)」

通信をしながらもアルミューレ・リュミエール越しにBETAを撃ち続ける。が、BETAの数は一向に減らず、ウィンダム達を下げてせいできた穴と高度を下げてできたイーゲルシュテ

ルンの穴を潜って、BETAがディストーションフィールドに取り付き地面に沈んでいく。だが、BETAがディストーションフィールドに触れるだけでエネルギー消費も増え、高度を上げたお陰で出力が上がった相転移エンジンも下がってしまった今、この状態が続けばいずれ要撃級の腕でも突破されてしまう…。フィールド内にいるウィンダム達も必死で迎撃しているけど、要塞級が近づいてきたら触手でディストーションフィールドごと艦をやられてしまう…！

『艦長、先程の衛士三名が意識を回復。自分達も迎撃に出るからMSを貸して欲しいと…』

っ！さっきの衛士達か…。撃墜されたばかりで少し不安だけど今の状況ではありがたい。

「…わかった！ミスリル、その人達にストライクノワールを！この状態だと砲撃も欲しいから一人はヴェルデダガーに！」

『了解！』

さて、三人の援軍でこの状況を何処まで改善できるか…。頭ではそう考えながらフォルファントリーを最大出力で放ち、衛士達発進の為の道を作りはじめた。

side ???

私が目を開けると、真っ白い蛍光灯が目に入った。強化装備はそのまま、ベッドに寝かされているらしい。回りを見ると、仲間

の皆もベッドに寝かされていた。よかった…。安心感と久しぶりに感じる柔らかな布団の感触に、再び眠りそうになるが、ふとこの状況に疑問を抱く。

私はなんでここで寝ているのだろうか？

…それは、急な任務で大陸の防備に回されて、そして着任早々、派遣先の基地でコード991…BETAに襲われたのだ。

突然の襲撃で、基地は二週間で陥落。生き延びた部隊も撤退したけど、BETAの追撃と遭遇戦で段々とその数を減らし、気づけば生き残りは私が率いる小隊だけ…。

何もない荒野を二機のF-4J‘撃震’とF-15J‘陽炎’が歩いてた。装甲は所々削れ、BETAの返り血を浴びており、武装も突撃砲と74式近接戦闘用長刀のみ。予備弾倉すら装備していない状態は、まさに満身創痍だ。

『センパ…いえ、小隊長。これからどうするんですか？』

訓練校で一期下の部下・宮野三咲が不安な表情を浮かべて通信をいれてくる。BETAの追撃と遭遇戦によって推進剤も半分を切り、弾薬だって雀の涙。後一回BETAと遭遇すれば…いや、戦闘中に弾薬が切れてしまうだろう。特に制圧支援担当の三咲は、両手の36？も弾切れ寸前。65式近接戦闘用短刀も一本だけと非常に心許ない状態だ。

「…………今最寄りの基地に向かってるから着くまで耐えてちょうだい。そうしたら助かるわ」

『それって…さっきと同じじゃないですか！？あれから二時間も経ってるのに基地なんて何も…！』

『いい加減落ち着きなさい三咲！！涼子だって辛いのよ！？そんなこともわからないの！？』

三咲のパニックを怒声で抑えてくれたのは、訓練校で今では唯一の同期、牧野 陽菜だ。突撃前衛としての腕は確かで、私の唯一無二の親友でもある。

「三咲も陽菜もやめて！！仲間割れなんて起こしたら生き残れるものも生き残れなくなるわよ！！」

BETAとの度重なる戦闘で、みんなの集中力も限界を迎えていた。このままだと隊が、皆がバラバラになってしまふ……！何とかしないと……！

「……ごめんね、三咲。こんな頼り無い先輩で……。でも安心しなさい、必ず生還させてあげるから！ あ、ついでに陽菜もね！」

『なっ！？ちよつと涼子、私がついでってどういうことよ！？』

「いいじゃない、可愛い後輩のほうが大切なのよ！」

『せ、先輩……可愛いだなんて……／＼／』

『ア、アンタそっちの気だったのね………って！涼子酷い！！』

「フフフ。さて、皆が明るくなった所で、先を急ぐわよ！」

急がないとまたBETAに襲われちゃうからね」

『……了解っ！』

……良かった。まりも教官直伝のジョーク（本人から受けた）は効いたみたい。これならしばらくは……

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

えっ！？振動センサーが振りきれてる！？

「全機緊急退避！！噴射跳躍ッ！！」

『了解ッ！！』』

慌てて噴射跳躍でその場を離れると、地面から今までとは比べ物になら無い程の数のBETAが現れたのだ。

空いた穴から突撃級が飛び出し、続いて要撃級、戦車級に……要撃級！？何でこんな時に……！！

『り、涼子……』

『先輩……っ！』

「ッ！こんな数、まともに相手したら死ぬわ！逃げるわよ！！最大戦速……！！」

……終わった。こんな数、生き残れる訳がない。機体も満身創痍、弾薬もない。逃げて味方に助けてもらわないと……！

ズドンッ！

「きゃああっ！！？」

突然機体に大きな衝撃が走り、跳躍途中だった陽炎はあらぬ方向に吹き飛ばされて地面に激突してしまった。

『先輩っ！？』『涼子ーっ！！』

二人がこちらに近づくのがわかったけど、激突の衝撃で陽炎はオシヤ力。第二世代機の軽い装甲が仇となってハッチが歪んだか……

「二人……とも、逃げな……さい！今ならまだ……！！」

『…もう遅いわよ。とつくにBETAに囲まれてる。どっち道逃げたって突撃級に捕まって終わりなら、涼子と死んだ方がましよ！』

『そ、そうです！！私は先輩となら何処へでも行きます！！』

み、みんな……………バカよ！！　なんで逃げないのよ！？

『行くわよ三咲！最後なんだから派手に行くわよ！！』

『了解ですっ！オレンジ3、FOX1！！』

『オレンジ2、FOX2！！』

ズダダダダッ！　ドンッ！　ドンッ！　ズダダダダ

ッ！

モニターは生きていたから周囲の状況だけはよくわかる。幸い脳震盪も起こしてないし、みんなを少しでも生き残らすサポートぐらい！！

「三咲、二次の方向！戦車級二十！要撃級三！」

『了解！』

「陽菜！右に戦車級、取りつかれる！！」

『おっと！！ナイス涼子……………っ！　逃げて涼子！！』

陽菜の叫び声の後、機体各所でガリガリと何かを噛み砕くような音が……………つまさか戦車級！？

『くそおおおっ！涼子から離れるおおおー！！　うあッ

！…！』

慌ててこちらに駆けつけようとした陽菜の機体が要撃級の腕で

すぐ目の前に吹き飛ばされ、こちらまで戦車級に取りつかれてしまう。

『先輩！？　キャアアアア！！』

「三咲っ！！グッ！！」

三咲は突撃級の突進に片腕を持って行かれて、吹き飛ばされた勢いをそのままに私の機体に吹っ飛んできた。今までで最大の衝撃が陽炎を襲い、私はそこで気絶してしまった…。

ガリガリガリガリガリガリガリガリ。

「うつ……」

うるさい音で目が覚める。暗い…。まだコックピットの中みただい。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリ！

「ひいッ！？」

この音、戦車級が装甲を喰ってる！？まだ終わってない！？

嫌だ、イヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だイヤダイヤダアヤダイヤダイヤダ！！

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！！

「う、うゝん……。あ、あれ？ここは……？」

「陽菜っ！！良かった、怪我はない！？」

今までの事を思い出していたら、隣のベッドに寝ていた陽菜が目覚まし、体を起こしたのだ。

「涼子！！良かったあゝ！………あれ？ここどこ？まさか天国？」

「違うわよ！何ボケてるの？ここは………何処だろ？」

「私に聞いてもわかるかあゝ！？」

「…皆さん、お目覚めになったのですね」

「「誰っ！？」」

「にやッ！？い、一体どうしたんですか！？」

不意に聞こえてきた第三者の声に身構えてしまう私と陽菜。三咲も私達の声で起きたようだ。それより一体どこから……！？

『ご安心下さい。今は忙しくて手が離せない状態です、通信をしているだけです』

ふう、それを聞いてひとまず警戒を解く。ちょっと過敏になりすぎね……。

「そ、そうなのですか……。失礼しました。私は帝国大陸派遣軍第十五戦術機甲大体系所属オレンジ小隊隊長の鈴原　涼子中尉であります！」

「同じくオレンジ小隊所属、牧野　陽菜少尉です！で、ついさっきまで寝ていたのは「宮野　三咲少尉であります！」……です」

『私は戦艦「ガーディアン」のオペレータ、ミスリル・ガーディアンと申します。…こちらは任務の都合上、所属をお答えするには艦長の許可が必要でして、今は艦長不在の為、申し訳ないのですがそれはできません』

戦艦！？…特務隊なの？よく見れば、こんな施設帝国にはない。だとすれば国連か米国？いや、艦の名前から見て国連の可能性が高い…。

「あの…艦長不在とはどういう事でしよう？それと、私達が救助されてからどのくらい経っていますか？」

あ、考え込んでる内に陽菜が質問しちゃった。まあ私も聞こうとしてた事だから別に良いけど…。

『貴女達が救助されてから二十分ほど経過しています。艦長ですが、貴女達が襲われていたBETAを迎撃するために出撃なさっているからです』

！！ まだBETAがいる！？

な、何で体が震えるのよ！？BETAなんてさっきまで何も感じなかったのに…！今じゃ、BETAと聞くだけで体が震えてしま…う…。

『…現在この艦には衛士が艦長お一人な為、無人機を出して援護していますが、光線級が出てきてしまい危険な状態です』

まだ…助かってない…？このままだと…そうだ！！

「あ、あの！私達の撃震は！？応急処置で動くならそれで…！」

『無茶です。先程ハ…整備士達に見せましたが完璧にスクラップです。直すより新品にしたほうが安い程…』

やっぱり……。あれだけ要撃級と戦車級にやられたんじゃ無茶か…。それにしても三咲、この短い時間でよく成長したな。もう死の八分は越えたんだ…。

「なら無人機を…戦術機を貸してください！！私とはかく涼子…いえ小隊長の腕はトップクラスです！必ず艦長さんも助けられますー！！」

陽菜…あなたまで。

『……………お待ちください。今艦長に問い合わせています』

長い。たった十数秒の沈黙なのに一時間にも感じられる。そして…。

『…許可が下りました。貴女方には近接戦闘用と遠距離砲撃戦用のどちらかに乗っていただきます。宜しいですね？』

「わかりました！では三咲少尉に砲撃戦用を。陽菜少尉と私には近接戦闘用をお願いしますー！！」

『了解。機体は格納庫に着き次第説明します。それと、今から見ることは他言無用です。わかりましたね』

「…はっ…！！」

『では、格納庫まではコミュニケーションで表示しますので、その指示通りに移動してください』

「皆、聞いたわね？あんな絶望的な状況で助けていただいたご恩…今こそ返すのよ…！！」

「了解っ！！」

二十分では今までの疲れなど、全て回復できていないはずなのに、良くやるわ。…フッフ、流石はまりも教官の教え子。富士教導隊の名前は伊達じゃない！

「よし！鈴原小队、行くわよ！！」

「はっ！！！！」

そして私達は意気揚々と格納庫を目指す訳ですが…いきなり目の前に現れたコミュニケに驚いて出鼻を挫かれた事は部隊の黒歴史だ…。これ決定！！

「うわぁ〜広い…！」

私達が第三格納庫（中央リアカタパルトは第二格納庫で、左方カタパルトデッキが第三格納庫、右方カタパルトデッキが私たちがいる第一格納庫となっている）に着くと、そこには鉄灰色の装甲を持つ見たこともない戦術機が二機、砂と深緑色の機体が一機、丸い球体達が操る機械に整備されていた。

「…な、に…あの戦術機…」

「今まで見てきた機体とは違いすぎる…。新型？」

「わぁあっ！こっちの砲撃戦用、スゴいですよ！肩や肩の上、腰にまで武装が付いてます！！」

見ると、三咲は一人先に砲撃戦用の戦術機？に近づいて、一人

マニュアルを見て喜んでいる。いかにも制圧支援が好きそうな重武装の機体だ。ふと、パタパタという音が聞こえてそちらを見ると、水色の球体がマニュアルを二冊持つて（挟んで？）こちらに跳んできた。

「マニュアル！ マニュアル！ ドウゾ！ ドウゾ！」
「あ、ありがとう…」

しゃべった球体に驚いた二人だったが直ぐに意識を切り替えてマニュアルを見る。

： G A T X 1 0 5 E ストライクノワール。主武装は両腰に装備されたビームライフルシューターと背部ウイング外側にマウントされたフラガラツハ3ビームブレード二本と同じく背部ウイング内側に装備されたりニアガン。どれも接近戦を想定して造られた武装です。設計上突撃級の突進や要撃級の攻撃を受けても破壊されはしませんが、内部に深刻なダメージが残るので、ダメージは控えてください。尚、このシリーズの機体は稼働時間が制限されているので警報が出たら直ぐに機体を母艦に向かわせてください。

追記：ライフルシューターもリニアガンも連射を前提とした武装です。トリガーを引き続けられ連射しますので、弾切れとエネルギー切れ、銃身過熱にご注意下さい。尚、装甲にエネルギーを通すことで相転移を起こし物理的な衝撃を無効化する特殊装甲です。ダメージを受ければその分エネルギー消費が激しくなるのでご注意ください。

「ビーム……って光学兵器!？」

「突撃級に突進されても壊れないって、一体…」

「涼子先輩、陽菜先輩！見てくださいよこのマニュアル！！」

目の前の機体：ストライクのスペックに驚いていた二人は、三咲が持ってきたマニュアルにも目を通す。直後、止めとけば良かったと後悔した。

GAT 103AP ヴェルデダガー。砲撃戦用の機体です。こちらは設計上突撃級の突進や要撃級の攻撃を受けた場合破壊されますが、光線種のレーザーには有効な装甲になっています。内部に深刻なダメージが残るので、直撃は控えてください。武装は両肩の220mm多目的ミサイル六連装ポッドに350mmガンランチャー、94mm高エネルギービーム砲。両腰の増設されたM9009B複合バヨネット装備型ビームライフルです。これは緊急時用にバヨネットとして使用可能ですが、あくまで緊急時用ですので多用なならないよう。尚、この武装は連結させることでさらに強力な砲撃を行います。

追記：この機体はビーム兵器主体な為、他の機体に比べてエネルギー消費が多いため、警報が出次第ビーム兵器の使用を止め直ぐに母艦に帰還してください。（解決策として母艦からケーブルを引きエネルギーを供給することが可能です）

「またしても…出鱈目な…！」

「ね、凄いですよね！？」

『鈴原中尉、急いで機体に搭乗してください。艦長が機体発進のためにBETAを排除していますが、そろそろ危ないのです。ぶっつけ本番ですが、操縦方法は戦術機と大差はない筈です。…艦長

をよろしくお願いします！』

しまった！私としたことがうっかりしていた……！この遅れ、絶対取り返す……！

「陽菜、三咲。初めての機体で、慣熟訓練してない機体だけど、性能だけなら不知火……ううん、武御雷を越えてる。難しいと思うけど、やるわよ……！」

「もちろん（です）……！」

「よし、じゃあ全員搭乗！BETAなんかには負けるもんですか……！」

そして、私達は艦長さん？の合図と共にBETA犇めく戦場に出撃した。

「えええい！　このツ！このツ！」

くっ……！BETAの波が途切れない！無人機である以上接近戦なんて任せられないから敵はデイスティンフィードに取り付き放題だ。イーゲルシュテルンで数は減らしてもそれ以上が攻めてくる……。あの三人はまだ来れないの……！？

『艦長、衛士方の発進準備完了しました。それにともないウィングダムとストライクEを予備機と交換します』

「助かった……！じゃあ道を作るから合図と共に全機発進させて

！」

『了解！』

空中からフォルフアントリーを連射して、穴を開ける！

「アルミューレ・リュミエール展開！ フォルフアントリー・マルチロック…行けええ！！」

ドーンドーンドーンドーンドーン！！

伸べ二十発ものフォルフアントリーとおまけで撃ったザスタバ・ステイグマトがガーディアン周辺に集まっていたBETAを一掃し、ソコだけ切り取られたように綺麗な空間ができた。

「今！！」

『了解っ！ オレンジ小隊、全機発進！！』

三つのカタパルトからそれぞれ機体が発進し、ヴェルデダガーは艦正面を。二機のノワールはそれぞれ左右を固めて迎撃を始める。各々を援護するためウィンダムが一機ずつ援護に入った。

『オレンジ3、FOX4！吹っ飛べーッ！』

ヴェルデバスターの衛士は掛け声と共にミサイル以外の武装を一斉射する。大口径ビームはビームサブマシンガンとは威力が桁違いだ。連射が遅い分一撃で何体もの突撃級の甲羅を突き破り後続のBETAを纏めて吹き飛ばす。ガンランチャーはビームで撃ち漏らした小型種を根こそぎ平らげた。

『オレンジ2、FOX3!!!うおりやあああーッ!』

左に回ったノワールはリニアカノンを撃ちながらビームライフルシューティーも連射している。小型種はウインダムのカバーリングが片付いていて、見事な連携をしていた。リニアカノンが弾切れになれば頭部のトードスシュレッケンと脚部に仕込まれた機関銃で小型種を狙い、ウインダムはドッペルホルンを奥にいる要塞級狙撃手を攻撃し始める。

実体弾が切ればシューティーを腰に戻しフラガラツハ3でBETAを切り刻み、BETAの返り血で機体が酷く汚れていく。…切り裂き ド?

『オレンジ1、FOX2!はあああああッ!』

右は隊長機かな?シューティーを片手で撃ちながらフラガラツハを構え突っ込んで…ってえええ!?突撃!?

『この…クソBETA共が!!人間を舐めるなあああッ!』

…スゴい。本当に初めての機体なのかと疑問に思ってしまう程の腕だ。BETAを踏み台にし、踏み台にした個体はシューティーで射殺。ジャンプ中にフラガラツハで擦れ違い様に要撃級の首を切り裂き、トードスシュレッケンで足場にいる邪魔な戦車級を尻ぎ払う。そしてフラガラツハでBETAを切り裂き…の繰り返し。まさに無双…。ウインダムなんか完全に置いてきぼり喰らってるよ……。でも、艦長たる者負けてはいられない!

「行ッくぞオオオッ!!!」

両手のザスタバ・ステイグマトを左右に、フォルフアントリーを正面に出して連射体制。スラスターの出力も上げる…。

「うりやあああー!!」

そして、先の隊長機よろしくBETAに突っ込みビームを撃ちまくる。フォルフアントリーでできた道をビームサブマシンガンで維持し、塞がればまたフォルフアントリーを撃つ…を繰り返し、やっと要塞級まで辿り着いた、途端。

「!?!」

自動でアルミューレ・リュミエールが展開しレーザー照射を防ぐ。見れば、要塞級が腹から光線級を何体も吐き出していた。

「忘れてた…。要塞級って腹の中にBETAを抱えてたんだっ
た! でも、もう遅い!アルミューレ・リュミエール、全面展開!
!」

ここぞと言うタイミングでアルミューレ・リュミエールを全面に張る。質量のないレーザー照射はアルミューレ・リュミエールの光波防御を貫くことができずハイペリオンを止めることができない。要塞級は尻尾についている触手で攻撃をするが、その前にザスタバ・ステイグマトを撃ち込んだ。

グオオオアアア……!

要塞級は断末魔の叫びを上げて巨大な足を周囲に振り回し、腹の中から出した光線級を刺し殺してしまう。

バシュバシュ！ バシュバシュ！

慌てたように光線級と重光線級がレーザー照射をしてくるが、アルミユーレ・リュミエールを破ることはできず、ザスタバ・ステイグマトの餌食となる。

撃ち終わって周りを見ると、光線級は今ので全滅したらしく、画面上に表示されていた警報が消えていた。付近のBETAも居なくなり、後はガーディアンに群がっている奴等だけだ。あの数ならあれで行ける！！

「ミスリル、光線級は全部片付けたから直ぐに高度を上げて！
！ローエン格林で残りを尻ぎ払う！！

オレンジ小隊の皆さん！今から地上のBETAを一掃するので、ガーディアンに乗ってください！はやく！！」

『『『『了解！！』『』『』』』』

返事と共に全機ガーディアンに乗り、浮上し始めた。安全圏まで昇ったのを確認して…

『高度確保。相転移エンジン出力上昇。ローエン格林チャージ開始、完了まで二十秒…。ミラージュコロイドを全面に展開します』

僕はというと、ガーディアンのローエン格林チャージを待っている間、撃ち漏らしが無いようBETAを引き付け続けていた。理論上ではアルミユーレ・リュミエールを最大出力で展開すればローエン格林の直撃を受けても大丈夫…なはず。だからこそできる芸当だ。でも、発射と共に空に逃げよう。命は大切だからね！！

『艦長、BETAの陽動、ありがとうございます。チャージ完了。発射のご指示を』

「わかった。…3、2、1…発射！！」

艦主から放たれた陽電子砲は、地面を抉りながら真っ直ぐBETAに近づき、全てを飲み込んだ。

閃光が過ぎ去った後に残ったのは、巨大な溝と衝撃で吹き飛ばされたBETAの破片…。そして宗一が操るハイペリオンだけであった。

第四話（修正）（前書き）

これで打ち止めです。何かご意見があれば遠慮なく感想をお願いします。

第四話（修正）

） ガーディアン第二格納庫 リニアカタバルト （

ガーディアンは今、総転移エンジンの調整を含めフルメンテナンスに入っている。着陸時と陽電子砲を撃った時にわかったことなのだが、ミラージコロイドを展開している間は何故かBETAに見つからない。理由はわからないけど、お陰でこっちは陽電子砲のせいで出力が落ちた総転移エンジンを休ませれた。サブの核エンジンなら戦闘さえしなければ数日は全力航行をしても大丈夫なので安全だ。

それより問題は目の前の三人。帰還途中にミスリルから聞いたけど、この三人は日本の帝国軍所属らしい。対応に困るな…。

「紹介が遅れましたが、自分は矢羽田 宗一…見ての通り日本人ですが、帝国軍ではありません。所属は…国連軍でもありません…この戦艦の艦長、とだけ言っておきます。自分…僕は平行世界の日本から来ました」

そこまで言って三人を見る。鈴原中尉は最初驚いたみたいだけど、すぐに思案顔に…。

牧野少尉は肩を震わせて俯いてる。…やっぱりいきなりこんな話してもからかってるようにしか思わなかったか…。宮野少尉は…何故か無反応。それはそれでなんか怖い…。

「はあ！？…冗談なら笑えないですね…！私達をからかってるんですか！？」

「やめなさい、陽菜！」

さっそく陽菜がキレた。今の話が相当気に入らなかったらしい。

更に怒りをぶつけようとした陽菜を止めたのは、涼子だった。

「涼子！？だって……！」

もちろん、納得いかない！とばかりに抗議する陽菜だったが、それは冷静に答える涼子によって抑えられた。

「あの戦術機：いえ、兵器の性能、どう見てもあり得ないのよ。これでも私は元富士教導隊よ？最新鋭の機体はもちろん、新型兵器のテストだって経験があるんだからそれくらいわかるわ。それに、いくら世界広しといえどもビーム兵器を実用化するには後何十年もかかるはずだし、例え実用化していてもビーム兵器を使うには機体のサイズが小さすぎるの。エネルギーを得るにはもっと大きな機関が必要だからね。そして一番の理由がこれ。この戦術機には今までとは全く違う別の概念、技術体系で造られているの。網膜投射はあったけど、管制ユニットには巨大なモニターがあったでしょ？多分網膜投射は後付けしたのよ。本来はモニターを見て戦う兵器だったはず。……だから、矢羽田艦長が言っている事に嘘はないわよ」

「……で、でも！だからって信用できないわよ！！目的も何も言っていないのにこんな力を持つてるヤツは特にね！」

陽菜の言葉を聞いて、宗一はしまった！と後悔した。一番始めにそれを言えはいさかいは無かったかもしれないからだ。

「……すみません、言いそびれていたのですが、自分がここに来た目的はただ一つ。オリジナルハイヴ攻略とそれまでの行程で発生する犠牲者を可能な限り減らすこと、です」

「……まるで、未来を知っているみたいな言い方ね？」

陽菜の意外に鋭い洞察力に驚きつつ、宗一は三人に答えた。

「ええ。知っています陽菜少尉。…といっても、大まかな事だけで細かい事はわかりませんけど」

「……」

「そして、その大まかな事だけでも数億もの人が死んでいるんです。それを防ごうとして何がおかしいんですか！？自分…僕は、その為に来たんです！ただ…それだけなんです…」

所々嘘は入ってる。けど、目的だけは間違うこと無き事実だ。管理者さんに頼まれたからというのは切っ掛けにしかすぎない。決めて、行動をしたのは僕の意味に他ならないのだ。

今、僕が言うべき事は全て言った。信じるも信じないも、後は彼女達次第だ…。

「…あなたの目的…いえ、覚悟はよくわかりました。ひとまず、先程の言葉に嘘はない、それだけはわかりましたから」

「…ありがとうございます。…皆さん、気づいているとは思いますが、僕がここまで話したのはわけがあります。皆さんにはできれば、このまま僕に協力して欲しいんです」

「……」

「…やっぱり、無「いいわ。協力してあげる」り……え？」

「あなたには助けてもらった借りもあるし、機体をあんなにしちゃった以上、戻っても降格しか待ってないしね。それに一番の理由は、あなたの言葉よ。あれがなければ協力なんて言わないわよ」

「…鈴原中尉、ありがとうございます。でも、残りの二人は…」

「私もいいわよ。さっきの覚悟、あれにはそれだけの価値があると私は見たわ。そ・れ・に……。私がアンタを気に入ったのよ！感謝しなさい！！」

ズシャゴケッ！！

最後の一言で陽菜少尉以外全員がこけてしまった。せ、折角良
い雰囲気なのにぶち壊しちゃいましたよ陽菜少尉……。恐ろしい人だ。

「わたしは、涼子先輩が信用しているならいいです。先輩、人
を見る目は確かですから！そして何より一番の理由が……。わたしは
先輩とならどこへでもついていくからです！先輩とわたしは一心同
体！！だからわたしも協力します！！」

「……苦労してるみたいですね、涼子中尉」

「……性格はああだけど、衛士としての実力は確かだから……。
それにもう慣れたわ、三咲以外は……」

「はああ……」

二人揃ってため息をはいく。ここまで個性の強い人達を纏める涼
子中尉には脱帽ものです……。何か残り二人（特に後者）の理由
に不安を覚えるけど、なんだかんだで涼子中尉と仲良くやってるの
を見ればそんなものは吹っ飛んでしまった。……何となくだけど、こ
の四人ならうまくやっていける。そう確信めいたものが自分の中に
あった僕でした。

「……ありがとうございます。こんな僕に協力「あー、ストップ
ストップ！」え？」

「せっかく仲間になるんだから敬語は無し無し！ね、涼子？」

「ふふ……そうね。軍隊じゃない以上固くなる必要もないし、い
いんじゃない？私は賛成よ。どう、宗一君？」

「あ……。わかったよ。じゃあこっちも全員呼び捨てにするけど、
いい？」

「もちろんです！よろしく、宗一さん！」

「こっちこそ、よろしく。三咲」

「よろしくな、宗一」

「うん。よろしく、陽菜」

「さて、みんなの親交が深まった所で相談なんだけど……宗一君、ご飯お願い。派遣先の基地で食べる暇なくて、衛士用の不味いゼリー食しか食べてないのよ。そろそろ限界で……」

「あ、私も確かに……」

「い、意識したら凄くお腹が空きましたよ……」

「……ブツ。わ、わかったよ。じゃあ食堂に行こう。そこで今後についても話したいしね」

そうして僕達は格納庫を後にし、コミュニケを使って食堂に向かった。

～ ガーディアン 食堂 ～

今、食堂で涼子中尉率いるオレンジ小隊のみんなとカレーを食べている。（もちろん天然素材）

天然素材の食事は久しぶりだったらしく、みんなスゴイ勢いでカレーを平らげていく。すごい……。

ちなみに、食堂は券売式でメニューはほぼ一定。たまに日替わり定食（昼限定）があるけどまだ試してない。厨房は人間そっくりでAI搭載のコックロボが券を受け取ると調理を開始する、という仕組みだ。内装はまんまアークエンジェルの食堂だった。

「……えっと、皆さんそろそろお話を……」

「っ！　そ、そうね！ごめんなさい……」

「いやあ、天然物なんて何時以来だろうね。訓練校でも滅多なことがない限りずっと合成食材だったし……」

「ううう……。カレー自体、何年ぶりに食べたことが……！」

上から順に涼子、陽菜、三咲の台詞です。合成食材、そこまで不味いのか……。おっと、僕まで別の方向に流されてしまった。

「で、簡単なことから確認するけど、今って西暦何年？それによつて、これからすぐに行動するかおとなしくしているかが決まるんだけど……」

「今は1999年6月20日です。私達が大陸に派遣されてから半年は過ぎている計算になるわね」

「1999年……横浜と佐渡島にハイヴができた年だ……！」

「ッ！本当ですか！？」

「うん。詳しくはわからないんだけど、今の時期だったら既にハイヴができてる筈……。で、この年に明星作戦という国連と日本、そして無理矢理参加してきた米国によつて横浜ハイヴは制圧されたんだ。佐渡島ハイヴは更に二年後に消滅。でも、九州・四国・中国・近畿がわずか一週間で壊滅しちゃつて、犠牲者は3600万人以上。斯衛軍主導による京都防衛戦も行われたんだけど、BRTA上陸から1ヶ月後には首都京都が陥落。京都陥落直前までに皇族、政府機能、一般市民の避難はできて東京へ遷都はできたんだ」

「……………」

皆さん無言。故国を離れている間にハイヴができたと思ったシヨックはスゴかつたんだろうなあ……。

「……ごめんなさい。もうちょっと考えて喋るべきだったよ」

「……気にしないでいいわ。知らないより遥かにまだから。教えてくれてありがとうね、宗一君」

「…話を戻すね。今は6月、横浜ハイヴ攻略が始まるのは大体8月辺りだった。ってことは作戦が始まるまであと一月と少しはあるんだよ。それまでに僕達はどうやって国連軍、もしくは帝国軍に接触するかが重要になってくる。タイミングを外せば利用されるだけだし、下手な情報は最悪の結果……十万人だけを外宇宙に避難させるオルタネイティブ5の発動を早めてしまふ。それだけの価値がこのガーディアンにはあるから厄介なんだよね。今はミラージクロイドで隠してるけど、いずれはばれちゃうから……。それで、僕はオルタネイティブ5の発動だけは阻止したい。だから今発動中のオルタネイティブ4は絶対に成功させなきゃいけないんです。その為にすること……僕は明星作戦に介入しようと思ってる」

「ちょ、ちよつと待つてよ！介入するって言ったって、どうやってするのよ！？いきなり戦場に飛び込んだら間違いなく攻撃されるわ！！」

「うん。陽菜の言ってることもわかる。けど、涼子と陽菜が乗って機体、あれに使われてる装甲は物理攻撃なら全て無効化してしまふ特殊装甲なんだ。マニュアルに書いてある通りエネルギーは消費するけど、武器を実弾系の物に取り替ええれば稼働時間は普通の戦術機とかかわらない。だから、光線級のレーザー照射や戦艦の主砲が直撃しない限り大丈夫なんだ」

「だ、だからって……！」

「それに、帝国も国連もそんなに余裕はない筈。そこに今までの戦術機なんて圧倒してしまう機体が助けてくれれば、即攻撃なんて事態は避けられる。交渉に持つていけばこっちの物さ。……危険だけど、これを越えない限り僕等は利用されるだけの存在に成り下がる。そしたら間違いなくオルタネイティブ5の発動を早めるだけになってしまふ。それだけは嫌なんだ。だからみんな、危険だけど協力してほしい！！」

僕が言い切った途端、三人は揃ってため息をついた。何でさ？

「…宗一さん、わたし達が協力するって言った以上、理に叶っている事に反対すると思ってるんですか？」

「そうそう…って、真っ先に嫌がってた私が言うのも矛盾するけど、あの時はそこまで無理する必要があるとは思ってなかったから…」

「まあまあ、そんなに気を落とさないの。三咲の言う通り、私達は余程無理がある事以外は協力するわ。それに、宗一君の計画は日本…いえ、人類を救うためのもの。私達が断る理由なんて無いのよ」

ああ、そつか。みんな日本の、人類のために戦ってたんだ。なのに僕は、それを考えてなかったか。…失礼なことをししちゃったな。

「…そう、だよな。うん、ごめんみんな。みんなの気持ちを考えてなくて…」

「わかればよろしい！　じゃ、後一ヶ月もあればあの機体も乗りこともできるし、その間に明星作戦介入を考えましょう」

「でも一ヶ月か…。その間にできる事って何があるのかな？　涼子先輩と陽菜先輩、何かありますか？」

「もちろん訓練。できればBETAの排除もしたいけど、これは情報が漏れるかもしれないから無理ね」

「情報………それだ！」

「宗一、何か思い付いたのか？」

「うん！これなら少なくとも協力体勢ぐらいには持っていける！さて、善は急げだ！」

そう言つと、宗一は涼子達三人を置いて食堂を飛び出していっ

た。三人は宗一の突然の行動に首をかしげることしか出来なかった。

第五話（修正）

Side ????

「何なのよ、このデータ！いつの間に…！」

私が書類やら本やらで散らかり放題の執務室に戻ってPCの電源を入れると、あり得ないことが起きていた。ハッキングされていたのだ。いくら大学の一部とはいえ、人類生存を掛けた一大計画、オルタネイティブ4の重要施設として、ここの警備は電子機器も含め世界最高峰を誇っている。それを易々と突破し、痕跡を一切残さずこのような‘置き土産’を置いていった奴に私はひどく興味をそられてしまい、そのデータに手をつけてしまう。

「……………ウイルスでもカウンター系の物でもない、ただ普通のデータ…。一体なんなの…ッ!？」

そのデータは、まさにパンドラの箱だった。中身は反オルタネイティブ派のリストに弱味、果ては未知の戦術機のデータまでと、かなりの量だった。…そして、一番最後に書いてあった気になる文。

『横浜ハイヴ攻略作戦、明星作戦の参加を黙認願います。このデータと一緒に送った武装を提供しますので、攻撃をしないようお願いします。黙認して頂ければ、このデータにある武装を一部譲渡、技術提供をする用意があります。‘天才’である貴女のいいお返事を期待します』

明星作戦なんて機密度で言えばオルタネイティブには程遠い。なのにそれを知って引き合いに出してくる謎の部隊…。ふふふ、面

白いじゃない！

「ま、攻撃しないようにするだけなら楽だし、このデータだけでも十分利益はあるわ。乗ってあげようじゃないの、謎の部隊…ガーディアンズ？」

これより後、イリーナ・ピアティス中尉は明星作戦開始までの間、深夜に執務室に籠って何やら妖しく笑っている夕呼を見ることになり、一人首を傾げるのであった。

く8月5日 日本海海底付近く

ガーディアンの格納庫は大忙しであった。ハ口達が忙しく動き回り、機体の擬装に必要なパーツや装備を運び、取り付けていく。

そんな格納庫の中を、この一ヶ月間でMSを完全な物にした涼子達オレンジ小隊は、感慨深げに眺めていた。

「…ついに、来ちゃいましたね」

「そうね…。長いようで短い一ヶ月だったわね」

三咲の呟くような独り言に、陽菜が思い出したかのように相づちを打つ。

ひたすらシュミレーターに次ぐシュミレーター…。戦闘パターンは豊富で、慢性化することもなくすぐに機体に慣れることができた。やったことはないけど、今ならヴォールク・データのハイヴも

生還することが出来るほどだと自負している。でも、MSでの実戦はあの時の一回だけ。死の八分を乗り越えた私達でも、不安は残ってしまう。

「ま、大丈夫、大丈夫！あれだけ訓練したんだし、宗一だってハイペリオンに追加装備と補給パックを持って出てくれるんだ。心配なんて無いわよ！」

「ふーん、陽菜にそう言ってもらえるなんて…今日は氷柱の雨かな？」

「なあ〜んですつてえ！？宗一、それどういう意味！！」

振り向くと、強化装備とは違う宇宙服みたいな物を着た宗一が立っていた。

「言葉どおりだよ。負けず嫌いの陽菜が僕を使うなんて初めてだからさ。…安心して。オルタネイティブ4の責任者とはちゃんと話についてる。それに危なくなったら僕が全力で守るからさ！」

「っ！う、うっさいわね！宗一の手なんか借りなくても十分よ！」

「あらあら。陽菜ったら照れちゃって」

「うふふ、照れてる先輩、可愛いですよ」

「私で遊ぶな〜！！！」

陽菜が悔し紛れに地団駄を踏む頃には、先程の不安げな空気はなく、いつも通りの明るい三人に戻っていた。陽菜には悪いけど、みんなの不安が無くなって良かった…。

「よし、じゃあ作戦を伝える。聞いてくれ」

この言葉で、みんな顔を引き締め真剣な目でこちらを見た。

「まずはこれを」

そう言ってみんなのコミュニケに横浜ハイヴ周辺の地図を表示させる。

「僕達の出番は明日から。明日の00:00になったら行動を開始して、しばらくはひたすらBETAを狩ってハイヴまでの道を作る。僕達の立場だけど、オルタネイティブ4の責任者直轄部隊A01の分隊扱いで、帝国、国連、米国から支援を要請されたら出来る限り応えないといけないからそのつもりで。あと、今言ったA01とは合流後協同作戦をとって、そこである程度の情報交換と武装の貸与を行い、明星作戦終了までA01の指揮下に入ることになります。何か質問は？」

「武器の貸与って言いえましたけど、何を持って行くんですか？MSは擬装して行くぐらいだし、ビームライフル？」

「三咲、よく気が付いたね。MSは慣熟訓練が必要だし今はまだカードとして取っておきたいからまだ出さないよ。だからこの擬装でもあるんだけどね…。」

話は逸れたけど、今回は武器だけだよ。戦術機でも使用可能なハイペリオンのザスタバ・ステイグマトを予備パーツから十丁、パワーセルマガジンも大量に持って行く。

ロムテクニカも十五本前後持つて行くつもり。後は弾薬倉庫の奥に「何故か」入っていた76?重突撃機銃をありったけと、アンチビーム爆雷を少々かな。ちなみにコンテナはハイペリオンのウィングバインダーと擬装装甲に設置していく。他には？」

「機体の擬装だけど、見た感じ外見が変わってるのは宗一君のハイペリオンだけだけど、私達は？」

確かに、大幅な変化はハイペリオンだけだけど、それは一番姿を晒したくないからであり、ハ口達を総動員しているから他の機体

には手を着けていないだけである。

「そういえば、擬装しかけのハイペリオンって、何となく撃震に似てるような……？」

「ああ、それは当たり前だよ。だって擬装パーツのほとんどは二人の撃震を参考にしてるんだから。それにストライクはストライカーパック以外は撃震装甲で包むから見た目はまんま撃震だよ？ 陽炎でもよかったんだけど、あれだと作りが細かくて時間が無かったんだ」

宗一の言葉に、涼子と陽菜はなるほど、と納得して下がったが、三咲だけは不満そうだ。

「撃震は嫌ですよ！ というか撃震の装甲だとヴェルデの武器がほとんど使えないじゃないですか！」

「それなら大丈夫。ヴェルデは頭部、胸部、脚部だけに追加装甲をくつつけるから武器は減らない。逆にミサイルポットとバッテリー、補給パックも付けられるスペシャル仕様！ しかも機動力底上げのためスラスターも増設してあるからヴェルデより性能はいいよ……欠点と言えば、整備とかすごい大変なのと移動にエネルギーがすごくかかるから追加バッテリーを付けて±0な所かな。あ、バッテリーの問題はストライクは問題なし。全身擬装装甲で包んであるからPS装甲分のエネルギーが浮いたから活動時間は伸びてます。さて、他に何か質問は？」

「……」

うん、みんな無いみたいだ。

「じゃあ次に上陸地点と方法だけ……」

こうして、作戦開始までの時間はあっという間に過ぎていった。

） 8月6日 横浜ハイヴ とある帝国軍部隊 ）

『ちいッ！二番機がやられた！三番機、穴を埋めろ！！』

『了解！！くそ、キリがないぜ…！！』

戦闘開始から十分。各地の帝国軍基地からかき集められた戦術機部隊は、国連部隊も合わせかなりの数であった。：が、後から後から沸いて出てくるBETAの突撃に、その数は削られていつてしまふ。

『くそ！要撃級に囲まれた！援護頼む！！』

『う、うわあああつ！！戦車級が、戦車級が取り付いた！！た、たすけ…！！』

部隊の大半を構成している撃震では機動力に劣り、突撃級は避けられず次々と巻き込まれ、避けたと思えば要撃級と戦車級が待ち構えて撃破されていく。

兵士級や闘士級に関しては、完全に素通りを許してしまう始末。くっ、何が帝都防衛部隊だ。こんな肩書き、全く役に立たないではないか！！

初めは十二機いた部隊も戦闘可能な戦術機は半分を切っている。このままだと…！

『 01からHQ、後退の許可をくれ！部隊は半』キヤアアア

「アッ！！」クソッ！半分以上だ。このままだと全滅する！！」

「H Qより 01、後退は認められない。繰り返す、後退は認められない。代わりに国連軍特殊部隊を二十秒後に向かわせる。それまで耐えてくれ！」

「01了解！：全員聞いたな！？特殊部隊だか何だかわからんが援軍だ！それまで持ちこたえろッ！！帝国軍衛士の底力、見せてみる！！」

『『『了解ッ！』『』『』』

01と名乗った衛士の乗る不知火は機体を加速させ右手に構えた36mmを撃ちながら前に出る。他の機体も必死にそれに続く。

『後十五秒！』

突き進んで来るだけの突撃級を撃ち、左手の長刀で近づく小型種を尻ぎ払う。が、左の死角から撃ち漏らした戦車級が近づいてくるのを見落としてしまった。

『十秒！！』

飛び掛かってきた戦車級に左手首の長刀を持っていかれてしまい、バランスが崩れる。慌てて右手の突撃砲で戦車級を殺し、左手に短刀を装備し後退する。：が

『後五秒：た、隊長危ない！！』

部下の悲鳴で、戦車級に気をとられた隙に近づいてきた要撃級に気づく。が、モース高度一五を誇る剛腕によって右腕は千切れ、衝撃で機体は吹き飛ばされフリーズしてしまう。あまりの衝撃に一瞬だけ意識が飛んでしまった。

『隊長、今…』来るな！！私よりBETAをやれ！！』…しかし…！』

…もう無駄だ。激突した衝撃で機体のフレームが歪んだ以上、ペイルアウトも不可能だ。ハッチをこじ開けるしかない。だが回りはBETAだらけ。こんな中で作業したら味方まで巻き込んでしまう。

無駄な犠牲はいらないのだ…。ハハハ、自分が死ぬと判っても、不思議と取り乱さないものなのだな。

（私もここまでか…。彩峰中将、あなたの無念を晴らせず申し訳ありません…。そして慧、一人にしてしまつて…すまない…）

敬愛する恩師と婚約者を思い浮かべながら、網膜に投影された情景を見る。目の前には既に要撃級と戦車級の群で溢れ返り、助かる可能性など万に一つしかない。自らの死を覚悟し、目を瞑った時、奇跡が起きた。

） side 宗一 （

作戦開始までに日本海から太平洋にガーディアンを移動させた後、僕らは使い捨てのミラージュ・コロイドを使って内陸部に踏み込んだ。既に艦砲射撃によって重金屬雲が巻き起こり、破壊された街跡に無数のBETAが骸をさらしている。

「こちらガーディアンズ01、A 01部隊、応答願います」

「…こちらA 01部隊伊隅ヴァルキリーズ隊長、伊隅みちる大尉だ。お前が香月博士がおっしゃっていた部隊だな？」

「はい。今回はご協力感謝します。では僕達は遊撃部隊として活動しますので、取り決め通り香月博士から連絡が入り次第合流します。では」

一方的に切ってしまったが仕方ない。時間がないのだ。今のうちに売れるだけの恩を売らないと後々厄介になりそうだからね。

「02から全機へ。データリンク正常。ここから北西十キロの地点の帝国軍が押されています」

「01了解。ガーディアンズ全機、これより僕達は苦戦中の帝国軍を援護する。行くぞ！！」

「『了解ッ！』『』」

ガーディアンズは追加されたスラスターを全て使い、援護に向かった。

「あれか！」

援護に向かってから一分。HQから直接の支援要請がついさつき届いた。どうやら半数以上を落とされてしまったらしい。

追加装甲とノワールストライカーの大気圏内飛行能力を機体に持た

せるために改良したウィングバインダーの機動力は凄まじく、すぐに苦戦している部隊の所まで着くことができた。

「こちら国連軍特殊部隊ガーディアンズ。中隊、援護します！」

『い、急いでくれ！！隊長が…隊長がBETAに囲まれてるんだ！！俺たちが助けに行こうとしても来るなって…！』

「…了解！！直ぐに救助します！皆さんは下がって補給と整備を！！！」

僕の指示に後退を始めた撃震と陽炎達が指さす方を見ると、要撃級と戦車級に囲まれ片腕を失った不知火が一機、突撃砲を片手に取り残されている。…確かにあの状況だと仲間が来た途端やられるだろう。それを理解して来ると言うあの隊長さん、凄い精神力だ。道連れにしたいっていう気持ちもわかるけど、この擬装ハイペリオンにそんな物は関係ない！！

「うおおおおお！！！」

ザスタバ・ステイグマトのビームを周りの要撃級達にお見舞いし、不知火の周りに集っていたBETAを排除。そしてできた隙間にハイペリオンを着地させる。

『な、何だ貴様は！？構わずBETAを排除しろと言っただろう！！それにそのような撃震もどきで何が…！！』

「……僕は国連軍特殊部隊、ガーディアンズ、リーダー矢羽多宗一。残念ながらあなたの指揮下では無いので従えません。それにあなたの部下達から助けてくれと言われた以上、見捨てるわけにもいきませんから。…良い部下をお持ちになりましたね」

『…馬鹿者共が！！BETAに囲まれてしまった以上、強力な武器があるうと助かるわけが…！！』

「それがあるんですよ。アルミユーレ・リュミエール展開！……
後」

『な！？』

「さっきの撃震もどき発言、生き残ったら撤回してくださいね
？」

｝ side 沙霧 ｝

不知火のパイロットは驚愕のあまり開いた口がふさがらなかった。
謎の戦術機が自分の不知火を含め謎の光の膜で包んだと思った瞬間、
その光の膜に触れたBETA達が焼け死んで行くではないか！こんな兵器、見たことがない！しかも中からは攻撃可能なのか、ブルーグレーの撃震もどきは、両手に持った突撃砲から緑色の弾丸を吐き出し、BETAを駆逐していく。

「まだまだー！04（三咲）、ミサイル発射！押し返すよ！」

『了解！04、FOX5！当たれえ！！』

後方から深緑と砂色を基調とした、砲撃戦特化の新型戦術機が現れ、こちらに構わずミサイルを六発撃ち出した。

ミサイルはBETAが固まっているところを的確に狙い着弾していき、多数のBETAを葬り去る。

『三咲だけに良いカッコさせないわよ！行くよ、涼子！！』

『了解！でも突つ走らないでよ！！カバーするの大変なんだから』

砲撃戦用新型戦術機の更に後ろから、色と装備は違えど二機の撃震もどき（その2）が飛び出し、混乱して渋滞を起こしているBETA達に遠慮容赦なく銃弾や剣を叩き込んでいく。

まさに一騎当千。十二機で支えていた戦線をたったの四機で支えているのだ。普通だったら目を疑うようなことなのだが、目の前で実際に起こっている以上信じるしかない。

『不知火の衛士さん、脱出できないようでしたらこちらの機体に来てください。後で帝国軍基地が先程の部隊にお送りします』

「…すまない、感謝する。国連軍にもこのような者達がいたのだな…」 『良いですよ、今は生き残ることを優先してください。02（涼子）、03（陽菜）！アルミューレブレードと連装キャノンで片づけるから下がって！04（三咲）もバヨネット型ビームライフルを連装キャノンモードに！』

『『『了解！！』』』

前衛と中衛の二機が下がると、息を吹き返したようにBETAが押し寄せてくる。が、そんな暇を与える前に二本の光線がBETAを焼き尽くしていく。そしてその光線によってできた道を、両腕から光剣を展開し駆け抜ける撃震もどき。

『うおりやああー！！』

光剣に触れたBETAは例外なく焼け死に、凄まじい勢いでBETAの穴を広げていく。僅かな取りこぼしも、交代した二機がきつちりと処分し、国連軍特殊部隊ガーディアンズが介入して、僅か五分で旅団規模のBETA群を殲滅してしまったのであった。後に、救助された衛士とその部隊の生き残りはこう語る。

『あれ程の力、もし我らがクーデターを起こしていたらその矛先は間違いなく我らに向けられていただろう』

と。

） 擬装ハイペリオン コックピット内 ）

あれから旅団規模のBETAを殲滅し終え、機体のチェックと補給を済ませた僕は、不知火のハッチを短刀（勝手に拝借しました）を使って決じ開け、中の衛士をコックピットに移した所だ。

「すまない、礼を言う。私は帝国本土防衛軍帝都防衛第一師団・第一戦術機甲連隊所属の沙霧直哉中尉だ。この恩、決して忘れるはない」

「そ、そこまで堅くならなくても…コホン、先程も言いましたが、自分は国連太平洋方面第十一軍所属の特殊部隊、ガーディアンズリーダーの矢羽田宗一です。機密のためこれ以上はお教えできませんが、許してください」

自分、かなり緊張しております。だって、あの沙霧さんだよ！？ラプターを不知火で撃破したエース！！…流石に今はそこまでの力量は無いみたいだけど、この人のオーラは何か違う気がする（何がだ！）。

「…気にするな。機密ならば仕方無い。それにしても、この撃震は変わっているな。試作機か？」

「はい。詳しくはまた教えられませんが、そこらの機体より性能は確実に上です」

「そうか……」

会話が無くなると、無言が続いてしまう。話しかけようにも中々…だれかヘルプミー！！

「……………あの時、このような力があれば彩峰中将も…」
「……………」

やっぱり、引きずってるんだな…。

「…例え僕達がその時に居たとしても、民間人の避難は難しかったはずです。僕達の…いえ、コイツらはそこまでの力はありません。最後の最後で一番頼りになるのは人自身です」

「……………」

「後、いくら理不尽な事があっても、それを武力や同じ理不尽な事で返したら、また同じことを繰り返すだけですよ？…今の目は、それをしてしまいそうな目でしたよ」

「っ！そんなことは……………」

「…只、貴方ほどの方が尊う人が、そのようなことを望んでいるか否か…行動するにしても、その事をよく考えて下さい」

…言ってしまった。でも、後悔はしない。だって、クーデターの時の沙霧大尉は自分の事しか考えていない様にしか見えなかった。殿下のため、と言うのなら、榊総理を殺す必要は無かったからだ。あれは明らかに復讐だ。それさえしなければ、また少しはマシな結果があったはずだと僕は思っている。折角未然に防げるチャンスがあるのに見逃すわけにはいかなかったのだ。

「…彩峰中将」

『…ちら帝国軍……所属……中隊の生き…こりだ！ガーデ…ア
ンズ、直哉は…沙…り中尉は無事か！？』

その時、ハイペリオンに通信が入った。この識別信号……………さっ

きの部隊か！

「や、山本か！？良く無『中尉！？ああ、もう！何で助けに行かせなかつたんですか！？あいつらの腕と不知火の性能なら救助ぐらい無傷でできましたよ！！』い、いや、しかしだな…！」

や、山本さん、恐るべし！あの沙霧大尉を黙らすとは…！

「こ、こちらガーディアンズリーダーの矢羽田宗一です。た…中尉の無事を喜ばれる気持ちはわかりますが、今から沙霧中尉をそちらにお願いしたいのです大丈夫ですか？」

『おっと、すまない。すっかり忘れていた。中尉を救助してくれて感謝する。さあ中尉、こちらの陽炎へ』

不知火が指示を出したのか、一機の陽炎がこちらに向かって歩いてきた。オートみたいだ。

「…矢羽田、だったな。君の言葉、覚えておくぞ…助けくれて、ありがとう」

「はい！沙霧中尉もお元気で！！あ、その前にこれを。差し入れます。中隊の皆さんとどうぞ」

そう言つて、僕はコックピットのサイドボックスから天然物の握り飯（アポートで出した）を十二個渡す。沙霧中隊の中隊は初め、十二機だったらしい。死んだ衛士の分も込みだ。

「……重ね重ね、感謝する。部下達も喜ぶだろう。矢羽田も生き残り！生き残ったら帝都で一番の店に連れて行ってやろう」

「それは楽しみです。益々死ねなくなりました。では沙霧中

尉、ご健闘を！！」

沙霧はハイペリオンの手に乗り移り、そのまま陽炎に乗り去っていった。

『H Qからガーディアンズ、現在北の第一次攻撃隊が押されている。至急援護に向かわれたし』

「ガーディアン1了解。援護に向かう」

『H Q了解。御武運を』

はあ、休む時間も無しか。ま、それも覚悟の内だ！

「よし！次の任務だ！全機行くぞ！！」

『『『了解！！』』』

ガーディアンズはブースターに火を入れると、目的地に向かい匍匐非行を開始した。

第五話（修正）（後書き）

不知火の衛士は本編に出てきたあの人です。

第六話（修正）（前書き）

まだ明星作戦は終わりませんが、ひとまず完成できたので投稿します。

P・S・第五話の最後に追記しました。ちょっと重要な要素が入っているのでご確認ください。

第六話（修正）

） 8月8日 03:00 ）

戦闘開始からほぼ丸一日。流石に疲れが溜まってきたのか、みんなの動きも悪くなっている。

沙霧中尉を助けてから、僕たちは色々な……そう、本当に、色々な、戦線の援護に向かい（もとい向かわされ）ついさっき補給と休憩のために時間を貰った所だ。

今のところ、GATシリーズ最大の弱点であるバッテリーも、擬装ハイペリオンの核エンジンからエネルギーを送っているので問題はない。だけど、弾薬と装甲、関節部は違う。関節部は動く度に疲労していくし、弾薬に関しては一番安全なハイペリオンにくっつけてきた補給パックだって、フル補給はあと二、三回できるかどうか……。特に、砲撃メインの三咲が乗るヴェルデガーに使う弾薬を多めに持つて来たのに、一番早く底をつきかけている。

「……涼子、大丈夫？」

「……何とか、ね。それより宗一君は？一番多くBETAを相手にしてたでしょう？」

「……宗一、アンタまた涼子の心配ばっかし……。少しは私たちも心配しなさいよぉ」

「……そうです。わたしだって疲れてるんですよ」

「ごめんごめん。わかったって。僕も疲れてて全員に気を回せなかったんだよ……。うーん、状況を考えて、一回ガーディアンで整備を受けた方が良さかなあ。関節部とかイエローになってきてるし、何より武器が危ない。固定装備はいつ暴発する危険があるかわからないからね」

サスタバ・ステイクマート

擬装ハイペリオンは追加装甲の関係上、フォルファントリーを立ったまま撃つことができない。撃つとしたら、ガンキャノンの砲撃体勢をとらないといけないのだ。戦場でそんなことをしている暇はないし、第一カッコ悪くてしたくない。

だから、ウィングバインダーに付いているアルミューレ・リュミエールとフォルファントリーは無傷に近いのだ。

『ノワールなんて最悪よ！膝・腕の関節なんてもう警告メッセージバンバンだし、アンカーランチャーはさっきので千切れて使用不能…。レールカノンとショーティーはあんまし使ってないから大丈夫だけど…』

『I・W・S・Pは…まだマシね。基本中距離ばかりだったから機体にダメージは無いけど、射撃系の武装がちよつと…』

『三咲のヴェルデはミサイルポット以外の砲身が…。それ以外は一番まともです…』

うーん、予想以上にダメージが蓄積されてるな…。あ、確かこんな時用にミスリルからコンテナを預かってたんだ！場所は…A 0 1用のコンテナの隣だったはず…。

「陽菜！悪いんだけどウィングバインダーの下に付いてる三番コンテナ開けてくれる？中に応急キットが入ってた筈だ」

『ホント！？そう言うのは早く言いなさいよ！えーと、三番三番……つと、コレね！じゃ、開けるわよ』

お、見つけたみたい。さて、何が入ってるやら…。

『あ~~~~っ！！ハ口じゃない！何でこんな所に！？』

って、ハ口ですかい！！整備士を丸々連れてきてたのか…。結構揺らしたけど壊れてないかな？でも、

「なるほど…。ハ口ならこんな所でも応急修理は可能か。流石と言っべきか、やっぱりミスリルはすごいなあ」

コンテナから飛び出たハ口達は、専用の工作機械に乗ってそれぞれの機体に取り付いて整備を始める。けど、ここだと場所が悪い。襲撃される可能性が低いところに……っそうだ！

「ハ口、整備は後回し。今すぐコンテナに戻って。オレンジ小队各機、移動するよ！」

『了解！ 了解！ 了解！』

『えっ！？ちよつと宗一！何で整備が後回しなの！？』

「こんな所だと何時戦闘になるかわからないからだよ。ちよつと予定と違うけど、今はA-01部隊に合流しよう。そこで武装を貸与して共同戦線を張れば整備もできる。わかった？」

『…わかったわ。じゃ、早いとこA-01に連絡入れなさい。本当にヤバいんだから…』

陽菜は渋々とだが、わかってくれたようで周囲の警戒に戻ってくれた。さて、陽菜がヘソを曲げない内にさっさと通信しちやいますか。

） A 01部隊 補給地 08:35 ）

作戦開始から二日、ヴァルキリーズはよくやってくれている。今のところ死者もなく任務を遂行中だが、こんな幸運はもう続かないだろう。実際他の部隊は被害を出しているのだから…。

私達は、補給は受けられても整備は受けられない。実質この二日間は整備無しで動かし続けている。いくら機体が不知火でも関節や跳躍機に大分ガタが来ている者も多い。

…そんな時だ。補給作業をしながら部かに指示を出していると、香月副司令から通信が入ったのは…。

『伊隅、どう、そっちの状況』

「ふ、副司令！？…失礼しました。現在ヴァルキリーズに脱落者は無し。他の隊は既に幾つか壊滅したようで、生き残りだった第三中隊の鳴海孝之少尉と平慎二少尉を加えて行動中です。ですが跳躍機など機体到大分ガタが来ている者が多く、正直今すぐ整備を要請したいです」

『…なるほど、わかったわ。帰還は許されないから、そっちに整備士と試作兵装を持たせた増援を送るわ。そして合流後、その場を警戒しながら状態の悪い機体から整備しなさい。わかった？』

「はっ！了解しました！ありがとうございます！」

『うん、よろしい。あ、後、そいつらすぐに来るから準備しときなさいよ』

最後にそう言い残し副司令からの通信は切れた。…………。

「全員聞け！副司令が整備士と試作兵装を送ってくれた。この状況での有り難い計らい…ここまでやって頂いたんだ、失敗なんぞ許さんからな！わかったか！？」

『『『『『『了解ッ！』『』『』『』『』』

全員威勢良く返事をし、警戒に戻る。

（さて、どんなお客様だろうねえ、その整備士達は）

そんなことを考えながら、伊隅みちるは補給作業に戻ると、自分達のかかり後方から接近してくる機影に気がついた。

） side ガーディアンズ 08:40 ）

あの短い間でハ口達は機体をスキャンして正確な情報を更新してしてくれた。

この中で一番まともだったのは涼子機で次に三咲機、僕、陽菜機と続く。陽菜は突撃前衛なのが原因で、機体関節部の摩耗が激しい。けど武器はPS装甲とビーム刃のお陰でダメージは無いから大丈夫。僕の場合は機体自体は問題なくても専用ザスタバ・ステイグマトとアルミューレ・リュミエールを使いすぎてしまい、磨耗が想定以上に酷かったのだ。師団規模のBETAと遭遇してもやられる事はないが、その後が危ない。このタイミングでA 01と合流する判断は正しかったみたいだ。

『02から01へ。前方に補給中の国連軍不知火部隊を確認。

A 01部隊で間違いないか？』

「01から02へ……確認した。国連所属の不知火部隊は他にいない。合流するよ」

『了解。ふう。やっと整備ができるわね……』

「だけど、向こうの機体も整備することになってるからすぐに

は無理だと思うよ」

『わかってるわ。程度の良い私の機体は後でいいから、まずは陽菜のストライクを修理しないと…』

「あ、その前にストライカーパックは交換してね。涼子は陽菜のストライクが整備し終わるまで突撃前衛をお願いすることになるからよろしく」

『了解。宗一君は、ハイペリオンの整備はどうするの？』

「僕は部隊長に武装と情報を交換しに行くから、暫くは動けない。ハ口達を置いていくからしつかり整備をよろしく」

ここで涼子と通信を切り集まって来た不知火達の前に着地。残りの機体も順次着地していった。

『こちらは国連軍第11師団所属香月副司令直属部隊A 01中隊、伊隅ヴァルキリーズだ。お前達が先程連絡が入った部隊か？』

突撃砲を構えた不知火が一步前に出て通信を入れてきた。この声は…。

「こちらはガーディアンズ。香月博士の協力者です。機体の整備とこちらの武装の貸与に参りました。そちらには事前にデータを送っているので確認を」

『…確認した。協力感謝する。それにしても珍しい撃震だな。後ろの砲撃戦用は新型か？』

あ、予想外にフレンドリーだ。

「壁に耳あり障子に目あり、ですよ。作戦が終われば香月博士と話があるのでその時にお話します。あと、これが貸与する武器の一覧です。マニュアルも送りますからどうぞ…」

『すまない。……………な、何だこれは！？ビームマシンガンにビームナイフ！？光学兵器が実用化されているなんて聞いたことないぞ……！』

ふふふ、人が驚く姿を見るのは楽しいですなあ。説明好きの金髪博士になりそうです。

「そのビームマシンガン……ザスタバ・ステイグマトはパワーセル式を採用したビーム兵器で、戦術機本体からパワーを取らずに使用が可能です。エネルギー残量はモニターに表示されますので、パワーセルが切れたら次のマガジンに交換してください。警告ですが、機密の塊ですからパワーセルマガジンは捨てないでください。連続して撃ち続ければ銃身が焼き付いてしまいますのでこちらも気をつけてください。」

次にビームナイフ……ロムテクニカは近接戦闘用のビーム武器です。柄の部分にバッテリーが仕込まれていて、これも機体からエネルギーを取ることはありません。長さは最大で74式長刀より少し短いぐらいまで伸ばせますが、その分バッテリーが早く消耗されるので使うときは良く考えてください。尚、エネルギーが切れればザスタバ・ステイグマトに繋いでもらえれば、パワーセルマガジンからエネルギーをチャージして再使用が可能です。もちろんザスタバ・ステイグマトに繋がたままでも使えますが、マガジンのエネルギーを使うので残弾が少なくなるのでご注意ください。何か質問は？」

『……………』

あゝ……、思考停止で固まってる……？現実離れた武器に頭が追いついてないのか……。取りあえず整備を始めている陽菜と三咲（涼子は周辺警戒でない）達の方を見ると……

『か、可愛い……！何よこの球体……！』

『あー……、ぴよんぴよん跳ねてるのを見てると癒されるうー！』

『そうでしょそうでしょ！うちのハ口はスゴいでしょ！！』

『…そうか？俺にはそうには見えないけど…慎二はどうだ？』

『孝之に同意だ。逆にぴよんぴよん跳ねてるのは不気味だぞ。』

『一体どんな仕組みなんだか…。お、終わったか。では先に警戒に戻ります！』

『了解。…で、何で新入りの鳴海少尉がハ口を貶すのかな！？』

『何ですって！？鳴海少尉、後で速瀬と涼宮にチクるわよ？』

『む…。せっかくハ口達が丹精込めて整備してるのに…酷いです、女の敵です！！そういう人は整備は最後です！』

『…って待て！そんな勝手に…！大尉も何か言って……あれ？』

伊隅大尉？伊隅大尉！？』

『…はっ！？な、何だ鳴海少尉。どうかしたのか？』

『大尉こそ、ぼんやりとしてどうしたんです？…ってそれより、この状況を何とかしてくださいよ！みんなあのハ口とか言う整備ロボに夢中で…！』

『…か、可愛い…』

『…………大尉、今なんて？』

『ッ！な、何でもない！！こらお前達、無駄口をたたかずさっさと整備を終わらせろ！！』

『了解』

…うん、カオスです。でも孝之っていう人には感謝だな。伊隅大尉を再起動させてくれた……って、鳴海孝之？まさか…

「あの、孝之っていう衛士の方は？」

『ん？俺だけどうかしめたか？』

僕が通信で呼ぶと、片手をあげて06とマーキングされた不知火が近づいてきた。あれか……

「…つかぬことをお聞きしますが、名字は鳴海さんで？」

『！何で知って……って香月副司令から聞いたのか。でも何で俺の事を？』

「いえ、ただヴァルキリーズの事を聞いたとき、一番気になった人だったので、それだけです」

い、いかん……。史上最大の優柔不断男として思ってるなんて、言えない……！

『…ちなみに聞くが何気になっただ？』

「……二人の同期に告白されてまだ答えを出してないヘタレ、と。……き、気にしないほうがいいです！こういうのって大切だから時間がかかるのも無理は無いはず……です」

『…ありがとうな。慰めとしては微妙だったけど……』

「ま、まあこれから長い付き合いになりそうですし、よろしくお願いします孝之さん。僕は矢羽田宗一です」

『おう、よろしくな宗一！』

『おい、鳴海！整備が終わったのならコンテナから武器を取れ！！全くこの腑抜けが……。帰ったら特製ドリンクをたらふく飲ましてやるから覚悟しておけよ？』

『うげえ……！り、了解です大尉。トホホ……』

ドンマイです、鳴海さん。頑張ってください。

こうして、ガーディアンズとヴァルキリーズの合流は無事（しかもかなり良好）に終わり、機体の整備と補給も順調に進んでいく……はずだった。

ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！

12:20。突如として、周辺警戒に出していた涼子とA-0の不知火四機の反応が途絶えてしまった。しかも最悪なことに、反応が消えた地点から小規模ながらもBETAがこちらに向かってきている。…整備はどれも中途半端だからすぐには動けない…。仕方無い、終わってないけどやるしかない！

「伊隅大尉、接近中のBETAは僕が片付けます！今の内に整備と補給を！」

「なっ！？ば、馬鹿者！たった一機でBETAの相手など…！仕方ない、私も出る！幸い機体もそこまで悪くはないのでな、戦闘には十分だ。ついでお前達の武器も試してやる」

「…そうですね、良い機会です。僕達の力、是非とも見て体験してください。三咲、陽菜。涼子が心配なのはわかるけど、今は僕を信じて機体を早く直してくれ。頼む！」

「…わかった。でも、終わり次第直ぐそっちに行くからね！」

「三咲もです…！」

「俺は行けるぞ！もう整備は終わってるし、あっちには慎二が…友達もいたんだ、必ず行くからな…！」

「ほう、随分とデカイ事を言うようになったなあ鳴海…。ならさっさと武器を装備して付いてこい…！」

「はっ…！」

「…時間がない、急ぎますよ伊隅大尉、孝之さん！」

ハイペリオンのカメラでは、向こう側から砂煙を上げて進んでくる突撃級五体を捉える事ができた。不知火達もあと少しで見えるはず。不安なく整備をしてもらう為、一肌脱ぎますか…！

「ガーディアン01、FOX1！行きます！！」

『ヴァルキリー01、FOX2！！行くぞ！！』

『ヴァルキリー07、FOX1！！うおおおおっ！！』

伊隅大尉はザスタバ・ステイグマトと予備マガジンを、孝之は76ミリ重突撃機銃とロムテクニカを手に、BETAへと向かっていった。

） side みちる （

私は思わず、先程渡されたばかりの武器を見つめてしまった。反動は36ミリの半分、だがその分発射数も半分以下だったが、その癖に威力は桁違いだったのだ…。

1トリガーで八発強。

そう、たったの八発強で、あの堅牢な突撃級の甲羅が撃ち抜かれたのだ。120？突撃砲を撃ってやっとだった程の強固な物なのに…。

呆然としている内に、いつの間にか鳴海と矢羽田が残りを排除し終わり、更に後方にいるBETAに向かう所を視界の端に捉えた。

（ヴァルキリーズの隊長たるもの、この程度で遅れを取るわけにいくか！）

私は出遅れた分を取り返すため、不知火の跳躍機を全開にした。

side 孝之

「うおおおおおーッ！」

支給されたばかりの武器は、今までの突撃砲とは違ってすごい威力だった。連射は少ないが、当たる度に突撃級の甲羅は凹み、ヒビが入る。

1トリガーで十発。三回トリガーを引き、計三十発を撃ち終わると、二体の内一体が甲羅を弾けさせて死んでいた。残りも無傷とは言いがたく、僅かばかりだが甲羅にヒビが入り動きが鈍っている。

この武器、装弾数が少ないのが残念だが、一発一発を無駄にせず確実に仕留めていけば今までの突撃砲と比べて使いかっではかなり良い物だ。

「……チッ！半分切ったか。この距離なら近接戦闘だ！」
ドッグファイト

そう言い、左手の盾を捨てロムテクニカを構えビームを出力させる。

ビームはブウウン、という音を出しながら発生し、短刀より少し長いくらいで止まった。

それを横目に、意識を残りの一体に集中させる。

宗一と伊隅大尉のお陰で残りはアイツだけ。ただ突撃してくるだけの攻撃を横に軽く跳躍して避ける。ただ突撃してくるだけの攻撃を軽く右に跳躍して避ける。と同時にロムテクニカを甲羅のない柔らかな横腹に突き刺した。

グオオオオオン！！

BETAが悲鳴をあげるところなんて初めて見た。突撃級は突進を止め、ロムテクニカを外そうと体を動かすが逆に傷を広げて血と肉を蒸発させるだけだった。

瞬間的に出力を上げて更に奥まで焼き斬ると、突撃級は力尽きその場に崩れた。念のため、右の76ミリを撃ち込んでおく。

『孝之さん！前方五百に要撃級と戦車級確認！！』

「わかった……って、伊隅大尉はやっ！？」

『だから急ぐよう言ったんです。獲物が無くなる前に行きますよー！！』

「了解ッ！」

後ろから来た残りのBETAは、大尉と宗一の腕のお陰で十分に殲滅出来たのであった…。

設定 二月二日追記(前書き)

現在第五話分までの設定です。良かったら目を通してやってください。

設定 二月二日追記

矢羽田 宗一 19歳（介入当時） 大学生

身長175cm 体重60kg

容姿：黒髪ショートカットで、頭脳はそこそこ優秀。性格は基本おとなしく、戦闘になると若干興奮してしまい荒っぽくなってしまう。オタクではないがガンダムなどのロボット系は好きで、それ系のゲームはかなり得意。マブラヴ オルタネイティブをクリア（一回だけ。彩峰ルート）した夜、世界の管理者にマブラヴオルタネイティブ開始二年前に飛ばされた。能力として、とある魔術の禁書目録から3つ、オリジナルとして現実世界から物を取り出せる能力を入れれば4つ手に入れている。後、身体強化・治癒力強化・戦術機の操縦可能のオプションも付いている。

能力：

テレポート

空間移動……レベル4相当で、視界に入っている物なら移転可能。

ただし、自分がMS・戦術機に乗っていた場合、自機を含めて戦術機一機分しか一度に移転させる事ができない。乗っていない場合は二機分まで可能。最長で1を一気に移転することができる。戦術機サイズは連続十回が限度だが、人間サイズなら四人分までは連続三十回の移転が可能。

テレパス・サイコメトリー

精神感應・読心能力……自分の思考を相手に読み込ませたりする能力で、念話能力も含まれている。読心能力はその逆で相手の思考を読み取ることができる。この三つの能力は並列して使用可能。MS・戦術機に乗っていても制約はない。MS・戦術機に乗っていても制約はない。相手と百km以上距離がある場合はノイズが走るなどの欠点がある。

アクセラレータ

一方通行……運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトルを自由に操作が可能。原作とは違い意識しない限り反射は行われない。戦術機全体にも効果は発動可能だが、演算能力不足のため最長で三分が限界。（三分を過ぎると強制解除、強制睡眠に入る。事前に解除してもしくは他能力は使用不可）核弾頭は戦術機ごとでも大丈夫だが、G弾は別。ギリギリ無傷で生還はできるが、暫くは動くことができない。その際の効果範囲は戦術機の管制ユニット一個分。

アポルト……んん（・・）様から名前をいただきました。元の世界にある物なら何でも取り寄せられる。ガーディアンのレストランにある食料が天然物なのはこの能力のお陰。宗一は初めて合成物を食べた時、違和感が酷かったのでそれ以降余り食べないようにしている。（慣れるために少しは食べている）基本食べ物だけだが、たまに小説など娯楽物を取り出している。制約によって一度に百kgまでしかアポルトできず、一日に五回しか使えない。

オプション：

身体強化……主に筋力強化、反射神経の向上など。だがあくまでも強化で、本気で殴れば兵士級も闘士級も吹っ飛ばせるが殺せはしない。足も俊敏だが、闘士級より素早く反応できて兵士級より足が圧倒的に速い。アクセラレータの反射を使えば殺すことも可能。

治癒力強化……ゲーム本編で茜が負った傷が一日で完治する。擦り傷レベルなら一分で治ってしまう。

戦術機の操縦……初めから武レベルの腕が再現可能。MSの操縦技術も同じで、それに空中戦とマルチロックのノウハウがあるレベルです。（涼子達オレンジ小隊があそこまで機体に順応できたのはMSのコックピットが管制ユニットと同じで、操縦方法も戦術機と同じだからです。違いがあるとすれば網膜投射がコンソールが選べるかぐらいです）

機体（前半の改造前）

機体名：CAT1 X1/3 スーパーハイペリオン

カナード・パルスが使用した機体。核エンジンが搭載されバッテリー、弾切れがなくなりエネルギー不足が問題であったアルミューレ・リユミエールも無制限で使用可能になった。だが、小型種に集られた場合過負荷でオーバーヒートを起こす。（360度全てをBETAに囲まれた場合）装甲はEカーボン装甲に換装されており、原型機に比べて防御力は格段に向上されている。

武装：

RFW-99ビームサブマシンガン「ザスタバ・ステイグマト」×2（専用）

ビームナイフ「ロムテクニカRBWタイプ7001」×4+2

ビームキャノン「フォルフアントリー」×2（専用）

モノフェーズ光波防御シールド「アルミューレ・リユミエール」×7

偽装形態

機体名：C A T 1 X 1 / 3 G スーパーハイペリオン偽装型（G
ハイペリオン）

ハイペリオン全体を撃震の装甲を元に作製した追加装甲で覆った姿。追加装甲はEカーボン装甲を使っているので戦車級の噛み付きにもある程度の耐性はあるが長くは保たない。見た目は普通の撃震より一回りほど大きく見えるぐらいで、追加装甲の関係上背中中のウィングバインダーが180°までしか回せず、フォルフアントリーを撃つためには土下座のような姿勢を取る必要がある（ガンキャノンの砲撃時を思い浮かべて頂ければ）ため、フォルフアントリーはもっぱら背後から強襲してくるB E T Aに対して使われる。両腕のアルミューレ・リユミエール発生装置は問題なく使え、ウィングバインダーについている発生器も全方位に展開することが可能。オプシオンとして追加装甲の至る所にイーゲルシュテルンやトードスシュレツケンを仕込み、装甲自体が予備バッテリーとして機能する。（その場合補給パックは搭載不可）尚、ウィングバインダーには大気圏内飛行を可能にするためノワールストライカーに使われているスラストを増設し、その増設した部分に補給コンテナなどを設置して運搬可能になった。

武装：

R F W - 9 9 ビームサブマシンガン「ザスタバ・ステイグマト」×
2（専用）

ビームナイフ「ロムテクニカR B Wタイプ7001」×4 + 2

ビームキャノン「フォルファントリー」×2（専用）

モノフェーズ光波防御シールド「アルミューレ・リュミエール」×7

M2M5 トーデスシュレッケン12・5？自動近接防御火器×4

75？対空自動バルカン砲塔システム「イーゲルシュテルン」×4

* 尚、ストライクEに装着された偽装装甲はハイペリオンと同規格の物である。（I・W・S・P装着のためにレールガンと単装砲のため一部装甲を削っているが）ヴェルデバスターは固定武装が装着してある部位を除いた全てに上記の追加装甲を施しているのので、見た目と言えば一番新型機に見えやすい作りとなっている。

機体名： GAT 103AP（G） ヴェルデ（G）ダガー

オリジナルの砲撃戦用機体。ヴェルデバスターのデータを基に低コスト化を実現し量産した機体で、VPS装甲は取り除かれ、ラミネート装甲とTP装甲になっている。総合的な性能差は装甲ぐらいで、稼働時間はこちらの方が原型機よりも長くなっている。Gは偽装装甲を外付けされた時の名称。

武装：

220？多目的ミサイル六連装ポッド×2

350？ガンランチャー×1

94?高エネルギービーム砲×1

M9009B複合バヨネット装備型ビームライフル×2

頭部12.5?トードスシュレツケン×2

偽装甲装備時:

75?イーゲルシュテルン×2

12.5?トードスシュレツケン×2

三連装ミサイルポッド×2

戦艦:ガーディアン

管理者が宗一の為に用意(創造?)した戦艦。ベースはアークエンジェル級で、カタパルトが左右二つと中央にプトレマイオスのリニアカタパルトを増設した。それ以外に外見に変わったところは無いが、船体各所にミラージュコロイド粒子散布用のハッチが追加されている。

動力は総転移エンジンとSEEDの核エンジン。半永久機関である総転移エンジンは大気圏内でも出力が得られるように強化されているが、マブラヴに來た当初は調整不足のせいで低出力しか出せなかった。装甲はラミネート装甲とPS装甲の複合装甲をとっているが、重光線級のレーザー照射を複数同時に受けると十分で装甲は融解してしまう。

武装:

225cm連装高エネルギー収束火線砲ゴッドフリート×2

75mm対空自動ビームバルカンイーゲルシュテルン×24

ミサイル発射管×48

陽電子破城砲ローエングリン×2

ディストーションフィールド発生用ブレード×2

四連装多目的射出機（四発）×2

対潜用魚雷発射管×8

オリジナル機体・武装

機体名 JGX-01 あめのむらくも 天叢雲

三種の神器シリーズの一機、天叢雲剣をMSの技術を使って改良した機体。新型バッテリーを搭載し、対艦刀シュベルトゲベルを参考にした試製〇一式近接戦闘用長刀、試製〇一式近・中距離戦闘用中刀を常備する機体。稼働時間も大幅に伸び、所要所にラミネート装甲を使用。軽量化を図りながら対レーザー対策も完備した機体。両腕の突撃砲を取り払い、代わりに最初から中刀を右手に、左手にウィンドムの盾（帝国製）を装備。ウィンドムに使われた仕込み武器も全て使え、バックパックに装備した長刀二本を外せばソード・ランチャー以外のストライカーパックを装備可能。その代わり、IEW・S・Pを基に先の長刀二本を翼の部分として装備した、ブレ

ード・ストライカー’が設計された。両試作一号機完成の目処は来年の月上旬予定。射撃武器は中刀のビーム砲、頭部トードスシュレッケン、盾に装備されたミサイル、手首から射出されるスティレットのみで、使用後は全て機体軽量の為投棄される。

機体名 J G X - 0 2 やたのがみ
八咫鏡

三種の神器シリーズの一機、八咫鏡をMSの技術を使って改良した機体。ロシアのチエルミナートルの複座型のコックピットを参考に二人乗りの機体となった。もちろん一人でも操縦可能。C・Eの通信装置を香月博士が複製に成功、量産が可能になりハイヴ内での地上までの通信が低コストで可能となった。センサーはパイルバンカー式にし、BETAに破壊される確率はぐんと下がる予定の地中に埋め込めるタイプを新たに製作予定。武装は試製〇一式突撃砲二丁に各予備弾装を二個ずつ。試製〇一式近接戦闘用短刀を二本。尚、パイルバンカーはウインダムの盾を改造する予定。試作一号機完成の目処は来年の月中旬予定。

機体名 J G X - 0 3 やさかに
八尺瓊

三種の神器シリーズの一機、八尺瓊勾玉をMSの技術を使って改良した機体。肩に装備されていたガトリング砲を取り払い、代わりにエネルギーセルを使ったビームガトリング砲を装備。腰の試製99型電磁投射砲はC・Eの技術を使い、砲身と冷却装置を改善した。更にショルダーをヴェルデダガーの物と同規格の物にしたことでミサイルが使用可能になった。こちらも要所要所にラミネート装甲を

採用しレーザー対策を施した。試作一号機完成の目処は来年の一月下旬予定。バックパックは追加の大容量バッテリーに弾薬、推進剤を貯めたプロペラントタンクを装備している。

武装名 試製〇一式突撃銃

120mmの代わりにザスタバ・スティグマトのビームマシンガンに換装した武器。大陸、明星作戦のデータから120mmの半分の射程でも突撃級を殺せる。エネルギーセルの大型化によってセル一発で五十発、1マガジンで百五十発発射可能（予備弾装は二個まで）。

試製〇一式近接戦闘用短刀

実体剣とビーム刃を使い分ける短刀。バッテリーの問題でビーム刃は五分が稼働限界。バッテリーが切れても再充電可能。

試製〇一式近接戦闘用長刀

実体剣の周りにビームを纏わせることに成功した長刀。電源は機体から取られるが切れ味は要撃級の腕さえ叩き斬る。

試製〇一式近接戦闘用中刀

長刀と短刀を足して二で割った長さの剣。実体剣にビームを纏わせることに成功し、どんなに下手な剣術でも突撃級の甲羅ごと一刀両断が可能。実体剣の先端にはビームの発射口があり、機体から電力を得ることで発射可能。

設定 二月二日追記（後書き）

12月12日、更に追記しました。

第七話（修正）

） 12：30 反応消滅地点 ）

『何だこの穴は……！』

三人の中で、一番はじめに声を出したのは伊隅大尉だった。

何故、僕を含めた孝之さん達までが無言だったのか……それは、無惨にも機体の胸部に大穴を開けて破壊された不知火と、その後ろに存在する巨大な穴があったからだ。

『お、おい…慎二？…う、嘘…だよな？何で…何でお前が死ぬんだよおおおお！！』

しかも、破壊され頓挫していた不知火は、さっきまで軽口を叩いていた慎二の物だった。この作戦で全滅した他の中隊で、運良く生き延びられていた二人だったが、遂に生き残りは孝之さん一人になってしまった…。

『くっそおおおお！クソッ、クソッ、クソッ！！』

『落ち着け、鳴海少尉！！今ここで叫んだところで平少尉は戻らん！！今は、他に生き残った仲間がいらないか探すのが先だ！！』

『…ッ……クッ！り、了解ッ！！！！』

それから約五分後、補給と中途半端だった整備を急いで終わらせた機体も到着し、再び周囲の搜索を開始したヴァルキリーズは、皆不安と焦燥感を溢れさせていた。ガーディアンズの陽菜と三咲も同じで、普段通りの顔をしているのだが、無理をしているのがバレバレだった。

調べたところ、謎の巨大な穴は、直径が要塞級二体分と少しぐらいの大きさだった。平機の穴は、良く見たら傷跡の周りが溶けていることから要塞級の触手でやられたのは間違いない…のだが、その要塞級が居た形跡が何一つないのだ。

『一体、なんなのだろうなこの穴は』

「…BETA…しかないのでは？それにこれ…ゲートに似てませんか？でも、こんなところにできてるなんて情報はありませんし…」

穴の一番近くまで来て調べると、地表近くは崩れたような傷跡で、更に奥をカメラアイで照らして見ると何かに食べられたような傷跡だった。そして平機をもう一度見る……あれ？よく見たらコックピット外れてる？

「……平少尉、生きてるのか？陽菜、コンテナからハ口を出して！」

『？…わかったわ。そっちまで行く？』

「お願い」

さて、僅かな可能性にかけますか。

…ジジジジツ …ジジジジツ …ジジジジツ

はい、見事生体センサーにヒット。平少尉は生きてます。只今ハ口達がコックピットを溶解中です。

どうやら機体の主機部分に溶解液が流れ込んだらしく、そのせ

いで機体がIFFを出すこともできなかったみたいだ。不幸中の幸いというか、ギリギリコックピットにまで溶解液は流れて来なかったらしい。

因みに平少尉は、ハ口達がスキャンしたところ脳震盪を起こしてるらしい。もしかしたら気絶してるかも。

ま、何があったか聞くために、急いで救助してるわけ。

『はっち 解放完了！ 解放完了！ 救助者確保！ 確保！』

「よし！…って、やっぱり気絶してたか。仕方ない、時間が惜しい以上使っしかないか…。『テレパス』」

意識を失い、目覚めるまで時間がかかるのなら、失礼だけど記憶を読ませてもらいます。…ごめんなさい、平少尉。

） side 慎二の記憶 12:10 ）

「お、いたいた。こちらヴァルキリーズ06。補給と整備は完了だ。誰か交代するぞ」

補給地点から一分ちよつと、その地点にヴァルキリーズの不知火三機とガーディアンズの撃震もどきがいた。…改めて思うが、あの撃震もどき、武装は凄くても動きがとろそうにしか見えない。開発者の顔が見てみたいぜ。

『了解、じゃあ私が戻るわ。鈴原中尉、お先に……』

ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！　　ビーツ！

突然、地面が激しく揺れ、立っていた不知火と撃震もどきは堪らず膝をついてしまう。少し離れている俺の所も同じで、跳躍しようにも揺れがひどく、バランスを崩す恐れがあるから何もできない！

「……ぐっ、地震か！？おいみんな、無事……！？」

仲間に通信を入れた瞬間、地面が『沈んだ』。

『なっ！？』

「ッ！早く噴射跳躍で逃げろ！！」

『無理だ！！さっきより揺れが酷く……キヤアアッ！！』

『優衣！？キヤアアアア！！』

二体の不知火が立っていた場所は、他のところより崩壊が早かったため、二機は暗い地下に堕ちてしまった。

『くそっ、擬装さえ外せば……！』

撃震もどきは、跳躍が成功したのかももう一機の不知火を担いで跳躍していたが、二機分の重さには耐えられず、距離を稼げずに陥没し始めたエリアから脱出できなかった。

『……優……大……夫！？優衣！？　　え……？ウソ……イヤアアアアア……！！』

「ヴァルキリー04、どうした!？」

微弱ながら、落ちていった04の通信を拾うことができた。だが、今の悲鳴は一体!？

『来るなあああ!!来る……アアアアア!!』

断続的に響く音は36?の発射音だ。だがそれも止み、突如として通信まで途切れてしまった。

(ツ!先に落ちていった05に続いて04のシグナルが…消えた?!それに、また悲鳴が……何があったっていうんだ!?)

そして、最後にズズウウン、という音を響かせて、地面に直径百メートルを超える大穴が開き、ギリギリ範囲外にいた俺以外の機体が全て飲み込まれていった。

俺はあまりに現実離れした事態に呆然としてしまい、その穴から這い出てきた突撃級や要撃級達には気づけたのだが、回避したときに死角となった場所から這い出てきた要塞級に気づくのが遅れて触手の痛い一撃を受けてしまった。

辛うじて管制ユニットへの直撃は避けられたが、機体を酷い衝撃が襲い頭をシートに打ち付けてしまう。ヤバイ…だんだんと意識が朦朧と……。

「孝…之…速瀬…涼宮…すまない」

朦朧とする意識の中で思い浮かべたのは、友人達の笑顔。そして…

(ハハ…。結局、孝之達の恋路、手伝えなかったなあ…)

後悔は、あの二股鈍感ヘタレ至上最悪男の敵野郎と速瀬と涼宮の恋路を、最後まで面倒見切れなかった事か…。あの二人、よりもよって出撃直前に告白しやがるんだ、タイミング悪すぎだろ？ま、お陰で孝之のやる気がでたから良かったんだけどな…。

意識が完全に無くなる直前に見たものは、機体の電源が落ち暗くなっていくコックピットの冷たい壁だけだった…。

） side out ）

「ふう……」

何とか平少尉の記憶を読み取れた。……かなり余計な物まで見ちゃった気がするけど…そこは気にしない。

管理者さんに貰ったこの力、結局使う機会が無かったからはじめてだったけど、成功して良かった。…さて、今で言えることは…。

『…ういち、宗一！その人生きてるの！？ねえ、返事ぐらいしなさいよ！…』

「うおっ！？は、陽菜か…。うん、平少尉は生きてるよ。ただ意識はないけどね」

『そう、よかつ、慎二が生きてるのか！？』…いきなり割り込まないでくれる？』

突如通信に割り込んできた孝之に、陽菜が不機嫌そうな声を上げる。けど、孝之の心情を察してか、今は何も言わなかった。

「はい。幸い、コックピットに直接被害が無かったので平少尉は脳震盪で気絶しているだけです。命に別状はありません」

『よかった……！本当によかった……！！』

『礼を言うぞ、矢羽田。危うく貴重な人員をKIAにして失うところだった。……ところで、何かあったか？』

さっきまでの明るい空気は無くなり、ピリピリとした空気が再び場を包む。

「……はい。ハ口達が管制ユニット内のデータをサルベージしてくれてわかったのですが、どうやら涼子とヴァルキリーズの三人は穴に落ちました。その内二機の不知火が穴に落ちた時点でシグナルロスト。涼子はまだ無事みたいなので、機体に付けてある発信器を辿ろうと思います。後、BETAはこの穴から出てきたようです」

『……そうか。撃墜は三、最悪の場合、A 01に残るのはここに居る四人だけ……。連隊規模まで居たA - 01も壊滅じゃないか……！』

「『『『『『『………』』』』』」

伊隅大尉の言葉に、何も返すことができない。今、大尉は自責の念に囚われているはずだ。自分が警戒に出させなければ、自分が代わりに出ていれば……そんな後悔で一杯になっている。だが、ここで悲しむのは死んでしまった二人に失礼だ。まだ生きてるかもしれない仲間を放っておいて、許すわけがない。大尉もそれはわかっていたのか、すぐに立ち直ってくれた。……本当に強い。

『………すまない、続けてくれ』

「………今は、涼子の機体に付けた発信器ハ口の反応を待つ以外に方法はありません。『見ツケタ！ 見ツケタ……！』来た！それで水ハ口、涼子達はどこに？！」

やっと来たか！普通はもつと早い筈だけど、余程電波が悪いとこ……まさかね…。

『地下 200m 付近ヲ 高速デ 移動中。 目的地ハ 横浜ハイヴメインシャフト』

『なっ！？』

『ハ、ハイヴ！？しかもメインシャフトって……』

『…生きてはいるんだよね、二人とも？』

『ばいたる 異常無シ 異常無シ。のわーる 健在！』

健在！ デモ ばってりー いえろー！ いえろー！』

『ちよっ！？宗一、バッテリーがイエローって…ヤバイじゃない！…早く助けないと涼子が…！』

「……………伊隅大尉、ガーディアンズをお願いします…！」

『！？待て矢羽田！何をする気だ！？』

『宗一さん！？』

『待つて！いくらハイペリオンでも無理よ！！止めなさい宗一

！…！』

僕は、伊隅大尉や三咲達の言葉に答えず機体を穴の中に飛び込ませた。

） side 涼子 ）

「くっ…！」

私と近くに居た不知火は、何とか地面？に激突する寸前にバーニアを噴かして破損だけは免れたが、現状はそんなことが考えられないほど酷い。何故なら…

『ゆ、優衣…？明…？返事してよ！！ねえ、二人とも！！』
「……………」

先に落下した二機の反応が、無かったからだ。

近くに残骸が見当たらないことから、僅かな希望はあるが生存は絶望的だろう。

通信を続ける不知火を視界に収めつつ、この、振動し続けている、穴の外壁を観察する。穴自体は不気味に発光し、足元を照らしている。が、流石に全体を照らすまでの光量は無く、全体は良くわからない。

「ヴァルキリー3、落ち着いて。ひとまず、この穴を調べるわよ」
「……………」

「ヴァルキリー3！返事ぐらいしなさい！！…………ヴァルキリー3？。」

おかしい。ヴァルキリー3の不知火が全く動いていない。…何か、猛烈に嫌な予感がする。

一歩、近づく。変化なし。

更に一歩。っ！少し動いた。

今度は留まり、集音センサーを最大にする。そして拾った音は…

ズガシャンッ!!

「いつてええッ!!」

焦るあまり、暗い坑内の壁に激突していたからだ。

「……つてえゝ! 水ハ口、涼子の機体の反応は!？」

『健在! 健在! デモ、戦闘中! 戦闘中!』

「…手段を選ばなければ最短でどのくらいかかる?」

『フィールドランス ヲ 使エバ 一分弱!』

フィールドランス: アルミューレ・リュミエールを前面だけに集中展開し、その先端を槍状にした突撃用の武器(もとい技)。推進力と核エンジンが続く限り無限に貫き続ける最強の兵装である。

「……ま、機体はそこまでボロボロじゃないし、何より涼子が

戦闘中なら仕方ないか。よし、アルミューレ・リュミエール展開!」

『アルミューレ・リュミエール 展開! フィールドラン

ス 発動!!』

擬装の為、フォルフアントリーを頭上に向けて展開、更にアルミューレ・リュミエールの発生機を調整して展開。最後は機体を水平にして進路と角度を調整…。よし、行けるぞ!!

「矢羽田宗一、突貫します!!」

そしてバーニアをフルスロットル。涼子達を目指して地中を掘り進み始めた。

特に大きな振動もなく、聞こえる音といえばたまに落ちてくる小石が装甲を叩く音だけ…。そんな中、ハイペリオンは突如巨大な空間に吐き出された。

「うわっ！？何でこんな所に…！」

慌ててバーニアを調節して水平飛行を続ける。穴は大体170メートル前後。地上の穴よりかは些か小さいが、この先に涼子達がいるのだろう。

『BETA確認！ BETA確認！』

「ッ！どこ！？数は！？」

『前方二百メートル 数八一体 一体！』

「……………あれえ？な、何か凄く嫌な予感が…。確か原作にもこのサイズのBETAが一体いたような…」

『新種！ 新種！ でーたべーす 二 該当種 無

シ！ 巨大！巨大！！』

…見えた。デカイ芋虫みたいな尻尾だけだけど、母艦級だ。間違はなく母艦級だよ！何で横浜にいるんだよ！？オリジナルハイヴにしかない筈じゃ！？

とにかく、更に急がないといけなくなった。あの腹の中にはBETAが何千体も潜んでるんだ！…フィールドランスで貫き殺した方が後々楽だな。うん。

「水ハ口、フィールドランスはどのくらい保つ？」

『五分！ 五分！』

「充分！行くぜ！！喰らえええええ！！」

再度機体を微調整。目標をバクバクと土を喰らいながら進む母

艦級の尻尾の中心に向けて、フィールドランスを突き刺した。

ジジジジジジジジジジッ！！

グオオオオオン！！

フィールドランスが触れた途端、母艦級が身体全体を使って悲鳴みたいな音を出した。だが、フィールドランスはそんなことはお構いなしに貫き、皮膚は溶け、中の肉は一瞬で炭化し内部に侵入してきた。

侵入すると、中はBETA、BETAのお祭り騒ぎ。頭上から降ってくる戦車級はフィールドに触れさせて焼き殺し、突撃級は回避しビームを叩き込みながら奥を目指す。

「うわあ、これは嫌だな…。でもまだハイヴよりマシなんだよなあこの状況…」

銃身過熱に気をつけながらも両手のザスタバ・ステイグマトを撃ち要塞級を殺し、おまけと追加装甲に仕込んだイーゲルシュテルンをばらまいて道を作る。

やがて、不気味な色が続く壁に違う色を見ることができた。所々赤紫の血に染まった土……地面だ。そして、その上空でレールカノンとビームを撃ちながら空中戦をしている機体が…

「涼子オオッ！！！！」

） side 凉子 ）

今のでレールカノンの弾は尽きた。バッテリーもイエローを切つてそろそろレッドに差し掛かる。トードスシュレツケンとイーゲルシュテルンも後十秒も撃てないし、アンカーも右手のあと一本。途中、不知火の突撃砲で対処したけど大した時間稼ぎにもならなかった。リーダーに映る要塞級は全て倒したけど、上から降ってくる戦車級達が……鬱陶しい！

その時だ。私が戦闘を開始してから何回目になるかわからない愚痴を溢すと、待ちに望んでいたリーダーの声が通信機から聞こえてきたのは…。

『凉子オオツ！！！！』

「宗一君！？助けに…キヤアアツ！！」

声に反応して動きを止めたのが致命的だった。その一瞬の硬直で、戦車級が頭部に飛び移るのを許してしまったのだ。

途端、機体をガキツ！ガキツ！と噛む音が聞こえてくる。E力ーボン装甲のお陰でしばらくは大丈………

ピーーーーーー

バッテリーが…切れた？

その瞬間頭に思い浮かんだのは、出撃前のブリーフィングの言葉だった。

『三咲以外に注意。追加装甲だけど、装甲自体はEカーボン装甲を使ってるから強度はあるんだけど、要撃級の攻撃は受けたら一堪りもないから、安全策として装甲が戦車級の噛みついたレベルの衝撃を受ければPS装甲が作動するようにしてあるんだ。バッテリー消費は最少でも、連続で喰らえばかなりバッテリーが削られるから注意してね』

（しまった！！まともな被害が無かったせいですっかり忘れてた！）

慌てて追加装甲のイーゲルシュテルンで戦車級を撃ち落とすが、今の攻撃でバッテリーがかなり持っていていかれてしまった。このまま逃げ続けられるのも二、三分が限界だろう。

『涼子、大丈夫！？』

宗一君のハイペリオンが合流したのはこの直後。アルミューレ・リュミエールで頭上を守ってくれたお陰で少しは楽になった。

「あはは…ドジっちゃった。バッテリーがもう切れちゃって…保って二、三分かな」

『…わかった。この状況だとこっちに移るのは危険すぎる。ノワールを抱えて脱出するから、関節部をロックした後生命維持装置以外は全電源をカット。不安かもしれないけど、指示通りに頼む』

「…お願いね、宗一君。私の命、預けるわ」

『ありがとう。……この様子だと、残りの不知火は全部やられたか…。なら、弔いを兼ねて、盛大にぶちかましますか！！』

「……うげえ。ぎもぢわるい……」

そうなりながらも周囲を観察する。今ので大半のBETAにならずダメージを与えられたみたい。さて、肝心の母艦級は…

「……止まってる。まあここまでやれば死んだか。涼子、今から脱出するけど、ちょっとGがキツイから注意してね」

『……了解。もう目が回って気持ち悪いから大差無いわ……』

あゝ、声だけで顔が真っ青な所が想像できる。G弾だつてそろそろ投下されてもおかしくはないんだ。ま、それはそれでミスリルに頼んであるから大丈夫だけど。

なるべく涼子に負担が掛からないように注意しながら、アルミユーレ・リュミエールをフィールドランスに戻して母艦級から脱出した。

side 夕呼

「何ですって！？それは何時……」

『……最短で三十分もかからないだろう。例の新兵器を持った部隊のせいで、米国軍も焦っているのだろう。このタイミングでのG弾投下はまだ効果が認められる……いや、最後の機会だろうからな」

「ッ……！」

私は唇を噛む齒に力を込めてしまった。その痛みで少しは冷静さを取り戻せたけど、それじゃあ意味がない。早く対策を練らなければ今戦闘中の部隊が壊滅するかもしれないのだ。

『…これは、もう確定事項として決定された物だ。変更などもう不可能なのだ、博士』

「……わかりました。ご報告ありがとうございます、ラダビノツド准将」

『…いや、こちらこそ手を尽くせずにすまなかった』

この言葉を最後に通信は切れ、明星作戦の後方基地の一つである国連軍基地で、私は自分の無力さに憤りを感じることはできなかった。

現在 13・25。横浜ハイヴG弾投下まで、後二十五分……。

第七話（修正）（後書き）

アドバイス等ありましたらバシバシ感想にお願いします！

第八話（修正）

） ガーディアン ブリッジ ）

『…これは、少々不味い状況ですね…』

横浜に近い海底で、抜群のステルスを使って潜んでいるガーディアンブリッジ内。総合管制AIのミスリルは、G弾を搭載した再突入型駆逐艦が米国本土から打ち上げられたのを確認したのだ。宗一の指示で事前に発射阻止を命じられていたのだが、結局失敗してしまったのだ。

『間に合うと思ったのですが、まさかここまでダミーを用意するとは…。ですが、最終的に駆逐艦を使用したのが運の尽き。コンピュータの掌握と通信妨害は完了、後は艦長達にそれを報告をして全軍に撤退命令を出すだけ…。状況が状況ですし、もう少し補給コンテナを射出しますか。さて、忙しい忙しい…』

とは言っても、流石は宗一以外で唯一未来を知っているAI。既に対策は万全であった。…何気に、この作戦を裏で操っている黒幕は彼女（？）なのかもしれない…。

『何か言いましたか？』

いえ何も！ ……って地の文に突っ込むな！！

現時刻…13・15。夕呼達の不安と後悔は全くの杞憂となっていたのだった。

『……こちら……イアン01、……ルキリー……ガーディ……ズ、応答……よ……!』

「ッ!……こちらガーディアン03!宗一、無事なの!？」

『陽……か!ああ、涼子は……事だが、ヴァ……キリーズは全滅だ。……間に……わなかった!……!』

通信は入ったが、ノイズが多い。涼子が無事なのは確認できて良かったのだが、落ちたヴァルキリーズが全滅という報告は、場の空気を更に重くさせてしまった。

『こちらヴァルキリー01。ガーディアン01、今の報告は………本当か?』

『………本当………す。申し訳あ………ません、自分………もっと早く………けていれば………!』

『それ以上は言うな!………後どのくらいで地上に出られる?』

『場所さ………考慮し………ければ直ぐにで………出られますが、皆さ………はさつきの穴か………動いていませんよね?』

『ああ。今の言葉から察するに、我々は動いても構わんのだな?』

『お願い………ます。移動後の場所さえ送って頂け………ば直ぐにでも向かいます』

『わかった、待っているぞ。だが鈴原中尉の声が聞こえんが、大丈夫なのか?』

そう、それはさっきから引つ掛かっていたのだ。まさか、どこか怪我でもしてるんじゃない………!!

『いえ、た………涼子の機体のバッテリーが切れてしまって通信ができ………いただけです。そちらと合流次第バッテリーの補給………始めるので、その時は警戒をお願いします』

『わかった。私たちはこれから前線を押し上げるために出る。が、後方に二機を残しておくのでそこで補給を済ませておけ』

『了解!』

……良かった。A-01の人たちには不謹慎かもしれないけど、涼子が無事で良かった……。

『さて、ガーディアンズの二人、どちらの機体が長持ちする?長持ちする方が私たちと一緒に前線に出てもらおうが……』

「私の機体は実弾系が主体ですので、稼働時間は三咲の機体よりは長いです。なので、私が行きます!三咲、宗一達のこと、頼んだわよ!」 『わかりました!!任せてください、先輩!!』

三咲の元気な返答を聞いて、私は機体を先行した機体に追いつけるためにフルスロットルで前線へと機体を向かわせた。

） 穴 ）

陽菜と伊隅大尉との通信も終わり、今は全速力で来た道を引き返してる状況。だけど…。

「何で通信が終わってすぐに現れるんですか!?!」

どうやら、母艦級が掘った穴はハイヴの広間近くを通っていたらしく、新しくBETA達が穴を開けて増築しようと作業中でした

よ！見逃したら上は勿論後方の部隊が危ないからフォルファントリ
ーを空いてる穴に向かって連射したあと天井にも同じこととして塞い
でみたものの、既に百を超えるBETAが先行して待ち構えてくれ
てました！！

コイツら叩かないと折角塞いだのに内側と外側のダブルパンチですぐに元通りだ。……後でミスリルに頼んで対BETA用のミサイルでココ潰そう。うん。

BETAに対してえげつない対策を考えながらも両足、両肩に設置されたイーグルシユテルンとトードスシユレッケン、更に片手のザスタバ・スティグマトでビームを撃ちまくる。

下手な鉄砲何とやら、じゃないけど、中途半端に狭いこの空間では十分な戦果を挙げている。後は細かい戦車級だけ。実弾は残りが少ないのでフォルフアントリーで纏めて葬る。うん、オーバーキル最高！

と、テンションが何やら危なくなっていたので落ち着けてから時間を見ると、通信から十分も経っていた。

慌てて送られてきたデータを見ると、合流場所はほぼ真上。このままフィールドランスで突き抜けてやる！

「涼子、今からちよつと乱暴だけど地上に出るよ！かなりガタガタ揺れるはずだから気をつけて！」

「了解。あと少しなら……耐えて見せるわ……！」

接触回線を繋げて確認を取る……けど、かなりキツそうだな。ま、最小限の揺れで済むよう努力しますか！

「アルミューレ・リュミエール展開、フォルファントリー発射準備……よし！ いっけええええー！」

アルミューレ・リュミエールの範囲を更に広げてノワールをカバー。オマケでフォルファントリーを撃ちながらだから少しは楽な筈だ！

ズビュウウウウン！！

二発の閃光は一気に十メートル以上の土を溶かし、そのドロドロの溶岩と化した穴にハイペリオンは突っ込んだ。

「……………で？何か反省はあるか宗一？」
「ほんつつつつつとうに申し訳ありませんでした！！」

只今機体を降りて絶賛土下座中。いやまさか、最後に地面をフォルファントリーで突き抜けたら真横に不知火が居たんだもの…。気づいたときには冷や汗をかいた。

一応アルミューレ・リュミエールは隠しておきたかったから、最後はフォルファントリーで穴を開けたんだけどそれが最悪でした。最大出力ではないものの、元々高威力のビームキャノンが低出力とはいえ機体に擦ればどうなると思う？…戦術機の装甲レベルなら軽く吹っ飛ばせます。お陰で、孝之さんの不知火は左腕の肘から先が無い状態…。平少尉の機体が胸部以外無傷だったことで、急遽八口達が突貫作業で左腕を移植中、それに平行してハイペリオンの整備と弾薬補給、ノワールの充電も行われていて、僕は説教中…。不幸だ。

「まったく、このバカ！上にレーダーでもかけていれば俺が居たのがわかっただろう！？」

「いえその…万が一を考えて地上に出ても減衰しきる位の深さで撃ったせいで、レーダーに映らなかったんです！」

「……減衰してあの威力。頭が痛くなってきた…」

それはさておき、只今13：10。ミスリルにホール塞ぎようのミラージュコロイドミサイル（高価だけど一発で潰すためには一番いい）をお願いするため通信を入れてみた。……良い具合に本部に連絡、ということとで説教は抜け出せたけど、終わった後まだ続きそうです。トホホ…。

『こちらガーディアン、ミスリルです。どうし……何があったんですか艦長？そのような泣きそうな顔をして』

「いや、こつちでトラブルがあったただだから気にしないで…。

それよりミスリル、今から送る座標にミラージュコロイド搭載の大型ミサイルをお願い。そこ、新しく門になりそうで色々と危ないから潰しておきたいんだ。…ところで、G弾はどうなった？」

『全くヒットしませんでした。個人で動かしている訳ではないと思うのですが、データを残さないようマニュアルでしている可能性が高く、コンピュータで追跡ができずG弾は軌道上に打ち上げられました。……しかもあれ、僅かに残る再突入型駆逐艦打ち上げのデータに全部が全部怪しい所を残す念の入れようさ……。もしかして私たちの情報が漏れているのでは？、と疑ったくらいです』

「……それは無いと思うけど…一先ず、G弾投下は防げなくても良いから、最低でも投下のタイミングはこつちで握れるようにしておいて貰える？そうすれば部隊の撤収とか随分と助かるから」

『了解、それは既に解決済みです。…それより、データを見たところストライクEが一体不調ですね…。ウインドムを送りますか？』

「いや、ウインダムは偽装が間に合わないからいらない。送れるなら無反動砲と突撃機銃、弾薬をお願い。後補給コンテナはすぐにミサイルは通信が終わってから十分後に発射してね」

『わかりました。武器は補給コンテナに入れてあった出撃時と同じ量、お送りします。では艦長、御武運を』

よし、ノワールもバッテリーはあと少しで満タンだし、これなら移動しながらで大丈夫。ハイペリオンも武装の整備は完了。孝之さんの不知火は……まだかかるか。

「孝之さーん！不知火って後どのくらいかかりますかー！？」

「ハ口達のお陰で後三分だ！調整入れたら五分だな！！」

「なら移植が終わり次第前線に出ます！残りのハ口達総動員しますから調整込みでは三分で済ませて下さい！！」

「わかった！」

ハ口全員なら移植は二分で済むし調整は一分で終わる。ミサイルも十分で着弾する筈もないから充分被害範囲からは脱出できるな。

その時、後方からジェットストライカーの轟音が辺りに響き渡り、機体の手前五メートルに土煙が舞った。うつすらと歪むシルエツトからウインダムだと推測できる。

ウインダムはコンテナを置くとそのままジェットストライカーを噴かして帰っていった。…敬礼ぐらいしたらいいのに。

コンテナはウインダムが手を離れた途端姿を現し、ハ口達は整備口ボを使ってコンテナをウイングバインダーに取り付けていく。

「涼子、行ける？」

『ええ。機体のバッテリーも満タンだし、休憩も充分よ！』

いつも以上に元気な姿が少し不安だけど、今は頼むしかないか。

「…ならよかった。この作戦も後二時間で『終わらせる』から、それまで頑張つて」

『（終わらせる…？）…ありがとう。それじゃ、出撃準備しとくわね』

あれから五分。少し遅れはあったけど孝之さんも出撃準備が終わり、全員が前線に向かつて移動を開始した。

その後、母艦級が開けた穴に一発のミサイルが直撃し、穴は跡形もなく消滅したのをハイペリオンのレーダーで確認した。よし！

） 最前線 13時50 ）

『第七小隊、前に出すぎだ！！下がれ！！』

『H Q、こちらフリーユージェル1！支援砲撃を……』

『がアアアアッ！！あ、足が…足がアアッ！！』

『隊長オ！隊長オオ！！』

この前線はまさに地獄だった。

B E T A の出現率は今作戦中最多。撃墜率も半端なく高い。

レーダーに映る赤いシミは消してもまたすぐに染まり、逆に味方を示す青のマークは塗りつぶされる一方だ。

『ヴァルキリー1よりヴァルキリーズ各機、これより最前線の

部隊を援護する――！いつも以上に豪華なご馳走だ、全て平らげる勢いで行くぞ――！」

『『『『了解――！』『』『』』』』

そんな中、国連カラーの不知火三機と一体の撃震もどきが戦場に飛び込んだ。

『ヴァルキリー2、FOX2――！』

一体が左手の突撃砲で戦車級を撃ちながら要撃級に近づき、左手で長刀を振るい切り裂く。直ぐ様後ろに跳躍して群れから離れると120mmを突撃級の足元に撃ち込み転倒させて後続を渋滞させる。

『今ツ！ガーディアン3、FOX4――！』

少し離れた所から渋滞を確認した陽菜操るI・W・S・P・ストライクは、バックパックの115mmレールガンと105mm単装砲をBETAが密集した場所に叩き込む。

レールガンは容易くBETAを貫通し遙か後方で爆発し、単装砲はレールガンの射線外にいた要撃級達をまとめて射殺す。

『ヴァルキリー1、FOX2――！』

伊隅の駆る不知火はザスタバ・ステイグマトのビームマシンガンは、突撃砲とは比べ物にならない速度でリーダーから赤いシミを消していく……が。

「チツ！弾切れが早い――！」

陽菜がコンバインシールドに内蔵された36mm径六銃身ガトリング機関砲を乱射しながら警告したが、遅かった。要撃級の一体が傷を負いながらも、残った腕でみちるの不知火を叩きのめそうとしていたのだ。

みちるもそれに遅れながらも気づいたが、遅い。脳がアドレナリンを過剰分泌させたのか、迫り来る要撃級の腕がゆっくりと見える。身体を死の恐怖が支配してしまい、何もできず腕を見送ることしかできない。

（正樹……ッ！）

愛する幼なじみの名を心の中で叫んでも、視線だけは要撃級の腕から外さない。まるでそれが精一杯の反抗であるかのように…。

そして、剛腕がみちる機を貫く直前、大出力のビームが要撃級を腕諸とも消滅させた。

「え……？」

一瞬間抜けな声を出してしまったが、慌てて跳躍機を使って後ろに逃げる。下がりながら後ろを見ると、円筒を真っ直ぐ伸ばし土下座のような体勢をしている宗一の機体が見えた。

背中 of 円筒から煙が出ていることから、あの光は宗一が撃ったのだろつ。

（全く…来るならもつと速く来い、馬鹿者が!!）

『こちらガーディアン1！伊隅大尉、ご無事ですか!？』

「私はな。……だが、残っているのは私と牧野少尉だけだ。今から後退するところだったのだが、丁度良かったと言うべきか…」

『……すみません、途中の部隊も援護していたらかなり遅れてしまいました。ですが大尉、後退はもう少し戦線を押し上げてからで

す。いけますか？」

「…バ力にするなよ矢羽田。押し上げるところかここら一帯のBETAを全滅させてやる!!」

「ま、まあちよつと落ち着いて…。そろそろHQから通信が来ますから」

「何？それはどういう意味…」

「HQから前線部隊全機へ！最優先伝達事項！！繰り返す、最優先伝達事項！！現時刻1620から二十分後に米軍主体によるG弾使用が決定、各部隊はBETAを一定ラインまで押し上げてください！尚、安全を考慮し投下五分前には全機撤退を開始せよ！繰り返す…」

この通達は戦場を一瞬凍りつかせたが、次の瞬間にはさっきまでとは比べ物にならないほどにBETAの損耗率が上がっていった。ゴールが見えた事で勢いづいたようだが、そこかしこから漏れてくる通信から、帝国衛士達の悔しそうな声が聞こえてくる。…米国に頼ると、大量破壊兵器を使うのが辛いだろう。

ヴァルキリースの三人（一人はまだ気絶中だけど…）も悔しそうな顔をしながらも必死に前線を押上げていく。

「矢羽田、さっきのヤツは撃てないのか!？」

「土下座しないと撃てません!!こんなにあんなに前出た以上無理です!!それにあと少しで予定ポイント…行つた!!ガーディアン1からHQ！予定ポイントまでBETAを下げた!これより後退する!!」

「HQ了解。支援砲撃を開始しますので直ぐに後退してください!!」

それを合図に、一番機動力が低いヴェルデダガーをストライク

二機が抱えて飛び立ち、不知火も後退を始める。それと同時に足止め用の砲撃が始まり、BETAを釘付けにし殺していく。それは各前線に見られるようになり、やがて全域が砲撃による爆煙で見えなくなっていた。

ヴァルキリーズも突撃砲を撃ちながら後退していく中、孝之の不知火だけ、その場から動こうとせず攻撃を続ける。

『孝之さん！？後退です！何やってるんですか！？』

『うるさいッ！ここは…ここは俺達の故郷なんだ！！それを…』

「馬鹿者！！貴様、今こんなところで犬死にするつもりか！？」

『そうです！あなたには、あなたを待っていてくれる人がいるでしょう！？その人を悲しませる気ですか！？』

宗一のハイペリオンが孝之の不知火を羽交い締めにして無理矢理後退させる。

『…クッ！』

『死んでしまえば、全ては終わりです！それさえもわからないんですか！？』

『……………くっそオオオオオ！！』

孝之は宗一の拘束を無理矢理引き剥がすと全力で後退を始める。通信越したが、その目には涙が溜まっていた。

1430時…横浜ハイヴに二発のG弾が使用され、地上のBETAとモニュメントは残らず消滅。ハイヴ内のBETAも大半は死滅

していたとの報告が上がる中、反応炉がある主広場^{メインホール}にて、人間‘だ
った’物を突入部隊が確認。…それは百を超える人間の脳と脊髄だ
った…。

こうして、明星作戦は翌日の八月八日に終了。G弾による有軍
部隊の被害は戦術機五機。いずれも機体の損傷によって後退が不可
能になり、押し上げた前線を支えるために残った機体だけであった。
尚、この作戦中謎の光学兵器を放つ撃震が複数確認されたが、
帝国軍上層部はこれを否定。戦場に流れる一種の噂として片付けら
れた。…一部国連軍並びに首都防衛隊の衛士を除いて……。

第九話（修正）（前書き）

修正版です。色々と直してあるので最初から読んでいただけたら幸いです。

第九話（修正）

） 仙台基地 戦術機格納庫 ）

仙台基地は、夕呼がオルタネイティブ計画の責任者としての権限で接収したものだ。連隊規模（108機）の戦術機を格納できる格納庫が用意された基地なのだが、今はたった二機の不知火と数十機の国連軍機しかない…という寂しい様相を呈していた。

先の明星作戦が終了してから一日。A 01…いや、伊隅ヴァルキリーズは機体のオーバーホールの為出撃も出来ず待機を命じられていた。

結局、A 01の生き残りは鳴海、慎二、みちるを含めた三名だけ。機体も慎二の機体が来るまで二週間もかかり、現在は小隊としての機能すら機能できない。しかも、慎二は機体がやられた時の怪我でしばらく入院。この分だと部隊として機能するまで建て直すのに一年はかかるだろう。

「ふう……」

その重たい考えを振り払うかのようにみちるは頭を振る。繰り上げたがA 01の隊長となった以上、部下にこんな情けない姿を晒すわけにはいかないのだ。

ふと視線を横にずらすと、孝之が愛機の前で黄昏ているのが見えた。…全く、生き残ったのにそんな顔とは、衛士の礼儀ができていない。今回が初陣で、イレギュラーがあつたとはいえあの大規模な作戦を生き残ったのだ。この先の任務ではそう簡単に死なない経験を積めたらう。

そして、生き残った以上はこんな所で潰れることは許されない。

活でもいれてやるか。

「おい、鳴海。何をそんなに落ち込んでいるんだ？」

「ッ！伊隅：大尉。…何でもありません」

鳴海は今にも消えてしまいそうな、どこか危ない雰囲気放っていた。PTSDにかかっているわけではないが……これは、故郷を守れなかった事がショックだったのだろう。……しまったな、私ではなくこいつの彼女が解決することだったか。なら今は…。

「…まあいい。今から一時間後、ミーティングがあるからブリーフィングルームまで来い。香月博士からお話があるそうだ。遅れるなよ？」

「……了解」

覇気はないものの、孝之が返事を返した：直後。格納庫に戦術機が入ってくる時に鳴るサイレンが鳴り響いた。…まさか、生き残りがいたのか！？

慌てて格納庫の扉を見ると、入ってきたのはガーディアンズの撃震もどきだった。今回は二機だけのようだが、先頭を歩く特徴的な跳躍機と武装を持った機体：矢羽田だ。後ろの砲台付きは牧野少尉か…。

二機は空いているメンテナンスベッドに機体を固定させた。それを見た私と鳴海は、互いに頷き合つと矢羽田達の機体に近づいていった。

駆けつけたと同時にハッチが開き、矢羽田達が出て来……ん？

二人……いや、‘三人’が降りてきた瞬間、格納庫に何とも言えない白けた空気が流れた。

一部の整備兵はスパナを構えて投擲しようとしたり、警備兵に至っては銃を構えたりと少し……いやかなり険悪な雰囲気格納庫を包み込む……。

その原因は、矢羽田がコックピットから降りるとき少女を抱えていたからだ。

遠目からでもわかる程、綺麗で流れるような銀の長髪は腰辺りまで伸び、顔は人形のように整っている。瞳は髪と同じ銀色で、妖精と言われても納得してしまうほどの美しさだ。

だが、彼女……いや、少女は見た限り十代前半。……犯罪と見られなくても仕方無いだろう。

「……………」

「ど、どうも、伊隅大尉に孝之さん。……お願いですからそんな目で見ないで下さい！（くっそぉ、何でこんな目に！！）」

「艦長、早く降ろしてください。周りの視線が痛いです」

「そりゃミスリルのせいでしょ！？」

「……………酷いです。嫌がったのに無理矢理抱っこしたのは艦長じゃないですか！」

うつすら涙目＋上目遣いという高等テクニクにより、格納庫にいた全ての整備兵と警備兵は各々の武器を構えて近づいてくる。ミスリルはというと、いつの間にかみちる達の方に逃げていて抱きついてる。

「……死に曝せエエエツ！！！！」

「ま、待つて今のはミスリルのうギャアアアアアアアアアアアアアアアア

ア
ツ！！！！」

それから十分間、格納庫には一人の絶叫とボコス力殴られる音が鳴り響き、事態を聞いた夕呼の停止命令が出るまで続いたそうなの。因みに、その時みちるに抱きついてたミスリルは、みちる本人に頭を撫でられ、周りの女性兵士達にも同じように可愛がられてとても御満悦な顔だったそうです。（そのせいで一部の女性兵士がランチに参加したそうなの。……トホホ）

） 時は戻って一日前 （

明星作戦が終わり、宗一達を回収したガーディアンはまた海底の奥深くまで潜航していた。そして、そのガーディアンの食堂には、四人の生きた屍が呻き声を上げながら机に突っ伏していた。

G弾使用后、A 01は帰還命令が下されガーディアンズもそれに合わせて仙台基地まで付いて行こうとしたのだが、流石に疲労が溜まりすぎていたし、機体もフルメンテナンスが必要だったので、会談は後日にしたいと打診したのだ。その際、香月博士に色々と悪態をつかれたものの、向こうもそれを承諾して今に至る。

全員コックピットから降りた途端その場でダウンしてしまい、三咲は八口達に食堂まで運んでもらう程だったのだ。

涼子達もいくらエースとはいえ、ここまで大規模で且つ、連戦に次ぐ連戦で体力的にはギリギリ余裕があっても、集中の連続によ

る精神的な疲労で保たなかったのだ。

それはもちろん、素人の宗一も同じで……いや、四人の中で一番ひどい。戦闘中は興奮でハイになっていたから、疲労とか全く感じなかったが、落ち着いた途端に一氣に来てぶっ倒れたのだ。

涼子達は飲み物を飲みつつ話していたが、宗一は飲むだけで余り参加できていない。肉体強化によって体力、スタミナはあっても精神はそうでは無いのだ。

後ろからてくてくと足音が聞こえたか、三人は話に夢中で気づかず（というか話してる時も視線が定まってない）、宗一はボンヤリしていたので同じで気づかなかったのだ。

小さな影はいつまで経っても気づかない四人にムツとしたのか、徐に氷水に浸してあったタオルを手に持つと……

「……えいっ」

かわいらしい声と共に宗一のおでこに投下した。

そんなボンヤリ中の宗一の額に冷たいタオルがピタッと貼られた。

「ぎゃアアアアアアア！」

当然、いきなりキンキンに冷えたタオルを落とされて宗一は悲鳴をあげ、食堂を包んでいたダラダラ感は遥かオリジナルハイヴまで吹っ飛んだ。

「ひゃうっ！宗一さん！いきなり変な声ださな……い……で？」

「そうよそうよ！ぼーっとしてるならよ……そ……で……？」

「どうしたのよ二人とも、固まって……だれ？」

三人の様子を見て、やっと異変に気づいた宗一は、ギリギリと擬音が聞こえてきそうな動きで後ろを向いて、言葉を失った。

そこには、今まで見たことが無いほどの美少女――少女かな？――が黒いドレスを着て立っていたからだ。

肩まで伸びた銀髪はサラサラと流れ、ライトの光を反射してキラキラと輝き、神秘的なオーラを醸し出している。

絵本に出てくる妖精というイメージがピッタリだ。

で、その少女は手に氷水の入った洗面器を持った状態で固まっていて、さっきの声で驚いたのか目を大きく開いたままで固まっている。

「えっと……おい、大丈夫……夫？」

「あつ！」

お、回復した。少女は慌てたように洗面器を他のテーブルに置くと、コホン、と咳払いをし姿勢を正して口を開いた。

「すみません艦長、少し驚いてしまっただけです。御安心を」

「いや、それはいいんだけど……君だれ？」

「？ ミスリルですが……わからないのですか？」

可愛らしく小首を傾げながら言う自称ミスリル。それに対して僕たちは…

「……あ、そうなん……って、えええええええッ！？」

「「「」」」

想像外の出来事にみんな揃って乗り突っ込み＋大絶叫、そして固まる。さっき以上の大音量にミスリル？が余計に怖がってしまった。

「ちょ、ちょっと待って！ミスリルってAIよね！？どうして人間になっちゃってるの！？」

いち早く硬直から復活した陽菜が問いたです。
それに吊られて僕達の思考も再起動を始める。

「いえ、これは生体ユニットです。本体の電子頭脳は艦の中核でしっかりと守られています。生体ユニットに電波を送信して動かし
ている、と考えて頂ければ結構です。因みに活動範囲はハイヴ以外
なら何処でも可能ですよ」

ぶい、とピースをしながら言うミスリルに、せっかく再始動した
思考は停止し一同は啞然とする。宗一も疲れはどこかへ吹っ飛んだ
ようだ。

「…宗一さん、何でこの事黙ってたんですか？」

意外に打たれ強い三咲が一番に復活し、ジト～とした目で宗一
を睨む。

それに気づいた宗一は慌てて弁解を始めた。…三咲は怒らせる
と大変なのだ、主に機嫌取りに…。

「……いや、僕も今知った所だから？…ってミスリル、何で黙

つてたの!？」

「いえ、管理者から『黙っていた方が面白い』と言われまして、それで」

……なんだろう。この沸々と沸き上がってくる感情は……!!

「そ、宗一さん、落ち着いてえ〜!!」

「…おい宗一、変なオーラが出てるぞ」

「……………ごめん、今落ち着いた」

怒りが収まった三咲と陽菜の呆れた声で我に返り、一先ず落ち着いた僕は、ズレにズレた話の軌道をもとに戻す。

「…で、何でミスリルが人の姿を取ったの？」

「この方が退屈しないからです」

……………。

「……………冗談です」

「……………冗談かい!!」……………」

「本当は艦長のサポートのためです。だって艦長、交渉とか腹黒いのダメそうじゃないですか」

「…確かにダメだけど…ミスリルこそ出来るの？」

「おまかせを。こんな姿でも頭脳はスーパーAI、香月博士など目ではありません」

おお、意外に頼もしい!涼子達も香月博士の異名、横浜の魔女、を知ってたみたいで、凄く感心してる。

「うっう、ミスリルちゃんカワイイっ!!」

「こら三咲、抱きつかない！ミスリルちゃんも嫌がつて……ないならいいわ。じゃあ、私も！」

「あ、涼子ズルい！私だって……」

この後、ミスリルは三人の気が済むまで撫でられたり抱き締められてました。

……いい加減話を元に戻せええ！！

「……羽田……加減……きなさい！……起きろつつんでんでしょうが……」

ドゲシツ！！

「いつてええええツ！！……あれ？ここどこ？」

「私の執務室よ。つたく、あのバカ共が騒いだせいで貴重な時間が削られたじゃない……！」

目の前で暗黒オーラを放出している女性は（怖いから）スルーして部屋を見る。

大量に積まれた本、床に散らばる様々な書類、奥のデスクにはでかいコンピュータが一台、入り口には黒い服を着たウサミミ少女……ん？

「……ウサミミじゃ、ありません。……カチューシャ、です」

「あら？社、いつの間に来たの？」

「……さつき、です。ミスリルさんも、すぐに来ます」

「そう…。じゃ、矢羽田、顔合わせは初めてよね。私が香月夕呼、オルタネイティブ4の責任者よ。で、入り口で立ってるのが…」

「……………社、霞です」

寝っ転がったままだと失礼なので、立ち上がり咳払いを一つ。…咳したのは締まりが悪いからだよ！

「初めまして。ガーティアンズリーダー、矢羽田宗一です。「シユーン」…で、今入ってきたのが」

「ミスリルです。主に艦長のサポートをしています。以後お見知りおきを」

そして、色々と不幸があっただけど、香月博士との会談が始まった。

第十話 6 / 28 修正（前書き）

大幅に修正してしまつてすみませんでした。

こんなダメ作者ですが、読んでいただけたら嬉しいです！

第十話 6 / 28 修正

チク…タク…チク…タク…。

会談が始まってから一時間。夕呼と宗一の話は平行線を辿っていた。

「……………」

「……………」

「……………（ズズズ）」

「……………（パクッ）」

因みに銀髪少女組は用意された和菓子とお茶を堪能中。その絵は見ていて和むのだが、如何せん宗一達が出す「お前が譲れやゴラァ」的なオーラでぶち壊した。

「……………どうしても、譲る気は無いのね？」

「……………はい」

「も〜、別に戦艦の一つや二つ、くれたって良いじゃない！」

「そんな事したらガーディアンズが活動できなくなります！！技術提供はできてもこれは無理ですよ！」

「……………チッ！」

「……………聞こえてますよ」

そう、ガーディアンズがA 01とは別の部隊として協力し、一部MSの技術とディストーションフィールドを提供するまではそんなに纏まった。

でも！！話がガーディアンの詳細になった途端、夕呼の目が豹変した。

そう、まるで新しいおもちゃを見つけた子供みたいに…。

「宇宙戦艦よ、宇宙戦艦！！オルタネイティブ5ですら脱出挺止まりなのに、それをぶつ飛ばして戦艦よ！？くうくうっ！考えただけで興奮してくるわ！！」

『大人な子供だ…』

『艦長、ストレート過ぎます。もう少しオブラートに…』

『……香月博士、子供なんですか？』

楽しそうに語りまくる夕呼を他所に、三人は固まってゴニョゴニョと…。一体何しに來たんだろ？

「だから…って、アンタら何で固まってるのよ」

「「「いえ、なんでも」」」

「……まあいいわ。じゃあ矢羽田、せめて私をガーディアンに乗せなさい！これは絶対に譲れないわ！！」

「…というか、何でそこまでガーディアンにこだわるんですか？」

ま、今までの言葉からして大体予想はつくけどね…。

「何でって…面白そうだからに決まってるじゃない！！」

その言葉が放たれた途端、宗一はテーブルに崩れ、ミスリルは納得し、霞に至っては「…博士は子供…博士は子供…」と繰り返す始末。

…原作でもどこか子供っぽい所はあったみたいだけど、ここまでとは…。

「……まあ、理由はアレですが、いずれは乗って頂くことになりますのでそれは大丈夫ですよ」

「ならよろしい！！ さて、それじゃあ早速MSの現物、引き渡してもらおうわよ。データはもちろん、明星作戦のデータを見る限り、代わりになる機体も開発しないと保ちそうにないしね」

「……………」

そう、明星作戦という大規模作戦を経験してわかったことなのだが、機体の消耗が激しいのだ。

A-01が使っている不知火は予備機も整備パーツも豊富にあるが、MSは違う。ガーディアン内にある簡易生産スペースでも、数を揃えることができないのだ。（実際、管理者からもらっていた予備パーツの半分は底を付いてしまった）

まあ、なるべく出撃回数を減らせば大丈夫だが……まあ新型を作った方が後々役立つだろうから、ガーディアンズの機体以外は最低一機は残して全て提供となったのだ。

「因みに、実際に造るのは帝国技術廠だからよろしく」

「はっ！？ そんなこと聞いてませんよ！！」

MSはこの世界では異様すぎる。下手に存在を知られれば武力行使をしても手に入れようとする国だって出てくる筈だ。特にアメリカとかアメリカとかアメリカとか……。

「安心しなさい、技術廠の巖谷中佐は安全よ。それに、いくら天才の私でも戦術機の開発なんて設計しかできないわよ。製造……というか技術関連は完全に十八番違いよ。専門家に任せるのが一番……と言っわけよ」

顔に出ていたのか、あっさりとおちらの懸念事項を払拭してくれた。

「ま、電磁投射砲の件で繋がりができてたから協力できたの。感謝しない？」

「……はい。ありがとうございます」

「因みに、条件としてXFJ計画に参加しないといけないみたいだから。その事で一週間後、偽装済みの機体を持って帝都まで行って貰うわ。がんばりなさいよ」

「……………マジ？」

「まじ？ ……ああ、本気って意味ね。何の見返りも無しに軍が動くと思った？」

「……いえ、ただ驚いただけです」

「さつきも言ったけど、安心しなさい。巖谷中佐は‘安全’よ。……ま、お見合いとかはさせられるかもしれないけどね（ボソッ）」

「え？最後、何て言いました？」

「何でもないわ。じゃ、帝都の件だけど明後日に行って貰うわ。いいわね？」

「……………はい」

夕呼が最後に呟いた一言がかなり気になったが、追求する前に、これ以上は時間の無駄、ということで執務室から追い出されてしまった。…………どこ行けば良いんだ？

｝ side 凉子 ｝

「で、ここで最後！PXです」

宗一君が香月副指令のところに運ばれた後、私は伊隅大尉と鳴海少尉に仙台基地を案内してもらっていた。

久しぶりにみる大勢の人…。ガーディアンの中だと、五人しかいなかったから、新鮮な気分がする。

「ん？　そういえばそろそろ昼時だったな。鈴原中尉、一緒に食べていくか？」

「え？　よろしいんですか？　でも……」

一応、基地を案内してもらった際に国連軍の軍服を貸してもらっているけど、別の軍 - 部隊かな？ - の軍人がここまでして大丈夫なのだろうか？

「なあに、心配はいらないさ。何せ、ガーディアンズは明星作戦で共闘したときからすでに国連軍として登録されている。気負う必要なんてないぞ」

「……では、お言葉に甘えて」

ためらってはいんだけど、伊隅大尉のお誘いは心惹かれる物があったのは事実だ。…そういえば、鳴海少尉って二股かけてたんだっけ（みちるから）その所、じっくりと聞かせてもらいましょうか！

その時、孝之は背後から嫌々な気配を察知し、直ぐにでもPXから逃げ出したい気持ちで一杯だったが、伊隅の「お前は何を食べる？」の一言の前に、脱出は不可能となった。哀れ…。

「今日はAランチか…。鈴原中尉は何にする？」

「…では、生姜焼き定食をお願いします」

「ほう、気が合うな。私もそれは好物なんだ。じゃあ、トレイは鳴海に持たせるから中尉は先に座っていてくれ。席は……」

「……鈴原？ まさか、涼子！？」

その時、私の後ろから懐かしい声が聞こえ、慌てて振り返る。そこには、大陸に派遣される時に笑顔で送り出してくれた教官であり先輩の姿が…

「…まりも、教官？」

「やつぱり…！涼子…！」

まりもは目につつすらと涙を浮かべながら涼子に駆け寄り、その場で力強く抱きしめた。

第十話 6 / 28 修正（後書き）

涼子の名字が間違っていました…。牧野は陽菜で、涼子は鈴原です！

第十一話（前書き）

今回は凄く短いです。前回の最後の続きだけですが、どうぞ

第十一話

） P X ）

「……そうか、鈴原中尉は神宮寺軍曹の教え子だったのか」

「はい。私が富士教導隊を目指したのも、教か「コホン！」……いえ、神宮寺軍曹を追いかけるためだったんです」

「富士教導隊！？その年で入隊できたんですか！？」

「……と言つても、腕はまだまだでしたけどね」

P Xの一画で、涼子とヴァルキリーズ、そしてまりもの計四人は一緒に昼食を取っていた。

カウンターで抱き合い泣いてしまふ、という赤面物の行動をしてしまったまりものも、暫く顔を赤くしていたもののすぐに「狂犬」の異名（涼子は知らない）通りの威厳を取り戻して睨みをきかせて周りにいた職員は一斉に顔を背けさせて席に座っている。

「それよりも鈴原中尉、生きていらしたなら手紙の一つぐらい送って頂いてもよろしかったのではありませんか？私を含めて一体何人心配させたと？」

笑顔だけ目が笑っていない顔とトゲのある言葉がまりもから発せられ、涼子は居心地悪そうに答えに詰まる。

『だって、今の今まで海底にいたんだから手紙なんて出せなかったんだもん！！』

「……………（ニコニコ）」

「……ごめんなさい」

「……ふう。ま、いいわ。涼子が無事だったんだから、それで許し

てあげる」

「せ、先輩……っ！」

「その代わり、後でたっぷりと奢ってもらわよ？私を含めた教導隊全員分」

「うげっ！！ わ、わかりました……」

まりもの要求に乙女らしからぬ声を上げてその場に崩れる涼子であつた。

第十一話（後書き）

次回は一気に一週間後。巖谷中佐達との面会です。…以前みたいに
ならないよう努力します！！

感想、誤字脱字がありましたらよろしくお願いします。

第十二話（前書き）

戦闘描写が未熟ですが、何かありましたら感想までお願いします。

第十二話

〽 帝都 帝国軍技術廠 〽

「こちらでお待ちください。巖谷中佐と篁中尉はすぐに参ります」
「ありがとうございます」

ここは帝都にある帝国技術廠の一室。ここまで案内をしてくれた兵士は敬礼して退室いった。

もちろん、巖谷中佐と会うためだ。

CMとマブラヴを勧めてくれた友人から聞いたぐらいしか知らないが、どうやらトータルイクリップス関連のようだ。その時の友人曰く、‘ガンダムで言うMSV’らしい。

先に案内の兵士が持ってきてくれた不知火壱型丙の名前を見て、やっと気づいたのだ。因みに機体はこの壱型と貳型、ACTVイーグルしか知らないし、登場キャラ、ストーリーなんかは全然知らない、未知の世界だ。

そんなことを考えながら、機体を運ぶトレーラーに乗ってきたオレンジ小隊のみんなを機体が運び終わった時点で休暇にして、隊員のみんなはそれぞれ帝都で思い通りの行動を楽しんでいる…

「うううう……。宗一さあ〜ん、早く会談終わらせてくださいねえ〜」

「それは無理。重要な会談なんだから今日一日は拘束されるよ。」

…じゃんけんに負けた三咲が悪い」

「うわあ〜〜ん！！あの時チヨキなんか出さなければあ〜！」

一名を除いて。

流石に一人での会談は難しいし、かといって未だに海底に隠れて

いるガーディアンから総合統括AIのミスリルを連れ出す訳にはいかず、自然オレンジ小隊の中から選ばれることになったのだ。

初めはいつもの流れでリーダーの涼子になる筈だったのだが、別に変な事を言わないようにするための監視（形だけ）と宗一の不安を取り除く為だから、別に誰でもよかったので、ここは公平にじゃんけんで決めよう、と言う流れになり、結果として言い出しっぺの三咲が負けたのだった。

「はいはい。それより、三咲から見て壱型丙ってどう思う？」

「ぐすつ……。えっと私、戦術機は撃震と陽炎…は一回だけけど…しか乗ったことないんでわかりませんよお」

「…そっか。じゃあ三咲、不知火の特徴ってわかる？」

「特徴、ですか？えっと、世界初の第三世代戦術機の量産型で、武御雷のベースになってて…すみません、ここまでしかわからないです」

「ま、そこまで知ってれば十分だと思うよ。不知火はね、普通の量産機に比べたらすごく高性能な機体なんだ。でも、そんな機体にも弱点があるんだ。…なんだかわかる？」

「…コストか整備性の悪さ、ですか？」

「それは違うな。不知火はコストパフォーマンスに優れ、尚かつ整備性の高い非常に優秀な機体だよ、少尉」

案内された会議室に、いつの間にか帝国軍の軍服を着た男性が入ってきていた。顔に大きな切り傷を残した、迫力満点の御仁が…。

「い、巖谷中佐！？何時の間にこちらへ！？」

慌てて立ち上がり敬礼をする宗一達。巖谷はそれにゆっくりと返礼した。

「君が不知火について語り始めた時からだ、矢羽田大尉。ああ、座ってくれかまわんよ」

巖谷の許しが出てゆつくりと座る宗一と三咲。…あれ？何か三咲の様子がおかしい。何か巖谷中佐の顔を見た瞬間から顔を見られないよう必死に俯いてる…。

「さて、せっかく不知火についてここまでストレートに言ってくれる人がいるんだ。もう少し話そうじゃないか。ちょうどXFJ計画にも関わってくるから手間も省ける。矢羽田大尉はわかってるようだが、不知火の決定的な欠点とXFJ計画の概要も少尉のために説明しておこう。」

確かに先程大尉と少尉が言ったことはすべて事実だ。…だが、資料にある不知火がこの壱型丙しかないのに違和感を覚えられないか、少尉？」

「え、えと！？ま、まだ実戦データが足りない…とか？」

…明らかにキョドってる。そんなに中佐の顔が怖いのかな？…ヤクザ顔なのは否定しないけど。

「…ふむ。残念ながらはずれだ。矢羽田大尉、説明を」

「はい。三咲、不知火は開発、実戦配備から既に十年という月日が経っているんだ。だから実戦データは豊富にあるんだ。だけど、改修機がこの壱型丙を除いて全く出ていない」

「…あ！確かに…」

「第二世代最強のイーグルだって初期型からいまはストライクイーグルまでと、開発から数年で何度も改修されてきているのに、不知火にはこれが全くなし。これがどういう意味を持っているのか、わかる？」

「……発展性が全くない、ということですか？」

「その通り。不知火は量産機に残されているはずの最低限の拡張性を犠牲にすることで、今の性能を保っているのだよ」

「でも、今までの量産機と比べて不知火は優秀すぎたんだ。優秀だからこそ、それに併せて現場の衛士達から改修と強化の要望が殺到した。…でも、実現しようにもそれは機体を一から造り上げるのと同じくらいのコストと手間が掛かる」

「だからこそ、それを改善するためのXFJ計画であり、それに新技術の塊である君達ガーディアンズのMSを参加させるのだ」

「そういう事。わかった？」

「は、はい。なんとか…」

三咲は今の説明で理解できたのか、顔隠すのも忘れうんうんと頷いている。

「では矢羽田大尉、早速だが資料を頼む。それが済み次第、実際に現物が動くのを見てみたいのでな、後で演習場に実機で家の中尉と模擬戦をしてもらいたいのだが、構わないか？ もちろんそちらの‘宮野’少尉も…」

（あれ？何で中佐が三咲の名字を………？）

「うううう…。やっぱりおじさん、気づいてましたか…」

「当たり前だよ。可愛い唯衣ちゃん友達である三咲ちゃんを、見間違えるわけがないだろう？……それよりも、生きていたのなら何で連絡をくれなかったのかな？どれだけ私と唯衣ちゃんが心配したことか……」

「つて、ストップストップ！！三咲、巖谷中佐と知り合いだったの！？」

「は、はい。知り合いと言いますか、巖谷のおじさんは親友の義父なんです。それで…」

「な、なるほど…（涼子もだけど、原作メンバーと知り合いがいるなんて…。陽菜もいそうでなんか怖い…）あ、っと。こちらが資料です。脱線させてしまつて申し訳ありませんでした」

「気にしなくて構わんよ。それと、三咲ちゃんもいることだし今からフレンドリーでいくがいいかい、矢羽田君？」

「あ、はい…どうぞ…（ねえねえ三咲、巖谷中佐つてこれが素なの！？）」

「ゴニョゴニョ（はい…。ですがこれでもまだ自制している方なんですよ？唯衣ちゃんのことになつたらもつとスゴインです…）」

その‘もつとスゴイ’というところに凄まじい不安を感じながらも、会談は続いていった。

ビーム兵器とレールガン、ラミネート装甲にPS装甲について根掘り葉掘り質問された。そして会談が始まつて二時間、やっと質問攻めから解放されて宗一達は今格納庫に向かつていた。もちろん、演習の為機体を取りに行くためだ。

そして格納庫への道すがら、模擬戦に関して色々と説明を受ける。

- ・こちらが使う機体はノーマルウィンドム

- ・対戦相手は近衛軍の武御雷F型

- ・武器は突撃砲と模擬刀。搭載火器の威力検証は別の機会で行うので武装はこれだけで行う。（ノワールにかんしてはフラガラツハを使う）

- ・JIVEESを使った実機演習。どちらかが戦闘不能判定を下されれば終了、PS装甲は考えない物とする

以上がルールとなった。

『準備はいいかね、矢羽田大尉？』

「はい、こちらはいつでも大丈夫です」

市街地戦を想定した演習場は、高いビル群が並んでいて視界が悪い。光線級はでない、ということとで自由に空を飛べるが、ジェットストライカーが無い以上ジャンプ程度しかできない。

しかも相手は接近戦に関しては世界最高峰の性能を誇る武御雷だ。近寄られた瞬間、ウインダムなど瞬殺になるかもしれない。

巖谷中佐との通信が終わると、やがて目の前に一機の山吹色にカラーリングされた武御雷が姿を現した。装備は突撃前衛装備で、既に長剣を右手に握っている。

『では、私の合図で両者とも模擬戦を開始せよ』

「『了解！！』」

『3...2...1...0！ 模擬戦開始！！』

） side 唯衣 ）

おじさまから頼まれたこの模擬戦…。どうやら、横浜の魔女が設計した新型のテストようだ。

どこか不知火を思わせる鋭角な装甲に頭部のV字アンテナ。腰に

装備されている二振りの武器はこの演習で使用されないようだが、何かの投擲武器だろうか？

そして、腰に着脱が可能なように装着されている筈の跳躍ユニットは両足の臍に一基ずつ埋め込まれるように装備されている。他に変わったことがあるとすれば、盾の中に仕込まれているミサイルと腰のシザーズに入っているクナイ？ぐらいだろうか。もっとも、この演習では代わりに短刀を装備しているようだが…。

『唯衣ちゃん、資料に夢中になるのはわかるがそろそろ演習場に入ってくれ。相手の期待は既に演習場で待機しているよ』

「わかりました。……って巖谷中佐！今は任務中です。そのような呼び方では…」

『準備はいいかね、矢羽田大尉？』

『はい、こちらはいつでも大丈夫です』

名前のことは流されてしまったが、今は任務。おじさまには後で説教することにして、今は指示通りに愛機を演習場に移動させる。ちようどこの演習場の中心部で向かい合うように対峙した私たちは、お互いおじさまの合図を待っている。

『では、私の合図で両者とも模擬戦を開始せよ』

「『了解！！』」

来た！！

その言葉を合図に、私は一気に集中力を高めていく…。

『3…2…1…0！ 模擬戦開始！！』

合図と同時に、跳躍機を使って一気に近づく…が。

「何ッ！？」

いきなり相手の機体、ウィンドムが右手に持っていた突撃砲をこちら目掛けて投擲したのだ。

予想外の行動に一瞬焦るが、すぐに意識を集中して長刀を振るい突撃砲を叩き落とす。だが、その僅か一瞬の隙にウィンドムは短刀を右手に、長刀を左手に構えて突撃してきたのだった。

ガギンッ！ ガガガガッ！

向こうは盾の重量を使って押してくるので、鏑迫り合いは片手だけの此方が不利だが、両者の動きが止まる。止まった瞬間、私は勝利を確信し左手の突撃砲の引き金を引いた。

.....

だが、一向に36mmが発射されない。どうしたのかと混乱した瞬間、機体を叩くカカカカカン！という音に気づいた。まさか……！

「頭部に……機関砲が！？」

気づいた時には既に手遅れだった。突撃砲を撃っていた機関砲は、火力が強くないのか、次の標的を肩などの関節部に移そうとしていた。

そうはさせるかと、無理矢理長刀を傾け相手の長刀を流すと返す刀で斬りかかった。

『うわあ！？』

一瞬、接触回線で悲鳴のような声を聞いたが、今度は相手が右手の短刀でこちらの長刀を受け流して距離をとる。

私はウィンドムの機関砲を警戒しながらも、使えなくなった突撃砲を投げ捨て、長刀を両手で構えた。

すると、ウィンドムは何を思ったのか盾とクナイを捨てるとこちらと同じ構えをとった。

（おもしろい…！格闘戦で武御雷に挑むか！その勝負、乗った！…！）

私は久しぶりに血が昂るのを感じて心地よい感覚を覚える。

一步…また一步。ジリジリと互いに距離を縮めているが、まだ動かない。

そして三歩目…。今だ…！

「はああああッ…！！」

二度目の全力噴射。凄まじいGが体にくるが、今はただ敵と刀に意識が集中しているのか全く気にならない。

向こうも全力噴射に気づいて、素早く長刀を居合いの構えに持っていく。

そして……

バギャンッ！！！

ウインダムが放った居合いと武御雷の放った神速の斬撃がぶつかった瞬間、ウインダムの長刀が砕け散り唯衣の長刀は吸い込まれるようにウインダムに直撃した。

『矢羽田機、コックピット部に致命的損傷、大破。模擬戦終了！二人とも、お疲れ。整備もあるだろうから二機ともそのまま格納庫に向かってくれ』

「『了解！』」

こうして、模擬戦は私の勝利という形をもって終わったのだ。た。

短編 ある日のガーディアン（前書き）

えっと、短編です。

短編 ある日のガーディアン

これは、宗一が帝国軍衛の涼子が率いるオレンジ小隊を救助し、仲間になってから一週間ほど過ぎた頃の物語である。

～ ガーディアン 食堂 ～

「う～～ん……」

初めてMSに乗り、座学が終わって正式な実機訓練が終わった今、各々は自由に休憩時間を過ごしている最中。そんな中私・鈴原涼子 - は食堂にある券売機の前で唸っていた。

（ここにあるメニュー、豊富なんだけどそれが悩む原因なのよねえ。今日は何にしようかしら）

メニューは料理だけで何十種類、飲み物に関してはそれ以上だ。和洋中すべて揃っている。料理を作るのはコックロボットだから味は大丈夫だけど、食料をどうやって補給しているのが、謎だ。それより……。

「…ねえ、いい加減コソコソ隠れるのは止めて姿を見せなさい……」
「……って、三咲はともかくなんで陽菜までここにいろの!？」

こっちのことを食堂の入り口から……いや、更衣室からでてからコソコソ尾行してきた二人に向かって言い放つ。いい加減無視するの

も限界になったのだ。

「テヘヘ…。だってえ、先輩が何処に行くか気になったんですう
!」

「私はこのバカが変な行動してるから監視」

「はいソコ、下手な嘘付かない。口元が笑ってるわよ!」

…毎度の事ながら、時々このメンバーでよく生き残れたな、と思う。

「いや、まあねえ」

「ですよねえ」

意味ありげにこちらを見てくる二人…。本当に何がしたいんだお前らは…!!

「……何が言いたいのかしら?」

「だってえ、強化装備着てMSの二人乗りしたのに、宗一さん何の反応もしなくて先輩落ち込んでたじゃないですかあ」

「んなつ!?!」

「そうぞ。何ともないように振る舞ってたみたいだけど、背中から滲み出てる暗いオーラは隠せてなかったわよ」

……そうよ。そうなのよ。今年で21にもなつて彼氏の一人もできなくて、やっと気になる人ができて強化装備（勝負服）で挑んであつさりスルー…。ちよつとトラウマになりかけたわよ……。

「……ああ、その、ごめん。そこまで落ち込まれると流石に悪いと」

「なら最初から言わないでよ!このBカップ!」

「なっ！？人が気にしてるの知ってるくせに……！！」

容姿の事が話題になって、ふと隊員全員を良く見る。陽菜は女性では珍しく160cm後半の長身で、髪と同じ色の瞳は綺麗で、キラリとした時と優しい笑顔のギャップで既に何人もの男性を墜している。……といっても、言い寄ってくるのは男性の方で、陽菜は全然相手にしないんだけどね。そのせいで陽菜は私と一緒に彼氏いない歴〃年齢を更新しているのだ。

「わわっ！は、陽菜先輩落ちついてええ……！！」

そして、地団駄を踏んで暴れている陽菜を必死に抑えているのが、隊の中で最年少（19）の三咲。橙色の髪は肩まで伸びて、ブラウンの瞳と相まってとても可愛らし顔をしている。しかも、身長が150（本人曰く150後半らしいのだが、身長測定の度に逃げ出しているのを知っている涼子からすれば嘘だとバレバレだ）しかないのも、下から見上げるような眼差しは、女性なら母性本能をくすぐり、男性なら保護欲をかき立てる……はっ！ち、違うの、私はノーマルよ、ノーマル！！レスじゃない！！……コホン、でも、三咲も私たち同様彼氏がない。ま、理由は‘あのジョーク’でわかったからいいけど……。

「あはは！陽菜ごめん。流石に私も言い過ぎたわ。今夜のデザー
トあげるからそれで勘弁して、ね？三咲も限界みたいだし……」

「……仕方ないね。それで手を打ってあげますか……って、コラ三咲！！アンタ何人の髪に頬擦りしてんのよ！？離・れ・な・さ・い！！」

「うう……ん。涼子先輩も暖かくて気持ちいいですけど、陽菜先輩の髪は太陽みたいでポカポカですう……。病みつきになっちゃいますう……」

「そういえばアンタ、そっち、だったわね……って、いいから離れなさい！私はノーマルなのよノーマル！！」

ふふ、陽菜ったら私と同じ事言ってる。さて、そろそろ本当に止めますか！

「……二人とも、それぐらいに……」

｝ side 宗一 ｝

僕は、食堂の入り口にへばり付きながら、今までオレンジ小隊の会話を聞いていた……。って、盗み聞きするつもりはなかったんだよ！？食堂に入りたくっても入れなかったただけだ！！

（涼子、やっぱり落ち込んだのか……。）

そう、僕だって男だ。涼子達みたいな美人を、しかも強化装備みたいな格好をされて何も感じないわけがない。表に出さなかっただけだ、うん！

『…艦長、それってヘタレですよ』

うるさいやい！！

そして、宗一は腹ペコなのを我慢して、その場から自室に引き上

げ
る
の
だ
っ
た。

短編 ある日のガーディアン（後書き）

オレンジ小隊の容姿が設定されてなかったの、今回で出しました！

もし、イメージと違う！！と言う方がいらっしゃったら申し訳ありません！ですが、これが僕のオレンジ小隊なんです…。

第十三話（前書き）

十二話の続きです。

第十三話

） 演習場管制室 （

「あつちや」。宗一さん、負けちゃいましたか…」

格納庫の近くに設置されている演習場管制室には、三咲と巖谷の二人だけがいて、たった今決着の付いた模擬戦を見ていたのだ。

「ふむ…。（あの模擬刀の砕け方からしてあれはわざと…それに行動後に行く僅かな噴射…）宮野少尉、矢羽田大尉の機体のデータをこちらに出してくれないか？主に関節部の消耗具合が見てみたい」

巖谷の口調が真剣になったのを感じた三咲は、頭を軍隊モードに切り替えた。

「…了解しました。パープル、データを巖谷中佐に」

『了解！ 了解！ 了解！』

「……………さつきから気になっていたんだが、その球体は何だね？愛玩ロボットかな？」

巖谷は三咲の足下でコロコロ転がったりピョンピョン跳び跳ねている紫の球　ハロ　を指しながら言う。しかも、重力を無視した跳ね方と音に、技術屋としての血が少しだが昂っていた。

「違います！！ハロは私たちの機体の整備士であり癒しであり友達でもあるスーパーロボットです！！専用の接続機があれば戦術機も動かせるんですから！！」

「そ、そうか…（何もそこまで力説せんでも…。やはり三咲ちゃんには変わらないな）お、来たか……。やはり…」

ピー、という電子音と共に巖谷が持っていた端末から宗一の乗ったウィンダムの詳細データが表示された。それを見た巖谷は自分の予想が当たっていると確信し、そしてそれを行った宗一の操縦技術に、元テストパイロットの血が騒ぐのを感じるのだった。そして…

「これは、唯依ちゃんが聞いたら…いや、勘づいてはいるか…シヨックだろうな…。宮野少尉、今から格納庫に移動する。二人の出迎えに行こう」

「はっ！…あの、巖谷中佐、さっきのって…」

「それは向こうで話す。それまで待つてくれ」

「…了解しました」

そして、二人は宗一達の機体が格納された区画に向かって移動を始めた。

場所は移って格納庫。演習場に一番近いこの区画は今、嚴重な人払いをされている。もちろん、宗一達の機体を見せないようにするためだ。

演習の終わったウィンダムはこの後、宗一の水色八口に簡易チエックをしたあと偽装装甲陽炎バージョンを付けて、後は帰るだけである。

一足先に帰還した唯衣はハンガーに固定された武御雷と宗一のウイングダムを見ながら、先程の演習で感じた妙な違和感について考えていた。

（…おかしい。渡された資料だとこの機体はもう少し性能が良い筈だ。なのに…）

そこまで考えたとき、ウイングダムのハッチが開き宗一がコックピットからラダーを使って降りてきた。

宗一は衛士の強化装備は恥ずかしいらしく、未だにSEEDのパイロットスーツ（オーブVer.）を着ている。

そして宗一は、こちらを見ていた唯衣に気づくとゆっくりと唯衣の近くまで歩いてきた。

「篁中尉：ですよ？僕は矢羽田　宗一。あの機体、ウイングダムのパイロットです。先程はお相手してもらってありがとうございます」「……いえ、任務でしたので」「あ、あはは。そうですか……」

帝国軍人特有の国連軍嫌いの影響か、声が若干硬い。もといアメリカ

それ以降、話そうとしてもタイミングが掴めず、微妙に居心地の悪い沈黙が続く……が。

「…矢羽田さん、貴方、先程の模擬戦、何をしたのですか？」
「……あっちゃー、バレてましたか。先ずは、篁中尉、真剣に相手をして頂いた貴女を侮辱するような行動をしましてすみませんでした！」

宗一がやったこと……それは、機体のダメージを減らすためにリミッターを掛け、更に移動終了時に細かくスラスターを噴かして関節部への負荷を減らしていたのだ。

もちろん、そんなことをすればまともな試合になるわけもない。実際、宗一は銃弾を避ける為に掛かる機体の負荷を減らすため、わざと最初から突撃砲を捨てたのだ。

「……ちゃんとした理由があるのであれば構いません。お聞かせ願いますか？」

「実は、香月副指令からは見せるだけ、と言って持ってきたので、模擬戦やってその上壊したとなれば何を要求されるか………（ガタガタブルブル）」

会話の途中から震えだした宗一を見て、怒る気も無くなった唯衣はため息を吐くと

「それならば仕方ありません。今回は許しましょう」

「よ、よかったあゝ！！ありがとうございま「ただし！」…へ？」

「次にやるときは実機でも本気をお願いしますよ？」

最後に見せた唯衣のからかうような笑顔に、宗一は苦笑しながら答えるのだった。と、そこへ…。

「おい、唯衣ちゃん！矢羽田大尉！お疲れ！」

「巖谷中佐、三咲…！」

「大尉…って矢羽田さん！？」

「あれ、言ってませんでしたか？」

「聞いてません！！つと、それよりも、先程は大尉に失礼なことを……！」

「気にしないでいいですよ、篁中尉。言わなかった僕が悪かったんですし……。あ、後、話すときはさっきみたいでお願いします。堅いのは苦手です……」

「矢羽田君もこう言ってるんだ！気にしすぎるのも逆に失礼だよ？」

「……わかりました。それじゃあ、矢羽田さん、でいいですか？」

「はい！ありがとうございます！」

タイミングよく巖谷中佐と三咲が格納庫に到着したのだ。……三咲はやっぱり、巖谷と同じで篁中尉に会うのが嫌なのか、必死に巖谷の背中に隠れようとしてる……

「ほら、三咲ちゃん！！」

ドンッ！

「わっひゃあああゝ！！」

けど、それに気づいた巖谷中佐が素早く身体を動かして、逆に三咲を篁中尉の前に押し出したのだった。

「えっ……みい……ちゃん？」

「ううう……唯依ちゃん……」

「さて、後は二人の問題だ。私たちは私たちでこれからのことを語ろうじゃないか」

「はい……って、巖谷中佐、その言い方だと何か裏がありそうで怖いのですが？」

「気にしない気にしない」

そう言われ、僕と巖谷中佐は二人を残して格納庫を後にした。

後から三咲に聞いた話だけど、一番最初にドカンっ！と怒鳴られた後は二人で泣いていたそう。やっぱ、篁中尉も巖谷中佐同様三咲のことは死んだと思ってたらしい。

泣き終わったら、ガーディアンでの生活や訓練、明星作戦と、今までのことを話したそう。もちろん、僕に関する機密情報は省いてだけだね。

こうして、三咲のX F J計画の参加が決まって、後のメンバーは暫くしたら決める事になった。

「…って、わたし結局教えてもらってませえーん！！」

帰りの道中、そんな叫びがあったとか無かったとか…。

第十三話（後書き）

すみません、作者の実力不足と唯依姫の情報が少なくて二人のシンはカットです。ごめんなさい！

第十四話（前書き）

遂にオリジナルが登場！武御雷もパワーアップしております！

第十四話

〕 技術廠 会議室 〕

格納庫からひっそりと退散した僕たちは、案内された部屋とは違う所に案内された。そこには、一人の女性軍人が待っていた。誰だろう？

「佐藤少佐、こちらがガーディアンズの矢羽田 宗一大尉だ。矢羽田大尉、こちらは佐藤 操少佐。帝国の次期主力戦術機開発計画を携わっている」

「初めまして、矢羽田大尉」

「こちらこそ。よろしく願います、佐藤少佐」

「因みに佐藤少佐は今年で23になるがまだ彼氏がなくてねえ。どうだ矢羽田大尉、家の唯依ちゃんともどもお見合いするのは……」

「ちよつ、中佐！？そのことは余計なお世話だ何度言えば！？」

「……佐藤少佐、苦労してるんですね」

挨拶で握手した途端なんつー爆弾投下してくれんだこのヤクザおっさん！？

「……コホン、話がズレましたが、本題に入りましょう」

そして手渡されたのは四つの分厚い資料。……新型？しかも一機は武御雷だし。

「まず一番上にある資料は、帝国近衛軍専用の戦術機、武御雷の試作図面です。まだ完成とは行かず、来年の三月頃を完成の予定にしています」

「続いて二、三、四番目の資料はいずれも武御雷の選考に負けてお蔵入りとなった機体です。矢羽田大尉が提供してくださる機体、ウインダム、ストライク、ヴェルデダガーの三機のデータをこの子達に使って、完成させるのが‘PMS計画’です」

「PMS計画？何ですか、それは？」

「‘Prototype Mobile Suite 開発計画’の略称だよ。香月博士の戦術機は、もう既に戦術機ではない全く別の設計思想で造られている。本人からもこれはMSだ、と言われているからね」

「そして、この全機体共通の光学兵器の使用可能、並びにグレイ・ツィ（相転移反応を起こすグレイシリーズの二番目）を使用したPS装甲、G元素を頼らずに従来の数倍の効果がある対レーザー加工に光学兵器の使用を可能にしたバッテリー……。どれか一つでも今ある戦術機に追加すれば、飛躍的な戦力増強に繋がります。そして、この計画は香月博士の技術協力で新たな戦術機を造る、がコンセプトとなっています」

…試作機動兵器開発計画、か。まんまそのまんまじゃん！

「…で、選ばれたのがこの三機、‘八咫鏡’、‘天叢雲剣’、‘八咫瓊勾玉’三種の神器シリーズ、と…」

改めて資料の三機を眺める。

八咫鏡…武装を限りなく削ぎ落としてハイヴ内でも通信、索的を可能にするため電子戦装備を強化した機体。電子機器装備のため一番コストが高い。

天叢雲剣…完全な近接戦闘特化型。天叢雲剣用に設計された盾の中に長刀と短刀の合の子が二本、背中に長刀二本、両腕に軽量化

された突撃砲を装備した、とことん機動性を求めた機体。外見は武御雷に近いがもっとスリムにした感じ。三機の中で一番低コスト。

八尺瓊勾玉：完全な砲撃戦用。頑丈な第一世代機をベースに大出力の跳躍機で準第三世代機並みの展開力を確保。武装は肩の五銃身120mmガトリング砲と六銃身36mmガトリング砲の二門に両腕の突撃砲、更に両腰に装備された試製99型電磁投射砲二門。背中に大量の弾薬と冷却剤、バッテリーを装備した機体。この中で二番目に高コストな機体。

「…因みに、何で武御雷に負けたんですか？」

「八咫鏡はコスト、天叢雲剣は近接戦闘に特化させ過ぎ、八尺瓊勾玉は性に合わない…が原因だ」

「まあ、ここまでやると使う衛士を選びますもんね…」

「では早速、始めましょうか……」

そして五時間。三咲達は機体を横浜基地に返しに先に帰還し、宗一はそれから三日三晩、徹夜であーでもないこーでもないという新型の設計に持てる技術を全て使い、新型三機に既存武器の強化案を完成することができた。

試製〇一式突撃銃：120mmの代わりにザスタバ・ステイグマトのビームマシンガンに換装した武器。大陸、明星作戦のデータから120mmの半分の射程でも突撃級を殺せる。エネルギーセルの大型化によってセル一発で五十発、1マガジンで百五十発発射可能（予備弾装は二個まで）。

試製○一式近接戦闘用短刀：実体剣とビーム刃を使い分ける短刀。バッテリーの問題でビーム刃は五分が稼働限界。バッテリーが切れても再充電可能。

試製○一式近接戦闘用長刀：実体剣の周りにビームを纏わせることに成功した長刀。電源は機体から取られるが切れ味は要撃級の腕さえ叩き斬る。

試製○一式近接戦闘用中刀：長刀と短刀を足して二で割った長さの剣。実体剣にビームを纏わせることに成功し、どんなに下手な剣術でも突撃級の甲羅ごと一刀両断が可能。実体剣の先端にはビームの発射口があり、機体から電力を得ることで発射可能。

JG - 01

あめのむらくも

天叢雲：三種の神器シリーズの一機、天叢雲剣をMSの技術を使って改良した機体。新型バッテリーを使って、対艦刀シュベルトゲベルを参考にした試製○一式近接戦闘用長刀、中刀を常備する機体。稼働時間も大幅に伸び、要所要所にラミネート装甲を使用。軽量化を図りながら対レーザー対策も完備した機体。両腕の突撃砲を取り払い、代わりに最初から中刀を右手に、左手にウイングダムの盾（帝国製）を装備。ウイングダムに使われた仕込み武器も全て使え、バックパックに装備した長刀二本を外せばソード・ランチャー以外のストライカーパックを装備可能。その代わり、I・W・S・Pを基に先の長刀二本を翼の部分として装備した、ブレード・ストライカーが設計された。両試作一号機完成の目処は来年の一月上旬予定。射撃武器は中刀のビーム砲、頭部トードスシュレッケン、盾に装備されたミサイル、手首から射出されるスティレットのみで、使用後は全て機体軽量の為投棄される。

JG - 02 やたのかがみ 八咫鏡：同じく三種の神器シリーズの八咫鏡をMSの技術を使って改良した機体。ロシアのチェルミナートルの複座型のコックピットを参考に二人乗りの機体となった。C・E・の通信装置を香月博士が複製に成功、量産が可能になりハイヴ内での地上までの通信が低コストで可能となった。センサーはパイルバンカー式の地中に埋め込めるタイプを新たに製作予定。武装は試製〇一式突撃銃二丁に各予備弾装を二個ずつ。試製〇一式近接戦闘用短刀を二本。尚、パイルバンカーはウィンダムを改造する予定。試作一号機完成の目処は来年の一月中旬予定。

JG - 03 やさかに 八咫瓊：三種の神器シリーズの八咫瓊勾玉をMSの技術を使って改良した機体。肩に装備されていたガトリング砲を取り払い、代わりにエネルギーセルを使ったビームガトリング砲を装備。腰の試製99型電磁投射砲はC・E・の技術を使い、砲身と冷却装置を改善した。更にショルダーをヴェルデガーの物と同規格の物にしたことでミサイルが使用可能になった。こちらも要所要所にラミネート装甲を採用しレーザー対策を施した。試作一号機完成の目処は来年の一月下旬予定。バックパックは追加の大容量バッテリーに弾薬、推進剤を貯めたプロペラントタンクを装備している。

尚、三機ともラミネート装甲以外はC・E・の装甲技術を使用する。これにより耐久力が全機とも四十%向上予定。

武御雷には新型バッテリーと〇一式近接戦闘用長刀・中刀・短刀・突撃銃を装備し、装甲も上の三機と同じ物をにすることで性能をあげる。

宗一が仙台基地に来てから十日。ようやく戦力の確保が整った。
武が来るまでに終わらせるべき事は…

「速瀬中尉と涼宮中尉のA-01への入隊…。そしてこれが終われば、後はX F J計画に……………」

‘佐渡島ハイツを来年中に落とす’だけだ」

第十四話（後書き）

ついに行動を始める宗……。果たして、彼が目指す救済の世界とは……！？こつこつ期待……！！

七月九日 新ストライカーパック・誤字・武装の詳細を追加しました。

第一五話（前書き）

フッフ、遂に、遂に宗一が能力を使う！！……………けどあんまし活躍が無い……………な今回ですが、どうぞ！

第一五話

〔 帝都 〕

技術廠から帰ってきてから更に一週間。宗一は一人私服を着て帝都を歩いていた。

「ふう……。やっぱりここは賑やかだなあ」

仙台基地の辺りも、人気はあってもやはり活気が少ない。それに比べれば、帝都は元の世界と比較しても遜色ない。

「……にしても、香月博士が休暇をくれるなんて、思ってもみなかった。……何か裏がありそうだからこれ以上考えるのは止そう。うん」

そう、宗一がここに居るのは休暇だからだ。前に来たときは、忙しすぎて見て回る暇がなかったのだ。

「あ、駄菓子屋だ。懐かしい……。すみませーん、ラムネ一本お願いします！」

「あいよ！……ほら、ラムネだよ」

「ありがと、おばちゃん！」

もらったお金（初給金）でラムネを買い、飲みながら帝都を回る。

何となく道を歩いていくと、数人の帝国軍人を見つけた。見回りのかな……。って、あれは……！

「沙霧中尉……ですか？帝都防衛隊の！」

「ん？何だお前は？沙霧中尉に………どっかで会ったか？」

沙霧さんはちょっと離れてたせいか聞こえなかったみたい。逆に一番後ろの軍人が気づいて、こっちに向かってきちゃった。……この声、何処かで……ああ！

「ああっ！！お前ガーディアンズの……！」

「……沙霧中尉の部下の……山田さん？」

そうだ、思い出した！この人沙霧さんを助けた時迎えに来た衛士だ！

「山田　　^{リョウ}琉也中尉だ。……すまん、名前はうる覚えで……」

「いえいえ、戦闘中でしたから。改めまして、僕は国連軍仙台基地所属、特殊戦術機甲部隊ガーディアンズ隊長、矢羽田　宗一
大尉です。あ、今は休暇中なので階級は無しで行きましょう」

階級言った途端、敬礼仕掛けるもん。少し焦ったぜ……。

「そ、そうか。じゃあ宗一、って呼んで良いか？俺も琉也でいいからさ」

「わかった。よろしく、琉也さん！」

「おい山田、またナンパか？いい加減に……や、矢羽田……？」

「お久しぶりです、沙霧中尉。お元気そうで何よりです」

琉也が居ないことに気づいたのか、少しお怒り気味の沙霧さんがこちらに来た。後ろには……副官？みたいな女性を連れてる。

「お前こそ無事だったか！！それと、今の私は大尉だ。明星作戦のお陰で、な……」

「…そうでしたか、それは失礼しました。因みに僕も大尉ですよ」

「そうか…」

「今日は休暇なんで帝都観光中です」

ほら、と言って右手のラムネを見せると、沙霧さんは納得したのか二度頷き、

「そうか。なら、あの時の約束ついでに帝都を案内してやろう」
「！」

とおっしゃりました。マジすか！？

「え、いいんですか！？今任務中じゃあ…」

「……そうだったな。スマンがこの話はまたになる。すまない」
「いえいえ、お気になさらず。また生きてれば機会がありますよ」

「…そうだな。では矢羽田、私達は任務に戻る。観光、楽しめよ」

「はい！ あ、ちょっと待った！大尉の所属って変わってませんよね？」

「ああ。変わらず帝都防衛隊だ。それがどうかしたか？」

「いえ、特に深い意味は無いですよ。ありがとうございます」
「ああ、ではな！」

そして沙霧さん達三人組は去っていった。去り際に琉也も声をかけてくれたのは嬉しかったな…。

気分も良くなった宗一は、帝都観光を再開した。

〔 帝都 裏路地 〕

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ！！」

「待て！」

「で、何で僕はこんな事になってるのさああゝ！？」

「私に聞かれても…それよりもそちらは行き止まりですよ？」

「冥夜言っのが遅い！！」

「え……？」

変な黒服集団に追いかけてるのに気づいたのが十分前。で、慌てて路地裏に入って撒こうとしたら帽子を被った女の子（冥夜？）と激突。で、女の子を抱えて逃げただけど知らない道だから直ぐに行き止まりになって逃げ道無し。今に至る、と。只今絶賛大ピンチ中です。

「…大人しくしろ。抵抗しても無駄だ」

「オルタネイティブか、反対派の方々ですか？…というか、こんな子供の前で銃なんか振り回さないでくださいよ…」

ジリジリと下がりながら少しでも時間を稼ぐ。もしかしたら誰かが通報したかもしれないからだ。…って、甘い考えは捨てよう。ここら一带の警察を抑えてる可能性だってあるんだ。

敵の人数は六人。四人が小銃で、後の二人はサブマシンガンか…。ひとまずコイツらを倒さないことにはどうしようもない。‘一方通行’を使おうにも女の子の前で虐殺映像見せるわけにはいかないし、何とかしてこの子だけでも逃がしないと…！

「…ごめんね。こんな状況に巻き込んだじゃって。でも、君だけは何とかして逃がすからね…」

安心させるように女の子に話しかける…って、あんまし怯えてない？

「…なるほど。状況を鑑みるに、この者達はそなたの敵、というわけですね…」

「は？あ、あの…お嬢、さん？」

その時、まだ抱えたままだった女の子から初めて声が…って、声あげる暇もなく逃げ回せたからなあ。それより、今のしゃべり方と声…もしかして！？

「ならば、遠慮は無用…。月詠！紅蓮！」

「「はっ！！」」

シュタツ！と、何処から現れたのか聞きたくなるが、一人の美女と一匹の野獣が現れた…って、やっぱりかあああゝ！！！！

「この下衆共が…！畏れ多くも煌武院 悠陽様に手を出すなど…」

覚悟しろ！！月詠、御主は左を、儂は右を片づける！！」

「はっ！！！」

ドガッ！ ベキッ！ ゴシヤッ！

「す、すげえ…」

相手側、銃を撃つ暇もなく制圧されていく…。本当に人間ですか

お二人とも…。

「こ、このお…！せめて貴様だけでも…！」

「つて、突っ込んでくんな…！」

自棄になったのか、黒服の一人が手榴弾片手に突っ込んできた。
しかもマシンガン撃ちながら…！

「うおおおおっ…！」

「くっ…！（逃げたくてもこのままだと後ろの二人が…！仕方ない！）レポート！」

「…なっ…？」

「お二方、この子を頼みます！『一步通行』！」

「な、お主、何をする気じゃ！？早まるな…！」

二人に悠陽（？）を預けて後ろに下げて、なるべく爆風が行かないように一方通行で空気も操って自分も反射を纏いながら前に出る！

ズドオオン…！

平和な帝都に似合わない爆音が響き渡った。

｝ side 沙霧 ｝

「な、何だ今の爆音は…？」

「向こうの路地裏からです…！」

矢羽田と別れてから一時間。突如町中では響いてはならない音が響いたのだ。

慌てて、爆音の元に部下を引き連れて向かう。近づくにつれて濃くなつていく煙に若干噎せながらも、現場にたどり着いた。そこには、赤の斯衛軍の制服を着た女性と、斯衛部隊総大将の姿があつた。

「紅蓮大将！？一体何が…！？」

「む！？そなたは…いや、それよりも人を呼べ！！男が一人爆発に巻き込まれたのだ！！」

「何ですと！？山田、駒木急いで詰め所に…！」

「沙霧さん、大丈夫ですよ！その必要はありません！！」

プワツ！と黒煙が吹き飛ぶと、そこには無傷でこちらに歩いていく矢羽田の姿があつた。

） side out to 宗一 ）

‘一方通行’の反射のお陰で、熱風も破片も浴びる事は無かつたけど、こつちに向かつてくる炎は、正直逃げ出したくなつたよ！

ま、後ろに人が居たから踏みとどまれたけど…。さて、この爆煙を払って戻りますか…。

「紅蓮大将、何があつたのですか！？」

「む！？そなたは…いや、それよりも人を呼べ！！男が一人爆発に巻き込まれたのだ！！」

「何ですと！？山田、駒木急いで詰め所に…！」

って、沙霧さん！？何でここに…って、それより早く止めないと！！ベクトル操作で気流を操って、突風を起こして煙を払う。

「沙霧さん、大丈夫ですよ！その必要はありません！！」

「な、矢羽田！？お前だったのか…。それよりも怪我は！？」

「大丈夫です。無傷ですよ」

すたっ！

「へ！？」

すると、いつの間にか月詠さんが短刀を首に押しつけて腕に関節決めていますって、イタタタタタ！！

「貴様、何者だ！！殿下を連れ去り、しかもあのような事に巻き込むとは！！そして何故あの爆発で無傷なのだ！？」

「痛い、痛い痛い痛い！！あ、あれはぶつかって転びそうだったのを起こしただけで、気づいたら距離が縮まって逃がす暇がなかったんです！無傷なのはノーコメントで！！」

「おやめなさい、月詠！！この者は私の命を救ってくださいましたのです。最後のことは私も気になりますが、まずはその者を解放なさい！！」

「はっ！…失礼した」

「は、はい…。こちらこそ殿下とは知らずに失礼な事を…」

短刀と関節決めから解放されて一息付けたけど、ひとまず殿下に謝っておこう。後ろの中尉さんからの視線が痛いから…。

「構いません。そ、その…流石に抱き上げられたときは驚きまし

たが…」

そう言って少しモジモジする殿下……はっ！…いかんいかん、彼女は確か今年で一五。ロリコンじゃないんだ！…って、それ言ったら三咲に殺されるか…。

それより月詠さんの視線が余計にきつくなつた！…って、紅蓮大將なんかほうほうと頷いてるし、沙霧さんなんか殿下と聞いただけで跪いて助けにならない…！だ、誰か助けてくれ…！！

「と、ともかく！自分は用事があるのでこれで失礼しま…」

ガシッ！

「えっ？！」

「ほほほ、このような事を起こしておきながら、帰れるとお思いで？」

「いや、あの…僕は民間人で…」

「沙霧とやら？この者は何者です？」

「はっ！この者は私の命の恩人であり、国連軍仙台基地所属の衛士、矢羽田 宗一大尉であります」

う、裏切ったなああああ！！

「…先程、私のことを冥夜と呼んだことも、ゆつくりとお聞きしたいですね。紅蓮…！」

「はっ…！」

「さ、沙霧さんお裏切り者おお…！！」

紅蓮大將に強制連行されながら沙霧さんを睨む……って、触らぬ神に祟りなしか、逃げるなあ…！！

「すまん矢羽田。では殿下、私たちはこれで…」

「何を言うのです？そなた達も着いてくるのですよ」

「…はあっ！？」

ふ、裏切った罰だ………つて、あれ…？原作の悠陽さんと違ってますんごいメチャクチャっすね！？それと紅蓮さん、痛いんで腕を掴む力抑えてください。マジで泣きそうですから！

こうして、僕と沙霧さん、琉也、駒木さんの三人は帝都城へと連行されました…。これからどうなるんだろ？

） おまけ ）

「っ！？宗一君、また女の子とイチャイチャしてる…」

「り、涼子！？何でいきなり暗黒オーラ！？つてちょ、私は味方よおおー！！」（ズガガガガガガガガ）

「せ、先輩落ち着いてー！！キヤアアアアー！！」（ドゴンッ！バカンッ！ガガガガガ！）

「……………全部、墜とす！」

「ぜ、全機目標変更！！涼子の機体を墜とせ！」

「…………りよ、了解！！……………」

その頃、シミュレーターで模擬戦をしていたガーディアンズと伊隅ヴァルキリーズは、突如バーサーカーと化した涼子相手に戦闘をすることとなった。結果は、みちると孝之、陽菜以外は全員墜とさ

れる‘バーサーカー伝説’という、新たな伝説が誕生した。本人には内緒の話でだが…。(因みに涼子は覚醒中の出来事は一切覚えていないそうな…)

第一六話（前書き）

少々宗一のキャラが崩壊します…。後、悠陽のキャラも…。イメー
ジが壊れる、と言う方、怒られたらごめんなさい！

第一六話

（ 帝都城 ）

帝都城に強制連行されてから一時間。これは一体どういう事でしょう？ 解説の沙霧大尉。

「…私に聞くな。私とて説明をして欲しいところだ」

「ですよねえ…。てか、ここって何の部屋ですか？ 取調室ではないみたいですけど…」

そう、連行された部屋は取調室とは思えないほどの豪華さ。壁に使われている漆も、飾られている壺に生け花に掛け軸……。極めつけはこのお茶。天然物だ。（僕にとっては珍しくないけど）普通、こんな高価な物を取り調べる奴に出すわけがない。…沙霧さんは別だけだ。

「それにしても、琉也と駒木中尉、大丈夫ですかね？ 僕等とは別の所に連行されたみたいですけど…」 「何も疾しいことはないのだ。アイツらは連絡のために出されたのだろう」

「…で、沙霧さんが僕の見張り役で残された、と」

「そうなるな。それにしても矢羽田、本当に何があった？ いくら国連軍とはいえ、命を狙われるなど普通ではないぞ」

「僕もあんまりわかんないんですけど…（かくかくしかじか）」

「…ほう。で、貴様は殿下を巻き込んだ。……極刑だな。お前にあの店を教えてやれなかった事は残念だが、運がなかったと諦めてくれ…」

「…って、待て待て待て待て！！ まだ死刑とは決まってません！！」

「殿下をあのような目に遭わせたのだぞ？ 良くて禁固刑…いや、

その前に国際問題か……」

「だからそうやって人を不安にさせるようなことを言っなあゝ！」

な、何だ！？沙霧さんってこんなに明るいキャラだったのか！？くそ、でも沙霧さんの言う通りそうなる可能性が……。香月博士にばれたらどうなるんだろ？

想像中

『アンタ何やってくれんのよ！！お陰で予算削られたじゃない！！
こうなったらアンタを00ユニットの素体に、いいえその前に解剖して……』

想像out

「い、いやだあああああ！！それだけは、それだけはやめてくれえええええ！！」

「お、おい！一体どうしたのだ！？ひとまず落ち着け！！」

「まだ、まだ死にたくないんだあああああ！」

「チツ！からかいすぎたか！！　おいっ！」

「あらあら。一体どうしたのですか？この様に取り乱されて」

変な方向に思考が行ってしまった宗一が暴れていると、宗一達が入った入り口とは反対側に位置する扉から悠陽と紅蓮、月詠（真那）が入ってきた。

「で、殿下！申し訳ありません、直ぐに抑えますので！」

沙霧が必死に宗一を押さえつけていると、月詠がゆつくりと近づき、宗一の耳元でボソツと呟いた。

「貴様、これ以上殿下の前で無礼を働くというなら…その首落とすぞ」

ビクッ！！

小さい声ながらも込められた殺気は相当な物で、押さえつけていた沙霧でさえ冷や汗を流していた。

もちろん、そんな強力な殺気を直接中てられた宗一は、顔面蒼白になりながら何度も何度も首を縦に振り動きを完全に止めた。

「さて、矢羽田殿が止まったところで……お茶会と参りましょう」

「……は？」

「だから、殿下はお前達と話しがしたいと申されたのだ！そんなこともわからんのか！？」

「い、いや…その意味はわかっている。ただ…」

「何で僕たちとなんですか？」

驚きのあまり、二人とも若干放心状態だぜ…。でもまあ、いずれは殿下と…というか、斯衛とパイプが欲しかったからちょうど良いのか？

「何、二人は明星作戦を生き残ったとか。それに、矢羽田殿は新型開発を手伝って頂いた方ですし、冥夜を知っているようでしたのでね」

あ、もしかして僕、無意識のうちに冥夜って呼んだのか！？…これってマジで死亡フラグかも…。

「新型…？まさか、あのお蔵入りとなった天叢雲達を完成させた、

あの！？」

「…はい。そして、まだ試作段階ですが武御雷の武装の強化もさせて頂きました」

「ほう…そなただったのか。いや、すまん。ただ聞いた以上に若く見えたのでな」

あ、驚いた月詠さんと紅蓮さん。意外にレアかも…。なんて思ってる暇はない！

「で、その…お話って、何を話せば…」

「そうですね…では、何故あの爆発で無事だったのか、とか？」

「（いきなりそれ来るかぁー！）…えっと、先程と同じノーコメントで…」

「あらあら。でしたら矢羽田殿は私を殺めるためにあのような事をした、と判断しても？」

お、鬼だ！！無限鬼道流修めているだけにまさしく鬼だよこの人！！

「…………オルタネイティブ関係ですので…」

「私は関係者です」

「…こ、香月博士の許可がないと…！」

「既に連絡は行っております。そうそう、確か香月博士からこのような言伝が…」

そう言つと、紅蓮が一枚の紙を差し出した。何々…。

『戻ったら覚悟なさい』

たったの一言。だが、それだけで夕呼がどれだけ怒っているの

か容易に想像させるものだった。

「では、お話してくださいな」

「は、はい……」

それから一時間。‘一方通行’とアポート、新型の話、冥夜の話（これは完璧ウソ）、多少の嘘を混ぜながらも何とか説明しきったぜ……。

「なるほど。面妖な話ですが、オルタネイティブが関わっている以上納得できます」

「アポートとやら、確かに便利よのう。このあんこ玉といういろいろといい……天然物は素晴らしい！」

因みに皆さん僕がアポートで出した高級和菓子セットを堪能中。沙霧さんは煎餅片手に涙流してるよ。……やつぱし、ゲームのイメージとかけ離れてるけど、これが現実なんだよなあ……。

「……さて、殿下そろそろお時間です」

「まあ……もうそんな時間ですか？楽しい時間が過ぎるのは、早いものですね」

「……あの、殿下。先程の話ですが、まだ話していない重要な部分があります。まだ時間がありますか？」

「……紅蓮？」

「大丈夫でございます」

「それで矢羽田殿、その重要な話とやらは？」

「はい……。殿下に、佐渡島ハイヴを落として頂きたいのです！」

「……なっ！？」「」

「……」

悠陽以外は驚きと怒りの視線を送ってくるが、悠陽が「よい」

と言つと収まつてくれた。

「このまま殿下が実権を取り戻さないと……クーデターが起きます……いえ、起こされます。米国の手によつて」

「……どういうことだ？」

「紅蓮大将、信じられないかもしれませんが事実です。今はまだ動きはありませんが、いずれ米国は日本でクーデターを起こさせて支配しようとしています。それを防ぐために、佐渡島ハイヴを落とさないといけないんです!!」

「（ガンツ!!）出鱈目を言うな!!」

「事実です! 米国はこの国を単なる防波堤程度にしか考えていません!! それを抜け出すために僕は光学兵器の技術を渡したんだ! 米国ですら実用化出来ない物を!!」

「…矢羽田、落ち着け!! 怒鳴つてばかりではどうにもならないぞ!!」

沙霧さんの言葉で、少し頭が冷えた。いけない、感情的になりすぎた……ありがとう、沙霧さん。

「殿下、今すぐには言えません。帝国軍の被害も、回復するのに時間がかかるのもわかっています。ですが、それでもお願いしたいのです!!」

「……わかりました。そなたのその気持ち、確かにこの煌武院悠陽が受けました。…ですが、それをするには私では未熟すぎます」

「……………」

「そこで、そなたには私の代わりとして機体を紫にして下さい」

「………はい?」

「今の私では無理でも、そなたのお陰で性能が上がった武御雷と

三種の神器シリーズがあれば、可能でしょう?」

「た、確かに、こちらの新型OSも含めれば可能ですけど…僕で良いんですか?僕は国連軍で…」

「軍など関係ありません。私は、矢羽田宗一、という人間を信じて、任せているのです」

いきなりの爆弾発言だけど…ここまで信頼されているのなら…

「…わかりました。その大役、謹んでお受けいたします!」

「では、そなた用に武御雷を一機造りませんと」

「も、もうですか!?まだ早すぎるのでは…」

「善は急げというでありましょう?では紅蓮、すぐに技術廠へ連絡を!」

「はっ!」

な、何だろう…。今、紅蓮大將がすつつつごく良い笑顔でこっち見てきたけど…………嫌な予感しかない…。

「そして沙霧大尉。そなたには矢羽田殿と共に行動してもらいます。こちらから派遣という形で移動するので、何人か部下を連れて行きなさい」

「はっ!」

こうして、沙霧さんが所属する帝都守備第1戦術機甲連隊から琉也と駒木中尉、その他三人が仙台基地へ派遣された。そして、帝国は試製01式シリーズが正式採用され(悠陽が力を入れるまでもなく)、徐々に配備が進められていく。

そして、三種の神器シリーズに使われたバッテリー・装甲技術、ラミネート装甲、おまけにアンチビーム爆雷技術が完全に実用化された。お陰で戦術機の稼働時間の延長され、不知火・壱型内でも9式電磁投射砲が可能となったことは嬉しい誤算であった。

そして、佐渡島ハイヴ攻略に向けての準備が、着々と進められていくのだった。

第一六話（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

…前書きでも書きましたが、悠陽ファンの皆様、申し訳ありませんでした！！一応明るくなったらこんな感じかな、って書いてみました。

第一七話 前編（前書き）

前編・後編で分けました。ちょっと戦場全体を書いたので宗一達の活躍はまだ無いです。

第一七話 前編

2000年 6月5日 日本海

吹き荒れる風は冷たいものの、肌を刺すような冷たさはない。けど、風の鋭さは部隊の空気を表すように鋭かった。そして、私の初陣にして史上最大規模の作戦が始まる。正樹ちゃん、やよいお姉ちゃん、みちるお姉ちゃん、まりかお姉ちゃん、私、がんばってBETAを倒すから、見ててね！

とある衛士の日記より抜粋

〔 最上 艦橋 〕

「ウイスキー部隊、全機発艦準備完了！」

「戦術機母艦全艦、対光線級用光波防御シールド、最終チェック完了！！」

「全砲門、対AL弾、アンチビーム爆雷、通常砲弾の装填終了、発射準備完了！小沢艦長、最終チェック、全て終了です！」

「うむ。報告ありがとう、少尉」

甲21号作戦……。あの日、BETAに故郷を蹂躪され、ハイヴを造られてからはや一年。今、この作戦に参加している全ての将兵が想いを一つにしている。

『日本の領土を我等の手で！！』と。

だが、それは我々だけでは不可能なことだった。事実、先の報告に上がった光波防御シールドやアンチビーム爆雷、新型の再突入殻、

第四世代戦術機等、‘横浜の魔女’こと香月夕呼の協力が無ければ実現しなかったからだ。

同じ日本人だというのに、複雑なものだ…。

『小沢提督、ついに後二十分で作戦開始ですな』

その時、信濃の艦長、阿倍君が通信を入れてきた。彼も、若いながらも艦長を務めている優秀な軍人だ。そして私たちの後釜でもある。

「そうだな、阿倍君…。ところで、横浜基地から派遣される筈の…ガーディアンという名の戦艦はまだ来ないのか？」

艦隊左翼を映すレーダーに表示された、ポツンと開いた穴を見る。作戦会議ですらスペックを明かされなかった横浜の切り札。わざわざここまで大きな場所を開けたのだ。一体どんな化け物が出てくるのか…。

『いえ、それが…。昨日既に発進したので、既にこの海域に入っている筈である』と、横浜基地のラビノツド指令から返信があったのですが…』

阿倍君の戸惑いながらも言った内容に、私も眉を潜める。既にこの海域に入っているなら、レーダーに写る筈だからである。

もう一度レーダーを見るが、そんな艦影は見あたらない。どういうことだ？

『お、小沢艦長、海底から巨大な物体が浮上してきます！！すごい速度です！』

今度はステイングレイ隊の母艦‘崇潮’艦長の大田だ。：そうか潜水艦か！

「アンノウン、浮上します！！！」

次の瞬間、日本海に蒼穹の守護者が舞い降りた。

） ガーディアン ブリッジ ）

『…驚きましたぞ、香月博士。貴女も人が悪い。このような‘潜水戦艦’を建造していたとは…』

「申し訳ありません。何分‘海に向こう’がうるさいせいで…。それにこれはオルタネイティブ4関連、詳細はお話しできなかったのです」

夕呼は内心大笑いを抑えるのに、かなりの集中力を使っていた。やはり、初見でこのガーディアンが宇宙戦艦だとは気づけないか。

「それと小沢艦長、これは潜水艦ではありません。水陸両用の戦艦です。：オリジナルハイヴ攻略用の、ね」

『何と…！これは頼もしい限りですな。では、作戦開始まで残り十分。よろしく頼みますぞ』

「主砲の威力は保証いたします。お任せ下さい」

艦隊指令との通信が終わると、夕呼は副長席にドカッと座り込んだ。どうやら、堅っ苦しい形式は疲れるらしい。

「香月副指令、お疲れさまでした!」

「博士、お疲れさまです」

「ありがとう、涼宮、それにミスリル、艦長、」

CICに座っている涼宮遙少尉と、今は衛星軌道上で再突入殻に入っている宗一に代わり、艦長席に着いてるミスリルから労いの言葉がかけられた。…が、ミスリルは夕呼の言葉に若干むくれ気味だ。

「……博士、艦長は矢羽田さんです。ですから艦長は……」

「フッフ、ジョーダンよ、ジョーダン!ミスリルってからかうと面白いから、つついちゃうのよね〜!」

どうやらこのやり取りはいつもの事らしく、ミスリルはため息を吐くと、ガーディアンを戦闘起動させ始めた。

「コンディション・レッド発令!コンディション・レッド発令!各員は速やかに持ち場に着いてください。衛士はパイロットルームにて待機!」

瞬間、ガーディアン全体に警報が鳴り響いた。

）パイロット（衛士）ルーム　　）

「よし、貴様ら準備はいいな？特に新入りの四人！」

『「「「はっ！大丈夫であります！！」」」』

みちるの激が新人の四人である速瀬水月、宗像美冴、風間禱子の三人に飛んでいた。（遙はブリッジの通信越しだから数えない）

「お前達も知っている通り、今回私達が乗る不知火には矢羽田大尉が帝国軍と共同で開発した新兵装を装備している。それに加え、多少強引だがストライカーパックも使えるよう改造された特別機だ。壊したら最後、整備班とハ口達からキツイお話が待っている。全員、気をつけろよ？」

全員、身体をガチガチに固くしたまま微動だすらない。まった
く…。

「おい、鳴海。そう言えばお前、速瀬と涼宮と結局どっちを選んだんだ？」

「うわっ、伊隅大尉その話は…！」

「……………」

『……………』

瞬間、ガチガチだった二人はピクツ、と身体を震わせるとダークオーラを吹き出し始めた。…どうやらかなりヤバい地雷だったようだ。

「は、遙…水月…！！」

『…孝之君、結局最後まで逃げてたよね？』

「うっ…！？」

「横浜基地でも…ガーディアン（ココ）の中でも。ねえ、遙？」

「お、おいお前達…」

「『大尉は黙ってて下さい!!』」

「す、すまない…（あれ…？私は隊長なんだよな？何で部下に圧倒されたんだ？）」

「『さあ孝之（君）、答えはどっち！？（なのかな…？）』」

みちるが自分の立場を再認識している中、残りの新人二人はという…

「あらあら」

「ハーレムとは羨ましい限りですね、鳴海先輩」

とか抜かしていた。…とういうか宗像に風間は完全にこの状況を面白がっている。これでは作戦開始直前の空気なぞ成層圏の彼方まで吹っ飛ばされていた。

『アンタ達、いい加減にしないで！鳴海、アンタはこの作戦が終わり次第拘束！二人が納得するような答えを出すまでよ！それと伊隅！隊長のアンタがそんな状態でどうすんの！？』

突然通信に割り込んできた夕呼によって、場の空気は一先ず元に戻ることができた。…全力で突っ込んだ夕呼は肩で息してるけど。

『ヴァルキリースの発進は第四段階。そして発進後はとにかくハイヴまでの道を作りなさい！軌道降下組のガーディアンズがハイヴに突入したらこちらもハイヴに突入…』と言いたいところだけど今回は地上の援護に集中しなさい。良いわね！？』

「『了解!!』」

…何だかんだで不安なブリーフィングだったが、甲21号作戦が開始された。

『デイス্টーションフィールド展開、核エンジン並びに相転移エンジン出力六十パーセント』

艦隊左翼にいたガーディアンは、デイス্টーションフィールドを展開し、宙に浮かぶ。陽電子砲の発射口に海水が入らないようにするためだ。

海面から数メートル浮かび上がるとそこで停止。陽電子破城砲‘ローエングリーン’の発射態勢が全て整った。

両舷カタパルトの先端が開くと、中からせり出てくる巨大な砲台。チャージ音の重低音が辺りに響き、砲口からバチバチッ、と電光が走る。

『3…2…1…作戦第一段階開始！！ローエングリーン一番二番目標、ハイヴ地表構造物！撃てええええ　　ッ！！！！』

目を潰さんばかりの強烈な光に、サングラスをしていた夕呼も言葉を失う。

白い閃光は射線上の海水で水蒸気爆発を起こし、佐渡島の平らになった地面を灼熱の溶岩にしながら突き進み、一本は地表構造物に突き刺さり、残りの一本は根本付近に直撃した。

ズゴゴオオオオオ

ンッ！

閃光と爆煙が止むと、そこには上半分は融解し、根本には大穴を

「揚陸部隊、発進開始！ハイヴ外周の光線種に注意せよ！！」

「こちら、ステイングレイ！雪の高浜に到達。橋頭堡確保に移る！繰り返し、雪の高浜に到達。橋頭堡確保に移る！！」

上陸に成功した帝国海軍第17戦術機甲戦隊の海神・改は、内蔵された試製九九式電磁投射砲を構え、一斉にその引き金を引く。

吐き出される120mmの砲弾はプラズマ化し、辺り一帯を白い閃光が駆け抜けた。

『ヒュウ！すげえ威力じゃねえか！！突撃級がゴミみたいだぜ！？』

『油断するな！これが撃ち終われば再冷却まで使えなくなる。今の内にBETAを平らげろ！』

『『『『了解！！』』』』

所変わって洋上。真野湾に向かって進行していた戦術機母艦群は、最大戦速で海を翔ていた。が…

「っ！レーザー照射警報！！戦術機母艦五、捕捉されました！！」

先の警告にあった佐渡島ハイヴから離れた位置にいる光線級のレーザーは、殆んどが重金属雲とアンチビーム爆雷に阻まれる事無く戦術機母艦に向かって放たれてしまった。…が

「光波防御シールド起動！……レーザーの無効化に成功しました！！」

おお、と、艦橋内を感嘆のざわめきが包み込む。現在までで前線部隊も含め損害はゼロ。これならば…！！

「やれる…！やれるぞ…！」

第一段階は滞りなく終了し、第二段階へと突入した。

） 真野湾 （

『よう、ウイスキー部隊の皆さん？随分とゆっくりしたご到着だな？』

『へっ、わりいな。こちらそれでも急いだんだがな…』

『おい、無駄口はそれぐらいにしておけ。ステイングレイ・サラマンドー隊、橋頭堡確保ご苦労だった。後は我々に任せる！』

ステイングレイ・サラマンドー両隊が確保した地点から、続々と戦術機が上陸を果たしどんどん戦線を押し上げていく。

『こちら、帝国連合艦隊第2戦隊！只今を持って艦砲射撃にて旧八幡・旧高野・旧坊ヶ浦一体の面制圧を開始する！各戦術機甲部隊は注意せよ…！』

長距離からの対A.L弾の雨は止み、代わりにアンチビーム爆雷が重金屬雲を保つために適度に発射され、通常弾頭が佐渡島の地表に降り注ぐ。集団で固まるBETA達に容赦なく降り注ぐ砲弾は、着実にBETAの死骸を生産していった。

更にこれから、佐渡島に近づいた艦隊による艦砲射撃により、BETAの数は更に減っていく。

それと同時に戦術機母艦は次々と戦術機を上陸させると、一端レィザーの安全圏まで後退を開始した。

『っ！！こちら信濃HQ、地下から師団規模のBETAの侵攻を確認！ウイスキー部隊は作戦通り、戦線を維持しつつ旧沢根へ西進、敵増援を引き付けよ！！』

ウイスキー部隊の中に配備されていた八咫鏡のやたのがみパイルバンカー・センサーによつて、BETAの地下進行を探知。埋め込み式にすることで今までの振動センサーよりも探知が格段に早くなったのだ。

『『『『『了解っ！！』』』』』

『…行つたか。後は、宇宙の奴らだけ、だな…』

旧沢根に向けて移動するウイスキー部隊を眺めながら、一機の海神・改の衛士が呟いた。

） 衛星軌道上 再突入型駆逐艦内 （

『こちらストーリーアラム。現在、作戦は第二段階に移行中。艦艇の損害は無し。戦術機部隊の損害率は三パーセントです』

『三パーセントって…。おいおい、そこまでスゲエのかよ、ジャンの新型って奴わよ？』

衛星軌道上にて、再突入殻を投下する駆逐艦の中で降下部隊の衛士達が会話をしていた。

『ストーリー1、情報は全て事実よ。…まったく、いつの間にこんな兵器を作ったのかしら？噂だと光学兵器が実用化されたいわ』

『4（ジャン）から3（ミリア）へ。マジか！？ってことは何かい、日本人は戦術機で光線級を造ったのか！？』

『3（ミリア）から4（ジャン）へ。そうみたいよ。しかも、突入する帝国軍の奴ら、試作の第四世代機が半分らしい。ま、数は六機だけだし、残りはF-4のカスタム機だけだね』

『……………なあ3（ミリア）、そのカスタムの中に、バックパツクに大筒二本抱えた奴が居なかったか？…いるなら、奴等は‘ルシファア’の幻影’だ』

『ん？確かにありましたけど…1（隊長）、奴等（ルシファアの幻影）の事知ってるんですか！？』

オペレーション・ルシファア

『ああ。俺が明星作戦に参加したとき、他の部隊の撤退を支援している奴等を遠目に、だがな。支援砲撃開始直前、異様なまでに前線が押し上がった地域があつて、そこは、‘ルシファア’の幻影’が支援に入つた途端押し上がったって話だ。…あの火力は異常過ぎる。もし日本が量産に成功したのなら、BETA戦は新たな時代を迎えることになる…』

『……………』

『っ！全機に通達！作戦が予想以上の速度で進行。ハイヴ突入部隊は降下を開始せよ。尚、新型のAL弾、アンチビーム爆雷によってレーザーの遮断率は百パーセントを確保。降下は安心しろ、とのことです』

『へっ。ありがてえ話しだぜ！ですよ、隊長！』

『そうだな…。よし、ストーリー・ダイバーズ。全員、生きてハイヴを墜とすぞー！』

『……………了解っ！……………』

『降下、開始！！ Good luck！！』

軌道降下ハイヴ突入部隊、大気圏突入開始。

） side ガーディアンズ ）

「…各関節部問題なし。弾薬、推進剤、バッテリー、武装…オールグリーン。…ふう。急拵えだけど、何とかアルミユール・リユミエルは起動可能か…。沙霧さん、天叢雲はどうですか？」

『頗る快調だ。全く、技術廠は良い仕事をしてくれたものだ』

ハイヴ突入部隊として、ガーディアンズの全員と沙霧さん率いる部隊計十名は大気圏から直接ハイヴに突入する。

ハイヴの頑強な地表構造物はローエングリンで大破してる筈だし、後はこの強襲コンテナ型再突入殻で邪魔なBETAとモニュメントを吹き飛ばして反応炉に向かうだけだ。

『なあなあ宗一！！この作戦で生き残れたら、コイツが俺達のものになるんだよな、な！？』

『山田、少しは落ち着け！それに今は作戦行動中だ。矢羽田大尉、申し訳ありませんでした』

「気にしてないからいいですよ。逆に堅すぎるの苦手ですから、これくらいが丁度良いんです」

通信に割り込んできたのは琉也だ。それを止める形で次に入って

きたのは駒木中尉。二人とも、それぞれ八咫鏡、八尺瓊に乗っている。機体の性質上、この三種の神器シリーズは三機の変則小隊で動かなければ十分な性能を発揮できない。二人は沙霧さん率いるA小隊で、残りの三人はB小隊となっている。

『それよりも、宗一の乗る機体は殿下専用機の試作機…問題は無いのかな？』

「うーん、アルミユーレ・リユミエールを無理矢理装着させたから、バランスに若干修正が必要でしたけどなんとか行けます」

『…そうか。紫の機体で出る以上、殿下の顔に泥を塗るなよ？』

「もちろんです！」

『宗一君、この作戦、絶対に成功させましょう！』

『全員生還っていう偉業を成し遂げて、ね！』

『そして、基地に帰ったらみんなでパーティです！』

「涼子、陽菜、三咲……！そうだね！んじゃ、帰ったら天然物の大盤振る舞いだー！」

『『『お~~~~！！！！』』』

全員の士気は充分。余程のことがない限り失敗はないだろう。

『ガーディアンズ全機に通達！作戦が予想以上の速度で進行。現時刻をもって第三段階へと移行します。ハイヴ突入部隊は降下を開始せよ。尚、新型のアンチビーム爆雷によってレーザーの遮断率は百パーセントを確保。降下は安心しろ、とのことです』

『はふう、流石は宗一さんの技術ですう』

『ホント…』

「さて、おしゃべりはここまで！みんな行くよー！」

『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』

ガーディアンズ、降下開始。

第一七話 前編（後書き）

次回、ハイヴ内戦闘！そして、そこで想定外の事態が……！！……
期待！！

第十七話 中編 7/23改訂(前書き)

遅れましたが最新話です。では、どうぞ！

第十七話 中編 7/23改訂

） 佐渡島 ）

『こちらノーム小隊、BETAを殲滅！これより援護に入る！』

『了解！流石だな、伊織』

『…違うさ。〇一式が無ければこんな事は出来ない。…もっと早くコイツが完成していればな』

『…さて、おしゃべりの時間は終わりだ。早く来ないとめえの分が無くなるぜ！？』

『…ふっ。お前がそんなに早食いが得意だったか？まあいい。今からお前の分も食い尽くしてやる！！』

増援のBETAを引き付けていたウィスキー部隊は、その役目を充分に果たしていた。

戦術機一機に一丁ずつだが配備された〇一式突撃砲は、ビームマシンガンのお陰で圧倒的な戦果を出していたのだ。

『チツ、重金属雲か…。全機、通常の突撃砲に切り替える！』

『了解！！…クソッ、ビームはここまでか…』

『安心しろ、まだ〇一式は使える。遠距離から使えなくなったただけだ。にしても、重金属雲を疎ましく思う日が来るとはな』

〇一式の弱点…。それは、味方が展開した重金属雲とアンチビーム爆雷によって射程が短くなることだ。光線級のレーザーを防ぐ為の物が、仇となった結果である。だが、通常射程で減衰されても要撃級程度は殺すことができるのだが、突撃級になると通常射程の半分にまで近づかなければ甲羅を焦がすだけだ。…まあ、不知火が装備している〇一式中刀のビーム砲は別だが。

『隊長、十一時の方向より突撃級!!』

『黒沢!お前らの中刀で突撃級をやれ!』

『了解、中隊長!ウンディーネ小隊、聞いたわね!?全機中刀構え!撃て!!』

ズキューン!ズキューン!ズキューン!

黒沢中尉率いる不知火小隊は、左手で装備した01式中刀のビーム砲を三連バースト。ビームは重金属雲など物ともせず突撃級達を葬り去った。

『中隊長、不知火のバッテリー及び主機出力低下!次弾は三十秒後に発射可能です!』

『よくやった!! よおし、野郎共!麗しのウンディーネ小隊が活躍したぞ?負けねえようにBETAを喰らいまくれ!!』

『イフリート小隊、了解!ステークにしてやりますよ!!』

『ノーム小隊了解!!そして黒コゲは土の中と...』

『シルフ小隊、長刀構え!!『エレメンツ中隊』の力、『横浜の魔女』に見せつけてやれ!!』

『『『『了解!!』』』』

撃震で構成されたイフリート、ノーム小隊。不知火で構成されたシルフ、ウンディーネ小隊。全四小隊十六機の通称エレメント中隊は、先程倒した突撃級の背後から迫ってくる要撃級に向け突撃を開始した。

side ガーディアンズ
「くっ……！」

大気圏突入を開始した再突入型駆逐艦の揺れは、少しでも喋ろうものなら舌を噛みそうな程酷かった。…やっぱし、専用の駆逐艦じゃないとダメか。サイズが合わないせいで、想定以上の揺れがこちらに來ている。ま、こんな揺れじゃ、機体は、ビクともしないけどね。

『高度5000…4500…4000…すごい、本当にレーザーが來ないのか…！』

『3500…3000…2500！再突入殻分離！！お前ら、ハイヴを叩き潰してこい！！』

ガゴンッ！ と言う音と共に激しかった揺れが少しだけ収まった。機体内は依然として非常灯の朱い光りだけしか灯っていないが、直ぐにモニターも映るだろう。やがて非常灯の光が消え、モニターが起動した。

「來た！全員、モニターに映像は來たね！？後は訓練通り、地表に残っているモニメントを強襲コンテナ型再突入殻のミサイルとビームで破壊、突入する！一応コイツは突入もできるように設計されてるけど、今回は機体を発進させたらガーディアンに戻るようプログラムされている。自分たちの腕で反応炉まで行って脱出しないといけないから、全員、心して掛かってくれ！！」

『『『了解っ！！』『』『』』

通常の再突入殻とは違い、最初から加速をかけている強襲コンテナ型は速い。

すぐに再突入殻の集団をを引き離すと更に加速。

大気圏内でも高機動を可能にする大出力エンジンが唸り、ドオンッ！と堅い物を叩いたような音を出して強襲コンテナはハイヴに迫る。

「全機、オールウェポンズフリー全兵装自由！」

そして宗一の合図と共に、機体各所のハッチからミサイルが放たれた。それに反応したハイヴ周辺の光線・重光線級からレーザーが照射され、ミサイルと強襲コンテナに殺到する…が、重金属雲とアンチビーム爆雷の厚い層に阻まれレーザーは消え、追加で放たれたA.L弾が光線級達を潰して照射されるレーザーの数がどんどん減っていく。

ミサイルは重金属雲を抜けて地表構造物に向けて一直線に進んでいく…が、重金属雲を抜けた途端レーザーがミサイルに当たり、一割ほどが撃墜されてしまった。だが、半壊した地表構造物を潰すのには十分な数は残っている。

ミサイルはローエングリンによって開けられた穴に命中し、爆発。モニメントは崩れ、破片が周辺のBETAを押し潰した。

『重金属雲突入！発進シークエンス開始！！』

重金属雲に入ると、コンテナの後ろが開き、機体が射出される。小型のパラシュートと外付けブースターで降下しながら、強襲コンテナの大型ビームキャノンで開いた穴からハイヴに突入した。

突入部隊の中に、紫の武御雷が確認され、帝国軍の士気は最高

潮へと達したのであった。

） 佐渡島ハイヴ ）

「全員BETAに構わず前進することだけを考えて！倒すにしても足場や邪魔な時だけ相手をせるように！沙霧大尉達もお気をつけて！」

『『『『了解！！』『』『』』』』

『了解した。宗一こそ墜ちるなよ？では、作戦通りメインシャフトで会おう！』

外付けされたブースターを切り離し、スタブ内を通常の跳躍機で全速力で駆け抜ける三機の撃震に紫の武御雷。宗一達ガーディアンズだ。

突入場所は沙霧隊とガーディアンズで別々に別れ、ハイヴ突入後はメインシャフトを目指して進み、合流後一気に主広間を^{メインホール}目指す。 - これが、宗一と夕呼が立案した作戦である。

今回の甲21号作戦：参加しているのは殆んどが帝国軍なのだ。国連軍も参加はしているが、軌道爆撃艦隊や戦術機一個連隊に軌道降下部隊、戦艦はガーディアンに大型の戦術機母艦が三隻だけ…。国連軍でも、この短時間で戦力の立て直しができなかったのだ。故に、今回の作戦は明星作戦よりも戦術機の数はいないため、長期戦は不可能なのだ。

短時間で反応炉を破壊し、可能な限りのBETAを殲滅する。BETAは所属していたハイヴが破壊されれば、近くのハイヴに向け

て大規模移動を開始する帰巢本能がある。

ここから一番近いのは甲二十号錬鉄ハイヴに……横浜ハイヴだ。原作でも二万以上のBETAが横浜基地に殺到したのだ。いくらビーム兵器が配備されたとはいえ、撃ち漏らしの数は原作以上になる筈だ。

……ま、‘香月博士とミスリルの合作’が横浜ハイヴ周辺に展開してあるし、帝国のお古戦術機部隊を貰った以上、心配はないんだけどね。

だから、佐渡島ハイヴ攻略の部隊が少なかったのである。

『宗一さん、八尺瓊のセンサーデータ来ました！最短ルート割り出し中………完了！最大戦速で行けば三十分弱です！』

「わかった。みんな、この作戦は時間が命だ。地上部隊は後退ができない分疲労が蓄積されている。作戦開始から戦術機の被害は五%に抑えられてるけど、一時間もすれば一気に損害率は跳ね上がる。地上の被害を抑えるためにも、最速で反応炉を破壊する！いいね！？」

『あつたり前よ！援護は私と三咲に任せなさい！』

『陽菜先輩の言う通りですう！邪魔なBETAはアグニでイチコロです！』

『イチコロって……。遂に三咲も矢羽田語に感染しちゃったか』

「あ、あのさ……？少しは緊張感のある会話しようよ！？今まで出してた威厳みたいな物返してよ……！」

『何よー、自分でからかつといて。私も涼子も平気よ、平気！』

『ぶー！三咲だって大じ』とか言って涼子のベッドに侵入したのは誰かしら？』……うにゅう』

は、ははは……。流石と言うか何と言うか、この世界の女性は強い。僕は必要無かったかな？

……因みに、今の会話はBETAと戦いながらやってた。てか、体

がBETAを見た瞬間反射的に行動してたから全然気づかなかった…。

訓練は大事だね、うん。

三人の賑やかな会話を聞きながらも、紫の武御雷を的確に操作する。

○一式突撃銃で足場や天井から降ってくるBETAを撃ち落とし、中刀のビームで壁を作ろうとする集団を纏めて焼き殺す。

気付けばオレンジ小隊の会話もなくなり、ただただひたすらメインシャフトを目指す。

『あ、宗一さん。今ので第二波目を突破。後十分でメインシャフトに出ます』

『はやっ！？もうそんなに時間経ってたのね…』

「いやいや、みんな覚えてないだけで時間は経ってたからね！？」

因みに今回、バッテリー補給が出来ない三機のストライクは、ストライカーパックと偽装装甲のバッテリーを使って稼働時間を確保している。

三咲のランチヤーストライカーのアグニだって、未だに一発も撃っていない。主にガトリングとミサイル、後は全員共通の○一式突撃銃だけでここまで来のだ。これもストライクの性能お陰、かな。

…………ゴゴオオオオオオ！

ん？今すつつつごく嫌な震動が…。

…ゴゴゴゴオオオオオオ！！

『そ、宗一さん！八尺瓊のセンサーがやられました！しかも、国

連軍の降下部隊の反応が途絶ですう！！」

「沙霧大尉の部隊は！？」

「まだデータリンクが生きてますので無事なはず……です」

……なら、まだ大丈夫だ。沙霧さんの腕はこんなところで死ぬような事は無い！

「艦長、ミスリルです。先程地上部隊後方に大規模なBETA群が出現。斯衛軍第16大隊の援護により戦線は立て直せましたが、損害率が十五%を越えました。早急に反応炉を破壊してください。尚、ガーディアンもイーゲルシュテルン、ゴッドフリートで支援を開始し、ヴェルデダガー部隊を援護に回します」

「……わかった。後二十分以内に反応炉を破壊する。絶対にだ！」

「了解しました。艦長、御武運を」

） 佐渡島 地表 ）

BETAに背後を襲われる形となった帝国軍ウィスキー部隊と国連軍エコー部隊は、混乱状態に陥っていた。

フレンドリーファイヤ

味方誤射だけは無かったが、まともな連携が取れずに撃破されていく部隊が激増したのだ。

「こ、こちらソード1、支援砲撃を……ギャアアアアアアアアアアア！
！」

「う、うわあああ！戦車級が、戦車級が取り付いた！？」

「来るな、来るなアアアアアアアア！」

「あ、あああ……！隊長……！」

破損した自分を庇ってくれた隊長……。初陣だからと元氣付けてくれた先輩……。同期の親友……。みんな死んでいつてしまった。

目の前には、破壊された隊長の機体を喰らっている戦車級。気が動転していた彼女からは見えないが、後ろからは要撃級が近づいていた。

「っ！？……このオオオオオオ！！負けるかアアアアアアア
！！！！」

警報で要撃級に気づいたが、既に腕は振り上げられている。最後の足掻きに、と胸部に仕込まれた36mm機銃を撃ち込むが、体勢が悪いせいでほとんどが要撃級の腕に当たり意味がなかった。

ダダダダ……カシユウウウウ。

それに加え、ここまで来るのに使いすぎたせいで直ぐに弾が切れた……。要撃級の腕は挙げ終わったのか最後の抵抗を嘲うかのように、勢いよく降り下ろした。

「イヤアアアアアア！！（正樹ちゃん……！）」

「……………あれ？」

来るはずの衝撃が来ない…。不思議に思い、目をゆっくりと開けると…

『ヴァルキリーズ各機、戦線を押し上げろ！』

いつの間にか、見たことのない装備を付けた不知火が私を守るように立っていたのだ。それに、今の声って…。

「……みちる…姉さん？」

『その撃震、無事か……って、あきら！？』

「やっぱり！…どうして姉さんがここにいるの！？確か仙台基地にいるって…」

『それはこっちの台詞だ！…まあいい。その機体は動けるのか？』

「うう…ダメ。左腕は無いし脚部も動かないや」

『………少し待っている、あきら。』

「ピーー！」こちらヴァルキリー1、CP、応答せよ』

みちる姉さんは秘匿通信始めちゃった。と言っても、BETAを倒す速度に変化がないとは…我が姉ながら恐ろしい。

『………すまないなミスリル、感謝する。「ピーー」おいあきら！

今すぐその機体からペイル・アウトして私の機体に乗れ！時間は仲間が作ってくれる。…それと、お前にプレゼントがあるから早く来い』

「わ、わかった！」

急いでペイル・アウトし、機体から飛び降りる。

さっきまで〇一式を撃っていたみちる姉さんの不知火は、しゃがみこんでこちらに手を差しのべていた。

マニピュレーターに乗ると、不知火は立ち上がり海岸線を目指し

て移動し始め…って、ええええええ！？

「ね、姉さん！？何でこっちに…」

『言っただろう？プレゼントがあると。…来たか』

その時、銃声以外の音が戦場に鳴り響いた。キイイーン、という音に顔をしかめながら空を見上げると、見たことのない戦術機が一機、こちらに向かって飛行をしていた。

蒼と白のカラーリングに二対の目とアンテナ。音の音源は背中に装備された推進器からだろう。

「あれは…！」

『帝国の新型、天叢雲の原型となった機体…ウインダムだ！』

研究用として倉庫で埃を被っていた、地球連合軍が誇るダガーシリーズの最高傑作が今、佐渡島の大地に降り立った。

）メインシャフト）

ミスリルとの通信から五分、ようやくメインシャフトに到着することが出来た。もちろん損傷はないし、エネルギーも十分すぎる程余っている。後は、沙霧さん達を待つだけだ。

「三咲、イーグス隊（沙霧隊）は何処にいるかわかる？」

『はい、メインシャフトに向かっているのはわかるのですが……！出ました。私たちより更に下の階層ですう！』

『あっちゃ、そう来たか！宗一、急いで降下するよ！』

「あ、うん。（一応僕が隊長なんだけどな…）」

機体をメインシャフトに向けて飛ばし、後は自由落下とブースターを使って一気に降下する。

暫くすると、前方に六つの光点が見えた。沙霧さん達だ！

「沙霧さん！」

『宗一か！無事だったようだな』

「そちらこそ。…それより、地上に師団規模のBETAが現れました。ですので、作戦の前倒しです。アトリエの占拠は後回しにして、反応炉を直接叩きます！」

『…やはり、先程の振動はそうだったのか…！』

「斯衛軍の第16大隊が増援に来てくれたので、被害は少なくて済みました」

『そうか…ならば急ぐぞ、宗一！』

「はい！」

天叢雲はブースターをフルスロットルギリギリまで上げ、更に加速。他のみんなも負けないよう出力を上げた。

メインシャフトを降下し始めてから五分。ようやく目的地である反応炉に到着した。

不気味な青白い光を放つ反応炉は、その巨体故に威圧感を放っている。

『全機、S-11の設置作業に掛かれ！時間がないぞ！』

天叢雲と武御雷、それに八咫瓊以外の機体がS-11を取り外し設置し始める。

総計七個（八咫鏡は両肩に二個設置）のS-11を取り付け、いざ起爆しようとした瞬間……！

ズドオオオオオオオン……！

反応炉の入り口を塞ぐように、巨大な芋虫……いや、横浜ハイヴで殺した筈の母艦級が姿を現したのだ。

しかも、巨大な口を開き大量のBETAを吐き出し始め、瞬く間に反応炉の主広間の一部がBETAで埋まってしまったのだ。

「なっ……？ コイツ……母艦級……？」

『何で、何でコイツが佐渡島にいるのよ……？ 横浜で宗一君が殺した筈じゃ……！！』

『おいおいおいおい……どうなってんだコリヤあ……？ 何でハイヴの中に要塞級がいるんだよ……！？』

『落ち着け山田中尉！ 沙霧大尉、このままではS-11が起爆できません……！』

『わかつている……！ 矢羽田、お前の光波防御シールドで何とかならんのか……！？』

動揺は一瞬。全員BETAを確認した途端引き金を引いていた。

……が、如何せん数が多く、攻撃が母艦級に届かないのだ。

『無茶です……！ 両腕にしか装備してないんで自分すら守れませんよ……！ とにかく三咲、僕の合図でアゲ二撃って母艦級までの道作って……！』

『り、了解……！』

やがて母艦級の口が全開となり、戦車級や要塞級が壁を伝って天

井から降ってきた。

どんどん逃げ道を塞がれ追い詰められていく中、宗一は覚悟を決めた。

「みんな、僕は今から母艦級に突っ込む。奴の中で僕のS-11を起爆させるから、その間BETAの相手をよろしく！ 三咲、アグニ発射！！」

『は、はい！！…あ、撃っちゃった』

宗一の命令に、三咲は条件反射で引き金を引いてしまった。

朱と白の閃光は射線上のBETAを焼き払いながら母艦級に命中。母艦級の悲鳴が響き渡る中、宗一は機体の腰に取り付けられたS-11を掴むと、母艦級に向けて噴射跳躍。一気に距離を詰める。

『ま、待て宗一！！貴様死ぬ気か！？』

『宗一君！？』

「安心して。すぐ戻るからさ！」

そう言い残し、宗一の乗る武御雷は母艦級の口に飛び込んだ。

（ 母艦級体内 ）

はい、こつちの世界に来て二度目の突入です！横浜の奴と同様青白い光を放つ体内を武御雷が飛ぶ。今回はアルミューレ・リュミエールが無いから天井から落ちてくるBETAも注意しなくては。

「うつわゝ、居るよ居るよウジャウジャと！ってか数だけは横浜以上じゃね！？」

中刀のビーム砲に〇一式突撃銃を撃ちながら奥を目指す。小型種はビームマシンガンと36mmで殺し、突撃級や要塞級クラスは中刀のビームや長刀のビームサーベルで斬り捨てていく。

特に問題もなく、若干上空から降ってくる戦車級や突撃級に冷や汗をかきながらも、順調に奥まで進んでいた宗一だった。のだが世の中もとい母艦級の中はそんなに甘くは無かった。

「うおっ！？何じゃこの要塞級の数は！！」

母艦級の中心付近で、出撃待ちだったのか何十体もの要塞級が、ブウォンブウォンと十本以上の触手が大気を切り裂きながら武御雷目掛けて襲ってきたのだ。

突然の事に対処が間に合わず、初撃は避けることで手一杯になった。しかも完璧にかわすことができず、強力な強酸液が擦ってしまった。綺麗な紫の装甲を溶かされてしまった。

が、やられっぱなしの宗一ではない。すぐに体勢を立て直し、要塞級に戻ろうとしている触手を長刀で斬り捨て、既に回収し終わった要塞級にはビームを撃ち込み撃破。

斬り裂いた触手は計二十五本。他にも直接本体を攻撃して殺した個体を合わせれば三十体は越えただろう。そして周りには小型種に要撃級、突撃級が数体いるだけとなっていた。

「よし。ここまで来れば十分か。S-11の信管を五秒にセット……っと」

起爆準備が整い、ここで深呼吸。通信を反応炉で戦っているみんなに開く。

「みんな、今から母艦級の体内でS-11を起爆させる。万が一にも外に爆風が行くかもしれないから注意してくれ！」

『ちよつと…ちなさ…よ宗一！脱出…できるの！？無…なら私が…！』

「来ちゃダメ。爆発に巻き込まれるし、脱出はできるから安心して、陽菜」

『……ア…タのその言葉、信じる…よ！』

「ありがとう、陽菜…。S-11は通信を切ってから五秒後に起爆する！それじゃ！」

ピツ、と通信を切り、信管を起動。起爆ギリギリの二秒前までS-11を掴み続け、時間になったのを見計らい投擲。同時に空間移動で主広間の外へ脱出した。

宗一の武御雷がレポートした次の瞬間、S-11が母艦級の体内で爆発。戦術核並の爆発が起こり、体内を蔓延っていた小型種は勿論、仕留め損ねた要塞級は蒸発。母艦級は活動を停止した。

） 反応炉 ）

『あり…とつ…。S-11…通信を切つ…から五秒後に…爆する！それじゃ！』

「五、五秒！？」

五秒って、脱出なんかできないじゃない、あのバカ!!

『!?!陽菜だめ!今行ったら陽菜も巻き込まれる!』

宗一を助けるために動こうとした私を止めたのは、涼子だった。

「何で…何で止めるのよ!?!涼子は宗一が死んでも…!!」

最後まで言うことができなかった。

通信が切れてからきっかり五秒。母艦級が一瞬ピクリと震えたと思ったら、口から爆風と衝撃波吐き出しそのまま這い出ていたBE TA諸とも頭部が吹っ飛んだ。

S-11の爆発は母艦級の体内で殆ど相殺され、更に距離があったお陰かこちらには弱くなった衝撃波だけが届き損害は無かった。

……爆発に巻き込まれた宗一を除いて。

「……………ウソ。ウソよ。だって宗一言ったじゃない…!みんなが無事に帰ろうって!帰ったらパーティーだって!!」

『……………』

『先輩……………』

「宗一の……………宗一のバカアアアアア!!」

『おいおい、バカは無いでしょバカは。人が命かけて母艦級を仕留めたって言うのに』

『『『『『『り、了解…』』』』』』

随分と温度差のある返答に冷や汗をかきながら、宗一は隠れていたシャフトから抜け出し、ガーディアンズと合流した。

反応炉を破壊されたハイヴは静かなもので、時折BETAが移動している音が響くぐらい……そのせいで、涼子達の怒気が強化されてるみたいだけど。

『ザザッ…信濃HQから全戦術機部隊へ！ たった今、殿下の乗られた武御雷が反応炉を破壊された！ 繰り返す、佐渡島ハイヴの反応炉は破壊された！ これより、残存するBETAの掃討作戦に移行する。尚、本土に向けて撤退するBETAを優先的に迎撃せよ！』

よし、作戦は最終段階だ。地上のBETAを殲滅しないと、新潟の防衛部隊に負担がかかってしまい危険だが、ガーディアンも出っ張ってる事だし問題はない。後は、地下から横浜ハイヴに進撃している筈のBETAを迎え撃つ防衛部隊と合流するだけだ！

そして、ハイヴに攻略部隊が突入してから一時間後、帝国軍の攻略部隊は帰還し地上部隊と合流。地上の残存BETAを一掃後、全機はガーディアンへと帰還、強襲コンテナで本土へと向かったのであった。

第十七話 中編 7 / 23 改訂（後書き）

あきらの口調がわからなかったなので、もし間違っていたら修正しますので教えてください。

P・S・君がいた季節に何故か平慎二が居た……君のぞキアラでは！？と思った作者でした。

第十七話 後編（前書き）

パソコンが壊れたりとトラブルはありましたが、とうにか完成です。
では、どうぞ！！

第十七話 後編

） 本土 旧横浜ハイヴ周辺 ）

佐渡島ハイヴ制圧から十五時間。甲21号作戦に参加した帝国軍の被害は戦術機部隊が25パーセント、艦艇は損害なし、という結果となった。

国連軍は軌道降下部隊が全滅、エコー部隊は40パーセントもやられてしまった。この結果は、〇一式シリーズの有無が大きな原因だろう。

そして、多大な犠牲を払うことで佐渡島地表にいたBETAはほぼ全滅。一部は海に入り逃げてしまったが、本土に向かうBETAだけは海神達が殲滅してくれた。

甲20号錬鉄ハイヴに二万規模のBETAが帰ってしまったが、そこは仕方のないことと割り切るしかないだろう。

作戦が終了した伊隅ヴァルキリーズは、一人のゲストを連れてガーディアンに帰還していた。そう、あきらの事だ。

因みに、一応であるがみちるにはあきらが参加している事を知らせていたのだ。そして、見つけた時の対応も。元々、今回の作戦であきらのヴァルキリーズ入りは確定事項だったりする。まあ、引き抜きは殿下に頼んであるし問題ない。……僕の休日を犠牲に（涙）

「い、伊隅あきら少尉であります！よ、よろしくお願いします
！！」

で、新人紹介ついでのブリーフィング。ヴァルキリーズと沙霧

さん達を前にして固くなってます。

……え？何でガーディアンズがいなかった？それは聞かない
お約束ギヤアアアア！か、関節はそっちに曲がらない……て三咲
正座中膝に座るなアアアア！！バッドは、バッドは止めて……！

宗一の悲鳴が響くなか、全員知らん顔をしてブリーフィングは
続くのだった。

「……コホン。艦長、不在、のため、私が作戦を説明致します」

霞と同じ国連軍の軍服を纏ったミスリルが壇上に立つと、部屋の
照明が消えスクリーンが起動した。

「まずは、皆さんご無事で何よりです。甲21号作戦が終了し
てからあまり時間が経っていませんが、今作戦もがんばってください
い。まず、今作戦の名称は横浜ハイヴ防衛戦です。……ネーミン
グセンスについては何も言わないで下さい。でないと艦長が泣きま
すから。今作戦は、佐渡島ハイヴで撃ち漏らしたBETAの迎撃と
なります。既に新型の高性能センサーでBETAの地下進行を感知
しています」

そして映し出される予想BETA進行ルート。それは、真っ直
ぐに横浜ハイヴに向けて伸びていた。

「このように、敵は既に新潟県を通過し群馬県に入っています。BETAの到達予想時刻は二日後の0700時。既に戦術機部隊一個大隊108機分のF-4J（撃震）とF-15J（陽炎）、TYPE-97（不知火）を帝国軍から借り受けました。更に甲21号作戦に参加した艦隊が太平洋側から砲撃支援をしてくれますが、先の甲21号作戦で砲弾の保有量が七割に減り、アンチビーム爆雷は3割しか残っていません。砲撃支援が途中で途切れる可能性があるので注意して下さい。国連軍は甲21号作戦の生き残り全てが参加します。尚、本作戦は横浜ハイヴの防衛：つまり、一匹たりともBETAを反応炉に到達させてはなりません。何か質問がありますか？」

そこで、直哉がすつと手を挙げる。他にも数人が続けて手を挙げたが、一番に挙げた直哉をミスリルは当てた。

「帝国軍から戦術機を、借り受けた、と言っていたが、衛士はどうするのだ？」

「それは「私が説明するわ！！」……香月博士にお任せします」

突如ブリーフィングルームに乱入してきた夕呼は、頭を押さえて教壇から下りたミスリルの代わりに嬉々として説明を始めた。

「沙霧、アンタが言った問題は大丈夫よ。何故なら……」

「……………何故なら？」

無視を決め込もうとした直哉は、夕呼の睨みに負けて渋々と話に合わせる。

「私とミスリルが開発した“H・A・R・Oシステム”がある

からよ!!」

「ハロシステム??」

そしてまた画面が切り替わる。すると、そこにはみんなお馴染みのハロが映っていた。

「アンタ達も知つての通り、ハロには高性能なAIが搭載されているわ。それは、人間と会話できるほどの、ね」

確かに、ハロはロボットのくせに感情表現が豊かだ。一部の整備士ではハロと親友になった奴もいる、という噂もある程だ。

「で、それほど高性能なら戦術機の操縦もできる筈、と踏んで作ったのが“H・A・R・Oシステム”。ハロ達にデータリンク繋げてガーディアンのスーパードライバーで管理する。ま、今回はテストも込みで一個大隊分しか運用できないだけだね……」

“H・A・R・Oシステム”の詳細を聞いて全員茫然自失。そのシステムが完成すれば、衛士はいらなくなり、何時でも一定水準の衛士を生み出すことができるからだ。

「ふう……わかったかしら、沙霧」

「はっ！わざわざご説明して頂きありがとうございます！」

「うん。素直でよろしい。じゃミスリル、後の説明任せたわよ」

そう言つて、夕呼は入ってきた時と同じように出ていくのだった。

部屋に残された全員は、どっと押し寄せてきた疲労感と脱力感

にため息を吐くのだった。

「……変な乱入がありました。説明は以上です。機体の整備と補給が済み次第、第二次防衛ラインへと向かっています。それまでは各自ご自由にお過ごしください。……では、解散」

） 横浜ハイヴ第一次防衛ライン ）

『HQから全八口並びに全戦術機部隊へ。敵BETA群が地上に向けて進行を開始。振動センサーが反応次第迎撃準備せよ』

『了解！ 了解！ 了解！』

『シャーク中隊了解！……にしても、日本は面白い物を作るな』

『でも隊長、あのボールカラフルで可愛いじゃないですか！』

『シャーク4、無駄口叩いてないでセンサーを見ろ！』

『はい。……ッ！？隊長、振動センサーに反応！振り切れそうです！！』

『おいでなさったか……！シャーク1からHQ！異常な振動を感じ！コード991の発令を進言する！』

『HQ了解。全戦術機部隊に通達する』

『隊長！！センサーが振り切れました！！前方五百メートル……』

…来ます！」

シャーク4の絶叫に近い声と共に、突撃級の群れが彼方此方から飛び出してきた。直ぐに120mで迎撃するが、飛び出てくるBETAの数は衰えるどころか増える一方。シャーク連隊で構成された第一次防衛ラインはあっという間に破られてしまった。

『く、クソ！HQ、こちらシャーク1！部隊はほぼ壊滅！戦車隊もやられた！後退の許可を！！』

『HQ了解。八口部隊が撤退を支援する。シャーク連…大隊は後退を開始せよ』

『有難い…！全機、後退開始！ありったけの弾を奴等にぶち込んでやれ！！』

『『『『了解！』』』』

『こ、こちらシャーク4！脚を戦車級に…い、イヤア！！胴体部に取り付かれました！！』

撤退を始めたシャーク1は、シャーク4がBETAに集られるのを見つけ、急いで部下に通信を入れる。

『シャーク8、12！4を助けるぞ！お前らは突撃砲で周りの小型種をやれ！』

『了解！待っててねアリスちゃん、愛しのデクスが今助けるからね！！』

『了解……ってこのクソが！戦闘中に女を口説いてんじゃねえ！！』

『そうよ3Kデクス！私は隊長に助けてもらいたい……ってイヤアアアア！管制ユニットまで来たああ！！』

『アリスちゃん！？』

『クソッ！要撃級まで……これだと間に合わん……ペイル・ア

ウトは出来ないか!？」

『数が多くて出た途端パクリですよ!!！』

…ふざけているようでもピンチはピンチ。36mmで周りの戦車級は潰せても、戦術機本体に取り付いた戦車級は誘爆の危険があるため、二人の腕では撃てないのだ。

しかも、救援に向かったシャーク1は要撃級に阻まれて足止め状態。シャーク連隊の生き残りがシャーク4（アリス）の死を覚悟した時、彼等は現れた!!！

『ハ口ハ口!　　ハ口ハ口!!！』

『狙イ撃ッ!　　狙イ撃ッ!』

『救助!　　救助!』

機械のような正確無比な射撃。単発で撃たれる36mmは的確にBETAだけを撃ち抜き、戦術機本体には傷一つ付いていない。

『お、お前たちは…!』

『ハ口ハ口!　　撤退　　支援スル!　　支援スル!』

いきなりの援軍に驚きながらも、相手をしていた要撃級が倒されたのと同時にシャーク4（アリス）の機体に取り付いた戦車級を短刀で排除し、後退を始める。

『た、隊長!　ありがとうございます!』

『ふん、気にするな。部下を助けるのは当然のことだ。デクス、エミル!　アリスの機体を抱えて後退しろ。俺も直ぐに後退する』

『了解!』

『…さあてハ口ども、実力拝見と行こうじゃないか…』

そう言い残し、シャーク1は残りの弾薬を全て使い切って第二次防衛ラインまで後退するのだった。

） 第二次防衛ライン ガーディアンズ&ヴァルキリーズ ）

後退してきた国連軍に補給と修理を行いながら、“H・A・R・Oシステム”搭載の戦術機部隊の映像を見る宗一。そこには、綺麗な陣形を保ったままBETAを狩るハ口達の姿があった。

「…何ともまあ、僕達の出番は無いかな？」

とかいいながらも、原作にあった挟撃に備えてセンサーに目を光らせている。今のところその予兆は無く、振動センサーも砲撃による揺れしか観測していない。

『矢羽田く。そっちの様子はどうか？』

「はい、現在第一次防衛ラインの国連軍とハ口部隊が交代、戦線は維持されてい『そんなことはこっちでもわかるわよ。私が聞きたいのは“H・A・R・Oシステム”の方よ！』…そっちですか。まあ動きが堅い機体が多いですが、それも時間と共に無くなってるみたいなので大丈夫かと」

さつきも言ったが、ハ口を載せた無人機は、今のところ目立った損害を出さずにBETAを狩っている。

無人機特有のぎこちない動きはほとんど無く、知らない人が見

れば衛士が操縦していると錯覚させるほどだ。

『なら問題ないわね。じゃ、アンタの指示通りガーディアンはメインシャフト直上で待機させとくわね。後…ミスリルに怪我させんじゃないわよ？』

「もちろん。霞が悲しみますからね。では、通信終了」
「そんじゃ行きますか！ミスリル、機体の最終チェック開始」

「了解しました。…最終チェック開始。ジェネレーター出力正常、各関節ロック解除、FCSコンタクト、全武装異常無し…。最終チェック終了。艦長、何時でも行けます」

「よし。…あー、みんな聞こえてるか？」

出撃可能となった所で、宗一は通信をガーディアンズとヴァルキリーズに繋いだ。

「みんな、第二次防衛ラインは頼んだよ！矢羽田 宗一、ハイペリオンブラスター出ます！！」

横浜の空に、本物の‘天を駆ける者’が飛び立った。

ハイペリオンブラスター…それは、管理者によって送られてきた強化パーツを使って作った機体だ。

天叢雲達と同じ時期に改造を始めとつくの昔に改造し終えていたのだが、甲21号作戦は悠陽を表舞台に立たせるため武御雷に乗ったせいで、今回が初の出撃となる機体だ。

主に改造されたのはウイングバインダーと両腰のアーマーだ。

ウイングバインダー（飛行可能）には、正面全体を囲めるだけのアルミューレ・リユミエール発生器を残し、フォルフアントリーの横に来るよう陽電子砲を二門取り付けた。エネルギーは核エンジンから直接送るので、チャージに時間がかかるが威力は折り紙付きである。

腰のアーマーはレールキャノンが付いたものに取り替え、（フリーダムのカスイフィアスレール砲と同じもの）マルチロック・システムも搭載し、ほとんどフリーダムと同じにしたのだ。

違うところとは言われれば、装甲が通常装甲な所だけだろう。

だがこの機体、致命的な問題がある。武装を増やしたまでは良かったのだが、排熱処理が追いつかず連射ができないのだ。

陽電子砲という絶対的な武装を小型化した代償が、これだ。

…でも、今はこの機体で出撃ないといけないんだ！

宗一とミスリルが第一次防衛ラインに到達した頃には、戦線は若干押され気味になっていた。

光線級が出てきたからだ。

上空から狙撃で足止めをしていたハ口達が、撃墜は免れたが最低でも小破の損傷を負っていたせいで、突撃級の侵攻速度が上がってしまったのだ。

「クソ……！でも、奴等は直ぐにエネルギーが切れる筈だ。ミスリル、アルミューレ・リュミエール展開。前に出るよ！」

「了解。次いでにマルチロックオン・システムも起動します」

前方の180°だけに展開したアルミューレ・リュミエールに、早速光線級が放ったレーザーが当たり眩しく光る。

レーザーが消えない内に半球体状のレーダーが現れ、光線級のみロックオンしていく。

陽電子砲を除く武装がせり上がり、固定。連射モードになり……

「全ターゲットロック完了。冷却装置稼働開始。艦長、いけます！」

「よっしゃ！ハイマツト・フルバースト……ファイヤ……！」

引き金を弾くと、MSが持つには過剰な程のビームとレール砲が凄まじい勢いで連射された。

フォルフアントリーが光線級の集団を焼き尽くし、クスイフィアスが重光線級を吹き飛ばす。

直ぐにレーザーは減り、光線級は殲滅された。

「ミスリル、陽電子砲チャージ開始！」

「既にチャージ中。後三十秒で発射可能です」

「何時の間に……？」

「艦長がトリガーハッピーになっていた時です」

「あ、そうですか……（何か最近ミスリルが冷たいような……）」

そうこうしている内に、またしても前線が押され始めた。光線級がやられたのが原因か、BETAが侵攻速度を更に跳ね上げたのだ。

「ッ！ミスリル、陽電子砲を撃つから前線部隊に後退の指示！」

「了解。…勧告完了。前線部隊、射撃しながらも後退します」

「安全圏まで後退したら撃つよ！」

両手のザスタバ・ステイグマトで可能な限りの突撃級や要撃級を撃ちながら、チャージが終わった陽電子砲を構え、クスイフィアスにフォルフアントリーも構える。狙うはBETAが密集している正面だ！

「……あと少し…！前線部隊、安全圏に到達！」

「行くぞ…！陽電子砲、ハイマツト・フルバースト…ファイヤ
！……！」

ズゴオオオオオオ

！！！！！！

瞬間、横浜ハイヴ周辺が揺れた。陽電子が射線上にある全ての物質と対消滅を起こし、爆発したのだ。

叩きつけられる爆風と、荒野となった横浜に吹き荒れる人工の砂嵐に、安全圏に避難した筈である戦術機達は吹き飛ばされないよう身を低くする。

ほどなくして、視界を覆っていた砂嵐が晴れる。そこには大きく削られた大地と、僅かに生き残ったBETAに、未だビームとレールキャノンを生き残り目掛けて撃ち続けているハイペリオンの姿があった。

たったの一撃で、六千体以上のBETAを焼き尽くした陽電子砲とハイペリオンの姿に、戦場に出ていた全ての兵士が歓声を上げたのだった。

戦闘開始から十二時間。ハイペリオンプラスターの陽電子砲やハイマツト・フルバースト、“H・A・R・Oシステム”の活躍もあり、第一次防衛ラインより少し抜けた辺りで全てのBETAを殲滅することに成功したのだ。

宗一が危惧していた第二次防衛ラインからの挟撃は結局無く、被害も撃墜が第一次防衛ラインの国連軍が二個小隊、八口達が一個小隊分。破損していない機体は居なかったものの、この程度の損害で済んだのは行幸と言える結果だろう。

四万以上のBETAに襲われた横浜ハイヴだが、反応炉への被害もなく作戦は終了することに…

「ちょっと、私達の出番は！？まさかあれだけ！？」

「ううゝ、忘れられたゝ！！」

「…宗一君、もう一度お仕置きね…」

…… なった。一人の異世界人を除いて。

「な、何でもたしても！？イヤアアアアアアアアアア！！！」

こうして宗一は、ハイヴから下りた直後、三人の般若に引き摺られていくのだった。

「艦長もバカですね。三人を守りたかったと素直に言えばいいのに……」

一人、ハイペリオンの前に取り残されたミスリルが、少し不貞腐れながら呟いていた。

第十七話 後編（後書き）

気付けば二十万PV越え…。そろそろ記念短編でも書こうかなと思
い、緊急アンケート！

宗一＋オレンジ小隊の誰かor今まで出てきた原作メンバーの誰か

の短編を書こうと思います！

これがいい！という方はどしどし感想までお願いします！

第十八話（前書き）

ついにあの国が動き出します。

第十八話

帝都

甲21号作戦、横浜ハイヴ防衛戦が終わった翌日。帝都はお祭り騒ぎになっていた。

忌々しいハイヴが本土から全て消え、しかも前代未聞の大戦果を出したとすればこうなるのは必然だ。

だが、ここまで民衆が興奮しているのにはもう一つ理由がある。それは…

「悠陽殿下、素晴らしい演説でしたよ」

「ありがとう、矢羽田殿。そなたも私の身代わりと反応炉破壊という大役、ご苦勞でした」

煌武院 悠陽殿下の演説があつたからだ。政治の表舞台に立つことはなくても、国民への影響力が凄かった悠陽は、世論を味方につける事に成功したのだ。これでまた一步、悠陽の実権回復に近づく事ができた筈。

「……………ところで、矢羽田殿の後ろにいらっしゃる御三方は？ 私は矢羽田殿お一人をお呼びした筈ですが…？」

何で僕がここにいるかと言うと…悠陽殿下にお茶会にお呼ばれされたからだ。…で、後ろにいる三人とは勿論、涼子達だ。この事は香月博士以外誰にも話してないのに、三人とも仙台基地のゲート前で立ってるのを見て少し怖かったの……う、嘘だからその背中に押し付けてる銃をしまってください！！

「…私達は矢羽田大尉直属の‘部下’ですから、当然のことです」

「オホホ…。面白い事をおっしゃる方ですね、矢羽田殿？」

「ち、ちよつと涼子！？殿下に向かつて何て事を…」

「…宗一（君）（さん）は黙ってて！」「…」

「は、はい。ごめんなさい…（あれ？何かデジャブを感じるよ？）」

と、涼子達三人と悠陽の間で火花が散っている時、海の方こう側では…。

） アメリカ （

ペンタゴンの中にある一室。そこにはオルタネイティブ5推進派とG弾推進派の主要メンバー、それと一部企業の重役が集まり、会議をしていた。

部屋はプロジェクターを使っているため薄暗く、お互いの顔がうつすらと見える程度の光量しかなく、それに比例して室内の雰囲気も暗かった。

そして、プロジェクターに映し出されているのは、横浜ハイヴ防衛戦の映像である。

かなりの遠距離から撮った為か、映像の画質が悪い。だがそれでも十分に‘ガーディアン’と‘ハイペリオンブラスター’、‘一式’の姿を見る事はできたのだった。

「何だこの戦艦は！？こんな物報告書には無かったぞ！！」

「それよりもあの戦術機だ！たった一機で師団規模のBETAを薙ぎ払うなど狂っている！！」

「だが他にもあるぞ！この新型突撃砲、レーザーを撃っている！他にも帝国は第四世代機の開発に成功したと言う報告も……！」

「鎮まらんか！！ひとまず落ち着け！！」

各々が勝手に喚いていた会議室を、全員より一つ高い椅子に座っていた男が鎮めた。

「混乱しているのはわかる。黄色い猿が我々を遥かに凌ぐ技術力を見せたのは誤算だった。……だが、それだけだ。無いのなら、奪ってしまえば良いのだよ。幸いこちらには切れるカードは山ほどある。黄色い猿如きに良い顔をさせてたまるものか……フフフフ、ハッハハハ！！」

男が不気味に笑うと、周りの参加者達も安堵にしたのか〇一式の利権について語る者まで出ていた。

だが、彼等はこの後酷く後悔することになるだろう。迂闊にも電子機器が使われている部屋を使ったことに……。

） 仙台基地 夕呼の執務室 ）

「……だ、そうです。鎧衣課長はどう思われますか？」

「ふむ。私としてはこちらのナツツチョコが気にいっていてね、お嬢さんもいかがかな？」

「……質問を無視したのは許せませんが、いただきます」

仙台基地にある夕呼の執務室。そこには、ブラウンのコートと帽子を被った自称「ちょっと怪しいおじさん」こと鎧衣左近の姿があった。そしてその反対側にはあっさり和餌付けされてしまったミスリルに夕呼の二人。鎧衣はミスリルがチョコを食べるのを眺めた後、視線を部屋の主へと向けた。

「どうやら、以前から五月蠅かったハエ共が動くようすな、香月博士」

「そうみたいね。しかも奴等、多少強引でも技術を奪いに来るつもりね」

「もぐもぐ……コクン。会話の内容からして間違い無いでしょう。まずは食糧の規制、鉱物等の資源物資、医薬品……まだ本土が復興されていない今ではどれも致命的です」

「……オルタネイティブの権限でも多少は輸入できても足りないから無理……八方塞がりね」

「帝国の上層部も、アメリカには〇一式を提供するつもりは無いようすな。中華統一戦線や大東亜連合、欧州連合への提供は既に決定したようすだ」

「……いっその事、アメリカのG弾推進派とオルタネイティブ5推進派を潰してしまうという手も……」

何気にミスリルが一番エグい案を出し、それを間近で聞いた大人二人は冷や汗を流すのだった。

「そういえば、艦長達は帝都で殿下に呼ばれていた筈……。お流れにされかけた、あの計画」の事もありますし、一応連絡はしておきますか」

そう言って目を閉じたミスリルを、鎧衣は不思議そうに見つめ

ていたのだった。

場所は戻って帝都城。宗一達と言うと、未だに悠陽とオレンジ小隊が睨み合っていた。……いつまで続くんだよ………ん？ミスリル？………うん、そっか。わかった。殿下もいるから直ぐに話すよ。

「みんな、ちょっと大事な話。睨み合いは後にして聞いて欲しい」

さっきの弱々しい声とは違う真剣味を帯びた声に、四人は姿勢を正して聞く姿勢となった。

「ありがとう。実は……」

そして、ミスリルが盗み聞……盗ちよ……スパイしてくれた内容を話す。みんなあまり表情に出すことはないけど、内心激しく怒り狂っているのが手にとるようにわかる。各言う僕だって結構頭に來てるんだよね、アメリカの態度には。

「……なるほど。食糧や資源物資を盾にされれば手も足も出ない……最低ね！人の……国の足下を見て……！」

「多分、他国に頼むとしてもアメリカからの妨害が酷いと思う。最悪、開発者が実物を強奪してさも自分達が開発した、と言ってくるかもしれない。ま、それは向こうの技術の問題だからわかんないけど……」

○一式は、先の甲21号作戦と横浜ハイヴ防衛戦で破壊が確認されている物以外は、全ての回収が完了している。例え戦場に投棄したとしても、今頃はもう戦車級の腹の中だから情報漏洩の心配は無し。けど、要求が出てこない内に何とか……あ、あれがあつた！！

「殿下、X F J計画の事は覚えていらつしやいますか？」

「不知火式型の……それがどうかいたしましたか？」

「電磁投射砲等の問題が解決し、一時はお流れにされかけましたが今がチャンスです！ユーコン基地は国連軍所属。しかも各国の軍が集まっているところで正式公表すれば、圧力を掛け難くなるはずです！」

「なるほど……。ならば早速巖谷中佐に連絡をしなければなりませんね。私も公務の時間のため失礼します。……矢羽田殿、今度は「二人で」お茶会をしましょうね？」

「り、了解しました！！」

前門の虎、後門のキングギドラ……。凄まじいスパークが飛び散る中、何でここに来たんだっけ？　と一人黄昏る僕だった。

てか最後まで仲悪いのかゆこの四人！！

第十八話（後書き）

ここでちよつと設定公開！

‘ 不知火・ストライク ’

ヴアルキリーズで運用されている不知火をストライカーパックを使用可能にした機体。主に背部の接続モジュールと肩のハードポイントを交換しただけである。武装にそう変化は無く、長刀が外され代わりに〇一式中刀を装備している。

‘ ハイペリオンブラスター ’

ハイペリオンの第二形態とも言える機体。ウイングバインダーと腰のサイドアーマーを改造した。

ウイングバインダーに取り付けられた陽電子砲は、小型化され威力は落ちたものの、これ一発でラザフォード・フィールドに穴を開ける事が可能である。

腰のサイドアーマーはフリーダムのカスイフィアスレール砲に代えられ、ビームサーベルを取り外しそこにレール砲の弾薬を多く取り付けた。

ハイマツト・フルバーストも使用可能となり、光線級がない戦場では無双が可能である。

ただ、陽電子砲発射までチャージに時間がかかるのと、撃つてしばらくは冷却とエネルギーチャージの為、暫く戦闘不能になることや、アルミューレ・リュミエールが前方だけに展開できないなどの欠点は有るものの、優秀な機体である。

以上、設定でした！

何かアイデアがあればお願いします！

あ、後、前話のアンケートは続いていますので気が向いたらそちらもお願いします。

二十五万ヒット記念小説！（前書き）

えゝ、結局誰がいいー、というのが無かったので、自分の独断でこの方にしました。短めですが、どうぞ！！

二十五万ヒット記念小説！

） P X ）

時は昼時…といっても昼のピークが過ぎた比較的空いている時間に、宗一はフラフラとカウンターに向かっていた。

「ふい〜。おばちゃん緑茶と牛丼セット〜！」

「あいよ！…全く、若いのになにだらけてるのさ。もっとビシッ！としな、ビシッと〜！」

バンバン、と凄い力で背中を叩かれて若干噎せた。鍛えてても京塚おばちゃんの張り手は効くぜ…。

「…無茶言わないでよ。水月さん達の訓練がキツイのおばちゃんだって知ってるでしょ？」

「それでも、だよ。男の子なんだから女の子に負けたら立つ瀬無いだろうが。ほら、今日はサービスで特盛だよ！」

「お、サンキューおばちゃん！」

おばちゃんの説教って、何処か暖かいんだよなあ…。疲れてても、バシンツと叩かれるだけで元気が出る。みんなのお母さんの存在です。

そしてトレイ片手にキョロキョロと空いている席を探す。ガーディアンズという立場のせいで、仙台基地に来てから結構経つけどあんまり知り合いがいないんだよな。知らない人とはあんまり喋れないし…って、居た。この時間に一人とは、忙しいんだろっな…。

「神宮寺軍曹。お一人ですか？」

「え？や、矢羽田大尉！？失礼しました！」

立ち上がって敬礼しようとする神宮寺さんを止める。堅う苦し
いの香月博士同様苦手なんです。

「敬礼はいいですよ。それより、相席いいですか？知り合いが
いなくて、一人は寂しいのです」

「…クス。大丈夫です。どうぞ」

許可が下りたので、遠慮なく神宮寺さんの対面に座る。そして
気づいたが、神宮寺さんは昼食ではなく資料整理の為にここにいた
ようだ。多分、207訓練小隊のものだろう。

「へえ…。この子達って新しい訓練生ですか？」

「ええ。ちょっと…というか、一人を除いて重要人物ばかり
ですけどね」

どうぞ、と言われて資料を受け取る。やっぱり冥夜達だった。
パラパラと資料を読んでいると…

「あの…矢羽田大尉。大陸では涼子を助けて頂き、本当にあり
がとうございました」

「へ？…ど、どうしたんですか突然！？てか頭を上げてくださ
い！…！」

突然、まりもが頭を下げたのだ。昼時を過ぎたとは言え、PX
には人が多い。さっきの宗一の大声で、ほとんどの人がこつちを見
ている。

「…涼子から聞きました。あの娘、恥ずかしがって肝心の救出劇を話さなかったんですよ？」

まったくもう…、と言いながら話すまりもはとっても嬉しそうで…。宗一はこの世界に来てやっと、自分がやりたかった事の一つができ涙がでそうになっていた。

原作メンバーを不幸から救う…。今はまだ準備段階だし、救えなかった命もたくさんある。でもやっと、やっと宗一は達成感を得ることができたのだった。

「ハハ！涼子って負けず嫌いなところありますからね。…お話ししましょうか？」

「はい。お願いします！」

それから僕と神宮寺軍曹のお話は盛り上がり、中々良い雰囲気だったとは京塚おちゃんの言。去り際に「まりもちゃんにも春が……」とか聞こえたけど、相手は誰だろう？……ていうかそれより。

「な、何でこんな無茶苦茶演習！？」

『『『^{ですう}』』』 問答無用！！！！』』』

何故かPXを出た途端オレンジ小队のみんなに捕まって強制シミュレーター。しかも運悪くヴァルキリーズのみんなも纏めて参加とか鬼かアンタ等！！ってうお！？

『ウフフ。余所見は危ないですわよ大尉？美冴さん、今です！』
『フツ、さあ矢羽田大尉。いい加減墜ちてください！』

風間さんと美冴さんはコンビで攻めてくるわ…

『行くわよ孝之!!』

『おう!水月こそ遅れるなよ!』

孝之さんと水月さんのダブル突撃前衛とか…

『ヴァルキリーズ、ガーディアンズ全機!矢羽田ターゲットはもうすぐソコだ!一気に落とせ!!』

『『『了解!!』』』

伊隅大尉の的確な指揮でどんどん追い詰められ…え、慎二さん?開始と同時に墜としましたけど…ってうわ!!いつの間にかヴァルキリーズの不知火・ストライクと涼子達のノワール、ヴェルデに囲まれた!?

『…さて、宗一くん?遺言はある?』

ビームショーテーターとレールカノンを構えた涼子が通信を入れてくる。…ならば言わせてもらおう!!

『…撃震で九機も相手できるかアアアア!』

『…あつそ。墜ちなさい!』

開始から五分。最後は機体を原型を留めないほど殺られて終わりましたとさ…。

後日、ガーディアンズに色々とき使われている宗一の姿が仙台基地の至る所で見られ、独身の男性基地職員は生温かい視線を宗一にプレゼントするのだった。

二十五万ヒット記念小説！（後書き）

次は誰にしようか……。

と、ここで重大発表！！

以前からトータルイクリプスにオリキャラを出してリンクさせるか、
宗一orガーディアンズがユーコン基地に行くか、で意見を頂いた
のですが、今資料を集めてる途中で作者もどっちにするか決まっ
てません。

ですので、アンケートを取りたいと思います！

宗一が、とか涼子達が、とかご希望があれば感想までお願い
します！

もしかしたら？的なお話（オルタネイティブ編）（前書き）

I f 物です。佐渡島を攻略せずそのままオルタネイティブ編に突入した物で…曰くボツネタです。T E 開始までの繋ぎですが、どうぞ！

もしかしたら？的なお話（オルタネイティブ編）

） 2001年 10月22日 横浜市柁町跡地 ）

目蓋越してもわかる太陽の光。白銀武は自分のベットの上で寝ころんでいた。

いつも通りの朝か……。にしても、変にリアルな夢だったよなあ、アレ……。ま、変な夢なんか純夏がお越しに来るまで布団の温もりを感じながら忘れ……。ん？ヤケに肌寒いな。……。布団が無いのか？
そういえば、あの夢も確か同じ……

「ッ！？」

ガバッ！！

勢いよく跳ね起きたせいで、ベッドのスプリングが悲鳴をあげる。

部屋を見回せば、いつも通りの自分の部屋だ。ハンガーに掛けられてる制服も、バルジャーノンのポスターに誕生日プレゼントのゲームガイ……。俺の部屋だ。

ドクン……。

何故か、後ろの窓……。純夏の部屋を見ようとしないう。
身体中から嫌な汗が吹き出るのがわかる。

『……は、はは。何を怖がっているんだ？窓の向こうにあるのは純夏の家だろ？あるのは、破壊されて放棄された撃震なんかじゃない、』

未だに後ろを向くのを拒絶する身体を、無理矢理後ろに……

「うそ……だろ？　アレは…夢じゃなかったのかよ!？」

…向かせると、目の前にあるのは純夏の家を押し潰している撃震だった…。

深呼吸を何度も繰り返して、混乱していた頭は落ち着いた。

…あれは、夢じゃなかった。今は、それがわかったただけ良しとしよう。身体をよく調べたら、しっかりと鍛えられたものだった。これなら、最初みたいみんなに迷惑をかけなくて済む。

「…一先ず、横浜基地に行こう。それで、夕呼先生に掛け合つて…そうだ、ゲームガイも持っていけば何かに役立つし、最悪拘束されても短くなるかも!」

鞆にゲームガイを突っ込むと、制服に着替えて家から出る。

瓦礫だらけの町…。回りを見回しても、建物の原型を留めているものはごく僅かだ。

ぶらぶらと破壊された町を歩きながら、今後の方針を考える。

まず、オルタネイティブ4は成功させないといけない。5は発動したら最後、地球はG弾とBETAで滅亡するだけだ。あんな事態だけは回避しないと！

そして、次は純夏のこと。前の世界にもいなかったアイツは、

この世界にもいないのだろうか？夕呼先生は存在しないと言ったけど、何か怪しいんだよね…

そうこうしている内に、桜並木がある坂に差し掛かっていた。見上げれば、巨大なリーダーがワインワインと回っている。

一度息を吸うと、坂を歩き始める。坂を登りきると、案の定二人の伍長が立っている。こっちに気がついたのか、片手を上げながら笑いかけてきた。

「よう、こんな何もない所を外出してたのか？物好きな奴だな」

「はは。ここは故郷何ですよ。ギリギリ家も形だけは残ってたから、見に行ってたんだ」

「…そうか、悪かったな。…っと、外出許可証を出してくれ。それがないと中には入れんぞ」

「それなんで」田村伍長、ハワード伍長。その人がさっき言ってた人です」…すが？……誰？」

俺の言葉を遮ったのは、警備兵の詰所から出てきた青年だった。ちよつと延び気味な黒髪に、俺とそんなに違いがない身長、どこかほわ〜んとしている顔……こんなヤツ、横浜基地に…いや、前の世界でも居なかった！！

『…どういう事だ！？こんなヤツ、前の世界には居なかったぞ！？』

こっちの混乱を他所に、話はどんどん進んでいく。

「うん？コイツがそうなのか、宗一？」

「はい。はじめまして、白銀‘特務大尉’。僕は矢羽田宗一、階級は大尉です。呼ぶときは宗一でいいですよ。その代わり僕も名前で呼びますね。…さて、香月博…副司令の指示で武の迎えに参り

ました。さ、副司令がお待ちしてますよ」

「「と、特務大尉いゝ！？し、しし失礼しました！！」

慌てて敬礼をしてくる伍長達に、条件反射というか体が勝手に敬礼をしてしまう。こっちが降ろすと、伍長達も遅れて戻した。

「武、急いでください。今あの人すつごく機嫌が悪いんです。急がないと解剖されますよ？」

「うげっ！！確かにあの人ならやりかねん……って、待つてくれーッ！！」

全く、何者なんだコイツ！？

横浜基地地下19階にある夕呼の執務室。今ここで、武は前の世界とは違いすぎる現状と夕呼の態度に混乱していた。

「ふう〜ん、アンタがシロガネタケルね？」

「っ！？先生、俺のこと知って……！？」

「違う違う、アンタの後ろに立ってるヤツから聞いたのよ。この世界を何度も経験した記憶を持つ……ってね」

「白銀さん、僕はあなたと同じような存在です。僕の居た世界には、BETAなんて生物はいませんし、戦術機何て物は存在しない平和な世界でしたよ」

「なあに嘘言つてんのよ。MS（あんな兵器）があるのにどこ

が平和なのかしら？」 「ぐっ……。ま、まあ、それは置いといて

！……僕も因果導体みたいなもので、同じ存在のあなたのことがわかったんです。後、僕はこの世界に来たのは初めてです。色々と情報を香月博士に渡して下さい。じゃないと訓練校に押し込みますよ？」

あの目、ふざけてるけど本気の目だ！慌てて、俺が知っている未来の出来事を語っていく。BETAの九州上陸、火山の噴火、そして……オルタネイティブ4の失敗。

4の失敗を喋った途端、掴み掛かれると思ってたけど、深いため息をつかれるだけで終わったのが気味悪かったな……。

「……なるほど。それで白銀、アンタの目的は何？」

「はい……。オルタネイティブ4の成功と5の阻止、そして人類の勝利……これだけです」

「そう。なら、一つテストをするわ。矢羽田から訓練校に入れる必要は無いって聞いてるけど、自分の目で確かめないと気が済まないのよ」

「……わかりました」

夕呼の考えるテストに、嫌な予感を拭えない武であったが、ここは覚悟を決めるのであった。

side 宗一

『……やっぱ、今はこれしか思っていないか……』

武がここに来るまでの間、宗一は出来る限りの事をしていたのだ。

戸籍の偽装、城内省のデータをハッキング、伍長達への説明…。理論が間違っている事を指摘したのも僕だ。（お陰で首絞められて死にかけたけど）

ひとまず、武を訓練校に入れるかどうかは巖谷中佐が作ってくださった‘アレ’に合格できるかにかかってるな…。

「…羽田、矢羽田！ボンヤリしてないでさっさと白銀を格納庫まで連れていきなさい！」

「は、はい！わかりました！！」

ふう…。ま、武の力を信じるしかないか……頑張ってくれ。

） side out ）

執務室から外に出ると、二人の少女が扉の前で待っていた。霞とミスリルだ。

「あれ？二人ともどうしたの？今日は部屋で遊んでる筈じゃ…」
「……………あの、私が我が儘を言って…」

「話しに聞いていた白銀さんの事、気になって仕方なかったみたいですよ」

「ミ、ミスリルさん……恥ずか……しいです」

顔を赤くして恥ずかしがる霞を見て、宗一とミスリルは顔を綻ばせる。が、武は目を大きく開いて驚いていた。自分が最後に見た以上に、霞が表情豊かになっていたからだ。

「……………あなたが……白銀さん……ですか？……………社霞……です」

「あ、ああ。俺が白銀武だ。よろしくな、霞」

「……………はい」

ここに来て、武は驚いてばかりだった。余りに違いすぎる現状。多分、これは宗一が原因だ。唯一前の世界に居なかったイレギュラー……………コイツのせいで、最悪俺の言った事が全部無駄に……………

「……………白銀さん……宗一さんは……そんな人では……ありません。

……………だから……そんな風に思わないで下さい……………」

「っ！……………そっか。そうだな。ごめん宗一！俺、お前の事邪魔なヤツだっと思ってた……本当にごめん！！」

「いいよ。僕は気にしてないし、そう思われても仕方ない……………っと、着いた着いた。おい、親っさん！例の新型のテストパイロット連れてきたけど、準備大丈夫！？」

「おうよ！！ばっちしだぞ坊主！！」

話に夢中で、格納庫に向かっているのに気づかなかった……。見ると、青い保護シートに包まれている機体が一機、固定ベッドに入っている。

「あのさ、宗一。テストってまさか……………」

「そ。武の知ってるバルジャーノンに限りなく近い戦術機……そのの先行試作量産機さ。今から武にはそののシミュレーターに乗っ

て貰つよ」

） シミュレータ室 ）

「……………」

「どう、武。‘草薙’の感想は？」

「……………」

「な、何か言つて、マジで……」

ガシッ！！

「何だよあの機体！！スゲー機動性じゃんか！！」

「や、やめい！気持ち悪いから揺らさないで……！！」

武の様子を見る限り、巖谷中佐と篁中尉達、それに涼子達は依頼通り良い物を造ってくれたみたいだ。

日本の第三世代戦術機‘不知火’。この機体は、量産機にしては高スペックな機体であり、世界で初の第三世代量産機でもある……が、そんな不知火には、かなり大きな欠点がある。

不知火は、量産機にはある程度残されている拡張性を犠牲にして、この性能を得ているのだ。

拡張性が少ない……。これは発展も改修も見込めないことを指している。実質開発から十一年も経っているのに、改修されたのは壱

型丙ぐらいのものだ。

宗一は逆に、‘可能な限り拡張性を犠牲にする’という点に目を付けた。『ダガー系の機体を不知火の様にしたらどうなるか…』と。実際、原作にもバスターダガーをはじめ数々の特化機体が存在している。

結果、帝国技術廠は帝都防衛用戦術機として新たに三機の第三世代機を開発できた。

まず、ダガー系の集大成ともいわれている‘ウインダム’を元に、その格闘性能を極限まで高めた‘草薙’（くさなぎ）。今武が乗っていたのがこれだ。

肩のシオルダーを改造して、そこに固定式の突撃砲を二丁、予備弾層も二個にサブアームもリロード用に取り付けられるようにした。主兵装はソードストライカーのシュベルトゲベルを改造して、もう少しコンパクトにして振り切ったときの硬直を少なくすることに成功した試製99式近中戦闘用長刀が二本。

元々シュベルトゲベルは、射撃もできるよう設計をされていた対艦刀であり、原作では未完成だったそれをユーコン基地のメンバーが完成させた物がこれだ。

短刀は全て量産体勢に入ったロムテクニカになり、これはハイペリオン同様腕から射出することで装備することができる。左右に一本ずつの計二本が標準装備だ。

次に、‘ヴェルデダガー’を元に造られた砲撃・後方支援用の‘八尺瓊’（やさかに）。

はつきり言って、この機体は日本向けの機体ではない。（篁中尉談）

両肩にはALMも撃てる八連装ミサイルランチャーに、ザスタバ・ステイグマトを砲撃用に威力、射程距離を延長させたビームガトリングが二門、腰にはC・Eのレールガンを参考に銃身と冷却機

構を改善した99式電磁投射砲が二門ずつの計四門。バックパックは超大容量バッテリーと電磁投射砲の120mm砲弾の弾が詰め込まれている。

両腕には海神と同じ仕込み型の36mmと120mm、頭部に味方が戦車級に取り付かれた時用の12.7mm機関砲二門と、格闘性能を犠牲にした完全な砲撃戦術機となった。

そして三機目、偵察・電子機器を強化した戦術機、
「八咫鏡」
(やたのがみ)。

武装は頭部にある36mmチェーンガンとロムテクニカ、通常短刀がそれぞれ二本ずつと少ないが、熱紋、音源の各種高性能センサーにバンカーバスターを利用した打ち込み式のセンサーを持っている。特にバンカーバスターは使い所が多い。ハイヴ内では壁に撃ち込んで通信の中継ができるし、センサーを撃ち込めばBETAの地下進行すら事前に察知できる。

因みに余談だけど、試しに一発撃ち込んだら本州まで伸びてるスタブが映って大騒ぎになったんだよね…。他にも数発撃ってそれが本当だとわかると帝国が埋めるためにS-11や地雷を使おうとしたんだけど、香月博士の提案で天王山の溶岩を使ったのは以外だった。…まあそのせいでおばあさんはもっと早く立ち退くことになったっただけだね……。

「……い、おい！！いい加減戻ってこい！！」

ドガッ！！

「痛ッ！？」

「……で、テストはどうだったんだよ！？」

「……あ、ああ。ごめんごめん。合格だよ。逆に充分すぎ」

「よっしゃー!!」

「じゃあ、武には207Bの戦術機教官とキャンセル・コンボが使えるOS、XM3の開発責任者になってもらうよ。香月博士の許可は取ってあるから頑張って!」

「……………」

「……………(ニコニコ)」

「……………マジ? と言うか待て! 何でキャンセルとコンボ知ってるんだ!？」

「僕の世界にもあったからだよ。バルジャーノンじゃないけどね。戦術機教官の方は、武にとってもメリットはあるよ。あの五人と絆ができる」

宗一の言葉にハツとする。そうか、その為に…。

「…ありがとな、宗一」

「気にしないで良いよ。じゃあ霞、武を部屋までよろしくね」

「……………はい。わかりました」

「武、僕は親っさん達と草薙の事で話があるからここで。部屋に制服が用意してあるから後で神宮寺軍曹に挨拶しといてね」

「おう! またな、宗一!」

そう言い残し、武は霞と共に地下四階へ向かっていった。

トータルイクリップス編 第一話（前書き）

決定しました!!

ひとまずオリキャラ設定は無くなりそうです。ですが、もし自分に余裕ができたら書くかも……という感じですが、TE編第一話、どうぞ!!

トータルイクリプス編 第一話

） アラスカ・ユーコン基地 ）

未だBETAの侵略を受けていないアメリカ大陸は、緑豊かな自然を多く残している。

日本では御目にかかれぬ貴重な光景を、宗一は一人大型の輸送機の中から眺めていた。

「うつわ、スツゴい景色…。 お、ユーコン基地はあれかな？」

何故宗一がアラスカにいるのか…。 それは、宗一が〇一シリーズの開発者となっていたからだ。そして、もう一つ理由がある。

「三種の神器シリーズの低コスト化と不知火式型の完成…。 課題は多いな」

宗一は次第に大きくなっていくユーコン基地を眺めながら、ここに来る前の事を思い出していた。

） 日本帝国・帝都 帝国国防省 第六会議室 ）

宗一達と悠陽のお茶会から数時間後。宗一はまたしても悠陽に

拉致され帝国軍国防省の第六会議室に連れ込まれていた。

そこには帝国軍のお偉方（高級将校）は勿論、各兵器開発メーカーの重役、技術士官…見知った顔では巖谷中佐がいた。こちらに気付いた中佐に軽く頭を下げ、隣に座っている、悠陽に小声で話しかけた。

「で、殿下？何故僕がこの場に…？」

「それは今から説明いたしますわ。…始めました」

「ではこれより、三種の神器シリーズと〇一式シリーズ、94式戦術機不知火の改修案、99式電磁投射砲について会議を始めます」

進行役と思われる軍人が立ち上がりそう告げると、さっきまでざわざわと会議室を満たしていたざわめきは消え、静寂が包み込んだ。

「ではまず、帝国斯衛軍の矢羽田大尉が開発した天叢雲、八咫鏡、八尺瓊の三機は、先の甲21号作戦において絶大な戦果を上げた…なのですが、問題があります。コストの問題です」

そう言つて手元の機械を操作する進行役さん……………つてちよつと待てえ！！

「殿下！？何で僕が斯衛軍に…？」

「勿論、天叢雲を開発したからですわ。開発者が他国の軍人だとは示しがつきませんので…。あら？既に香月博士には許可を頂いていたのですが…ご存知無かったのですか？」

あ、あの引きこもりマッドが…！しばらくは合成物で我慢して

もらおう…。

と、宗一が復讐を考えている間にも会議は進んでいた。

「現在三菱重工を始めとした各企業で量産を開始…してはいるのですが、〇一式シリーズの配備のため想定以上のコストがかかりました」

「ですから、今の我が国では量産をしようにも出来ない、という事です」

司会の言葉を引き継ぐように放たれた巖谷中佐の言葉に、会議室内にざわめきが起こる。

「それに加え、アメリカが〇一式の接收に動いている、と香月博士から情報が入りました」

更に悠陽の一言が放たれると、会議室の至る所から「アメリカが!？」とか「またか!?!いい加減にしろ!」等さつきと比べ物にならないほど会議室が荒れた。

「静粛に!…ここで、以前三種の神器シリーズを開発する前にあった不知火の改修案…不知火弐型が出てくるのです」

そしてスクリーンはハイヴ内の戦闘シーンを映し始めた。

side 唯衣

不知火壱型乙。これは壱型丙に三種の神器シリーズのパーツを流用して造った機体だ。

無理矢理バランスを調整した壱型丙に比べ、格段に操縦性、機動力は良くなっている。

「第一小隊、前方の要撃級を叩け！第二小隊は第一小隊の援護
！」

「了解！！！！」

唯衣が隊長を努めるホワイト・フング部隊は、その不知火壱型乙のテストを行っていた。〇一式のビームが要撃級を腕ごと蒸発させ、長刀のビームサーベルが何の抵抗もなくBETAを切り裂いていく。順調にハイヴを攻略していく。ように見えたが、そうはならなかった。

「ッ！？こちら三番機、機体に異常発生！戦闘不能です！！」

「私もです、篁中尉！！脚部が…」

「クソッ！！またなのか！？」

突撃前衛で構成された第一小隊の二機が、機体トラブルで動けなくなってしまったのだ。一番動きが激しいポジションが災いし、機体の稼働限界を迎えてしまったのだろう。

そして、前衛部隊を失ったホワイト・フング部隊はジリジリと後退を余儀なくされ、その途中で機体は稼働限界に達し撃破されたのだった。

side out

「これはゆ…ゴホン！帝国斯衛軍、ホワイト・ファング、部隊の訓練映像です。そして、今の映像を見た通り、我が国では不知火の改修は不可能でした」

会議室は三度ざわめきが溢れた。

「不知火壱型乙は、アメリカ製のパーツを使用する筈だった箇所に三種の神器シリーズのパーツを流用して造られたのですが…結果はこの通りです」

再び壱型乙が戦闘不能になる場面を再生させる。

「原因は、型の合わないパーツを無理矢理合わせたため、機体の磨耗を早めてしまったのが原因であります」

「そして今回、アメリカの要求をかわすためにもXFJ計画は最適だと、こちらの矢羽田大尉は判断されたのです」

突如話を降られた宗一は、少し戸惑いながらも立ち上がった。

「…矢羽田大尉、何故XFJ計画が最適だと？」

「え、XFJ計画は不知火を外国製パーツを使って改修する計画でした。そしてそれは、国連主体のプロミネンス計画に便乗するものでした。…あの、ユーコン基地とプロミネンス計画の資料ありますか？」

「あります。少々お待ちを…」

あるんだ！ と驚きながらも、スクリーンに映像が映ると説

明を再開した。

「プロミネンス計画は各国が共同で戦術機の開発を行う素晴らしい計画です。ソ連、中華統一戦線、イギリス等、最前線の国が多数参加し、ある程度の成果を挙げています。そして、ユーコン基地では基本技術の出し惜しみは無し。つまり……」

「そこ（ユーコン基地）で公表し、同時に提供を始めればアメリカは手を出せない……！」

「ええ。アメリカに貸しを作るのは出来なくなりますが、提供しても香月博士にブラックボックス化をお願いするので問題ない筈です」

最後の部分で、会議室いた人の怒りが霧散するのを感じた。中には笑っている人も……って、巖谷中佐あなたもですか。

「……とまあ、こんな感じです。不知火式型も完成でき、アメリカにも一矢報いることができる、まさに良い計画ではないでしょうか？」

勿論、XFJ計画に反対する者は一人も出ず、篁中尉のユーコン基地行きが決定した。

ついでに僕も……。何でああ……！！

「はあ………」

長い回想が終わると、輸送機は既にユーコン基地に着陸していた。それに気づくと直ぐに座席から立ち上がり、外に出る。

アラスカの肌寒い風が少し厳しいけど、まだ許容範囲内だ。持ってきた防寒具を着こんで輸送機の後ろに回ると、六機の機体をトレーラーが運搬し始めるところだった。

周りを見れば、既に沢山の人垣ができていた。まだ保護力バーが外されていないから機体は見えないけど、中身は三種の神器シリーズと僕の機体：ハイペリオン、それに不知火壱型丙と乙だ。

念には念を…という事で、涼子達と殿下に押し付けられたのだ。

「…ま、TEは全然知らないけどがんばりますか…！」

一人、日本から遠く離れた異国の地で宗一は決意を新たに…

「大尉、すみませ〜ん！搬出の邪魔なんで退いてもらえますか〜！？」

「あ、ごめんなさい…！」

……多少不安だが大丈夫だろう。うん！

トータルイクリプス編 第一話（後書き）

唯衣姫はまだ日本です。宗一より二、三日遅れで現地入り、そしてユウヤはもうちょっと後です。

次回更新は…… かなりかかるかもです。せめて小説は揃えたいのですが店舗注文で時間が……（――；

トータル・イクリプス編 第二話（前書き）

まだまだ本編には入りませんがお付き合いお願いします！

トータル・イクリプス編 第二話

） ユーコン基地 基地指令室 ）

「日本帝国斯衛軍所属、並びに国連太平洋方面第十一軍仙台基地所属の矢羽田宗一であります！」

「長旅ご苦労、大尉。楽にしてくれ」

輸送機から追い出されて数分。直ぐに案内の兵士に連れられて基地の統合司令部まで通された。で、今日の前にいる御方は…

「遠路はるばるご苦労だったな、大尉。私が『プロミネンス計画』を預かるクラウス・ハルトウィック大佐だ。…貴国の切迫した状況は聞き及んでいる。独力での戦術機開発がいに困難なことかはりかいしているつもりだ。極東の要衝たる日本の防衛に貢献できるのであれば、尽力は惜しまんよ。何かあれば、言ってくれたまえ」

「ありがとうございます！ですが、それはX F J計画の責任者に言っ上げてください。自分は単なる先発隊に過ぎませんから」

あはは、と苦笑する宗一にハルトウィック大佐は目を見開いて驚いている。あの〇一式…光学兵器の開発者となっている人物が責任者では無かったことに驚いているようだ。

「…自分は主に新型の方を担当していて、不知火の改修は以前から担当者がいただけです」

「ッ！…そうか。すまなかったな。だが、今の言葉に嘘はない。ここにいる者にとって、守るべき国が残されているということは大きな意味があるのだよ」

大佐の表情に影が入る。大佐の名前はドイツ系…ドイツは今、BETAの占領地だ。日本は甲21号作戦で国内のハイヴを駆逐してきたが、未だに多くの国がそうなのだ。

アメリカ対策の為にプロミネンス計画を利用したが、宗一はこの世界の人類の状況を甘く見ていたのかもしれない。

現に、こうして目の前にBETAに苦しめられている人がいるのだ。

…いや、ハルトウィック言う通り、この基地にいる全ての人がそうなのだ。

そう自覚すると、宗一の手には自然と力が入る。宗一は、この計画をアメリカとか関係なしに成功させる、と決意し、ハルトウィックの言葉を胸に刻むのだった。

「お気になさらないで下さい、大佐。自分も大佐のお陰で、学ばべき事、やるべき事を思い直すことができました。…ハイヴが無くなったせいで、浮かれていた自分が恥ずかしい限りです…」

「…そうか。大尉にそう思ってもらえたなら、話した甲斐はあったな」

そう言いニヒルに笑う大佐。意外な大佐の茶目っ気に、宗一はハルトウィックに好感を抱くのだった。

「ではハルトウィック大佐、自分はこれで失礼します。機体の調子も見ないといけませんし、〇一式の資料の最終チェックをしないといけませんから」

「そうか。がんばってくれよ、大尉。その資料が、人類を救う

ことに繋がるのだからな。……そうそう、確か今はアルゴス試験小隊の四名が実機演習中だったな……」

「アルゴス試験小隊？」

退出する寸前、ハルトウィックがそう呟いた。その言葉に宗一は反応し、再び部屋に戻る。

「ああ。アルゴスはXFJ計画の開発チームとして選ばれた小隊だ。丁度彼らはF-15（イーグル）の強化プランである『フェニックス構想』で成果を上げている」

アクティブ・イーグル
「F-15ACTV……」

「……ほう、耳が早いな」

「いえ、整備士達が言っていたのを小耳に挟んだんですよ。……それで、自分をどうしたいのですか、大佐？」

「なに。彼らも叩き上げの猛者揃い。XFJ計画の前任者として、興味はないかね？」

この時のハルトウィック大佐の笑顔は非常に黒かったと言っておいつ。

） 第二演習場 ）

様々なビルが乱立する都市型演習場。そこでは、四機の戦術機がペイント弾を使った模擬戦闘――CASE47――を行っていた。

『ハハッ！VG、それだと只の的だぜ！？』

『のわっ！？テメエ…』アクティブ A C T Vだからって調子に乗りやがって…！』

そこには二機の F - 1 5 E ストライク・イーグル - - いや、一機は微妙に違う - - が対峙していた。

追い込まれているのは通常のストライク・イーグルで、肩に大型のスラスターを増設した改修機が突撃砲を撃ちながら第三世代機を凌ぐ三次元機動を発揮し、段々とストライク・イーグルを追い詰めていた。

『これで…！！』

ズダン！！

『うっ…！』

一気にスラスターを噴かし、圧倒的な加速力でイーグルの機動を上回り、背後から 1 2 0 m 砲弾を胸部に撃ち込んだ。弾が当たりペイントが機体を染めると、ストライク・イーグルはその動きを停止させた。

『アルゴス 3、コックピットブロックに致命的損傷、大破。状況終了。タリサ、お疲れさま』

『へっ！これで昼は奢りだぜ、V G？』

『くっそおお！！負けた！！』

『ま、貴様が変な条件を出したからだな。自業自得だ』

模擬戦が終わると、演習場の外れから一機のストライク・イーグルとアクティブ・イーグルが模擬戦をしていた二人 - - タリサ・マナンドル少尉とヴァリエラ・ジオコーザ少尉 - - の元に着陸した。

『さてお前ら、お客さんだ。さつきCPから通信で模擬戦の申請があった。相手は日本帝国…噂の第四世代機だ』

『『『!!!(ひゅーう)』』』

この小隊を預かるイブラヒム・ドゥール中尉の一言に、三人とも驚きを隠せないでいた。

最新の装甲技術を使い、軽量化と耐久性の向上に成功した重装備の動く武器庫。

近接武器は突撃級の甲羅をも切り裂く近接戦に特化させた機体。BETAの早期発見を目的とした偵察用の支援機。

甲21号作戦を生き残った衛士の噂だけでも三機確認されているのだ。そして、一番の噂となっている四機目…。

たった一機で何千体ものBETAを焼き払った、光の膜に包まれた二対の角とカメラアイ、大筒を背負った機体…。

この機体に関しては、甲22号横浜ハイヴ防衛戦の生き残りで、タリサの友人であるアリスから聞いたのだ。ちなみにあの四人も別の試験小隊としてここに参加している。

『お客さんはあと少しで到着する。弾薬は持ってきてあるから、各自補給をしておけ!』

『『了解!!』』』

『あと、エレメントは俺、マナダル少尉。ジアコーザ少尉、ブルームル少尉だ。わかったな?』

そして数分後、アルゴス試験小隊の前に宗一の駆る機体が降り立った。

トータル・イクリプス編 第二話（後書き）

緊急アンケート!!

お気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、宗一がアルゴス小隊と戦う際の機体を募集したいと思います。

機体はハイペリオン、天叢雲、八咫鏡、八尺瓊の四機です！

戦闘にも何かリクエストがあれば感想にお願いします！

もしかしたら？的なお話第二弾（オルタネイティブ編第二話）（前書き）

以前の続きです。短いですがどうぞ！

もしかしたら？的なお話第二弾（オルタネイティブ編第二話）

） 格納庫 ）

武達が立ち去って少し。宗一は草薙の前に戻って来ていた。もちろんミスリルも一緒だ。

と、そこにさっき宗一が親っさんと呼んだ整備班長が近づいてきた。

「あ、親っさん。どうですか草薙は？」

「なあ坊主、いい加減親っさんは止める。…そうだな、はっきり言って組み立てんのに二日はかかるな」

「…そうですね。まあ、そこはがんばってもらうということで。よろしくお願いします」

「…フン、一緒前に言うようになりやがて…。まあ、涼子ちゃん達が完成させた機体だ。きっちり動くようにしてやるよ。おいお前ら！今からコイツを仕上げるぞ！！ヴァルキリーズの奴らも回せ！！」

「…「ういーいーっす！！！！」」

親っさんの号令で、格納庫にいた整備員の半分が草薙の作業に取りかかり始めた。

「…艦長、この機体はウィングダムを基にしたからこそすぐに完成した機体。量産体制が整うのには一月はかかります」

「…わかってる。今になって思うけどもう少し機体をもらっておけば…って思ったけど、それは大丈夫だよ。C・Eの技術は香月博士が再現してくれたし、ビーム兵器も出回り始めてる。後は武のXM3さえ完成すれば、生存率は比べ物にならないくらい上がる」

「…C・EのOSだと、香月博士の演算装置ですら容量不足で

再現ができませんでしたからね」

「ま、キャンセルだけできるようにしたX M 2があるから、X M 3はすぐに完成するさ」

「そうだと、いいですね…」

格納庫には、夕食までその様子を眺めるミスリルと宗一の姿があった。

武は部屋に置いてあった国連軍士官の制服に着替えると、霞の案内でまりもの部屋へと向かっていた。

一人で行けると武は言ったのだが、霞が譲らず案内をしたのだ。

そんな霞の行動を微笑ましく思っていると、何時の間にかまりもの部屋の前に来ていた。ひとまず深呼吸して…と、よし！

コンコン

「失礼します。本日付で横浜基地に配属された白銀武大尉です。

よろしく願います！」

「こちらこそ。お話は副指令と矢羽田大尉から伺っていただきましたが……本当に矢羽田より若いのね…」

「あ、あの…軍曹？」

「し、失礼しました！ では大尉、これが今いる207B訓練小隊のデータです。どうぞ」

「ありがとう。……なあ軍曹、一つ提案なんだが、いいか？」

「…何でしょうか？」

武の提案、と言う言葉を聞いて、夕呼によって鍛えられたまりもの危機察知能力が警鐘を鳴らす。…また禄でもないことに巻き込まれそうな…。

「実はさ、軍曹って俺が教わった教官にそっくりなんだよ。だから敬語を使われるのも、こっちが上官口調で話すのに違和感が取れなくて、できればこの訓練生みたいに接して欲しいんだが…」

「は！？ い、いや、無理ですよ！？上官に対してそんな…」

「歳も軍曹の方が上なんだし…ダメか？」

「うつ！？」

武の恋愛原子核の成せる技か、武のどこか子供っぽい所に何故か断ることができないまりも。暫くうっう唸っていたが、やがて肩をがくつと降ろすと、

「…わかりまし…いや、わかった。ではこれから大尉のことは白銀と呼ぶが、構わないな？」

「はい！よろしくお願いしますまりもちゃん！！……あつ」

「……まりも…ちゃん？」

「す、すみません神宮司軍曹！つい…」

「つい、って…」

「お、俺って人にあだ名付けるのが趣味なんですよ！だから資料見たときにこう、ピン！ときたんです。因みに夕呼先生は爆笑しながら許可くれました」

「ゆ、夕呼……！！！」

「……神宮司軍曹、香月博士から、『副指令命令だからあきらめなさい、まりも』と伝言を預かっていました」

「……ごめん白銀、ちよつと席を外すわ。資料は夕食までに目を通しておいてね。訓練内容に関してはPXで話し合いますよ…」

「は、はい！わかりました！！」

まりももから漂う負のオーラに、霞はビクリして武にしがみついでしまう。とうの武も冷や汗を滝のように流しているが…。

こうして、武とまりもの邂逅は無事？に終わったのだった。

グラウンドにでた武は、そこで懐かしい面々と再開することになった。そう、冥夜達だ。彼女達は今、まりもが夕呼の所に行く前に指示したマラソンをしていたのだ。全員息が上がっている。

「はぁ…はぁ…小隊集合！」

走り終わったのか、少しの休憩の後、委員長…千鶴が全員を集めていた。…丁度いいタイミングか、と思った武は、ゆっくりと四人に向かって歩き出した。

もしかしたら？的なお話第二弾（オルタネイティブ編第二話）（後書き）

前話のアンケートはまだ続いていますので、これとこれの戦闘が見たい、という方は遠慮なくいつてください。期待に添えるようがんばります！

因みに今は

ハイペリオン 1

八咫鏡（支援用第四世代機） 1

不知火 1

となっております。

トータル・イクリプス編第三話（前書き）

お待たせしました！！アンケート結果は活動報告と変わらなかった
ので、この二機にします！！

まずは一番投票が多かったこの機体：ハイペリオン！！
ブラスターは装備してないノーマルです。擬装装甲も着ける予定です。

そして悩みに悩んだ同一票のこの機体……八咫鏡！！

不知火に関しては、機体を持ってきたので短編でひっそり書くか
もしれません。

あと、八咫鏡にはA H（対人）戦装備で新兵装を出します。こつこつ
期待！！

それでは長らくお待たせしましたが、アルゴス小隊対宗一の第一回
戦、どうぞ！！

トータル・イクリプス編第三話

ユークン基地 テストサイト18 第二演習区画 E

- 102 演習場 -

アルゴス試験小隊の四人の前にやって来たのは、一機の見慣れない戦術機。恐らくこれが噂の第四世代機なだろう。第四世代機は四機の手前で噴射跳躍をし、地面を派手に削りながら停止した。

『…なあVG、どう思う？あの盾付きのずんぐり鶏冠とんが』

『あー…何とも言えん。なあ、ステラ？』

『ええ。ただ、着地した時の機体の動きは熟練の物よ。油断なら無いわね』

『……こちらアルゴス1、貴官が矢羽田宗一大尉で間違いないですか？』

後ろでゴタゴタ言っている三人を無視し、イブラヒム・ドゥール中尉は八咫鏡へと通信を開いた。すぐに回線は繋がり、国連軍の強化装備を着た宗一が映し出された。

『はい。そうです。自分が日本帝国斯衛軍所属の矢羽田宗一です。今日はよろしく願います』

『はっ！了解いたしました！……所で大尉殿、報告では第四世代機でいらつしやると聞いたのですが、これが…？』

上官である宗一から丁寧な挨拶をされ、若干調子を崩されながらも全員が疑問に思っていた事を聞く。これを聞いた途端、後ろの三人は喋るのをやめ聞き耳を立てる。

『そうですよ。今乗ってる機体の名前はJGX-2八咫鏡…日

本の第四世代機の一つで、主に索的、通信、弾薬補給がメインの機体です。もちろん、〇一式も使えます」

『支援用……？いくら光学兵器のが使えるって言ったってなめて……！』

『まあ話はこれくらいにして、そろそろ始めましょう。後ろのお客さん達は待ちきれなさそうですから』

そう言うと、宗一は八咫鏡をアルゴス小隊が居る地点とは逆に位置する場所に噴射跳躍させた。

思わぬ機体の登場に、四人は甘く見られたと思い怒りを感じながらも闘志を燃やしていた。タリサは最もそれがわかりやすい。何故か？それは……

『……クッソオオ！！ナメやがって……！この勝負、絶対に勝つてやる……！』

全員が顔をしかめる程の声を上げていたからだった。

side 宗一

機体のテスト以来乗る機会が無かった八咫鏡は、慣れていないせいで若干動きがぎこちないものの戦闘には何の支障も無かった。

ここで、もう一度機体のチェックと装備を確認する。右手には〇一式支援突撃砲（バレルを長くして集弾率と命中率を上げたもの）、左手にはウィンドムの盾を改良した〇一式支援兵装盾。

これには、盾の裏側に装備されるミサイルを無くし、予備弾倉と索的用のパイルバンカー式多目的センサーを取り付けたのだ。因みに

センサーは盾の先端から撃ち込めるようになっていた。

後は胸部のトードスシュレッケン（36mm）にこの前遊びで造ったショットガンに対BETA用の地雷。最後のショットガンに関しては完全に遊びだから、製造費はもちろん開発費も全部自分持ち。もしかしたら採用されるかも、と思って開発会議で提案してただけど、使い処がイマイチ無いからボツられたのを諦められずに造っていたのだ。…と、そろそろかな？

『CPから全機。各小隊、準備はよろしいですか？』

『アルゴス1、問題ない』

『アルゴス2、何時でも行けるぜ！！』

『アルゴス3、準備万端。あ、後でお茶でも…』

『アルゴス4、何時でもどうぞ』

『ガーディアン1、こちらも準備よし！』

『了解。では、カウント共に模擬戦第一回戦を開始します。今回は矢羽田大尉の要望で二回行われます。二回とも、勝利条件は敵機の全撃破、または戦闘不能判定にすれば勝利となります。尚、本演習にはJIVEESを使用し、'実際と同じ'強度で判定されるよう改良された物を使いますので、一発撃たただけでは撃破となりませんのでご注意下さい。第一回戦はアルゴス1と2の第一班が担当となります。…では、カウントスタート！』

モニターにカウントが表示される。

唾を飲み込み、気持ちを落ち着かせた後画面を睨み、何時でも発進できるよう集中する。

3.....2.....1.....0！

『模擬演習、開始！！』

合図と共に、機体各所に設置されたスラスターを噴かし、全力加速。一気に第一班が居るであろう地点まで駆け抜ける。

と、その前にセンサーを撃ち込み、地雷を設置して罠を張る。まだ大分距離があるので、今のうちに仕掛けられるものは仕掛けておく……と、早速センサーに反応が来た。

「ほうほう、二機が左右に別れて来るみたいだな。一機が囷になつて挟み撃ちかな？ そうなるとこの機体だと不利。…なら、まとめて潰させてもらいますか！」

宗一は作戦を決めると、音を立てないよう素早く移動を開始した。

） side タリサ ）

『アルゴス2、奴は支援特化型だ。貴様お得意の接近戦で叩くぞ。俺は右から行く、貴様は反対側から移動して挟み撃ちにする！』

「了解！！ やつてやるぜ！！」

中尉の作戦は簡単なものだ。元々機動力、空戦能力の強化を施されたF-15・ACTVに、機動力に劣る支援機で相手をするのは自殺行為だ。近接戦特化型で来なかったことを後悔させてやるぜ！！

暫く進んで、一旦停止する。そして全センサーを使って索的をする。

「熱紋、振動、音響センサー共に反応なし…か。クソッ、隠れるのは上手いらし…！？音響センサーに反応！？アルゴス1、敵をみつけた…！」

『確認した！アルゴス2は奴の足止めをしろ！直ぐに向か…』

ザアアアアア ！！

突如、アルゴス1との通信が途切れた。今のは…

「通信…妨害…？まさか…！」

私は嫌な予感が頭をよぎると、今までの隠密行動をかなぐり捨ててアルゴス1の居る地点に向かった。

だが、タリサがアルゴス1がいた地点に向かう途中で本人とがち合ったのだ。

これにタリサは混乱し、急いで通信回線を開いた。

「中尉？！無事だったんですか…！」

『マナンドル少尉こそやられたかと思っ…！嵌められた！マナンドル少尉、全周囲警戒…！ここは…奴の狩り場だ…！』

アルゴス1の言葉を肯定するように、何十発ものペイント弾が二機目掛けて襲いかかってきた。もちろん、センサーは音響センサー以外何の反応もない。

「くッ!? 一体どこから…!」

すかさず近くのビル陰に滑り込み、弾幕を回避する。だが、弾幕は直ぐに止み、演習場を静寂が包み込んだ。

またしても反応がなくなり、一旦後退しようと脚部を下げた瞬間…

プシュ !!

足元に転がっていた筒に触れてしまい、筒からすさまじい勢いで白煙と金属片が吹き出した。

「しまった、ECMか!? 周りが…!」

『マナ…ダル…下…るんだ! 私…ひだ…で…を引き…る!』

ノイズが酷くて聞き取れなかったが、何とか中尉の指示通り別方向に逃げようと振り返った瞬間、グルカの戦士としてのカンが閃き、咄嗟に機体をジャンプさせた。

次の瞬間には、さっきまでACTVがいた所に大量のペイント弾と光弾が駆け抜けた。

その光景に冷や汗をかきながらもスモークから脱出し、すぐの下を見る。

すると、そこにはこちらに銃口を向ける八咫鏡の姿が…!

「 ッ…!」

反射的にフットペダルを蹴飛ばし、ACTVの進行方向を八咫鏡に合わせ、降下、接近する。ここで逃がしたら次が無いと判断したからだ。

「当たれエエ　　ッ!」

ペイント弾と共に発射された光弾の何発かが、機体を擦る。たったそれだけでもJIVESは反応し、動きが鈍くなる。だが、そんなことは無視しひたすら八咫鏡に接近戦をしかけようとするタリサのACTV。そしてついに、タリサのペイント弾が八咫鏡の突撃砲に命中し、弾幕が無くなった。

「もらったあ　　ッ!」

すぐに突撃砲を投棄し、脚部のナイフシーフから短刀を抜き放ち、更なる噴射跳躍で八咫鏡に迫る。

が、八咫鏡は一瞬迷うような仕草をしたが、すぐに機体全てのスラスターを噴かし、ホバリングで滑るように、そして一瞬でACTVの後ろを取った。

「しまっ　　ッ!」

やられる!　　そう思った時、唐突にヤツが逃げ出した。何故?と疑問が頭を過るが、すぐにその答えはわかった。

『少尉、ボヤボヤしている暇があるならさっさとヤツを叩くぞ
!』

「は、はい!」

イブラヒムの援護射撃があったからだ。上官の援護で一瞬、そう、ほんの一瞬だけ気が緩んだのだろう。振り向いてすぐに足元を確認しなかったなんて…

カチャ ピーーー！！

「『は！？』」

損傷を告げるアラート音と警告ランプが灯る。タリサもマナンダルも、一瞬何が起こったのかわからなかったのか混乱を極めていた。

『…アルゴス2、地雷により脚部消滅。並びにコックピットブロック被弾。致命的損傷と衛士死亡により大破と認定します』

CPの通信で再起動を果たしたタリサは、ゆっくりと今出した右足を退ける。そこには、見たことの無い形の機械が地面にへばり付いていた。

「……………んな」

タリサの喉から、普段は出ないような低い声が出され、それは歴戦の兵士であるイブラヒムに、一瞬とはいえ恐怖心を抱かせた程だった。

「んな結果で我慢できるかアアア ツー！！」

） タリサ side out ）

タリサの怒号が虚しく響くなか、宗一とイブラヒムとの演習は続いていた。

突撃砲を失った宗一は逃げる一方で、イブラヒムに押されている…ように見えていたが、実状は全く違っていた。

（弾が、掠りもしないだと！？）

そう、36mmも120mmも^{いっしょ}尽く宗一に回避され、気づけば残弾が少なくなっていたのだ。しかも…

（また誘われたか…！）

またしても、先程と同じような周囲が開けた場所に誘い込まれてしまったのだ。しかも、最悪なことに地面には地雷のオンパレードときている。恐らく小型種用の物だろうが、威力は大きいはずなので下手に動けない…。どうにか突破口を見つけなければ…！

その時だった。触ってもいない筈なのに、地雷が爆発したのだ。堪らず、‘まだ’爆発していないエリアの空中に逃げ、安全圏に着地。直ぐに移動しようとした直後

ガコッ！ ガシャン…！

銃口を押し付けられる音と、弾丸を装填する音が鳴り響いた。

『…対人戦は情報が命。挟み撃ちではなく、最初から^{エレメント}二機編隊

で来ていれば勝てたかもしれませんね』

ズダンッ！！！

『アルゴス1 コックピットブロック被弾。致命的損傷、大破判定！状況終了！』

ショットガンから放たれたペイント弾は、イブラヒムのACTVをたたら踏ませる程の衝撃を与え、撃墜。第一回戦は宗一の勝利となった。

『模擬演習の二回目は、今から三時間後に開始します。それまでにアルゴス小隊は補給、整備を整えてください』

CPからの通信を聞きながら、タリサは機体の中で肩を震わせていた。もちろん泣いているわけではなく、怒りのためだ。

「ナメやがって……！！アタシが一発も、しかも支援機ゴトキに当てられなかった……！！」

悔しそうに、ドガンとコンソールを叩く。ここまで荒れているのは、地雷にやられた事も原因の一つだろう。……いや、それ以上に一瞬の油断がこの結果を出したことが大きいのかもしれない。

「……この借りは、次で返す……！！」

タリサは、瞳に更なる闘志と怒りの炎を燃やし、機体の整備に

向かうのだった。

トータル・イクリプス編第三話（後書き）

ハイペリオン戦はもう暫くお待ちください。事前に書いておいた全機体分の簡易文が残っているので、そう長くはかからないかと…

トータル・イクリプス編第四話（前書き）

お待たせしました！時間がかかりましたが、アルゴス小隊戦の後半です。まだタリサ達の性格や口調がうまく再現できてませんが、そこはお許しを…。

では、どうぞ！

トータル・イクリプス編第四話

テストサイト18 第2演習区画 E-102 演習場

整備、補給が完了したタリサとイブラヒムのF-15・ACT
Vが演習場に到着し、VG達のF-15Eと合流した。整備兵の努
力の甲斐があつてか、ペイント弾の跡はもちろん機体は万全の状態
に戻されていた。

『……………』

タリサとイブラヒムに会話など一切無く、二人とも淡々と準備
を終わらせていく。

『…キレてんな、二人とも』

『そうね。余程悔しかったのね』

『…ジャコーザ少尉、ブルームル少尉。お喋りしてる暇がある
なら機体のチェックでもしておけ。私達の二の舞になりたくなけれ
ばな…』

イブラヒムは理性を残してはいるようだが、その裏には今にも
暴発しそうな程の怒りが言葉の節々から滲み出ており、二人は揃っ
て背筋を伸ばす。といってもステラは元々そうだったが。

『ヤバイ、マジでヤバイぞ!？』

『……………』

VGの焦った声に、ステラは無言で返すだけだった。

『CPからアルゴス小隊。全機所定の位置に配置完了。ガーデ
イアン1、準備はよろしいですか？』

『こちらガーデイアン1。何時でもどうぞ』

『了解。では、カウントと共に模擬戦を開始します』

一回戦同様、目の前に数字が現れ減っていく。

5
:4
:3
:2
:1
:0
!!

『第二回戦、開始!!』

side 宗一

フットペダルを蹴り、擬装装甲とウィングバインダーのスラスタ
ーを点火。一気に空へ舞い上がる。

度重なる強化と改修によって、この世界に来たときとは比べ物
にならないほど魔改造されたハイペリオンは、凄いの一言に尽きる。

まず、擬装装甲を装着しての完全な飛行。明星作戦でも、飛行
は短時間しか出来なかったのをここまで強化したのだ。マブラヴの
技術もバカにできないとはミスリルの言。

そろそろ危険だな、と判断した宗一は、スラスターを切り着地。
着地前に音響欺瞞筒をバラ撒くのを忘れない。

すぐに機体をビル影に隠し、八咫鏡には及ばないが、かなり高

性能な複合センサーで索的を開始する。

「…あっちも反応しない。前の試合でやり過ぎたから警戒してるのか」

ハイペリオンの複合センサーは、音響欺瞞筒があっても、敵味方の識別は無理だが発見は可能なのだ。…流石にECMまで使われたら不可能だが。

それにすら反応しないと、敵は完全に隠密行動に徹しているはずだ。こっちも、最初の飛行以外動いていない。

「仕方ない。こっちから動きますか!」

動き出してから、宗一は水月の戦闘狂が移ったとどんよりとするのだった。
バトルジャンキー

二回目の跳躍を終え、三回目に移った瞬間警報が鳴り響いた。演習場の北側から発光が二つ…すぐにアルミューレ・リュミエールをその方向へ向け展開する。

展開した直後、120mm砲弾と思われるペイント弾が二発、アルミューレ・リュミエールに当たり蒸発した。

すかさずカメラを最大望遠で起動し、音源と発光から大体の射撃位置を特定する。

「…居た!」

一瞬だが、F-15系統独特の肩の装甲が見えた。スラスターが付いていないからF-15Eだろう。

ビ　ッ！　　ビ　　ッ！

「ッ！！」

狙撃手に気を取られている内に、接近を許していたらしい。というよりこれは…！

「罨！？…流石はトップクラスの衛士、四人相手はキツイかな…！？」

宗一の言葉に答えるように、左右にあるビルからF-15EとF-15・ACTVが突撃砲を撃ちまくってくりながら躍り出てきた。すぐにアルミユール・リュミエールを張り、スラストターを噴かして緊急回避。‘ブルーフレームセカンド’を参考にした、肩のスラストターも噴かして右ヘスライドし、F-15Eに肉薄する。

それに気づいたF-15Eは、発煙筒を投げ煙幕を張ろうとした…が

「そんなモノ…効くと思うか…！」

右手のザスタバ・スティグマートをF-15E目掛けて撃ちながら、左腕のアルミユール・リュミエールを展開し発煙筒を切り裂いた。

F-15Eは切り裂かれたの発煙筒を見ても、諦めずに何個も投げつけてくる。

「ッ！しまった、センサーが…！！！」

流石に数が多すぎて捌ききれず、発煙筒が発火し辺り一面が見えなくなってしまった。

side out

『やっと掛かった!!』

アルゴス小隊の作戦は、タリサ達の教訓を活かした物だった。
一機での戦闘を無くし、必ず二機ないし三機でかかるようにしたのだ。

『アルゴス3からアルゴス1！奴の目は潰した、今から後退するぜ！』

『了解した。アルゴス3は作戦通りに後退しろ』

『了解！…にしてもタリサ、あれが四機目なのか？F-4の改修機を新型にしたんじゃないのか？角も目もねえしよ』

『…わかんない。けど、油断だけはすんなよVG。…それと』
『ん？』

『アイツは、アタシが必ず墜とす！！前の勝負の借り、倍にして返してやる!!』

VGは、なんだかんだ言ってタリサはタリサだと安心する。と、

『お、おい出なさった！行くぜタリサ！』

『おう!!』

二機は隠していた機体をわざと見えるように高度を上げ晒すと、

すぐに回避行動取りながら逃げ回る。

視界の端を何十発もの光弾が駆け抜けていくのを尻目に、V GのF - 15 Eは背装コンテナを起動し、36mmの弾幕を張る。そのお陰か光弾の数はずっと減り、その隙に一気に目的地までブーストダイブ噴射降下。

『よくやつた二人とも。さあ…狩りの時間だ!!』

イブラヒムから通信が入り開くと、そこには凶暴な笑みを浮かべた戦士の顔があった。

side 宗一

ブーストダイブ「噴射降下? 何でま……!?!」

宗一は一瞬、背筋に走る悪寒を感じると、肩のスラスターを起動させて方向を強制的に変更する。

無理な機動は機体を軋ませ、パイロットに多大なGをかける。が、その甲斐あって被害は最小限に抑えられた。

「クッ……! 主機を落としてセンサーを誤魔化したのか!?!」

撃たれた左肩のスラスターは沈黙し、左腕は大量のペイント弾で染まっている。まだ動くものの、今のままでは稼働域をかなり制限されてしまうだろう。

「ぐっ!?!」

今度は前の二機からの攻撃だ。右腕のアルミューレ・リュミエールを展開し防ぎ、後ろに現れた二機のイーグル達には左腕のザスタバ・ステイグマトで牽制する。が遂に、防ぎきれなかった砲弾が脚部のスラスターと跳躍ユニットに当たり、バランスを崩して地面に落ちてしまった。

姿勢制御はどうにか間に合い、無様な姿を晒すことは無かったが、勝敗は決してしまった。

『これで……アタシの勝ちだあああ!!』

ハイペリオン目掛け、短刀を構えこちらに向かってくるF-15・ACTVが目に入ったからだ。ご丁寧に禁止されているオープン回戦まで開くとは……。八咫鏡戦で天狗になっていた宗一は一瞬で意識を切り替えると、とあるスイッチをカバーごと叩き割った。

） side アルゴス小队 ）

『これで……アタシの勝ちだあああ!!』

タリサが短刀で突っ込んでいくのを見たアルゴス小队の全員は、この勝負はもらったと確信していた。次の光景を見るまでは。

ドゴン!!

『うわああああ!!』

『ッ！クッソ、何で俺なんだよ！？』

36mmで弾幕を張っても意味はなく、手も足も全く出ない状態だ。

アルミューレ・リュミエールのせいで良く見えないが、ハイペリオンが両手のザスタバ・ステイグマトを構えたように見えたVGはランダム回避を行う。が…

『ぐおッ！なんだよコイツは！？さっきより弾幕が厚いぞ！？』

ザスタバ・ステイグマトが二丁になり、しかも核エンジンからエネルギーが直接回された分、威力、連射性が上がっていたのだ。

しかも、擬装装甲というデッドウェイトが無くなったことで、機動力はF-15・ACTVはもちろん、武御雷以上。F-15Eなどすぐに後ろを取られ、撃墜判定を喰らってしまうのだった。

『ッ！？またF-15Eを…！』

次の標的はステラだった。すぐに狙撃地点から離れ逃げようとした…が、遅かった。

ズバアアアアア
！！

光の奔流としか思えないようなビームが、ステラのF-15Eを飲み込んだからだ。

もちろんLIVESの見せた虚像だから被害はなく、ステラ機は地面にゆっくりと着地すると動かなくなった。

『……………化け物』

いつも、彫刻のような無表情をしているステラの顔には、恐怖とも怒りとも取れる感情が出ていたのだった。

呆気なく二機を撃墜したハイペリオンは、こちらを挟み撃ちする機動を取る二機を睨み付ける。ゆつくりと両手を上げ、ザスタバ・ステイグマトをそれぞれ左右のF-15・ACTVに合わせロックする。

『んな攻撃、当たるかよ！』

二機は慌てること無く、ザスタバ・ステイグマトの銃口を見ながらビームを回避し、ハイペリオンとの距離を詰めていく。もうすでに、この二人は〇一式の攻略法を見つけたのだ。

宗一は二人の対応の早さに舌を巻く。が、久しぶりの対人戦で興奮したのか、一瞬だけ獰猛な笑みを浮かべるとザスタバ・ステイグマトの撃ち方を少しずつ変えていった。

ビームの不規則連射。これが意外にも曲者で、だんだんと二機の動きが制限される。突っ込みたくても、何時来るかわからないビームで撃墜されるから逃げるしかないのだ。

そして二機が横一直線に並んだ瞬間、ザスタバ・ステイグマトからロムテクニカが射出された。

『クツ…！避けきれん…！』

イブラヒムのF-15・ACTVは、ザスタバ・ステイグマトの弾幕で回避ができずに、ステイレットの噴射機構を取り入れたロムテクニカに貫かれて撃墜。一方タリサは、またしてもグルカ族の血が働いたのか、四基のブラッツ&ウィットニー114wbを噴かして、一瞬で弾幕をぐり抜けて、ロムテクニカも回避した。……その方向までもが計算されていたとは知らずに。

『…え？』

警報は未だに鳴り止まない。弾幕と隠し武器は避けたはずだ。そして、今はアイツの後ろを取った位置にいる。直後、タリサはロムテクニカ二丁とフォルファントリーの全力斉射を受けて撃墜されるのだった。

} side ??? }

アルゴス小隊と日本の最新鋭試作機との模擬戦が終わると、それを眺めていた各国の軍人は忙しく動き始めた。ある者は上層部に報告するため。ある者は自分の機体に走りシミュレーションを始めるため。

そんな中、一人の軍人が酷く歪な笑みを顔に張り付かせていた。

「…ふざ…けるな…！極東の猿ごときが、我が軍を越えるだ…！？」

力を入れすぎ、血の気が無くなり真っ白になった手を震わせながら、男は一足遅れで部屋を出ていくのだった。

外伝 その頃の横浜基地（前書き）

行き詰まってしまった…。

息抜きで書いた短い短編ですが、どうぞ。

外伝 その頃の横浜基地

） 横浜基地 P X ）

「えええ ツ！！もう天然物が無いの！？」

宗一がアラスカへ旅立ってから二週間。基地の隊員全員の食事を作っているPXでは、水月の悲鳴が響き渡っていた。

「だ〜から！無いものは無いんだよ！！宗一が置いてつてくれた食材は昨日ので最後！あの子が帰ってくるまで待ちな！はい、次！」

「ううう…。私のご飯…！」

「ま、まあまあ。元気出してよ水月。わたしのおかずあげるから…」

文句を言いながらも、しっかりと合成生姜焼き定食を受け取った水月は、遙に慰められながら席に向かう。といっても、遙自身も落胆の色を隠せていなかった。

それどころか、食堂にいる全員がどこか落ち込んでいる。

意外にも、宗一の天然食材の提供は士気を上げるのに一役買っていたのだ。アポーツできる物は多種多様。一度に転送できる量は限りがあるが、今では貴重な米、はてや緑茶やコーヒー等の嗜好品はあると無いとでは雲泥の差があったようだ。

「うう〜！遙、ありがとう！」

「気にしないでよ。私達、友達でしょ？」

一瞬、遙の背中に天使の羽を垣間見た水月は、涙を流しながら、唐揚げ定食、を摘まもつとする…まさにその時

「あ！水月と遙じゃない。一緒に食べましょー！」

憂鬱な空気が流れる食堂を突き抜ける明るい声。その発生源は、ガーディアンズが誇る特攻バ…もとい、突撃前衛長の牧野陽菜であった。

既に同じテーブルには、涼子、三咲はもちろんのこと、この前の総技演習でヴァルキリーズに入隊した新人も含め、A-01が勢揃いしていた。

「あれ？伊隅大尉まで？今日って何かありましたか？」

「いや、そんなものは無いぞ？ただ、最後の‘天然物’はみんなで食おう、という事になったな」

「なるほど、それで集まったと……って、ちよつと待つてください！！今最後の‘天然物’って言いませんでしたか！？おばちゃんはまだもう無いって……！」

「ん？おかしいな……。生姜焼き定食は私ので最後だったからか？（ブツブツ）」

良く見れば、テーブルにある定食は全部合成物じゃない。

まさか！と思いカウンターを見ると、喜んでいる者や悔し涙を流しているヤツが…

「…運が無かった、としか言えないわね。ほら、カツ丼のカツ、一口あげるから元気出して！」

「ううー！こうなったら、矢羽田が帰ってきたら美味しいモノ用意させてやるんだからー！！」

そう涙目で叫びながら、遙の唐揚げと涼子のカツでご飯を掻き込んでいく。

それを憐れに思いながら、隣に座ってきた遙にみちるは話しかける。

「そついえば涼宮、お前は生姜焼き定食が品切れなのを教えてやらなかったのか？」

「あ、あはは。気づいたら水月が注文した後で……」

「とか言いつつ、自分の唐揚げ定食が無くなるかもしれないから黙ってたりした、とか？」

「……………」

と、みちるの反対側に座っていたあきらが冗談を言う。

言われた途端笑顔で固まった遙に、一部始終を見ていたヴァルキリーズは恐怖するのだった。

「なにい！？もう合成定食しか残っていないのか！？」

またカウンターから大声が発せられた。聞き覚えのあるな、と思つて見れば、そこには沙霧尚哉が立ち尽くしていた。

（ああ、あの人もか……）

すると、隣に立っていた訓練生が優しげに尚哉の肩を叩いていた。みちる達が驚きで固まっているなか、更なる衝撃がヴァルキリーズを襲う。

「尚哉、落ち着いて。私の焼きそばあげるから」

「慧……」

なんと、カウンターの　　というか公衆の面前でイチヤつき始めたのだ。

すると、後ろからガタガタと席を立つ音が聞こえ、嫉妬という名の黒いオーラを纏いながら尚哉の後に立つ。

突然、ガシツ、と肩を掴まれた尚哉は驚き、振り返る。そこには、背中から死神を幻視させる部下達の姿が…

「大尉、少々込み入ったお話があるのでついてきてください」

「な！？春日、隅田、何を…！！」

「大尉を格納庫まで連こ…お連れしろ！あ、お嬢さん、少し大尉をかりますね」

「や、やめろお前達！私は慧と…！！」

次の瞬間、尚哉は何人もの帝国軍人に拘束され 何故か国連軍の服が混じっていたが 姿を消した。

暫くして、尚哉は顔中に擦り傷と痣をつけながらも食堂に戻ってきたが、そこに慧の姿はなく、嫉妬に燃える男達の目論みは成功するのだった。

こんな感じで、横浜基地は今日も平和なのであった。

「……………バカばっか、です」

外伝 その頃の横浜基地（後書き）

アイデア募集中です。何かあれば感想にお願いします！（涙）

トータル・イクリプス編

第五話

結構重要な改訂（前書き）

公布した武器の内容を変更しました。

） 格納庫 ）

模擬戦終了から三十分。八咫鏡は整備士^{ハロ}に任せて、宗一は擬装装甲を強制排除したハイペリオンのチェックに入っていた。

本来使ったつもりは無かった強制排除。一度も使ったことがなかったから、念入りに整備をしないといけない。：帰ったらミスリルのお小言が待っていていそいで、非常に憂鬱だ。

現実逃避も兼ね、モニターに映る数字やら数式やらを流し読む。

「あー、ラミネート装甲の一部が不調だ。爆発ボルトが原因かな？後で換装しないと…」

「おい、その整備兵！！」

「うおっ！？…誰、キミ？」

突然、すぐ隣から大声が聞こえたからひどく驚いてしまった。見ると、そこには小柄で褐色の肌に黒髪の少女と、前の娘とは正反対な白い肌、金色の透き通るような髪の少女の二人が立っていた。

「アンタ、さっきの演習で出撃^でたヤタ…ヤタノなんちゃらの整備兵だよな？ならその衛士、今何処に居る！？さつさと会わせろ！！」

「グエ…ッ！ちょ、いきなり、首、を、じめるな…！！」

「そ、そうよタリサ！というか首を離しなさい！！」

「うるせえアリス！邪魔すんな！！」

いきなりスゴいこと言う娘だなあー、と油断していた宗一は、いきなり首を絞めてきた少女に反応できず、見事に極められてしま

った。小さいくせに、かなりの力だ…。

因みに今、宗一は整備兵が着ているツナギを着ている。そのせいで、この小さな衛士に整備兵と間違われたのだろう。

それよりも、意外にも宗一はピンチだったりする。見た目は中学生の少女が、飛びかかるように首を掴んで絞めているのだ。下手に振りほどけば近くの機材に当たって大怪我するかもしれないし、仲間の暴拳を押さえつけようとしている金髪少女がいるせいで余計に動けない。しかも最悪なことに、だんだん視界が霞んできている。何とかしなければ…！

(く…！こうなったらコレだ！)

「さあ、さつさと居場所を…！ イッ！？わ、わははっ！や、やめ…キヤハハ、アツハハハハハ…！！」

「ちょ！？タリサ大丈夫！？」

掴んでいたタリサの腕を離し、手を脇に入れて軽く持ち上げる。そして差し入れた手の指を動かして…そう、くすぐり攻撃だった。

あまりくすぐりに免疫が無いのか、効果は抜群だった。

もちろん、くすぐられている本人は暴れまわっているので、蹴られないように腕を限界まで伸ばしている。

タリサの動きが大分大人しくなってきた。笑いすぎで息が保たなくなったと判断した宗一は、そこまできて、ようやくタリサを解放した。…意外に鬼畜である。

息も絶え絶えのタリサの前に仁王立ちすると、宗一は少しやり過ぎたかと思っただが説教をし始めた。こんなことが二度と起きないように、しっかりと教育しなければ！

「あのね君、いきなり人の首を絞めるなんてどういっ了見です

か？お陰で今死にかけましたからね、僕」

因みにタリサは説教を聞いていない。というか聞いている余裕がない。

本当に限界ギリギリで解放されたので、アリスの介護を受けていても、酸欠で意識が朦朧としていたのだ。

「…だから次からは…って、ちょっと大丈夫！？おい、おい！！」

「タリサ！？ちょっと！いくらなんでもやり過ぎよ！！」

タリサ？の顔の前で二、三度手を振っても反応しない。というか、意識がない…？

それに気付いた宗一は、顔を青くしタリサを「お姫様抱っこ」、医務室まで全力で走り去った。

「あゝ、待ちなさい！タリサを何処に連れてくのよぉー！！！」

アリスを忘れてったけど…。

「退いて退いてー！！！」

アニメのように、土煙を上げながら廊下を疾走する宗一に、声に反応したVGとステラは道を開け、次の光景に目を見開いた。

「のわっ！？テメエ気いつけ！？おいステラ、今のつてタリサじゃねえか？」

「…多分そうじゃないかしら。あの身長で褐色の肌は、あの娘以外見かけてないわ」

「なら何でお姫様抱っこなんだあ？ま、これでからかうネタができたからいいけどな！」

ククク、と笑うVGを冷たく一瞥すると、ステラは心配そうにタリサが連れ去られた方向を見つめるのだった。

） 医務室 ）

「問題なし。只の酸欠だし、暫く寝れば回復する。後はこっちで面倒見るから、アンタは機体の整備に戻りな」

「そうですか…よかった〜！」

目の前に座る、頭が少し寂しい軍医ドクターの言葉を聞いて、宗一は安堵のため息を吐いた。

くすぐりで酸欠にしまった衛士・タリサは今、ベッドに寝て静かな寝息を立てている。

それを見届けると、少し後ろ髪を引かれながらも宗一は「失礼しました」と一礼し、医務室から出ていく…とすぐに戻ってきた。

「あの、この箱をあの娘に。あとごめんなさいって伝えといってください。では！」

そう言つと、今度こそ本当に医務室を出ていった。

マメな男だ、と思いながら、預かった箱を机に置くのだった。

） ユーコン基地 統合司令部 大会議室 ）

会議室の中は、多種多様な人種の人間で溢れていた。

世界各国の軍事関係者が集まり、グループを作つては話し合っている。

しかしそのざわめきは、ツナギから帝国斯衛軍の軍服を纏つた宗一が現れたことで収まつた。

宗一は静かに壇上まであがると、マイクを受け取り話を始めた。
世界の明日を大きく変える話を…。

『各国の皆様、はじめまして。日本帝国斯衛軍所属、矢羽田宗一大尉です。早速ですが、本日皆様に集まっていたいたのは他にもありません。コレです』

宗一が合図を送ると、資料が配られ部屋が暗くなり、プロジェクターが起動した。そして映し出されたのはもちろん…

『 帝国軍技術廠が開発した新兵器、〇一式突撃砲並びに近接長刀、中刀、短刀の発表です！』

ザワザワ

！！

会議室は一瞬で驚嘆の声で溢れかえり、先のざわめきとは比にならない程会議室を満たした。

未だ静かにならない人々を置き去りに、プロジェクターが次に映し出した映像は、ハイヴ内の戦闘映像だった。そう、甲21号作戦の映像である。

その映像は、若干荒れているものの、何をしているのかわかる程度の鮮明さは保っていた。

ビームマシンガンが戦車級を蒸発させ、〇一式の長刀が突撃級を硬い外殻ごと切り裂き、八尺瓊の電磁投射砲とビームガトリング砲がハイヴ坑内のBETAを種類の関係なく吹き飛ばす…。

その威力、制圧力は映像、会議室にいる全ての人に希望をもたらす物だった。

そして再び、プロジェクターは〇一式シリーズの映像に戻る。

『これらの装備は、既に甲21号作戦、並びに甲22号（横浜ハイヴ）防衛戦にて戦果を挙げております。今回、我々帝国軍はこの二基の新型兵器の提供を決定しました』

宗一の言葉に、会議室は三度ざわめきに包まれた。それも殆どが歓喜の声だが、一部では不信がっている。やはり日本の情報だと信頼性が低いか…

『設計図の一部はブラックボックス化しますが、これは全国家に提供致します。…しかし、そのためにはこの条約に調印してもらい必要があります。既に国連総会にて認可された物ですので、

特別日本が優位な立場に立つことはありませんのでご安心を。では、資料の最後のページをご覧ください』

ひとまずその不信がつている人達は置いて、最も重要な事を出す。これは、どうやっても認めさせなければいけない条件だ。

宗一の言葉を引き金に、会議室にいる全員が資料を捲る音が響く。すると、皆一様に最後のページになるとピタリ、と動きが止まった。最後のページに書かれていた内容は…

○一式の使用規約だった。内容は

『人類に対する○一式を基にした兵器の全面的な使用禁止』である。

それを読み終わった人は、軍人、整備兵、高級将校等関係なく軒並み啞然とした表情をしていた。中には、言葉の真意がわかったのか驚いた顔で宗一を見つめる人もいる。

『…実を言うと、自分は、開発者の立場として○一式の提供、配備には反対していたのです』

『それは、この兵器の威力が強力なことも含まれます。しかし、それよりも一番恐れていたのは、この兵器によって新たな火種を呼び込む可能性があったからです。それを防ぐためのブラックボックス化もありました』

しん、と静まり返る会場を見て、宗一はさらに言葉を重ねる。

『……帝国製の○一式突撃砲は、120mm砲のユニットをビーム発生デバイスに取り替え、余った部分に冷却システムを取り付

けました。ビーム発生デバイス自体はかなり小型化してあるので、余程余剰スペースがない突撃砲でない限り換装は比較的簡単です。

このビーム発生デバイスについては、ライセンス生産を認めますので各国で製造してくださって構いません。……… BETAを排除後、人類が誤った道に進まない事を、信じています』

宗一は、最後にそう言う与会議室から退出していった。

後に残されたのは、難しい顔をして俯く軍人達だけだった。

さて…前書きで書いた通り、ネタ切れなのです。主にアメリカの裏工作やら暗黒面やらが…。

しかもショックだったのですが、四千円近くかけて買ったTEの小説（ファミ通）と総集編が、ジャール大隊全滅までしかなかったのが先が全く書けない状態に…（涙）

資金の関係上総集編のvol.2は来月にしか買えない…しかもパソコンは直らないのダブルパンチ。

…どなたかTEのラストをあらすじだけでも教えていただけないでしょうか？

本当はいけないことなのはわかっていますが、どうかご協力お願いします！

トータルイクリプス編第六話（前書き）

い、一応進展……。あの二人が登場です。

トータルイクリプス編第六話

） ユーコン基地 ）

「ふう……………」

○一式の発表が終わってすぐ。宗一は一人、司令部から離れ基地の中を歩いていた。

宗一は、悠陽から開発者として預かった権限を使い、ライセンス生産を許可したのだ。

今の日本には、各国から寄せられるであろう大量の注文を捌けるだけの余力は無い。本当に、先の佐渡島ハイヴ攻略作戦はギリギリだったのだ。

○一式の心臓部は、香月博士とミスリル、帝国の技術者達が持てる知識と技術を全て使って出来たもの。そう簡単に、○一式以外の武装ができる可能性は低いとはいえ、未だに不安が残るのだった。

「……………」

そして、先程からこつちをじろと見つめてきている少女を見る。視線に気づくと、慌てて物影に隠れる姿は小動物じみていて非常に可愛らしい。

「……………ねえ、僕に何か用かな？」

「……………」

出てこない。気配はまだそこにあるから、動いてはいないのだろつ。

無視してそのまま行こうにも、もし格納庫まで付いてこられた

ら拘束されかねないし、仕方ない。

そう思うと、宗一は少女に近づいていく。

そして、少女が隠れているコンテナの影を覗くと、あどけない少女と視線が合わさった。

流れるような綺麗な銀髪、霞と同じ瞳は、ただひたすら宗一を見つめている。…と、そこで宗一は横浜基地で度々感じていた感覚を感じた。これは…

「君、リーディングが使えるのかい？」

「っ！そう、だよ。あなたも？」

「まあ、僕のはちょっと変わってるけど似たようなものかな」

宗一と話して緊張が解けたのか、少女はいろんな角度から宗一を眺める。それに少しだけ恥ずかしくなった宗一は、当初の目的のため口を開く。

「そういえば、何で僕を追いかけてたの？何か用事でもあった？」

「……………」

じー、とまだこちらを見つめてくる。会話がつかまらないな、と思った宗一は、手を軍服のポケットに突っ込むとアポーツを発動した。

「よかつたら食べる？」

「……………これ、なに？」

差し出したのは、どら焼きである。少女は不思議そうにどら焼きを眺め、ぱくっとかわいらしい口を開いて食べた。

もぐもぐ、もぐもぐ、という擬音がぴったりな様は、非常に癒される。

「コクン……。おいしい!」

「それは何よりです、お姫様。…もしかして、迷子? 所属の基地がわからないとか?」

「ううん、だいじょうぶ。わかるよ。それに、すぐにクリス力がむかえにきてくれる!」

この少女は、クリスカという友達をとて信頼しているのだから。笑顔を見ていれば、それは良くわかった。

「そっか…。そういえば、自己紹介がまだだったね。僕は宗一、矢羽田宗一だよ」

「そーいち…。わたしは、イーニヤ。よろしくね、そーいち!」

「こちらこそ。じゃ、そのクリスカって子の事、探そうか?」

「うん!」

イーニヤは元気に笑うと、宗一の手をとって歩き出した。

「ねえねえ、そーいちは何でここに来たの?」

クリスカという友達を探してから二十分ほど。このユーコン基地の広さも相まって、なかなか見つからない。いっそのこと、基地の放送で呼び出そうか? と頭を過ったが、イーニヤの楽しそうな笑

顔を見てやめた。楽しんでるなら、すぐに終わらしたら悪い。

「僕？僕は、〇一式っていう新装備の提供に来たんだよ」

「ぜろいち？」

「うん。日本には〇〇式　TYPE・〇〇っていう戦術機が先にあつて、被らないように一年先だけどこれをつけたんだ」

「ふ〜ん…。あつ、クリスカ！！」

イーニヤは、前から歩いてくる同じ銀髪の少女に向かって走り出した。その少女　クリスカは、イーニヤの姿を見つけた途端嬉しそうにわらい、宗一を見た瞬間冷たい表情になった。警戒されたようだ。

「クリスカ、クリスカ！」

「もう…一人で歩き回ったらダメだって言ってるじゃない。…貴様、イーニヤを連れてきてくれたのは感謝する」

（か、感謝って君、そんな顔で言われても脅されてるとしか受け取れないよ？）

イーニヤに向ける慈愛に満ちた笑みとは違い、氷のような表情で睨み付けてくる少女に、口には出さず心で言う。これならイーニヤから注意してくれると思ったからだ。

「……そんなにキツイ顔をしていたのか」

「？何か言った？」

「い、いや、何でもない。さ、行こうイーニヤ」

「あ、まってよクリスカ！そーいち、どらやきありがとうー！」

クリスカはすたすたと行ってしまう、イーニヤは遅れないよう走っていった。

不思議な二人組だ、と思いながら、宗一は司令部へと戻っていた。

結果から言つて、〇一式は全ての国が採用することとなった。ただ、アフリカ等の前線国は余裕がなかったため生産を日本に依頼する形にしたいそうだが、そこまでの権限は与えられていないから帝国議会と交渉することになるだろう。

そして、ライセンス生産に関しては、アメリカは全てを買い取った。短刀から中刀長刀の全てを、だ。明らかに、アメリカがビーム系統の新型兵器を作る気満々なのは明確だ。

まあ、向こうの生産ラインが整う前に、莫大なライセンス料で一氣に生産。中華統一戦線やEU諸国のシユアを取るだけだね。

「と、こんな感じになりました」 『わかったわ。報告ご苦労』

「ただ、アメリカの事ですから、X F J計画でライセンス料の値引きとかしてきますよ絶対」

『ま、そこは外務省のお偉方の仕事よ。そうそう、速瀬達が早く戻ってこい、ってうるさいわよ』

「あ、もう食材が切れたのか。まだもう暫くこっちにいるんで待つように言つていてください」

『わかったわ。じゃ、通信切るわね』

夕呼との長距離通信が終わり、背もたれに体重を一氣にかける。椅子が不快げな音をたてるが、連日押し寄せてくる〇一式の質問

という名の拷問　　を捌いたのだ。これくらいは我慢してもらわないと。

「明日は中華戦線とソ連、アルゴス達と〇一式の訓練か……。ああもう！　いつそのこと最前線でテストしてくれば良いのに……！」

等と愚痴を繰り返しながらも宗一はそのまま眠りにつくのだった。

トータルイクリップス編第六話（後書き）

） おまけ ）

「なア、タリサ。お前何食ってんだ？」

「ああ？なんか気絶させた整備兵が詫びで置いてったんだ。意外にイケるぜ、この菓子！」

「あら本当。これ、日本の餡子みたいね」

「あ、ステラ！！勝手に食うな！」

「イヒヒッ！いったき〜！」

「ステラさんの言う通りだ〜！アリスちゃん感激〜！！」

「お前らア〜……いい加減にしやがれ ツ！！」

とある小隊の一日より抜粋

） おまけ2 ）

「そついえばイーニヤ、さつきから何を食べてるの？」

「ん？そーいちからもらったの！すつごくおいしいんだよ！」

「へ、へえ。ねえ、私にも一口「ダメ」…え？」

「だってクリスカ、そーいちにひどいこと言っただもん」

「ま、待ってイーニヤ！イーニヤ！？」

とある姉妹の一日より抜粋

トータルイクリプス編第六話（前書き）

い、一応進展……。あの二人が登場です。

トータルイクリプス編第六話

） ユーコン基地 ）

「ふう……………」

○一式の発表が終わってすぐ。宗一は一人、司令部から離れ基地の中を歩いていった。

宗一は、悠陽から開発者として預かった権限を使い、ライセンス生産を許可したのだ。

今の日本には、各国から寄せられるであろう大量の注文を捌けるだけの余力は無い。本当に、先の佐渡島ハイヴ攻略作戦はギリギリだったのだ。

○一式の心臓部は、香月博士とミスリル、帝国の技術者達が持てる知識と技術を全て使って出来たもの。そう簡単に、○一式以外の武装ができる可能性は低いとはいえ、未だに不安が残るのだった。

「……………」

そして、先程からこつちをじく、と見つめてきている少女を見る。視線に気づくと、慌てて物影に隠れる姿は小動物じみていて非常に可愛い。

「……………ねえ、僕に何か用かな？」

「……………」

出てこない。気配はまだそこにあるから、動いてはいないのだろう。

無視してそのまま行くにも、もし格納庫まで付いてこられたら

拘束されかねないし、仕方ない。

そう思うと、宗一は少女に近づいていく。

そして、少女が隠れているコンテナの影を覗くと、あどけない少女と視線が合わさった。

流れるような綺麗な銀髪、霞と同じ瞳は、ただひたすら宗一を見つめている。…と、そこで宗一は横浜基地で度々感じていた感覚を感じた。これは…

「君、リーディングが使えるのかい？」

「っ！そう、だよ。あなたも？」

「まあ、僕のはちょっと変わってるけど似たようなものかな」

宗一と話して緊張が解けたのか、少女はいろんな角度から宗一を眺める。それに少しだけ恥ずかしくなった宗一は、当初の目的のため口を開く。

「そういえば、何で僕を追いかけてたの？何か用事でもあった？」

「……………」

じー、とまだこちらを見つめてくる。会話がつかないな、と思った宗一は、手を軍服のポケットに突っ込むとアポーツを発動した。

「よかつたら食べる？」

「……………これ、なに？」

差し出したのは、どら焼きである。少女は不思議そうにどら焼きを眺め、ぱくつとかわいらしい口を開いて食べた。

もぐもぐ、もぐもぐ、という擬音がぴったりな様は、非常に癒さ

れる。

「コクン……。おいしい！」

「それは何よりです、お姫様。…もしかして、迷子？所属の基地がわからないとか？」

「ううん、だいじょうぶ。わかるよ。それに、すぐにクリスカがむかえにきてくれる！」

この少女は、クリスカという友達をとて信頼しているのだろう。笑顔を見ていれば、それは良くわかった。

「そっか…。そういえば、自己紹介がまだだったね。僕は宗一、矢羽田宗一だよ」

「そーいち…。わたしは、イーニヤ。よろしくね、そーいち！」

「こちらこそ。じゃ、そのクリスカって子の事、探そうか？」

「うん！」

イーニヤは元気に笑うと、宗一の手をとって歩き出した。

「ねえねえ、そーいちは何でここに来たの？」

クリスカという友達を探してから二十分ほど。このユーコン基地の広さも相まって、なかなか見つからない。いっそのこと、基地の放送で呼び出そうかと頭を過ったが、イーニヤの楽しそうな笑顔を見てやめた。楽しんでいるなら、すぐに終わらしたら悪い。

「僕？僕は、〇一式っていう新装備の提供に来たんだよ」

「ぜろいち？」

「うん。日本には〇〇式　TYPE - 〇〇っていう戦術機が先にあつて、被らないように一年先だけどこれをつけたんだ」

「ふん…。あつ、クリスカ！」

イーニヤは、前から歩いてくる同じ銀髪の少女に向かって走り出した。その少女　クリスカは、イーニヤの姿を見つけた途端嬉しそうにわらい、宗一を見た瞬間冷たい表情になった。警戒されたようだ。

「クリスカ、クリスカ！」

「もう…一人で歩き回ったらダメだつて言ってるじゃない。……

貴様、イーニヤを連れてきてくれたのは感謝する」

（か、感謝つて君、そんな顔で言われても脅されてるとしか受け取れないよ？）

イーニヤに向ける慈愛に満ちた笑みとは違い、氷のような表情で睨み付けてくる少女に、口には出さず心で言う。これならイーニヤから注意してくれるから問題ないと思つたからだ。

「……そんなにキツイ顔をしていたのか」

「？何か言つた？」

「い、いや、何でもない。さ、行こうイーニヤ」

「あ、まってよクリスカ！そーいち、どらやきありがとう！」

クリスカはすたすたと行つてしまい、イーニヤは遅れないよう走つていった。

不思議な二人組だ、と思いながら、宗一は司令部へと戻つていっ

た。

結果から言つて、〇一式は全ての国が採用することとなった。ただ、アフリカ等の前線国は余裕がないため生産を日本に依頼する形にしたいそうだが、そこまでの権限は与えられていないから帝国議会と交渉することになるだろう。

そして、ライセンス生産に関しては、アメリカは全てを買い取った。短刀から中刀長刀の全てを、だ。明らかに、アメリカがビーム系統の新型兵器を作る気満々なのは明確だ。

まあ、向こうの生産ラインが整う前に、莫大なライセンス料で一気に生産。中華統一戦線やEU諸国のシユアを取るだけだね。

「と、こんな感じになりました」

『わかったわ。報告ご苦労』

「ただ、アメリカの事ですから、XFJ計画でライセンス料の値引きとかしてきますよ絶対」

『ま、そこは外務省のお偉方の仕事よ。そうそう、速瀬達が早く戻ってこい、ってうるさいわよ』

「あ、もう食材が切れたのか。まだもう暫くこっちにいるんで、待つように言つといてください」

『わかったわ。じゃ、通信切るわね』

夕呼との長距離通信が終わり、背もたれに体重を一気にかける。椅子が不快げな音をたてるが、連日押し寄せてくる〇一式の質問という名の拷問　を捌いたのだ。これくらいは我慢してもらわ

ないと。

「明日は中華戦線とソ連、アルゴス達と〇一式の訓練か……。あ
もう！ いっそのこと最前線でテストしてくれば良いのに……！」

等と愚痴を繰り返しながらも宗一はそのまま眠りにつくのだった。

トータルイクリップス編第六話（後書き）

） おまけ ）

「なア、タリサ。お前何食ってんだ？」

「ああ？なんか気絶させた整備兵が詫びで置いてったんだ。意外にイケるぜ、この菓子！」

「あら本当。これ、日本の餡子みたいね」

「あ、ステラ！！勝手に食うな！」

「イヒヒッ！いったき〜！」

「ステラさんの言う通りだ〜！アリスちゃん感激〜！！」

「お前らア〜……いい加減にしやがれ ツ！！」

とある小隊の一日より抜粋

） おまけ2 ）

「そついえばイーニヤ、さつきから何を食べてるの？」

「ん？そーいちからもらったの！すつごくおいしいんだよ！」

「へ、へえ。ねえ、私にも一口「ダメ」…え？」

「だってクリスカ、そーいちにひどいこと言うんだもん」

「ま、待ってイーニヤ！イーニヤ！？」

とある姉妹の一日より抜粋

トータル・イクリプス編第八話（前書き）

ご心配をおかけしました。

最新話です。

トータル・イクリプス編第八話

く グルームレイク基地 く

「クッ……！何だよこの威力は！？」

新型兵器のコンテナを運び、シミュレーターで訓練を終えた今。ユウヤは試作ビーム‘砲’の実射テストを行っていた。

本来、〇一式突撃砲に使われるエネルギーセルマガジンを三つ取り付け、〇一式中刀のビーム砲と〇一式突撃砲のビームマシンガンを使用可能にしたのが、この試作ビーム砲だ。

そして、標的として使われたのは解体処分待ちの再突入殻^{リメントリーシェル}。対レーザー蒸散膜を使っているにも関わらず、一撃で貫通、爆散した。ビーム砲は一発一発の威力を高めたせいで、連射性能が犠牲になったものの、衛士の固定概念を打ち砕くには十分な威力だった。

『CPよりショット1。何か問題でも？』

「……いや。何もない。全行程のテスト終了。帰還する」

『了解。お疲れさま、ユウヤ。ヴィンセントが格納庫でお待ちかねよ。なるべく急いであげてね』

最後の言葉を全力で無視したユウヤは、疲れに疲れた体を庇うようにゆっくりと機体を進ませるのだった。

〈 格納庫 〉

あれからじつくりと時間をかけて戻ると、愛機の固定ベッドの前で顔を鬼にしている整備兵が立っていた。ヴィンセントである。

「よおお、ユウヤああ。随分と重役出勤だな……！」

「そんなに怒るなよヴィンセント。こっちだって疲れてるんだ」

ヴィンセントは、全く……と言いながらため息をついた。

お前も似たようなもんだろ、という突っ込みは、心の中に止めておく。

「……んじゃま、さつさとフル点検といきますか……！」

「点検という名の解体、の間違いじゃないのか？」

「抜かせ！……そういやあ、さつき基地司令からお前に出頭命令が出たぞ？確か一時間後だったから、さつさと着替えてこい」

（……基地司令から？）

思い返してみても、お叱りを受けるようなことは一切していない。何か嫌な予感を感じながらも、ユウヤは更衣室に向かうのだった。

〈 司令室 〉

「ユーコン基地への……転属！？……でありますか？」

「ああ、そうだ。貴様には本国と日本帝国の共同プロジェクトであるX F J計画のテストパイロットとして選ばれたのだ。光栄に思いたまえ」

（何が光栄に…だ！完全に厄介払いじゃねえかよ！！）

基地司令の日本人に対する偏見は知っていたが、まさかここまであからさまな手を使ってくるとは…！

ユウヤは腸が煮えくり返りそうな怒りに、拳から血が垂れているのにも気づかず、基地司令の次の言葉を待つ。

「尚、今回の派遣により貴様は一時的に国連軍に入ってもらつ。専属整備士を一人と、貴様の判断で後一名まで派遣扱いになる。…誰を連れていくか、良く考えておくように」

「……了解……しました…！！」

淡々と…そして何処か優越感を滲ませた口調で告げる基地司令を殴りたくなる衝動を、なんとか抑え付けて、ユウヤは司令室から退室した。

基地の外にある行きつけの酒場に、ユウヤとヴィンセント、そしてヴィンセントと同じ輝くような長い金髪をポニーテールにした美少女 セレス・ウィッティングトン が座って飲んでいた。

「おいユウヤ、少しは元気出せって！せのX F J計画とやらで成果を出せば良いだけだろ？」

「ヴィンスの言う通りよ、ユウヤ。気落ちした所で、何も変わらないわよ？」

「…わかってるよ。ただ、少しナイーブになっただけだ」

カラン、とグラスに入った氷が崩れ、澄んだ音を奏でる。

ユウヤはグラスに入った酒を一気に煽る。

「…っし！もう大丈夫だ。それでセレス、基地司令のブタ野郎から後一人連れてけるんだが、良いか？」

「あら？何で当たり前の事を聞くの？ヴィンスが行くのなら、私と一緒に行くのは決定事項よ！」

「セ、セレス…！」

おうおう、熱い熱い…と言いながらユウヤはマスターにもう一杯と言うと、何故か天然物のウィスキーが出てきた。

「…マスター、これは？」

「俺の取って置きさ。ま、饞別みたいなものだ」

金はいらん、と言って奥に引っ込んだマスターに、ユウヤは心の中で感謝しながらウィスキーを飲むのだった。

二人には言っていない、二週間後のユーコン基地にも思いを馳せながら…。

場
く

一ヶ所を囲むように展開された布陣。ソ連、統一中華、国連…各国の試験部隊が、日本製の〇一式を構えながら演習の開始を今か今かと待ち構えていた。

そしてタリサは、自分達アルゴス小隊の隣に空いた‘穴’に疑問を抱いていた。

「……なあ、V G。何でココが空いてんの？」

「知らねえよ。どうせC Pのミスか何かだろ？……つと、始まるぜえ！」

V Gの言った通り、C Pから通信が入りJ I V E S 起動の指示が出た。

『全機のJ I V E S 起動を確認…。矢羽田大尉、そちらの準備はよろしいですか？』

（な！？何でアイツが……ってまさか！）

大体だけど、不自然に空いた戦術機が入りそうな穴…。その正体に、タリサは直感した。奴が来る、と。

直後、一機の戦術機が穴に滑り込んできた。

機体は、模擬戦で散々やられた支援機　八咫鏡だ。

『はい、大丈夫です。何時でもどうぞ』

『了解！カウントスタート！5…4…3…2…1…演習開始！！』

瞬間、包囲陣形の中心地点の地面は砕け、B E T A が飛び出した。

『アルゴス1より全機！アロー・ヘッドワンで突撃！食い散らせ
！！』

『『了解！！』』

勢い良く突撃してくる突撃級に狙いを澄まし、いつもの癖で120mmの引き金を引く。そして、その反動の無さに120mm砲が無いのを思い出した。

「……あれ？死ん…でるのか？」

全く反動も無く、放たれたビームは突撃級の外殻を貫き後ろの要撃級をも貫いていた。

あまりの威力に、一瞬弾幕が止む。警報でようやく再起動した部隊がビームを撃てば一瞬で戦線が上がる…今ここで、衛士達の固定概念が粉々に砕け散った。

『演習終了！全機、格納庫に帰投後、一時間後にブリーフィング
ルームに集合せよ』

CPの通信には興奮が隠しきれておらず、それは演習に参加した全ての衛士も同じであった。

興奮冷め止まぬ雰囲気の中、皆一様に〇一式の配備を望むのだった。

〈 格納庫 〉

「タリサ〜!!」

F-15・ACTVから降りてドリンクを飲んでいて、向こう側から金髪のアリスが駆け寄ってきた。

「おつ、アリス……と誰さん？」

「内の整備士とCP担当よ!ね〜、マイ君にエレちゃん」

「…あのなあ、いい加減そのあだ名止めろよ!?俺にはマイケル・パレっつー立派な名前が…」

「貴女がタリサちゃん?アリスから良く聞いてるわ〜。私はエレン・エイム、ヨロシクね?」

「お、おっ…」

後ろから、「無視するなあああ!」と叫んでいるマイケルを無視して握手してくるエレン。…何となくだが部隊の上下関係がわかってしまう構図だな。

「それにしても、〇一式って凄い威力ね〜。アリスちゃん、驚きで撃つの止まっちゃった」

「…だな〜。一応整備マニュアルで見たけど、スゲえ技術だぜ、ありゃあ」

無視されるのには慣れているのか、すぐに会話に復活したマイケルは、無視され無いであろう内容を投げる。

「あん?マニュアルなんて配られんのか?」

「ああ。各国に公表、提供されたんだ。今〇一式の機関部を既存

の突撃砲と互換してるから、それでな」

「ふん、私は初耳だな。で、いつ頃出来そうなの？」

「早くて三日後、調整とか入れたら一週間はかかるな……」

一週間。その間はずっと〇一式突撃砲を使っただけ訓練が出来ないのは辛い。下手に別の銃に慣れると、勘を取り戻すのが大変だからだ。

「シミュレーターでも無理か？あの突撃砲、微妙に慣れないんだよな……」

「あ、アリスちゃんも！やっぱり使い慣れてないとダメね」

一同、なまじビーム兵器の威力を知っている分、かなりやきもきしているようだ。

「早く、前線に回って欲しいな……」

そして、キャンプで会ったクマールが戦場に出ないような世界に……。

タリサの呟きは、〇一式について語り出したマイケルによって掻き消され、アリス達に届くことはなかった。

ソ連軍 格納庫

「クリスカ、そーいちがつくったアレ、すごいね!!」

「…うん。そうだね、イーニヤ」

イーニヤの嬉しそうな様子とは違い、クリス力は何処か暗くなりながら整備ハンガーに固定され、整備兵達に取り付いている愛機を眺めていた。

（…あの威力。あの突撃砲だけで戦況は引っくり返る…。なのに何故、私は不安になるのだ…？）

「…クリス力？」

イーニヤの気遣う視線に気づいて、思考の海から脱け出した。

「…ごめんなさい、イーニヤ。少し考え事をしていただけだから大丈夫…」

「……うん！」

安心したのか、花が咲くみたいに笑ってそーいち…矢羽田大尉の話を始めるイーニヤ。笑顔を見れるのは良いのだが、何処か複雑だな…。

そして私達は、サンダーク中尉の後を追いながら、先ほどの会議室<sup>フリーフィン
グールム</sup>まで足を運ぶのだった。

トータル・イクリプス編第八話（後書き）

ヘイルUさん、オリキャラの名前、ありがとうございました！

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第一話（前書き）

本作は、ガンⅡカタさんの作品とのコラボです。

時系列は関係ありません

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第一話

） 横浜基地 ）

ある日の夕方。今日の夕飯は、楽しみにしていた好物がおかずでしかも！天然素材ふんだん使用！……………な日の筈なのに、僕はお預けを喰らっていた。香月博士の呼び出しによって…！

香月博士が待っていたのはシミュレーター室。しかも後ろには今まで無かった怪しいシミュレーターが鎮座していた…。

一応逃げるとかたまたま通りかかった陽菜に押しつけるとか色々逃げ出す方法はあった……………んだけど、意気揚々とPXに向かう途中で霞に捕まって、ここまで連れてこられたのだ。あの円らな瞳で見られたら、例え行き先が地獄とわかっていても断れるわけがない……………。

「…香月博士、なんですかこの魔改造シミュレーターは！？いくらなんでもコレは……………」

「魔改造とは失礼ねえ。コレ、暇つぶしで造ったんで外見がアレだけど、G元素をふんだんに使いまくった最高級シミュレーターよ…！」

とその改造され、色々と外見が変わってしまい、暗黒オーラを放っているシミュレーターをバンバン叩く。叩くのは良いですけど精密機械だから壊れても知りませんよ？

「いや、そんなに自信満々に言われても……………てか最高級って…。確かに高そうなのはわかりますけど、基本的にはグレイ・ナインしか使っていないですよ？それ以外って兵器以外に使い所無かったよ…うな……………」

「……………ま、そんなことよりさつさとやってデータ取りなさい。
機体データはアンタが開発した天叢雲よ」

「って、待て待て待て待て！！使ったんですね！？ 그레이・イレ
ブンまで使ったんですね！？んなことしたらどんな事が起こるかわ
からないじゃないですか！！」

G元素のフル使用…！ヤバイ、公式設定にすら明記されていない
摩訶不思議物質のオンパレードだ！！下手したら変な反応起こして
ボン！　かも…。こんなところで僕は終わるのか…？

「はいはい、うつさいわねえ。そんな危険な物私を作るわけ無
いでしょ？」

「……全然信用なりません、今だけは信じます。てか、やらな
い限り僕のご飯が遠くなるだけなんですよねえ…」

さつき霞からリーディングで言われたよ。『……もう諦めて、早
く乗った方が身の為ですよ』ってね。…はあ。さつさと強化装備着
て魔改造シミュレーターに乗りますか。…霞、おかず取っておくよ
うおばちゃんによろしくね？

本当に、早く終わらせないと今日のおかずが……！！あの食道楽
達に食い尽くされてしまうから！！

『……………わかりました。伝えておきます。…がんばって下さい』

霞の応援に心が洗われ、若干だがテンションが回復した宗一。シ
ミュレーターに乗り込む…と同時にプログラムが起動した。予め準
備がしてあったのかな？何か通信ウィンドウの博士がニヤニヤと嫌
な笑顔をしてるけど……まあ大丈夫でしょ。ステージはハイヴ攻略
用シミュレーション・横浜ハイヴだ。

） side 宗一（救済）

「このつ、くそつ、おりゃあ！！そこおお！！！」

天叢雲は格闘戦に特化させた機体。その特性は、射撃武器を近接武器と一体化させ、最終的には機体を身軽にして高機動戦を行うことを目的としている。

そして今、残っている武器はトードスシュレッケン四門に〇一式中刀が一本、ステイレット一発にシールドだけだ。ブレード・ストライカーの武装は長刀を残して突入と同時に使い果たしている。

BETAの数が最も少ない壁を蹴るようにして進み、推進剤の消費を最小限に抑え、必要なときに遠慮なく噴出す。

奥に進めば進むほどにBETAの数は増えていき、足場も無くなつていく。天井から落ちてくるBETAはビーム刃で切り裂くか回避し、足場を塞ぐように集まる小型種にはビーム砲とバルカン砲をお見舞いする。

「くつそ、もう手持ちの武器が……！だけど、後少しだ！！」

既にトードスシュレッケンの弾は雀の涙。ビーム砲とてチャージに時間が掛かるから実質射撃武器はステイレットのみ。

その最後のステイレットを、戦車級の集団に向けて投擲。ステイレットはハイヴの壁にめり込むと爆発。戦車級達は吹き飛ばされ足場ができる。

ステイレットを犠牲にして作った足場を使い、一気にフルブース

ト。ブレード・ストライカーの推進力によって一気にBETAの大軍を振り切った…と思った矢先に

「つちよ！？あんなBETAの壁、どうやって抜けると!？」

大軍を抜けたと思えば今度は壁。BETAで出来た、シャフトを完璧に塞ぐほどの大きさのBETA壁だ。

いくら温厚な僕でも、このイジメには流石に殺意を抱いた。ただ、殺意を募らせている間にもBETAは攻めてきている。生き残って罰を与えるためにも、作戦を考えねば。

改めて機体状況と武装をチェックする。残ってる武器は接近戦用のみ。いくらビーム砲でもあの壁に穴は開けられない。穴さえ開けば、後は天叢雲の装甲と推進力に物を言わせて突き抜けられるのに…。せめてS-11弾頭並の爆弾があれば…。あ、あった。

思い付いたら吉日？とばかりにすかさず機体进行操作。ガシャツ、という音と共にブレード・ストライカーが切り離され、バーニアを噴かしてBETA壁に突き刺さった。

そう、ブレード・ストライカーには大量の推進剤が入っている。往復分も入っているから爆弾にするには十分だった。そしてブレード・ストライカーが刺さった瞬間、それに反応した戦車級が喰らい付いてくるが、そんなのは関係ないとどんどんめり込んでいく。そして、めり込んだブレード・ストライカーに向けてビーム砲を一発。ついでにトードスシュッケンの残弾全てを撃ち込み、爆発するであろう地点にシールドを構えて機体を実つ込ませる！

ドゴオオオオオン！

盛大な爆発が起き、機体が揺さぶられる。目の前のモニターは黒煙で埋まり、僅か数秒の時間が永遠に感じられる…。それでも機体のブースターだけは緩めない……！

機体をガリガリと削るような音が響いても無視し続ける。一秒…二秒…三秒…音が減った…抜けたのか！！

すぐに機体をバレルロールさせ、取り付いた戦車級を振り落とした。クラクラする頭でバックモニターを見れば、遠ざかっていくBETAの壁が…。その光景に安堵し、正面を向けば、蒼色に発光する反応炉の姿があった。

「お、終わった。後はS-11を設置すれば夕飯だ…！」

そしてS-11を機体から外し、パパツと設置。そして爆破スイッチに手をかけ…押した。

プシューウウウ……………

「は！？何何何！？故障！？」

突如、空気の抜けるような間抜けな音を出してシミュレーターがダウンした。筐体内から色々とするものの、全く動かない。一瞬だけ、最後に見た香月博士の顔が色々としどろり顔になっていたの思ひ出す。……これってそれと関係あるの…？

ってか結局欠陥品かよマッドサイエンティスト！！

ピピピピピ……………ブンツッ！

あの手この手で色々と弄っていたら、やっとシミュレーターが息を吹き返した。

「やっと動いた！！……って、ここ何処のステージ？それにあの不知火は一体……」

ようやく起動したシミュレーターは、何処がおかしかった。

まずモニターが復活した。ここまではいい。問題は次だ。

モニターに写っているのはハイヴの反応炉ではなく、草木が一本も生えていない荒野（テキサス・コロニー？）だったのだ。そして、対峙するように立っている謎の不知火……の改造型か？あんな機体案は見たことないけど……。ってか今の結果は？まさかノーカン！？ならマジ泣きますよ僕！？

……そうかそういうことが騙しましたね香月博士！！あの嫌あゝな感じの笑みはそういう事か！！

この機体を知ってる博士のことだ、どうせ向こうはとんでも機体だろう……。なら、そのとんでも機体をとことんなぶり殺しにして差し上げよう……！！

宗一は、ダークオーラを放ちながら天叢雲を操作する。○一式中刀を両腰の鞘から引き抜き、両手に装備。右手の一本を相手に向け、左の一本は普通に構える。

すると、向こうも同時に起動したのか、ガトリングシールドと腕のバルカン砲を構え臨戦態勢に入った……。

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第二話（前書き）

本作は、ガンⅡカタさんの作品とのコラボです。

時系列は関係ありません

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第二話

「先手必勝！当たれええええ！！」

開始の合図と共に、先制で頭部の36mmトードスシュレッケンを撃って弾幕を張った。

あの先鋭的な不知火は見た感じ、装甲を削って機体重量と空気抵抗を減らし、大型跳躍機で高機動を可能とした機体だと思われる。

武装も長刀二本に取り付け式のバルカン砲 恐らく着脱可能なタイプ に、ナイフシースに短刀。そしてI・W・S・Pにあるようなガトリングシールドがある。見た感じ〇ー式シリーズは装備していないが、油断は禁物だ。

…まあ、機体の分析はこれぐらいにして、相手の機動をよく観察する。半分程使いきってしまったのに、十発ちよつとしか当たらないとは……というか。

「何であんな加速ができるの！？普通ならGで圧死してるのに…！」

いくら香月博士でも、衛士を殺すような機体は作らない。だとしたら、安全面はクリアしている筈だ。やはり博士の技術力は恐ろしい…。

「くっ…！当たらない！」

しかも、余程高性能な学習装置とAIを積んでいるらしい。トードスシュレツケンの弾幕を、相手は完璧に見切っている。

じり貧になってきたので、ならば、と残り少なくなったトードスシュレツケンを止め、中刀にビームを展開させ構える。

同時にスラスターを使って浮き上がり、地面をホバリングしながら不知火に肉薄する。

向こうもそれに気づき、ガトリングシールドを切り離すと長刀を構え、こちらに向かって殺人的な加速力で突っ込んできた！

ギンツ！ ガシャンツ！！

「ッ！？もらったか…！」

交錯は一瞬。だが、互いに一撃を入れ合い相討ちとなった。

不知火は長刀を半ばからビーム刃で断ち切れ、勢いをそのままに頭部と右腕を肩の装甲もろとも切断された。

だがこちらも……信じられないことだけど、残った左腕で強度が弱い関節に短刀を‘投擲’され、シールドごと左腕の肘から先を持つていかれてしまったのだ。

「…本当にコンピューター？」

自然とそんな言葉が出るような挙動だ。…まさか、また八口を分解したんじゃないよな…。あれ以降、博士に近付こうとする八口が無くなったんだよなあ。

っと、今は集中集中。

一撃をもらったとは言え、不知火は一時的に目を失っている。もちろんそんな隙を逃すわけもなく、中刀を不知火に向けビーム砲を撃った。

「チツ！狙いがぶれた…！」

が、無理な体勢で撃ったため、ビーム若干逸れてしまったのだ。そのせいで、不知火の管制ユニットを貫く筈だったビームは、腰の跳躍機を貫き、下半身ごと爆発させた。けど被害はそれだけで、止めを刺し損ねてしまった。

跳躍機を失い、空中で制御も減速もできない不知火に、今度こそと狙いを定め…

「チエツクメイト…！」

引き金を引いた。

ビームは寸分変わらず、不知火の管制ユニットを貫き爆散させた。

第一ラウンド…勝者 宗一

「よっしゃー！これで夕飯…が…？」

ピピピピッ！ ピー！

2ndステージ…Ready?

表示された文字に喜んだ途端、新たに現れた文字に凍りついた。

「は！？これまだ続くの！？ハイヴシミュレーターと連続でもう限界…って…！」

S t a r t ! !

「N O オ オ オ オ オ ! !」

あんなに叫んだにも関わらず、開始の合図を出すとは……！悪魔、
魔女……！

「……博士、もう許しませんよ……！こうなったら博士の食事はずつ
と合成品だ……！」

博士への復讐が決まると同時に、不知火の攻撃が始まった。

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第三話（前書き）

本作は、ガンⅡカタさんの作品とのコラボです。

時系列は関係ありません

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第三話

「しまった、向こうの方が反応が速い!？」

第二ラウンドの先行は不知火に取られてしまった。

次の試合の存在を予測していなかった宗一が悪いが、反応しそびれたのも原因か。

一拍遅れて放たれた頭部のトードスシュレッケンは掠りもせず、まっすぐこちらに突っ込んできた!

「チツ! スティレットもダメなのか:!!」

何とか不知火から距離を取りろうと、腰のアーマーからスティレットを投擲した:のだが、相手は軽く機体を反らすだけでかわしてみせた。初見で避けるなんて:!

「これ: AIじゃない!？」

もう一本。今度は近接信管をセットした自爆型を投げたが、またしても避けられる。

あろう事が、不知火は爆発の衝撃波をも利用して加速、近づいてくる。

「くそッ!!」

負けじと腰の鞘から中刀を引き抜き、ビーム砲で狙う。

なのに、相手はちょこまかとロックオン・サイトから逃げ、一向

に当たらない。しかも、その避け方が煽ってくるようでバッテリーが……ッ！！

「まさか、ビームを銃口を見て避けてるのか！？どんな化け物衛士なんだよ！！」

ビームの弾幕をあつさりとかわされ、お返しに短刀の一撃が。

一撃目は装甲を狙われたが、硬すぎる事がわかると二撃、三撃目からは関節部ばかり狙わる。

右肘に一撃。モーター、パーツ破損。パワーダウン。

左膝関節に一撃。同じくパワー、機動力ダウン。

四撃目。首関節部切断。メインカメラ、トードスシュレッケン使用不能……。

「……いい加減にしやがれええ！！」

頭部を斬られた所で、頭の中でナニかがキレた。

機体に負荷を掛けないように気を使っていた戦い方を止め、ただひたすらに、がむしゃらに。敵を倒すことだけを考える機械になる。

無理矢理な態勢は無視。破損した右腕が軋むのさえ無視し、○一式突撃砲を腰から抜いて撃つ。

実弾と光弾の雨は検討違いな方向に向かい、地面を耕すだけで終わる。

「ッ！……落ち着け！冷静に！」

それを見て何とか冷静になれたけど、遅かった。

突然、不知火の動きが変わったのだ。先程まで感じた威圧感も無くなり、訝しげになりながらも盾に取り付けられたミサイルを全弾発射。

不意を突いたつもりなのに、それさえも冷静に36mmで撃ち落とされる。

やること成すこと全てが無駄に終わり、遂に宗一は、取り戻した冷静さを無くした。

「このオオオオオ!!」

中刀にビームを纏わせることも忘れて、独学の二刀流で斬りつける。

ガンッ！　ギンッ！　シャンッ！

不知火は長刀で全ての斬撃を斬り払い、押し返してくる。

僕には、勝てないのか…？

そんな思考が頭を過った瞬間、決着がついてしまった。

押し返されて体勢を崩し、大きな隙を作った天叢雲に、不知火が懷まで潜り込む。

そして無駄のない流れるような動作で長刀を振るい、一閃。天叢雲の両腕が肘ごと落ちた。

「ぐあッ!!…しまっ…!!」

更に胴体へ蹴りを一撃。圧倒されていた思考では衝撃に呻くこと

しかできず、不知火を見つめることしかできなかった。

『年長者は敬え、良いな?』

「え…?」

長刀が天叢雲を一刀両断する直前、そんな声が聞こえた気がした。

《第三ラウンド……

ERROR! ERROR! ERROR! ERROR!

「…また、対戦?…もう何が来たって驚かないよ…」

こてんぱんにされた事で、少しどころかなりナイーブになりながら画面を見つめる。

システムに重大な破損を確認。対戦中止。
種目変更…ハイヴ攻略シミュレーション

「ハイヴって…あんのマッド・サド・サイエンティストMSがアアア!!あれだけボコボコにされてテンションガタ落ちなのに、神経使うハイヴシミュレーションなんて無理だ……って、ああ!？」

ステージ変更…甲22号横浜ハイヴ

S
t
a
r
t
!

R
e
a
d
y
?

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第四話（前書き）

本作は、ガン＝カタさんの作品とのコラボです。

時系列は関係ありません

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第四話

） サイド 救済 ）

「ぐっ…！」

ハイヴシミュレーションの文字が消えると共に、派手にショートし火花を撒き散らすシミュレーター。バチバチッ！と時々火花が散る中、怪我をしないように顔を隠していた腕を退ける。

火花も収まり、システムも復旧したようだ。そして一番に目に入るのは網膜投影される外の風景で、そこにはハイヴの不気味に輝く坑道が映し出されていた。

「ハイヴなの…か？一体どのハイヴだろ……………ん？」

シミュレーターのPCが唸りを上げる。すると、視界の左前にノイズが走り、あの高機動型不知火が…。

「シミュレーションの機体！？」

不知火は声が聞こえたのか、一瞬だけ反応する。しかしすぐに周囲の警戒に戻って聞き捨てならない台詞を吐いた。

『何だ、幻聴か』

「幻聴じゃないです！」

よりによって幻聴ときますか。まあ、気づいてないなら仕方ないか…。

『何か用があるのか？坊や？』

「なっ！誰が坊やですか、誰が！？」

『お前以外に居るか？』

…よし、ひとまず落ち着こう、僕。深呼吸だ深呼吸…。確かに不知火のチューンアップ版に負けてるんじゃないと言いつ返せない。

『…どうやら、お互いこのふざけたミッションが終わらなきゃ外には出られないらしいな』

「…まあ、そうみたいです」 『ならサッサと終わらせるぞ、坊や。茶番に付き合っている時間はない』

「あのですねえっ、その坊やって呼び方やめて ツ！！」

最後の驚きには二重の驚きが含まれている。一つはいきなり始まった事。そしてもう一つは、僚機となる龍二の不知火が最大加速で突っ込んで行ったからである。

『…前衛は俺がやらせて貰う』

「…あんのじゃじゃ馬不知火…この僕に後衛を務めると？…良い度胸だコンチクショウ！！」

あの殺人的な加速力には負けるが、何故か換装されていたブレード・ストライカーのお陰で置いていかれる事はないだろう。天叢雲の膝を曲げ、ブレード・ストライカーのブースターに火を入れる。ブースターが轟音を出すと共に莫大な推進力を生み出し、機体を一気に最大戦速まで押し上げて不知火を追いかけるのであった。

「クソッ！今度はソコかよ！？」

ズダダダダダダダ！！

先行する不知火はスピードを落とすこと無く、真っ直ぐ反応炉を
目指して突き進む。

しかも相手にするBETAは足場作りの最小限…というか、BETA
を足場にしてるよあの人…。

腕は僕以上だとは思ってたけど、予想を木っ端微塵に砕くほどの
腕だ。

「確りと尻を追っ掛けないと、直ぐに見失うぜ？坊や」

「ッ！だから誰が坊やですか！！」 「言った筈だろ？お前以外に」

「ああ…もうっ！良いですってば、それ！！」

何なんだこの人は……！

一々最後に付け足される坊やに軽く切れながらも、進路上に邪魔
と判断したBETAを120mmレールガンと105mm単装砲で
蹴散らす 怨みも込めて！！

ズドンダダズドンダダ！！

ついでとばかりに不知火の進路上のBETAも吹き飛ばしておく。

…狙った訳じゃないよ？ちゃんと次に、どの要撃級を踏み台にするか先を読んだんだから。

『フフ…』

「？…今、笑いませんでしたか？」

『こんな地の底で笑う？冗談は止せよ』

ウソだ。絶対に笑ったでしょ！？…と、視線に込めて睨む。

向こうはそれを軽くスルーして、次のBETAを踏み台にして奥に進む。…あ。

『坊や、行くぞ』

「また坊やつて…あ、ちょっと、待ってくださいよ！！」

ブースターを盛大に噴かし、少しだけ不知火と並ぶ。その間にブレード・ストライカーから36mmと120mmの弾倉を取り出して不知火に差し出す。丁度両方とも弾倉が切れかけていたからだ。

『良いのか？』

「後ろのストライカー…バックパックに弾薬を積んでますから！」

ちよつとキツメに言い返したことを後悔して下がろうとすると、

『……ありがとう』

「へっ！？あ、い、いやっ、当然ですよ！」

一瞬、何を言われたか理解できなかった。今まで坊や扱いだったのに、お礼を言われるなんて…あ、そうだ！

「あ、そういえばまだ自己紹介がまだでしたね。僕は矢羽田。矢

羽田宗一です」

『…剣崎龍二だ。よろしくな』

「はい！」

返事を返してくれた龍二さんの顔には、今までの子供をみるような色は少なくなっていた。

（認められ、たのかな？）

そう意識した瞬間、嬉しさが込み上げてくる。ここまで興奮したのは、何時以来だろう？

弾薬を渡すと、僕は後衛に、龍二さんは前衛に戻り、更に加速した。

「……これは、無いでしょ」 『その意見には同意させて貰う。夕呼の性格が十二分に現れているじゃないか』

今、目の前には壁があった。赤色やら肌色やら斑緑でできた、だ…。

龍二さんも呆れているようで、さっきから動きが止まっている。

「…残ってる砲弾、全部使わないと崩れそうにないよこの壁…」

物は試しと、中刀のビーム砲を一発撃ち込んだのだが、貫通はしたものの、死んだり体が欠けたBETAはすぐに後ろから湧き出てきたBETAに壁から吐き出され、前以上に増えて増強されるた。たまったもんじゃないぞコレ！？

『チツ…こんなことなら、戦術機用のRPGでも作って置きや良かったかな』

「…S-11か…使うしかないのか？」

実は、天叢雲が装備しているシールドの裏には、六基のミサイルが搭載されている。しかもハイヴ突入戦の場合は、その半分以上をS-11弾頭に換装してあるのだ。

佐渡島戦での教訓を活かした物で、小型化されてはいるものの威力は御墨付きだ。

既に通常弾頭は使いきっているので、ミサイルは三発のみ。一発でどれだけ削れるかわからないが、最悪機体に取り付けられたS-11も使えば良いのだ。

「龍二さん、今からS-11弾頭のミサイルを撃ちます。機体の後ろか壁に隠れてください」

『S-11のミサイルだと？……確かにそれなら、威力は十二分だな……しかし、夕呼の頭はビックリ箱か？つうか、そんな面白いものがあるならさっさと配付しろよ、馬鹿』

何か最後にブツブツ言ってたけど、龍二さんは機体を背後に向け…？

『後ろからお客さんか……さっさと撃て、坊や。後ろの敵は俺が止めて置いてやる』

…ありがたい。これで安心して狙いがつけられる！

「宜しく願います！！」

龍二さんが迎撃を始めたのを確認してカメラを正面に戻す……と、

いつの間にかBETAの壁はかなり接近していた。

120mmレールガンとシールドを構え、小型種が固まっているエリアをロック。まずはレールガンのトリガーに指を乗せ、引いた。ズドンズドンズドン！！

冷却を一切考えずに残っていた残弾の六発を撃ち切る。

そして、120mmの着弾予測地点にミサイルをロック。再びトリガーを引いた。

カシュッ、とミサイルが切り離される音が響くと、ミサイルは一瞬だけ落下し、次の瞬間には轟音を響かせながらロックした地点に向かう。

「爆風、来ます！」

『だったら、死ぬ気で俺を護ってくれ』

簡単に言ってくれますな…！

すかさず龍二さんの後ろに下がり、シールドを地面に突き刺し、衝撃に備える。

脳内でアドレナリンが過剰分泌され、ミサイルの動きがスローに見える。やがて、三発が同時に死体を吐き出している壁の穴に接触。死んで無抵抗になった小型種の柔らかい体を貫きながら少しだけ奥に進み…

ズゴゴゴゴゴオオオオ

ン！！！！

S-11ミサイルは、カメラがホワイトアウトする程の閃光を発生し、機体が吹っ飛ばされそうなほどの衝撃波をも発生させた。

発生した衝撃波によって突き刺したシールドから悲鳴が上がり、

押さえつける腕が軋む。そして時折、何かがぶつかる音と震動が、シールドを構えた腕を通してコックピットにまで響いてくる。

永遠に続くかと思われた振動は、十数秒程続いた。

轟音と閃光が止み、すぐにBETAの壁があった方を向く。そこには、炭化し只の物言わぬ肉片と化したBETAの山が積まれていた。

「よし、今なら……龍二さん！」

『叫ぶな、頭に響くだろうが。坊や』

後ろを振り向き、機体の影に隠れていた龍二さんが前に……って、

「まだ坊やかよ!？」

……まあ、こつちも機体を立ち上がらせて行きますか……って、クソッ！動きが鈍い。

爆発の衝撃波を諸に受けたのが原因なのか、簡易チェックでは左腕はレッドに限りなく近いイエロー……つまりは濃いオレンジ。それ以外は余すところ無くイエローになっていた。

何回か機体を捻るように動かし、無理矢理動くよう調整……。よし、動く！

推進剤の残りが少なくなったブレード・ストライカーを噴かし、噴射跳躍。

あの壁BETAで残りが少なくなったのか、それからはまばらにしかBETAが出てこない。

四度目の邂逅の後、龍二さんが通信を開いてきた。

『……坊や、お前は……護りたい物はあるか?』
「え？」

突然な内容で、全く反応できない。

『……俺にはある。こんな俺にも良くしてくれた愛しい家族の誇りを護る事だ』

…護りたいもの、か。言われて初めて気付いたけど、今の僕には、この世界に來た時の願いは薄くなっている。今あるのは…

「僕には……」

『いや、無理をして聞き出したい訳じゃ無い。

俺は、お前に何も考えずに戦って欲しくないのさ。それだけ、本当に、それだけの事だ』

………そつか。この人が僕を坊や扱いしたのは、腕の差だけじゃない。意志が無かったからじゃないだろうか？

僕は、どんな事をしてもこの世界にとっては異邦人。もしかしたら、それまで気づいたから、意志を確かめるような事を聞いたのかもしれない。

既に通信は切られ、反応炉を目標している龍二さんの気を逸らさないよう、心の中で呟く。

ありがとう

と。

潰しながら暫く進むと、いきなりだだっ広い空間に出た。反応炉がある主広間だ。

そこには、既にS・11の設置作業を始めている龍二さんの不知火の姿が。

順調に作業している姿を見て笑顔になるが、天井を見て笑顔が凍った。

戦車級が幾つかのグループに集まり、砲弾のようになると、不知火目掛けて落下を始めたのだ。

「龍二さん、上!!」

『チッ!今は動けん、迎撃頼むぞ!!』

「了解!!」

急いで〇一式突撃砲を構えビームマシンガンと36mmの弾幕を張る。小粒だが高熱を持ったビームが戦車級の弾を燃やし、削り、その残りを実体弾が吹き飛ばす。だが、弾薬を渡したせいで36mmはすぐに切れ、ビームマシンガンもエネルギーセルが切れてしまった。

直ぐに突撃砲を放棄し、中刀を引き抜いてビーム砲で狙撃する。今度は大きく威力が上がったことで、一発で焼き殺す事が出来た。

「よし、これでラス……なあ!？」

最後のひとつとなった戦車級の塊に、**左腕**の中刀のビームを撃つ直前、それが起こった。

機能不全。

たったのこの四文字で全てが表される。突撃砲の反動で、オレンジだった左腕がレッドを越え死んでしまったのだ。

左腕は力を失い、地面に向かって垂れ下がる。しかも最悪なことに、右手の中刀はチャージ中で撃てなかった。

最悪は更に続く。最後の戦車級を狙うときの位置関係のせいで、最後だけ交差するように持っていた左手の中刀が、右手首を中刀ご

と切り裂きながら地面に突き刺さったのだ。

もう間に合わない……。地面に向かって落ちていく中刀を見ながら、宗一は作戦の失敗を覚悟した。

戦車級の塊は不知火の頭上で弾け、十数体の戦車級が不知火を覆うように降りかかる。

『……よくやった。ギリギリだが間に合ったぞ、宗一。』

次の瞬間、龍二はS-11から手を離し長刀と短刀を引き抜くと、自ら戦車級に突っ込んでいった。

長刀と短刀で戦車級を切り裂き、時速700kmオーバーの速度で体当たりを敢行。ものの数秒で全ての戦車級を片付けてしまった。

余りの機動、そして戦法に声が出ない。

不知火はそのままこちらに近づくと、S-11を天叢雲から取り出しセットしてくれた。

「……あ！龍二さん、今名前で……」

『……セット完了。おい、下がるぞ』

「は、はい！」

龍二の一言で二機とも安全圏まで後退。念には念をとシールドを龍二さんに渡して地面に突き刺す。

お互い、機体同士で頷くと龍二さんが指でカウントを始めた。

『「3……2……1……0！！！」』

直後、主広間から閃光が。遅れて爆音と震動が機体を襲うと、モニターに

《反応炉破壊成功！》

の文字が…。そして次の瞬間、シミュレーターは派手に火花と黒煙をあげ、宗一の意識はブラックアウトした。

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第五話（前書き）

今回で最後です。ガン＝カタさんの方でも、龍＝sideで書かれているので、そちらも是非とも読んでいただければ…。

では、どうぞ

合同作品 交差する救済と黒い獅子 第五話

龍二さんとの会話から、時折現れるBETAを潰しながら進む。すると、いきなりだだっ広い空間に出た。反応炉がある主広間だ。

そこには、既にS-11の設置作業を始めている龍二さんの不知火の姿があった。

順調に作業している姿を見て笑顔になるが、龍二さんからの通信で笑顔が凍った。

『……坊や、敵が来る』

「え？」

レーダーを見ると、反対側や天井から戦車級と要撃級、闘士級：突撃級はいないものの、かなりの数がわらわらと…！

『此方は設置中。まだ動けん！お前が対処しろ、坊や！』

「ッ、了解ッ！！」

言われなくとも、という言葉は胸の内で呟き、急いで〇一式突撃砲を構えビームマシンガンと36mmの弾幕を張る。

小粒だが高熱を持ったビームが要撃級の腕ごと体を焼き、削り、その残りを実体弾が吹き飛ばす。

だが、弾薬を渡したせいか、半分ほど倒した所で36mmは底をつき、ビームマシンガンもエネルギーセルが切れてしまった。

直ぐに突撃砲を放棄し、中刀を引き抜いてビーム砲で要撃級を狙撃し、小型種には胸部と頭部のトードスシュレッケンで片付ける。

ビーム砲になったことで大きく威力がり、要撃級は一発で焼き殺す事が出来た。

「よし、これでラス……なあ!？」

最後の一体となった要撃級のに、左腕のビーム砲を撃つ直前、それが起こった。

機能不全。

たったのこの四文字で全てが表される。突撃砲の反動で、オレンジだった左腕がレッドを越え死んでしまったのだ。

左腕は力を失い、地面に向かって垂れ下がる。しかも最悪なことに、右手の中刀はチャージ中で撃てなかった。

最悪は更に続く。最後の戦車級を狙うときの位置関係のせいで、最後だけ交差するように持っていた左手の中刀が、右手首を中刀ごと切り裂きながら地面に突き刺さったのだ。

『大丈夫か!?!』

「だ、大丈夫です……それより上　ッ!！」

龍二さんの通信……反射的に大丈夫と言ってしまったが、もうトードスシュレツケンも弾切れだ。

しかも、いつの間に移動したのか、龍二さんの直上に戦車級の群れが……。

間に合わない……。地面に向かって落ちていく中刀を見ながら、宗一は作戦の失敗を覚悟した。

戦車級の群れは不知火に向かって落下し始め、まるで砲弾のよう……。

『いけるさ……』

次の瞬間、龍二さんはS-11から手を離すと突撃砲の一挺を戦

車級目掛けて投擲し、残った一挺でその突撃砲を撃った。
突撃砲は残弾とともに弾け飛び、戦車級の弾にダメージを負わせる。

更に跳躍機を噴かし、自ら戦車級に突っ込んでいった。
機体を戦車級の後ろに回り込ませ、そのまま時速700kmオーバーの速度で飛び蹴りを敢行。戦車級はグチャツ、と嫌な音を立てて沈黙した。

余りの機動、そして最後の飛び蹴りに、宗一は一言。

「無茶苦茶だあ ！！戦術機で蹴りなんてありですかああ
！？」

力の限り叫んだ。

龍二さんは叫びを無視してそのままこちらに近づくと、S-11
を天叢雲から取り出しセットしてくれた。

『なあ』
「はい？」
『……お別れだな』
「……みたい、ですね」

薄々とは気づいていた。こんな機体は聞いたこともないし、何より龍二さん程の腕前を僕が知らないなんておかしい。多分、G元素が引き起こした奇跡みたいなものだったんだろう。

龍二さんもそれに気づいて、今みたいに話しかけてくれたのに、
上手く言葉が見つからない…。

『……まあ良しさ。お互いにやる事は腐る程あるだろう？“宗一”』

「はい……えっ、今名前で……！」
『負けるなよ、宗一』

直後、主広間から閃光が。遅れて爆音と震動が機体を襲う、モニターに

《反応炉破壊成功！》

の文字が……。そして次の瞬間、シミュレーターは派手に火花と黒煙をあげ、僕は

「龍二さん、ありがとうございました！」

感謝の言葉を最後に、僕の意識はブラックアウトした。

） 横浜基地 ）

「……田……矢羽………矢羽田！！目を覚まさない！！」

バツチイイ ン……！！

「痛ッ！！ちょ、香月博士、もう起きてます！起きてますからピンタはやめて……！」

博士からの強烈なピンタで強制覚醒。最悪な寝起きだ……。

回りを見回せばいつの間にかガーディアンズの三人まで…って、

「あれ？何で涼子達が泣いてるの？」

三人とも、瞳に涙をためて今にも泣き出しそうな雰囲気だ。一体全体何が…？

「……………宗一さんは…あの後…十時間以上もシミュレーターに…閉じ込められていたんです。……………突然、シミュレーターのメインコンピュータが…乗っ取られて…」

「無理矢理開けようにも、中に入れたG元素のせいで下手に触れなかったのよ。ま、無事で何よりね、矢羽田！」

宗一は、十時間という時間を聞いて啞然としてしまった。明らかに、外との時間の流れが違ったからだ。まあ、G元素が起こしたことでだから仕方ないか…。

「……………あ、霞。メインコンピュータって起動できなかったの？」

「……………はい。そのせいで、宗一さんの生体情報さえ確認できなかったんです」

「……………じゃあ、龍二さんのことは誰も知らないか…」

それから、シミュレーターで何があつたのか問い詰められて、龍二さんの高機動型不知火についても話した。ただ、龍二さんの名前が出た瞬間、博士の眉毛がピクリと動いたのを、宗一は気づかなかった振りをした。

後に、この話はみんなから忘れ去られ、魔改造シミュレーターと共に封印されるのだった……………って、ああああ…！

「僕のごはんがあああああ!!!」

もちろん、時間をつくに過ぎたPXは閉まっており、夕飯もお預けを喰らった僕は、一人アポーツで取り出したカップ　ードルで腹を満たしたとき。トホホ…。

いつの間にか六十万…的な外伝（前書き）

イクリプス編の次話にあたりますが、外伝です。

いつの間にか六十万…的な外伝

リルフォート

○一式の合同演習も終わり、デブリーフィングも終えた宗一は、この世界に来たときの私服に着替え、一度も入ったことの無かったリルフォートを歩いていた。

帝都では見られない西洋風の街並みは、一瞬だけ元の世界の街並みと重なった。

仲睦まじく歩くカップル。クレープ屋の前で母親にごねる子供…。荒廃した日本では見られない光景に、懐かしさと寂しさがあわさった、微妙な心境になる。

「…やっぱり、どこかで帰りたいとか思ってるのかな？」

僕は、どんなにこの世界の住人として振る舞っても、異物以外の何者でもない。

こればかりは、仕方の無いこととして割り切るしかないだろう。

「……さて、涼子達のお土産でも買いますか！幸い、民間用で服屋とかもあるし…でもその前に」

そう言いながらも真っ先に向かったのはクレープ屋だ。…懐かしいから仕方ないじゃないか。

「いらつしやいませ〜！ご注文はお決まりですか？」

「えっと…じゃあバナナとイチゴのを一つ」

「はい！3\$になります！」

早速できたてのクレープにかぶり付く。

溶けたバニラアイスと生クリームがバナナと絡まって…美味しい！
そして一人、ゆっくりとクレープを味わいながらリルフォートの
街を歩くのだった。

「へえ、居酒屋…じゃなくてバーか。やっぱり後方は違うな…」

リルフォートに入ってから三時間。既に陽はどつぷりと沈み、完
全に夜になっていた。

家族連れや恋人たちは数を減らし、それに代わって軍人達が多
くなる。

もちろん、彼ら（彼女ら）のほとんどは数多くある酒場に一直線
だ。それ以外は…言うの野暮ということだ。

「…？あ、あの三人組は…」

そうして街中を見ていると、視界の端に親子連れ…みたいな三人
組が。そう、アルゴス小隊の三人だ。

「…酒を飲むのも久しぶりだし、親睦を深めるためにも行きます
か！…」

涼子達から止められる事無く、久しぶりに満足行くまで酒が飲め
ると喜び（以外に酒好きなのだ）宗一は気分良さにバーへと入っ
ていった。…アポーツで取り出した酒類を忘れずに。

バーに入ると、既にカウンターの前でタリサがガバガバ飲んで
いた。ヴァレリオとステラの二人はなんにも言わず、飲んでるタリサ
の愚痴を聞いているだけのようだった。

ゆっくり近づいていくと、二人はこちらに気づいたみたいだけど
なにも言わず、逆に何をするのか楽しみにしている節が。

「（…まあ、変なことする訳じゃないし…）よっ、マナンドル少
尉！」

「ああ〜！？誰だあ〜…って、お前キヤア！？」

「おっと…」

バランスを崩したタリサをキャッチ。小さいから抱え易い。
それにしても、軽く肩を叩いただけで椅子から落ちるとは…。そ
こまで驚かなくてもいいのに。

「~~~~~！?!?」

「大丈夫？」

「っ！う、うるさい！早く離しやがれ！！」

おうおう、顔が赤いことで、とか外野から聞こえてきたけど、タ
リサには聞こえてなさそうだ。というか現在進行形で殴りかかれ
ている。

「いちいち！ちょこまかと！避けるなア！！」

「んなこと、言われて、も、殴られたくない、からね！」

闘士級に匹敵する身体能力は伊達じゃない。でも、いい加減避け

るのも飽きてきたから、止めにしますか。

「ほいつと！」

「んな！？この体勢…まさか…！？」

「眠るがいい…秘技！抱腹絶倒攪り地獄！！」

「や、やめ…キャハハハハッ！」

格納庫で気絶させたあの技、攪り地獄だ。今度はちゃんと手加減したよ？

「はあ…はあ…はあ…」

「さて。マナンドル少尉が落ち着いたところで…。三人とも、さつきぶり。混ぜてもらっても構わないかな？」

「…はっ！どうぞ、大尉ど「堅くしなくていいよ？」…わあつたよ。ンじゃ、タリサの隣に座ってくれ。それともステラの方が良いかあ？」

「じゃあマナンドル少尉の隣で。マスター、ロックを一杯」

未だ床に突っ伏しているタリサの右隣に座る。ステラから残念…とか聞こえたけど、気のせいだろう。うん。

「まあ、初日は模擬戦に付き合ってくれてありがとう。こっちも貴重な経験になったよ」

「イヤイヤ、そりゃコツチもだぜ？」

「どの部隊よりも早く、〇一式に触れたもの。その恐怖にも…ね」

「そっか…」

わかってくれたか…。でも、それは帝国軍人とアルゴスの四人だけだろう。

訓練を終えた衛士は、皆一様に興奮していたけど、そこに〇一式…ビーム兵器への恐怖は一切無かった。

これは、何かアクションを起こさないとダメか…。

「ぜえ…ぜえ…！おいテメエ！二度も同じことしやがったな！？」

「…あのね、一度目は明らかにマナンドル少尉が悪いでしょ！？ああしなかったら僕が酸欠になってたからね！？」

「ぐっ…」

「…まあ、僕もやりすぎたよ。ごめん、マナンドル少尉！」

「…はあ。別に、もう気にしてないからいいよ。…そ、それと、いい加減名字じゃなくて名前で呼んでいいぞ！アタシを倒したんだからな…！」

酒でも回ったのか、顔を赤くして威張るタリサ。吹き出しそうになるのを堪えるのは相当キツイ…！

「う、うん…じゃあタリサ。これからもよろしく！」

「おう！」

「そんじゃ宗一、俺も名前でもいいぜ。それがVGでもな！」

「私もステラで構わないわ。よろしく、宗一大尉」

「ヴァレリオもステラもよろしく…！さて、一応仲良くなれたことだし…酒盛りだ！！マスター、ここのじゃないお酒出してもいい？もちろん、お店にも数本出すから、さ」

「……構わん。だが……」

マスターは少し考えるとオーケーしてくれ…たけど目付きが鋭くなる。

「だ、だが…？」

「自分で頼んだ物を飲まんうちには許さん！…わかったな？」

「一応言つとくけど、ここのマスターってハルトウィック大佐の戦友だから。怒らせたら怖いぜ？」

「ウソ、マジ！？」

宗一がマスターを見つめると、「余計なことを…」とヴァレリオに言いながら他の客の所に歩いていった。…世間は意外と狭いものだな…。

「おお！？オイオイ宗一、こりや何てビールだ！？メチャクチャ美味えじゃねえか！！」

「ング…ング…ング…ぷはー！！もう一杯！！」

あちゃー、あつちはあつちで出来上がった。箱のビールが次々と消えていく…。

「はあ…。ま、喜んでくれたならいいか」

口に運んだウィスキーは、中々の味だったと言わせて貰おう。そして、宗一達はタリサ達がべろんべろんになった所で解散した。

翌日、偶然通りがかった会議室を覗くと、案の定タリサとヴァレリオが二日酔いでダウンしていた。

考えて飲んでいたステラは大丈夫だったみたいで、二人が撃沈しているなか、お土産の中に混ぜていた紅茶を一人優雅に飲んでいた。

ステラ、恐ろしい娘！

会議室を後にすると、入れ違いでイブラヒムが入り…直後。ユ
コン基地に二つの雷が落ちた。

いつの間にか六十万…的な外伝（後書き）

…ツンが！タリサのツンが…！！

もう少し上手く書けるよう努力致します…！

ミスリル「……では、次回予告です」

三咲「遂に始動したX F J計画！」

霞「…ユーコン基地に集うメンバー。出会うもう一人の主人公…」

唯衣「……そんな中、米国の特殊部隊が遂に姿を現す……（何故私
がこのようなことを…！）」

涼子「そして、全世界を震撼させる事件が…！」

全員「「次回、救済 X F J計画、始動！こうご期待！」「」」

まりも「…えー、この予告はフィクションであり、本編と異なる事
がございますがご了承ください……って、何で私まで…！！」

トータル・イクリプス編第九話（前書き）

お待ちせしました！過去最長？記録を更新した今話、どうぞ！！

トータル・イクリプス編第九話

＼ ユーコン基地 滑走路 〉

〇一式の演習から一週間。ようやく各国の〇一式の配備が始まり、実機訓練でも使用されるようになってきた今日この頃。ついに、日本のXFJ計画が始動した。

アメリカのボーイング社との合同で、既に持ち込んでいた不知火型丙・乙にパーツの組み込みを始めている。結果は上々のようで、細かい調整を入れれば三週間で不知火式型が形になるらしい。

そして今日。XFJ計画の総責任者として篁中尉がユーコン基地に来る。…三咲とミスリルも一緒に。

ミスリルはもちろん擬装装甲の件だ。三咲は、僕もすっかり忘れてたけど篁中尉と模擬戦をした後に、XFJ計画に参加する話になっていたそうだ。巖谷中佐が強権使ったみたい…。

と、ジェットエンジンの轟音が聞こえてきた。

そろそろかな？

数分後。各二基の再突入殻を抱えた二機のムリーヤが滑走路に着陸し、篁中尉と三咲、それにミスリルが降りてきた。

＼ ムリーヤ機内 〉

「唯衣ちゃん、ミスリルちゃん、もうそろそろで着きますう〜！」

「はいはい。わかりましたから三咲さんは座ってください。着陸できませんよ?」

「相変わらずだな…三咲は」

幼なじみの変わり様の無さと、本人より幼いミスリルに説教される三咲を見て、笑顔が零れる。

視線を三咲から、アラスカの瑞々しく雄大な景觀に移し、ため息をつく。復旧が始まっているとはいえ、未だに国土の半分以上が廃虚と瓦礫の山になっている風景に見慣れてしまった唯衣の目には、この景觀は眩しすぎた。

(…そうだ。ほとんど意味を失ったとはいえ、X F J計画を完遂させれば日本…いや、世界が救われるのだ)

唯衣が決意を新たにしている内に、ムリーヤは着陸したのだった。

） ユーコン基地 滑走路 ）

「簗中尉、三咲、ミスリル！久しぶり！」

そして、私達を一番に出迎えてくれたのは矢羽田大尉だった。後ろに何人かいるようだが、〇一式の関係者だろうか？

「矢羽田大尉、出迎え感謝します！」

「そ……っと。矢羽田大尉、お久しぶりですう！」

「…お久しぶりです、艦長」

「みんな元気そうで何よりだよ。さ、司令部まで案内するね。あ
とこの人達は…」

「アルゴス試験小隊の隊長を勤めている、イブラヒム・ドゥール
中尉だ。篁中尉、よろしく頼む」

代表として、中央に立っていたイブラヒムが挨拶をする。唯衣達
はそれに返礼し、そして司令部に向かうのだった。

） 司令部 ）

「遠路はるばるご苦労だったな、中尉。私が『プロミネンス計画
』を預かるクラウド・ハルトウィックだ」

「はっ！『XFJ計画』開発主任として着任いたしました、篁
唯衣中尉です！」

司令室に案内された唯衣達は 宗一は案内が終わると、アルゴ
スのメンバーを連れて何処かに向かった クラウドに着任の挨拶
をしていた。そして後ろには、イブラヒムが立っている。

「話は矢羽田大尉から聞いている。貴官の計画の完遂、全力でサ
ポートさせてもらおう」

「はっ！ありがとうございます！！（矢羽田さんはなんて話した
のだ？後で問い詰めないと…）」

「紹介は済んでいるだろうが、後ろにいるドゥール中尉のアルゴ
ス試験小隊が、『XFJ計画』を担当してもらう部隊だ」

唯衣がイブラヒムを見る。軽く頷き、口元を僅かに緩めるとすぐに引き戻した。

「そして、メインテストパイロット主席開発衛士としてこの人物を用意した」

バサツ、とデスクの上に投げ出された封筒から書類が出てくる。

（日本人…？いや、日系アメリカ人が…）

「実戦経験こそ無いが、F-22（ラプター）にも乗っていたというエリートだ。申し分ない経歴だと思う」

「…アメリカ合衆国陸軍戦技研部隊所属　ユウヤ・ブリッジス少尉…か」

唯衣はユウヤの写真付きの書類を見ながら、額に皺を浮かべるのだった。

（　統合司令部　地下会議室　）

「改めて、ようこそユーコン基地へ。今からアルゴスの残りの皆を紹介するよ」

再び宗一と合流した唯衣達四人は、宗一の案内で地下会議室につれてこられた。

そこには、滑走路で出迎えていた残りの三人が座っていた。

「アタシはアルゴス2のタリサ・マナンドル！ネパール陸軍の少尉だ！」

「アルゴス3こと、イタリア共和国陸軍のヴァレリオ・ジアコーザ少尉であります。あ、後でお茶で…イッ！？」

「スウェーデン王国陸軍、アルゴス4、ステラ・ブルーメル少尉です」

失礼がないよう、ステラに足を踏まれて悶えるヴァレリオ。爪先を狙われたのか、相当痛そうである。

「日本帝国斯衛軍、ホワイトファンング中隊所属の篁 唯衣中尉だ。X F J 計画の開発主任も務めている。よろしく頼む」

「国連軍横浜基地、特殊戦術機甲部隊ガーディアンズ所属、宮野三咲少尉です！X F J 計画だと、基本的に仮想敵^{アグレッサ}を務める予定です。よろしくうー！」

「同じく、国連軍横浜基地、ガーディアンズ所属のミスリル・矢羽田」です。父さんがお世話になっています」

ピシリッ！

幻聴だと思うが、会議室の空気が固まる音が聞こえた。

タリサは口を開けたままと固まり、ヴァレリオは

「ヒュー、やるねえー」

等とほざき、ステラに至っては

「あらあら」

と笑うだけ。しかも篁中尉なんか汚物を見るような視線に…！

「つて、ミスリル！何を…？！」

「…勝手に擬装装甲を持っていた罰です」

と言つてそっぽを向くミスリル。…い、今かわいいと思つてしまつた自分が悔しい…！

「そ、それとこれとは話が違」

「宗一 teme エー！！子供がいるなんて聞いてねえぞ！？」

「ちょ、タリサ！誤解を招くような事を言わな」

「あれれ？宗一さん、何をやっちゃったんデスかあ？」

う、動けない！笑顔なのに怖いってこれどうよ！？

「ちょ、待つて！関節はそっちに曲がらな…！？」

「はいはい、そんなのは気のせいですよ。………浮気は、成敗ですうッ！！」

「ギヤアアア　　！！」

その後、三咲の帝国式格闘術を喰らつた宗一を見たものはいなかった…。

） P X ）

「よつ、“お父さん”！」

「いいわねえー。和むわ」

「大尉、お父さんと呼ばせ…」

「ああ、もう！うるさくいい！！特に最後の！！」

XFJ計画の打ち合わせとかで三咲達と別れた後。お腹が空いたとミスリルが言い、PXに来たら、この始末だ。

「父さん、大人気ですね」

「まだ言うか！まあ、色々と物資を配ったりして友好関係は作ったから。…それより、何で父さん？兄さんでもよかったんじゃない？」

「だって、子持ちと知れば近づく輩も少なくなると香月博士が」

「……………まあ、今はいいや。それよりミスリル、“アレ”はちゃんと？」

「はい。衛星軌道上で待機しています。指示さえあれば何時でも降下可能です」

「うん。上出来上出来。ありがとう、ミスリル」

宗一が言った“アレ”。それはあくまで保険として持つてこさせたのだ。使わないに越したことはない。

そう願いながら、合成ペペロンチーノを食べるのだった。…うん、微妙だ。

） 一週間後 ）

「広報任務…ですか？」

XFJ計画が始動してから一週間。宗一はハルトウィックに呼び出され統合司令部にいた。

「ああそうだ。プロミネンス計画もそうだが、今の人類には希望が必要なのだ。その為に、大尉には第四世代機で来てもらいたいのだ」

広報任務と聞いて、嫌そうな顔を一つ。しかも資料を見れば、実弾を搭載した、とあるのだ。

「実弾使用に関しては、広報担当が実弾を撃っている所が撮りたいたからそうだ」

「……あの、本当に自分でなければ？」

「……あまり言いたくはないのだが、ロシア側から圧力が掛かってな。紅の姉妹の一人が駄々を捏ねたらしく……な」

「イ、イーニヤ……。わかりました、引き受けます。その代わりに、機体は此方で選びますが構いませんね？」

「ああ。それで構わない。…感謝する、大尉」

「いえ、任務ですから。では、失礼します」

そう言い、宗一は司令室から退出した。

それから三時間後。宗一は、国連軍の強化装備を着込み、ハンガリーの前に立っていた。右隣にタリサを連れて。

なんと、この広報任務にタリサが選ばれたりする。気性の荒いタ

リサより、ステラの方が適任

「何考えてやがる？ああ！？」

「ちよっ！？わ、悪かったからククリナイフをしまっ……！」

「……フンツ……！」

女ってこういう時は勘が良いんだよなあ……。

「そーいち……！」

どうやって機嫌を治すか考えていると、腹部に軽い衝撃。一応構えていたから、ふらつく事は無かった。

「おっ、イーニヤ！……とクリスカさん」

「……矢羽田大尉、貴方に名前で呼ばれる筋合いは無い」

……げ、こっちもか！というかクリスカさんには何もしてないよね！？何で殺気まで飛ばしてくるのさ！？

「……」

「……」

「あのさ……イーニヤ、タリサ、睨み合うのはその辺で、ね……？」

あー、もう！何でこんな修羅場になってるのさ！？誰か助けくれ……！

と、心の叫びが届いたのか、二人の救世主が現れた……！！

「すまない、予定が狂って遅れてしまった」

「……おい。イーニヤ、クリスカ。いい加減にしろ。祖国の顔に泥を塗るつもりか？」

現れたのは、軍人にしてはガツチリとしていない、事務官です、と言わんばかりの男性と、宗一と同じ年と思われる青年だ。

「私は国連軍広報官のオルソン大尉だ。貴官らが矢羽田 宗一大尉にタリサ・マナンドル少尉で間違いないな？」

「はっ！そうであります！」

「よろしく願います、オルソン大尉」

タリサは大尉と聞いて姿勢を正す。宗一は同じ階級なので若干軽い。

そして、紅の姉妹の二人の説教が終わったのか、短い金髪の青年がこちらに歩いてきた。

「申し訳ありません、部下が迷惑をおかけしました！！自分はペトルーシカ・イワーノヴィチ。階級は中尉であります！」

「ペトルーシカ中尉、僕は気にしてないから。後、無理矢理堅くしなくていいよ？普段通りでいい」

「……了解した。なら、俺の事はルーシカと呼んでくれ。仲間はみんなそう呼んでいる」

「よろしく、ルーシカ中尉！」

ペトルーシカ…いや、ルーシカが手を差し伸べ、宗一と握手する。がっしりとした手は力強く、暖かった。

「…あの、イーニヤ達がずっと震えてるけど大丈夫？」

「問題ない。ただ、兄を怒らせたらどうなるか思い出させただけだ。なあ？クリスカ、イーニヤ」

二人はビクツと肩を震わせると、顔を青くしたまま謝ってきた。

… 一体ナニをしたんだ？

「さて。自己紹介が済んだところで任務の説明だ。今回は」

オルソン大尉の説明を聞き流しながら、この任務の不審さを思い出す。

まず一つ。実弾を装備した上での撮影。

まず間違いなく罠だ。何かを仕掛けて、こっちの機体のデータ取りが狙いかもしれない。

二つ目、この任務にソ連側が圧力を掛けたこと。いくらイーニヤがエースでも、それだけで圧力を掛けるのはおかしい…。

「大尉！矢羽田大尉！ちゃんと聞いているのか！？」

「へっ？き、聞いてます聞いてます！タリサと紅の姉妹の三人が先に飛んで、僕とルーシカ中尉がそれに続く、と…」

「……まあ、いいだろう」

目元はかなりピクピクしてるけど、同じ階級なお陰が助かった。

… タリサめ、笑ったな？お前だけオヤツは抜きだ！

「では各自、時間になり次第所定の場所に集合。解散！！」

最後にビシッと敬礼をし、ソ連側と国連側に別れ格納庫に戻っていった。

「最終チェック開始：各関節、異常なし。跳躍機、推進剤ともに異常なし。火器管制、クリア。“ブレードストライカー”、正常起動。…オールグリーン、と」

結局、広報任務に持つて行く機体は天叢雲になった。三種の神器シリーズで、一番日本を表しているから、だそうだ。

『父さん、ブレードストライカーはどうですか？』

「特に問題なし。ただ、長刀を分離させたら飛びにくいのが難点かな。アタッチメントか何かを翼の代用にするようにしたら良いと思う」

『…その手がありましたか！データは横浜基地に送りますので、改修機はすぐできると思います。父さん、ありがとうございます』

「…まだその呼び方？つて、あれはタリサとイーニヤ達？何やって…ッ！」

通常歩行で集合地点に着いてみると、握手をしようと差し出したタリサの手を、クリスカがビンタで払ったのだ。

すぐにタリサは暴れ始めたけど、その場にいたヴァレリオが抑えてくれて事なきを得た。

クリスカは、そのまま何かを言い残すとS U - 37 U Bに向かっていった。

「……………」

『ご愁傷様、とだけ言わせていただきます。これでトラブルは確実ですね』

「もう、勘弁してくれ……」

ミスリルから通信機越しの慰めを受けて、宗一はこの日一番のため息を吐くのだった。

） ムリーヤ機内 ユウヤ side ）

「うわあゝ！見て見てヴィンス！山脈がスゴいよー！！」

「おおっ！マジだな！やっぱグルームレイクとは全然違うな！！」
（…このバカップル共が）

現在、グルームレイク基地から発進したムリーヤは、ユーコン基地に向かっている。五十人は収容できるキャビンには、ユウヤとヴィンセント、セレスの三人だけという貸切状態だった。

そして、いい加減ヴィンセント達が五月蠅くなってきた注意しようとした時、それは起こった。

ガコンッ！！

突如、体が浮遊感に見舞われ、次の瞬間には激しい震動が彼らを襲った。

「ココンッ！？」「」

「何だ何だ、再アプローチか！？」

「……違う！ユウヤ、コックピットに！！」

「わかってる！」

事態の異常性にいち早く気づいたセレスは、ユウヤをコックピットに向かわせる。残念ながら、CPオフィサーである彼女では揺れに揺れている機内を移動することが困難だからだ。

多少ふらつきながらもコックピットに着くと、そこは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

ひっきりなしに管制塔へ問い合わせを続ける副操縦士。計器を見ながら、操縦幹をどちらに切るか迷っている主操縦士。メインパイロットこれだけを見て、ユウヤは叫ばずにいらなかった。

「何があつたんだ!？」

「後方から戦術機四機がこっちに突っ込んで来るんだよ!!」

「クソッ! 管制塔、アイツ等を追い払うなりなんなりしてくれ! このままだと衝突するぞ!」

キイイイ ン…

(これは… 格闘戦機動か! ? くそつどこのバカだ!! この状況なら回避なんて運任せだぞ!!)

「こうなったら、一端高度を上げて…!」

「ッ!? 逆だ! このまま高度を下げる!! 滑走路まで突っ込めッ! !」

機首を上げようとした操縦士を押し退け、無理矢理操縦幹を倒す。次の瞬間、爆音を奏でながら三機の戦術機が飛び去った。

遅れて残りの一機がムリーヤの近くで止まり、通信を開く。

『こちらはイーダル3。そちらの機体、問題はないか?』

イーダル3とかの相手は操縦士達に任せ、ユウヤは三機が飛び去った方角を見て武者震いを起こした。

あんな化け物を開発しているのだ。もしかしたら、今以上の機体だっているかもしれないからだ。

『そうか…ともかく、うちの部下が迷惑をかけた。HQからそちらの誘導を指示されたから、ついてこい』

ジュラブリクの衛士はそう言うと、ムリーヤの前を飛び始めた。

「助かったよ！もしアンタが助けてくれなかったら衝突で死んだぜ！」

「違う！本当にありがとうな！！」

「…ああ」

操縦士達の感謝にも上の空で、ユウヤはコックピットから出ていくのだった。

） 数十分前 ）

撮影開始から少し。発進当初は荒れに荒れていたタリサも、どうにか落ち着いたのか大分静かだ。…本当に、通信機越しとは言え、愚痴を延々と聞かされるのは堪えるよ。

『大丈夫か？どうやら収まったようだが…』

「うん、ルーシカ中尉ありがとう…。一応収まったみたいだけど、まだ安心できないよ。タリサがイーニヤ達の後ろに付いてるから、調子に乗って何かやらしかねないから…」

『…まあ、手の掛かる部下を持ったのが運の尽き、と諦めるしかないまい？俺だって、紅の姉妹を預かってから丸一月かけてアレだからな』

「…その結果であんなに怯えたんですか？」

『…不可抗力だ！まあ、俺の事を“始めからいなかった”ような振る舞いをしたとき以外にお仕置きはしてないから安心しろ』

「お仕置きつて…。（始めから…？クリス力はともかく、イーニヤがそんなことをする筈がない。まさか…）」

見た感じ、クリス力達とペトルーシカの仲は凄く良さそうだった。それが一時とはいえ忘れた振りまでするだろうか？

宗一が、考えうる限り最悪である可能性に辿り着きそうになった直前、それは起きた。

） sideタリサ ）

「ああああ…！イラつく…！」

アタシことタリサ・マナンドルは、チビと氷像女の態度で不機嫌を通り越して完全にブチキレていた。

そこまで付き合いの長くない宗一にはわからなかったみたいだけど、さつきまで随伴してたVGはアタシの激情に気づいてたみたいだ。

「くっそ、やっぱり収まんねえ……………おつ、良いこと思いついた！」

イライラしてたら、仕返しの名案が浮かんできた。撮影のせいで、アイツらはアタシの前を飛んでる。つまり、無防備な背中を向けて

いるのだ。

「…フフフフ、後ろからロックされて慌てふためけ!!」

自分で言ってる、随分と悪役臭かったけど今は気にしない。右手の突撃砲をS u - 3 7 U Bに向け、ロックした。

この後、アタシは自分が仕出した事に酷く後悔するのだった。

「なっ…消え…!?!」

紅の姉妹をロックした瞬間、アイツらは眼前から姿を消したのだ。

「何処だ、何処に行っ…!?!」

ビー！　ビー！　ビー！

今度はこっちのロックオン警報がけたましく鳴り響く…しかも後ろ!?!

「ッ!?!」

ゾクッ、と背中を走る悪寒。後ろにいるS u - 3 7 U Bから発せられる濃密な殺気に当てられたからだ。

（ヤバイヤバイ逃げろ二ゲロ逃ゲロ!!）

負けた。ロックされ、後ろを取られ、それに怯えて逃げ出してし

まった。今は、生存本能に任せて逃げることしかできない…！

「!?CPからアルゴス2、所定のコースから外れている！直ぐに復帰せよ！模擬戦闘の許可は降りていないんだぞ!?」

「できるかバカ野郎！アイツら本気なんだ…！！逃げるのを止めたら……殺られる…!!」

反射的に怒鳴り返すも、少し涙声に聞こえてしまったのが悔しさを倍増させる。

そして視線を機体後方の映像から正面に移す…と。

「っ…何で輸送機が居るんだよ!?邪魔だああ

…!!」

輸送機は再アプローチのつもりか、高度を上げ始める。後ろの奴が実戦モードに入っている以上、上手くかわせるかどうか…。

けど、そこはエースとしてのプライドか、咄嗟に格闘戦の三次元機動を調整、直撃だけは避けるコースを取る。
ドッグフライング

が、もし輸送機が更に上昇すればかなり危険だ。…でも、やらな
いとどっち道死ぬしか無い!

「タリサ!落ち着いて!」

「クリスカ、イーニャ!何故止めない!?聞こえていないのか!」
?」

やっと追いついたのか、宗一達の叫びが聞こえた気が…。でも今はそれさえ無視。

眼前の輸送機が更に近づいた時、機体が一気に降下した。

「!今だッ!!」

四基のエンジン、プラッツ&ウィットニー114wbが咆哮を上げ、機体に大きなGがかかる。

次の瞬間には、急加速で輸送機を追い抜いていた。だが、一番の危機は去っていない。すぐ後ろから迫る悪魔に落とされないよう、アタシは更に加速させるのだった。

）タリサ side out next side to 宗一
）

「あの三人…もう許さない!!」

あのムリーヤが高度を下げてくれたから何とかなったものの、それを反省もせずに止めないとは…。いくら温厚な僕でもキレましたですよ三方!?

「…アルゴス2、並びにイーダル1。あと十秒以内にそのふざけた遊びを止める。無視するならば、これ以上被害を出さないためにも……落とす」

最後だけに、僕が出せるだけの殺気を籠める。涼子達でさえ怯えた殺気だ。無視はできない…はず……多分。

と思つてたけど、効果はあつたみたい。イーニヤ達のSu-37 UBの動きが固まり、こっちに向かって突進してき…って何でじゃ…!!

「ちょ！？イーダル1、何でこっちを狙うの！？」

『……………』

「無視か。無視ですか。…警告はしたからな！」

○一式突撃砲の36mmをSu-37UBに向け、引き金を引く。もちろん、イーニヤ達とはつくに回避コースに入っているから、当たらないのは知っている。でもそれでいい。今は被害を出さないためにも、安全な空域に出なければ…！

「管制塔、こちらガーディアン1！今からエリアB-037に向かう！該当エリアに誰も入れるな。いいな！？」

『り、了解！…』

「あとタリサ！戻ったらイブラヒム中尉と一緒に一発殴るからそのつもりで…！」

『……………了解』

「さて…！」

射撃を止め、最大戦速でB-037に向かう。Su-37UBはそれに釣られて接近、撃ってくる。

「っと！甘い甘い…！」

上、右、下、左、とブレードストライカーの推力と自由に動かせる主翼を使つてのランダム回避。結構Gがきついけど、砲弾を避けることには成功している。途中で120mmも混ざってるし、大分弾は減らした筈。今なら…と、その前に。

《イーニヤ、クリスカ！本当に聞こえてないの?!返事して!!》

《……………》

《た…すけ…て…そーいち…!!》

「イーニャ…！待ってる、今助けるから…！」

リーディングとは違う、テレパスだからこそと言うべきか。ようやく、イーニャの声が届いた。

二人を助けるためにも、腰とストライカーのブースターを全て噴かし、Su-37UBから距離を取る。

追ってくるのを確認してタイミングを計る。気付かれないよう跳躍機だけ推力を落とし、近づかせる。

じわじわとSu-37UBが近づき、射程内に…入った！

「今ッ…！」

ブースターを全てカット。跳躍機だけは前に向けさせて逆噴射をかける。

Su-37UBは直ぐ回避機動に入ったが、近すぎた。

天叢雲とSu-37UBの両脚が接触した…瞬間。ブレードストライカーの主翼からビーム刃が発生し、Su-37UBの膝から下を切り裂いた。

無理な回避機動を取っていたせいで、急激な重量変化についていけずSu-37UBは落下。宗一が通常の短刀で武装だけ切り捨てた後、機体を抱き上げユーコン基地に帰還した。

（滑走路）

無事に着陸したムリーヤは、格納庫に向かっている。もちろん、

ユウヤ達三人は降りてジューブリークとF-15・ACTVの側に
来ていた。

「へえ、F-15の新ヴァリエーションか！兵装担架を取っ
つてエンジンを付けたのか…」

早速ヴィンセントはF-15・ACTVに近寄り、色々と眺め始
めている。と、二機の衛士であろう強化装備を着込んだチビと金髪
が歩いてきた。

「おいお前！アタシの機体に何やってんだよ！？」

「ん？あ、もしかしてこの機体の衛士！？凄え空中機動だったよ
な！エンジンは何に換装してあるの？最高出力はぶはぁッ！！」

いきなり怒鳴ってきたチビに詰め寄るヴィンセント…。一瞬本気
で警備兵を呼びかけたぜ。でも、ちゃんと成敗してくれる奴はいる
からな。

「ヴィンスくなに他の女の子に手を出してるのかなぁ？」

「お、おいセレス？落ち着け、俺はあの機体が知りたかっただけ

…！」

「向こうで話、しょ」

「ま、待つてくれええええ……………」

ロリコン（ヴィンセント）は消えた。心の中で黙禱を捧げている
と、爆音が近づいてきた。音からして一機分…多分、あの二機の内
どちらかが落とされたのだらう。

「なっ…バカな、あっちが落とされたのか！？」

そう思い滑走路を見ていると、膝から下を無くしたS u - 37 U Bを抱え、着地姿勢を取る見慣れない機体の姿があった。

戦車砲を二門付けたようなバックパックを装備した機体は、S u - 37 U Bを整備士が集まっている場所に丁寧^{テイネ}に置くと、F - 15・A C T Vの近くに来ると膝を折った。すぐに管制ユニットのハッチが開き、日本人らしい衛士が降りてきた。

日本人だとわかると、すぐに視線をS u - 37 U Bに移す。見ると、そっちの方には専属と思われる整備兵達に取り付き、救助作業に入っていた。

「ふう…死ぬかと思った」

「大尉、アイツらを助けてくれたこと、感謝する。ありがとう」

「気にしないで、ルーシカ中尉。今の戦闘のお陰でわかったこともあるし。…それより、タリサ？」

無視はしても会話は聞こえてくる。チラリと視線を向けると、チビが体を震わせてヤツの前に立っていた。

するとヤツは、徐に右手を上げると

ゴンッ！！

「ツ~~~~~~~~!!?!?!?」

見るからに痛そうな拳骨を喰らわせていた。チビは頭を押さえて転げ回っている。

「さて。馬鹿者の修正が済んだところで……貴方がユウヤ・ブリッジス少尉か？」

「……はっ、そうであります、大尉殿」

「…ま、今はいつか。貴方がムリーヤを降下させたんだよね？あ

りがとう。あれのお陰でタリサが死なずに済んだよ」

「っ！…どうも」

手を指し伸ばされて、固まってしまった。はっ、となつてすぐに握手したが…やはり、日本嫌いは治つてないようだ。昔に比べたら大分マシだけど、な…。

「…ユウヤ・ブリッジス少尉！」

「はっ！！」

温厚な雰囲気消した宗一の声に、ユウヤは姿勢を正す。

「貴様には今から統合司令部に向かつて、そこで貴様が着任するアルゴス試験小隊と合流しろ。私は事後処理のため行けないが、司令部まではここに転がっているマナダル少尉が案内する」

「了解しました！」

「…よし！じゃあ僕はこれで失礼するよ。ルーシカ中尉、行きますよ！」

「了解。…せめて最後までもたせられないのか…？」

いきなり元通りになった宗一に面食らい、敬礼もできずに固まったユウヤは、何故かエクトプラズマを口から出しているヴィンセントを引き摺ってきたセレスに再起動され、タリサが復活してから統合司令部に向かうのだった。

2000年7月5日。役者が揃った物語は、異物（宗一）を巻き込みながらも始まるのだった。

トータル・イクリプス編第九話（後書き）

今悩み中なのですが、やはりユウヤの吹雪特訓編も書いた方がいいのでしょうか？

実はそこをふっ飛ばしてグアドループに行こうか…二つ路線がありまして？

違いと言えばセレスやアリス、マイケル・パレ、エレン・エイムの活躍が増えるか減るか…それかはやくアヴァチャ湾に行くか行かないかの差です。

どちらにしようか、アンケートをしようかと。感想に、どちらが良いかお願いします！

期限は一週間です。皆様、ご協力お願いします！

番外編 ペトルーシカ・ストーリー（前書き）

はい、外伝です。気づけば七十万越えてました。凄くびっくりでした。

今回はオリキャラのペトルーシカことルーシカ中尉が視点の短い物です。

ルーシカ中尉がアラスカに来る前のエピソード…どうぞ。

番外編 ペトルーシカ・ストーリー

「異動：でありますか！？自分が！？」

はじめは、目の前にいる基地司令の言葉を信じられなかった。作戦でもミスは無く、自分の小隊は未だに戦死者が0なのだ。何かの間違いでは、という期待を込めて司令を見るが、答えはかわらなかった。

「事実だ。しかも上層部から直々に、な。私としては、優秀な部下を内地に送らなければならぬことがシヨックだ。……まあ、若い命が危険から遠ざかると考えればマシだがな」

戦闘から帰ってすぐの呼び出し。嫌な予感がしながら司令室に向かえば、待っていたのは後方への転属だった。

ここの基地司令は、今まで出会った上官の中で一番部下の事を考えている人だ。そんな人の下を離れる事、そして一年以上共に戦場を生き抜いてきた仲間と離れることが。本当に嫌だった。

「……命令の撤回は…無理でしょうか…？」

「…まず、不可能だろう。中尉が異動する場所は……アラスカだ」「アラスカ……プロミネンス計画ですか！？」

「そうだ。わかったと思うが、これは栄誉あることなのだぞ？中尉が開発した機体で、祖国の勇士達が救われるのだぞ？……暗く取らない事を願う」

「……………はい」

消え入りそうな声を何とか出すと、ペトルーシカは司令室から退出した。

俺ことペトルーシカ・イワーノヴィチは、親の顔を知らない。それはほとんどの少年兵に言えたことで、別段珍しくとも何ともない。ソ連の政策により、子供は生まれた途端母親から引き離され、施設に入れられて専用の教育……兵士になるための訓練を受ける。

その分部隊間での絆は深く、家族のように……いや、一つの家族と同じほど強固な絆で結ばれる。そして今、ペトルーシカの目の前で涙を流している三人の少年少女は、彼の弟妹達なのだ。

「ルー兄……っ……う……」

「泣くな、ルカ。手紙も書くし、もう会えなくなるわけじゃない」

最年少のルカは、“家族”の中で一番若い。そのせいか、堪えきれず涙を流してしまった。

「……そうよルカ。ルーシカが嘘をついたことがあって？」

「……う……っ……ない」

「なら泣くんじゃない！ルーシカが安心して行けないじゃない！」

そして、ルカを慰めているのがフラン、激を飛ばしたのはレミリアだ。何時も通りというか、相変わらずの“家族”を見て、心が落ち着く。

みんななら、生き残れる。と。

「……中尉、そろそろ時間です」

「わかった」

ルーシカのすぐ後ろに控えるアントノフから、操縦士がルーシカを呼ぶ。時計を見れば、既に十分もオーバーしていた。

「さて、俺はもう行かないといけない。……小隊全員、聞け！」

「……っ！！はっ！！」

「俺がアラスカから帰ってくるまで、誰一人として死ぬんじゃないぞ！？もし死んでいようなら、地獄から俺が引き摺り戻してやる。いいな！？」

「……了解しました！！隊長！！」

「ふ……。では、行ってくる」

ルーシカがアントノフに乗り込むと、すぐに扉が閉まり滑走路へ。ルカ達は、アントノフが見えなくなるまで、滑走路脇で敬礼を続けていた。

番外編 ペトルーシカ・ストーリー（後書き）

イクリプスでラトロワさんが言っていたソ連軍の現状を参考に、書いてみました。

結果ですが、吹雪特訓編は通過することになりました！次話の予定はユウヤvsタリサ＋です。

やっぱり、前話の予告は嘘になりましたね…本当にごめんなさい！！

次話は何時になるかわかりませんが……というかテスト真つ最中＋留年かかってるのに大丈夫かと思いつつ、これにて失礼します。

トータルイクリプス編第十話（前書き）

勉強した甲斐あって赤点回避に成功しました！

…とまあ作者のつまらない現実はいといて、今回はアルゴスチー
ムの模擬戦闘です！宗一は次には出る……はず……です？

トータルイクリプス編第十話

＼ ユーコン基地 地上 〵

ユウヤが調達した軍用四駆は、目的地である統合司令部を目指し舗装された道路を走っていた。三列ある席のうち、助手席にユウヤが座り、二列目にヴィンセント、セレス。三列目にはタリサ 名前は滑走路を出るときに聞いた が座っていた。

「おいユウヤ、見てみるよ！スゲエぞこりや！？」

軍用四駆に乗ってからおとなしかったヴィンセントは、いきなり大声でユウヤを呼ぶ……が、ユウヤは無視。だが、強く肩を叩かれ仕方なくヴィンセントの示す窓の外を見る……と。

「…何だ。ただデカイだけのハンガーじゃ無いか。こんなのグルームレイクでも…」

「お前の目は節穴か！？よく見るよ、戦術機の方だって！！」

更に五月蠅くなったヴィンセントに舌打ちしながらも、言われた通りに戦術機を…

「ん？…なるほど、そういうことか」

「やっとわかったか！アメリカ、欧州、ソ連製の戦術機が新旧入り乱れてるんだぜ！？戦術機の見本市みたいなもんだ！！」

確かに、戦術機に関わる者なら興味を抱かないでいられない光景だった。

ヴィンセントもこれで興奮が頂点に達したのか、誰も聞いていな

いの目に入った戦術機の解説を始めた。…といっても、セレスもいい加減五月蠅くなってきたようで十機目に突入した途端頬をつねられて終わったが。

「お！さっきのヤツもいるぜ！」

懲りないヤツだ、と思ってセレスの制裁を待っていると、一向に来ない。不思議に思って振り向くと…。

「アレは…さっきのー！」

そう、先程見た信じられない格闘戦をしていたS u - 37 U Bを破った、天叢雲だった。

背中にあつた大砲と翼が見られず不思議に思ったが、あれは追加兵装だったと予測する。事実、横向きだが背中には接続プラグが剥き出しになっていた。

「…ん？あちのイーグルはアンタの機体だったよな。結局聞きそびれてたけど、あれって…」

そこからヴィンセントが怒涛の勢いで質問を重ねる。馴れ馴れしく、しかもS u - 37 U Bの敗北と宗一の拳骨で苛ついていたのが災いし、一瞬で導火線に火が点いた。

「アンタさあ、整備兵のクセに何にも知らないの？アレはF - 15の高機動実験機で、名前はF - 15・ACTVっていうだよ。わかった？物知らずの整備兵さん」

ヴィンセントの笑顔が引きつった。しかもセレスまで。これは一波乱あるな…。

「い、一応あの機体も軍事機密だろうからさ……他の基地まで情報は来ないんじゃないかな。あははは……」

ヴィンセントは何とか、何とか作り笑いを保とうとしているようだが、そのせいで余計に酷い顔になっていた。セレスは深呼吸を繰り返して俯いている。……これは相当ヤバイ。

ユウヤはかなりの修羅場になると予想し、なるべく耳に入らないよう外の景色に意識を集中させる。

「ふうん。アンタ達、相当な田舎出なんだ？」

「……あらあら。確かにネバダのグルームレイク基地は田舎よ？一般人なんて立ち入り禁止だし、ねえ？」

ユウヤは見えていなかったが、セレスはそれはもう“素晴らしい笑顔で言い放った。苛ついていたヴィンセントでさえ一瞬で落ち着くほどの。

それでも、言葉だけはユウヤの耳に入ってくる。ユウヤは胃が痛くなるのを必死に堪えた。

「……グルームレイク基地、ねえ。あたしは知らないよ、そんな最前線を知らない三流基地なんて」

「テ、メエ……！小娘だと思って下手に出てれば調子に乗りやがって……！！グルームレイクはなあ、アメリカ陸軍最強の実験部隊がいる基地なんだぞ……！」

言外にその出身だと告げるヴィンセント。何だかんだで、親友も飛ばされた事に苛ついていたのを知り、ユウヤは申し訳なく思ってしまう。

「フン！小娘相手にキレルなんて……ああみつともないね」

「……………あらあらあら。さっき負けたことの八つ当たりかしら？ねえ、ユウヤ？」

セレスが話を向けても無視。後が怖いがこの中に入るよりはマシだ！

が、そんなユウヤの努力は報われずに、タリサはユウヤに目をつけた。

「あれ、そっちの人は衛士？何とか基地の」

「オイオイ、コイツは俺の相棒で基地じゃあ1、2を争う凄腕だぞ！？それにな、ユウヤがムリーヤの上昇を止めてなかったら…」

「（余計なことを…！）……………ヴィンセント、着いたらしい。さっさと降りるぞ」

ヴィンセントの口上を遮り、タイミングよく着いた司令部ビルを眺める。軍用四駆は殺風景なエントランスで停まり、ユウヤ達は中に入ろうとする……………が。

「……………」

タリサがユウヤを先回りして立ち、何か言いたげな視線をぶつけてきた。それに辟易としながらも、じっとタリサを見つめる。

「……………なあ、アンタに一つだけ言っときたいんだけど…。アンタが余計なことをしな「タリサ・マナダル少尉ッ！」「ヒウッ！」突然、エントランス全体に響いた怒号にユウヤ達までビクツと肩を震えさせた。タリサに至ってはガタガタと震えている。

「なあマナダル少尉、貴様は名誉ある広報任務を預かっておきながら何をやらかした！？」

「……あ……う……」

「……貴様を締め上げるのは後だ。今は……さっさと着替えて、報告書に記載する内容と、オレへの言い訳を考えておけッ……!」

「り、了解しました……!!」

そう言つて、タリサは走り去つていった。

ヴィンセントはざまあ見ると笑いを押し殺していた。

「はあ……全くもつて、何故オレの部隊は腕が立つてもこうなのだろうな……。で、貴様達が米国から来た助っ人だな？」

中尉の階級賞を付けた中近東出身を思わせる男　イブラヒム・ドール　にユウヤ達は敬礼をした。

「ユウヤ・ブリッジス少尉及び、ヴィンセント・ローウェル軍曹、セレス・ウィッティングトン軍曹、現時刻を以て着任いたします!」

「私は貴様らの所属するアルゴス試験小隊を指揮するイブラヒム・ドール中尉だ。着任早々、騒がしかったな。まあ、なにはともあれ……」

イブラヒムは爽やかに笑うと、右手を差し出し

「最前線へようこそ」

ユウヤ達を歓迎した。

そしてその翌日。統合司令部の地下会議室に招集されたユウヤは、簡単な自己紹介とブリーフィングが終わると、イブラヒムの提案で“歓迎会”を開くことになった。CASE-47…エレメント二機編隊同士で行われる対テロリスト用プログラムだ。もちろんテロリストが使用するのは戦術機である。

無論、この演習にはユウヤの実力を測る面も含まれている。

「戦域想定は、光線級が存在する地域より二百キロメートル離れた市街地。飛行高度は制限されるものとする。どちらもCPは壊滅、オープン回線も禁止、戦域データリンクは僚機のみだ。勝利条件はリーダーが撃墜、または全滅した方の負けとする。…何か質問はあるか？」

会議室にいるのはユウヤ、ヴァレリオ、ステラ、タリサ、壇上に立っているイブラヒムの五人だ。
イブラヒムが全員の顔を見回すが、誰も質問は無いようで黙ったままだ。

「…無いようだな。では編成を伝える。A分隊　リーダーはマナダル少尉、僚機はジアコーザ少尉。続いてB分隊　リーダーはブリッジス少尉、僚機はブレーメル少尉。尚、ブリッジス少尉には私に変わって一番機になってもらう」

「っ！？」

「ええー！？」

ユウヤが一番機：つまり隊長機となると聞いた途端、タリサは抗議の声を上げていた。

「何か問題でもあるか、マナダル少尉。私はXFJ計画が始まれば指揮所に入らねばならない。それにブリッジス少尉は計画のメ

インテストパイロット…これはその予行練習も兼ねているのだ」

「で、でも……宗一ならまだしもこいつがなんて……！」

諦めずに反論しようとしたタリサだったが、イブラヒムが一睨みすると静かに座った。そして後ろを振り向くとユウヤを睨み付けた。

（…八つ当たりかよ。でもまあ、これで本気の戦いができるだけ良しとするか）

タリサの駆るF-15・ACTVの機動は、ユウヤの目にしつかりと焼き付いている。もちろんSu-37UBの衛士もそうだが、それはまた今度と眼前の凄腕を倒すことだけに意識を集中させた。

「では一三二五にハンガーで集合だ。遅れるなよ」

「……はっ！」「……」

「よし、解散……！」

（ふ……。何時もと同じだ。力でねじ伏せるまでだ！）

ヴァレリオがタリサに連行されるのを視界に納めながら、ユウヤは気合いを入れるのだった。……と、その前に、

「なあ、ブルームル少尉、ちょっといいか？」

「……なにかしら？ブリッジス少尉」

解散の号令がかかっても席に座っていたステラの元に向かう。心の中で、待っていたのか？と思ったが、今は関係ないと頭の中から放り出した。

「安心して、少尉。私にも衛士としてのプライドぐらいあるわ。態と負けるようなことはしない」

「…そうか。やるからには、勝たないとな」
「……そうね」

言い終わると、ステラは滑るような動きで立ち上がり、会議室から出て行く。訓練前の会話としては短かったが、ユウヤ的に見れば充分だった。態と…と言っているときのステラの目と表情には、その言葉が嘘でないと確信できるだけの物を見られたからだ。

「…………お、まだ居たな！おい、お前！！」
（やっぱり来やがった…）

ユウヤがさつさとハンガーで機体の座席調整でも済まそうと考えていると、ヴァレリオを何処かに置いてきたタリサが走りながら会議室に舞い戻ってきた。

最後の一睨みで、何か仕掛けてくるとは思っていたが…。

「…………で、何のようだ？」
「あたしは、お前が中尉の代わりに一番機になるなんて認めないからな！！」

「……………」
「ま、あたしに勝てたなら、認めてやっても良いけどな！」

ユウヤが無言なのを、何も言い返せないと解釈したタリサが調子にのりはじめた。と言っても、ユウヤはこのうるさいガキをどうしようか考えていただけだが…。

（集合まで二時間弱……。まあ、まだ間に合うな）
「…？……おい、何無視してんだこの野郎！！」
「（やっと気づいたのか？）おい、チヨビ」
「チ、チヨ…！？」

「チョコビと言われた瞬間、顔を真っ赤にして怒るタリサ。ユウヤはそんなタリサを無視し、言葉を続ける。」

「チョコビ、さっきお前、あたしに勝ったら、って言ったよな？」

「チョコビって言うんじゃないー！……って、確かに言ったけどさ、それがなんなのよ！？」

「その言葉、守って貰うぞ」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。…じゃ、こっちは座席調整とか色々あるから」

「あ、コラ待「へえ」。大口叩くじゃんか、トップガン」……V
「G」

トップガンと言われて、一拍遅れて自分のタックネームだと気づいた。…また新たな目標ができたが、今は黙っておく。

「ま、その調子が本番でも出るといいな？じゃ、俺達の方こそ先にいくぜ。邪魔して悪かったな」

「あぐっ！？テメ、VG！絞まってる！！やめ……！」

ヴァレリオは最後にそう言つと、タリサの首根っこを掴んで引き摺って行った。

イマイチ掴み所のわからないヴァレリオの態度に混乱しながらも、ユウヤはハンガーに向かうのだった。

戦術機用の巨大なハンガー。高さは優に二十メートルを越え、戦術機が二機同時に発進しても問題ない巨大な扉の後ろで、アルゴス試験小隊は模擬戦前の最終ブリーフィングを終えていた。

ユウヤが乗る機体はF-15E。グルームレイク基地でユウヤの愛機だった物と同じ機体だ。

「ほあゝ。そりやまた凄い歓迎なこつて」

「お前、他人事だからって…」

F-15Eの管制ユニットの中で最終チェックをしていたユウヤは、ヴィンセントの投げ槍な返しに肩の力が抜ける思いだった。

「ま、実際そうだろ？俺は整備兵で、ユウヤは衛士。それぞれで世界が違うんだ。違うか？」

「……………」

「で、どうよ調整の方は？グルームレイクのヤツと全く同じとは言えないが、限りなく近いはずだぜ？」

確かに、ヴィンセントの言う通り機体の誤差はコンマ01以下。今日一日でここまで合わせられるのは、正に神業としか表現のしようがない。

「ああ。違和感もほぼゼロ。完璧だぜ、ヴィンセント！」

「なら、あのサル女に絶対勝てよ！……………主に俺の財布のために……………」

「ん？サル女……………ああ、チョビのことか。……………サル女は無いと思うぞ」

「あのチビにはサルで十分だ！……………にしても、相変わらずあだ名付けるのが早いな」

「いや、まだイブラヒム中尉とイタリア野郎……マカロニでいいか。中尉が決まってるない」

「思いつきかよ!？」

「別にいいだろう?……ハッチ閉めるぞ」

「了解了解。……蹴散らしてこい!!」

ヴィンセントの応援に笑って返すと、ユウヤは機体を起動させた。

＼ ユーコン基地 テストサイト18 第二演習区画 E-102
演習場 〉

市街地戦専用を用意された演習場は、二機の戦術機よるドッグフアイトの舞台となっていた。

片やゲルカの戦士が駆るF-15の高機動実験機F-15・AC TV。それに対するは、米軍が誇る基地のトップガンの駆るF-15シリーズの最高傑作と吟われたF-15E。両者の戦いは、熾烈を極めることは間違い無かった。

「アルゴス1（ユウヤ）から4（ステラ）。敵は絞れたか？」

『……ダメね。タリサ達は相当慎重になってるみたい。音響欺瞞筒をしこたま使ったようよ』

くそっ、とユウヤは舌打ちを打つ。苛立ちながらも、ユウヤとス

テラのエレメントは互いに周囲を警戒、索的しながら演習場の奥へと進んでいった。

乱立するダミーのビル群は動きを制限され、敵に隠れられれば奇襲の危険性が高まる厄介なステージだ。

「……っ!？」

と、次の曲がり角を覗こうとした途端、網膜に警告ウィンドウが現れた。

反応したのは音響センサー。しかもウィンドウが示す光点は三つ。

『……見つかった……いえ、“見つかったくれた”のかしら?』
「……ブルームル少尉の言う通りだな。明らかに罠……だが、今のでこちらを補足された可能性もある。行くぞ!」

ユウヤは隠密性を捨て、水平噴射跳躍で敵が待ち伏せていそうな地点に向かう。その地点地点に発煙弾を仕掛けながら、何時来られてもいいよう集中させる。

三ヶ所目に差し掛かった瞬間、一機のF-15Eが飛び出してきた。

「っ!!マカロニか!!」

素早く十字路に隠れ、仕掛けた発煙弾を起爆させる。が…

「!?!野郎…気付きやがった!」

F-15Eは地面への警戒を怠らなかったようで、ユウヤの仕掛けた発煙弾を見つけ、ペイント弾で無力化したのだ。

「クッ……！」

そのままマカロニとドッグファイトに入る。逃げたくとも、こちらの回避場所を狭めてくる射撃のせいで抜けられないのだ。

（このままだと……マズい……！）

『ユウヤ！進路そのまま！V Gを引き付けて……！』

「……わかった、任せるぞ！」

急な通信。信頼関係が出来きっていない状態で信じるのは難しかったが、ユウヤには会議室での会話が思い出されていた。負ける気は無い。その一言で、ユウヤはステラを信じたのだ。

こちらの動きが鈍くなったのを好機と見たのか、V Gが一気に距離を詰めてくる。機体の直ぐ側を砲弾が駆け抜けた。それを見てもくにも回避したい衝動に駆られながらも、ステラの言葉を信じて待つ。

「まだか……まだなのか……！」

もう限界、そう思った瞬間、マカロニのF - 15 Eの右腕と胴体に黄色い花が咲いた。カメラで砲撃の方を見ると、ステラのF - 15 Eが片膝を着いていた。

『うげ！？ステラ、狙撃しやがったのか……！？』

『アルゴス3、管制ユニットに致命的損傷、衛士死亡により大破……！』

「やったぜ！」

『そうね……っ！？』

『アルゴス4、胴体部に直撃弾。致命的損傷、大破……！』

と、一瞬の気の緩みが原因か、たちまちステラが墜とされてしまった。これで状況は五分五分。^{イブン}優勢から叩き落とされたのに、ユウヤの目には闘士が漲っていた。

『へっ！！これで一対一だ。掛かってこい！！』

「上等だチヨビ！捻り潰してやる！！」

ステラがいた地点から、F - 15・ACTVの特徴的な肩が見えた！と思った瞬間、F - 15・ACTVが消えた。

「なっ！？上！？」

乱立したビルの一つを蹴り上げ、同時に4つの跳躍機で空に舞い上がったのだ。迎え撃とうと視線を向けると、太陽の光が邪魔をして当てるできなかった。

すぐに機体を逃がすことに意識を向け、ギリギリのタイミングで36mmの雨から逃れられた。

『へっ！へたくソ！！そんな弾幕であたしを止められると思った！？』

何とかチヨビの射撃をかわせたが、次はない。後ろを取られながらもガンラックを起動させ、全力射撃。が、チヨビは見たことの無い異次元機動でそれをかわす。が、数発だが当たったようで、右手の突撃砲と左脚部のナイフシースが黄色く汚れていた。

『チッ、やるじゃんトップガン！けど、このACTVに格闘戦で勝てると思ったら大間違いだ！！』

「うるせえぞチヨビ！！グ……！！」

怒鳴り返した途端、機体を襲った衝撃と何かが壊れる音。右手を短刀に持ち換えたACTVが持ち前の加速力に物を言わせ斬りつけてきたのだ。お陰で弾切れ間近の突撃砲がやられてしまった。

『ほらほらどうしたの？逃げるだけ？』

「……………（まだ、まだだ！あと少し…！）」

いい加減逃げられるのが五月蠅くなったのか、タリサは跳躍機を噴かして噴射跳躍。すぐに背中の一基も噴かしてユウヤのF-15E目掛けて噴射降下を仕掛けた。

ぐんぐんと大きくなるF-15E。それを見てタリサは勝利を確信した……………が。

「っ！？しまった！！」

ここぞというタイミングでユウヤは跳躍機を反転し急減速。目標を失ったタリサは地面に短刀ぶつけ折ってしまったが、体勢を整えることには成功した。が、ユウヤがそんなチャンスを逃すわけなく…

『アルゴス2、管制ユニットに直撃！大破！』

『くっそー！っ！』

『状況終了。全機帰投せよ！』

タリサの悔しげな叫びを聞きながら、ユウヤはどつとのし掛かってきた疲労感に力を抜くのだった。

トータルイクリプス編第十話（後書き）

） おまけ ）

「うおっしや ツー！大穴だぜー！」

「ああ畜生！何でやらなんだよVGは！？俺の十ドル返しやがれー！」

模擬戦の結果が届いたハンガーでは、大半の整備兵が悲鳴を上げてのた打ち回っていた。

そんな中、ヴィンセントは手元に來た大量のドル札に顔を良くしながら戻ろうとすると、その背中に鋭い視線が突き刺さった。言わずもなが、すった先任整備兵達からだ。

「なあゝヴィンセントおおゝゝ」

「な、何ですかロンズさん？」

逃げ遅れた！心の中で叫びながら、油の切れたブリキのように後ろを向く。

「今日なゝお前の歓迎会があつてなゝ？リルフォートまで飲みに行かねえか？」

「そ、そりやあ有り難い話つすけど……資金は大丈夫なんすか？すったばつかなのに……」

「ん？あるじゃねえか。お前の腕の中に」

気づけば買った整備兵までもがヴィンセントを囲んでいた。

それを見たヴィンセントは肩をがくしと落とし、賞金を差し出すのだった。

(さらば…俺の五百ドル…プレゼント…)

ヴィンセントは心の中で涙を流すと、ユウヤのF-15Eが帰ってくる整備ベッドに向かうのだった。

〽 その夜 〽

「あれ？ヴィンス、プレゼントは？」

リルフォートの帰り道でバッタリ遭遇したセレスの悪意なき一言に、ついにヴィンセントは泣き崩れるのだった。

トータル・イクリプス編第十一話（前書き）

ふう……。人生初のシーン書きです。ようやくパソコンが復活してギヤルゲーができたらしょうか？

今回あるシーンに何かありましたら感想までお願いします。

トータル・イクリプス編第十一話

） 7月15日 ユーコン基地 X F J 計画専用格納庫 ）

アルゴス小隊に配属されてからはや一週間と少し。今ユウヤは、整備兵のヴィンセントと共に薄暗い地下にある格納庫まで来ていた。幾つにも渡る網膜、掌紋認識式の検問を通過して、やっと中に入れた一同を待ち受けていたのは所々にカバーをかけられた“モノ”だった。

「オイ、見ろよユウヤ！」

「コイツは……？」

「戦術機だぜ！外装を全部取っ払ってるせいで判りにくいかもしれないが、間違いなく戦術機だ！」

普段から整備をしているヴィンセントにはそう珍しくないようで、事も無げにユウヤの呟きに返す。

戦術機に乗った後、基本衛士はすぐにデブリーフィングを始める。もちろんその後はシャワーを浴びて……などとしているせいで、ユウヤがここまで戦術機の中身を見るのは初めてのことだった。

そしてヴィンセントの言う通りに良く見ると、確かに戦術機の頭部の様な物がカバーで膨れていた。

更に機体について聞こうと横を見れば、いつの間にかヴィンセントは戦術機を見るため居なくなっている。

ユウヤは相棒の変わらない行動にため息をつく、ここに来るまでの経緯を思い出すのだった。

「あ、居た居た！ブリッジス少尉、ちょっと来て！」

それは、PXで軽めの昼食を取った後だった。矢羽田…とか言った大尉が基地の廊下から突然現れ、いきなり連行してきたのだ。

説明を要求しても後での一点張り。階級が上なこともあり、渋々とだが大人しくついていく。

エレベーターに乗り込み、何やら上に上がっているようだが、そんな高級軍人達しかいないような場所に連れていく宗一に、ユウヤは余計に宗一の目的がわからず混乱する。がそれも、エレベーターを降りた所で理解した。

「司令室…？何でそんなところに…」

「中で説明するよ。……ハルトウィック大佐、ユウヤ・ブリッジス少尉を連れて参りました！！」

『入れ』

ノックの後、暫くしてハルトウィックの渋い声がドア越しで聞こえてきた。宗一は「失礼します」といいながら入り、ユウヤもそれに続く。するとそこには、ヴィンセントと軍服を窮屈そうに着ているメガネの男が戦術機の話で盛り上がっていた。

「ヴィンセント！？何でお前がここに？」

「それについては、私から説明させてもらう。ブリッジス少尉」

ヴィンセントに向けていた視線を左に向ける。そこには、美しい黒髪の少女がいた。

「私は篁 唯衣中尉だ。X F J計画の開発責任者も勤めている」

相手が中尉と名乗った途端、反射的に敬礼をしてしまった。“日本人相手に”。

唯衣が敬礼を止めると、すぐにユウヤも止めた。そしてこの部屋に連れてきた張本人を睨み付ける。

「いや、そう睨まれても……」

「……ッン！！ブリッジス少尉をここに呼んだのは、X F J計画についてだ」

ひとまず席に。そうハルトウィックに言われたユウヤは唯衣とは最も離れた席に座り、宗一は唯衣の隣に座った。そして全員が席に着いたのを確認すると、唯衣が話始めた。

「ブリッジス少尉は、X F J計画についてどのように認識している？」

「は！日本帝国の第三世代戦術機TYPE-94を自国で改修を試みるも頓挫。アメリカの協力を得て開発を続行した……と認識しています」

「うん、大体合ってるけど、ブリッジス少尉が語ったものは“表向きの認識”なんだ」

「表向き……？どういうことですか！？」

「ふふ。テストパイロットとして出し惜しみされるのが嫌なのはわかるが……場所変える。ついてこい」

意味深に笑うハルトウィックと宗一に、ユウヤは若干不機嫌になりながらも席を立つのだった。

そして冒頭に戻る。分解中の戦術機を眺めていると、視界の隅にもう三機程の機体があることに気がついた。

「あれは……」

「矢羽田大尉が開発された世界初の第四世代戦術機、三種の神器シリーズだ。XFJ計画は、不知火の改修を表向きとし、裏ではこの三機の簡易量産、技術提供が裏で行われている」

「正気か！？開発されて間もない、しかも最新技術を広める！？一体何の利益が……」

ユウヤの言う通り、ここまでやるのは何か裏があるのしか思えない。もし無かったとしても、それは馬鹿と言われる奴のする事だ。

「……そんなに知りたいか？」

「あ、ああ」

「……なら着いてこい」

ここでは話せないのか、大佐に断りを入れてから一旦格納庫から出る。手近な部屋に入ると扉をロックし、唯衣は話し始めた。

「……大尉は、まだ私と煌武院悠陽殿下、横浜基地の香月副司令にしか言っていないようなのだが……」

「大尉は、たった一人で……全人類の存亡を掛けた“囧”をするためだけに、貴様の言う馬鹿な行動をするのだ……！」

「なっ……！囧だと……！」

「そうだ。甲一号オ리지ナルハイヴを攻めBETAを内陸部に誘

きだし、その隙に周辺にあるハイヴを全世界で同時に攻める……これが、矢羽田大尉が立案、作成した“桜花作戦”。各ハイヴを攻める作戦を“バビロン作戦”という」

ユウヤには正直、目の前にいる唯衣の言っていることが理解できなかった。しかも、一度踏み込んだら最後、絶対に脱け出せない蟻地獄にはまった気分にもなる。

「もう既に、欧州では“要塞級殺し”の改造、それに合わせたタイフーンの改良計画まで送り、ソ連、中華統一戦線にはジュラーブリク、殲撃十型のストライカーパック対応、アメリカにはある宇宙戦艦の設計図……」

聞いているだけで頭が混乱する内容だ。しかも謎の単語もあることから、かなり機密の高い物の筈……。なのにこの女、平然と他国の軍人に喋るなんて……！？

「ま、待て待て待て！！明らかに機密な内容が入ってないか！？俺が聞いたらヤバイだろう！？」

「貴様は既にこの計画の主要メンバーだ。それに、既に矢羽田大尉からは許可を得ているから問題はない」

た、退路を塞がれた！？

「そろそろ戻ろう。断りを入れたとはいえ、そろそろ怪しまれるからな」

そのとき、どうしてだかユウヤの心の中にイタズラ心が芽生えてしまった。後に後悔するともしらずに……。

「……………男女の仲…とかか？」

「っ！？！？き、貴様いきなりなにを！？」

「うわっ、落ち着けて！！」

顔を瞬間湯沸し器よろしく真っ赤にした唯衣が、殴り掛かってきたのだ。手に持った資料が舞うなか、女性とは思えない鋭い攻撃にユウヤは反撃もできず後ろに下がることしかできない。

三撃目となる手刀を避けた瞬間、何かにぶつかってしまった。

「しまっ…！」

「もらったアアア！！」

後方確認を怠ったツケか、会議室の机にぶつかってしまい体勢を崩したのだ。

眼前に迫る拳。咄嗟に首を捻って避け、腕を掴んで押し留める。何とか膠着状態に持ち込んだものの、この体勢は色々とマズイ。何せ、目と鼻の先に唯衣の顔があるのだ。本人は興奮のあまり気づいてないが、冷静になったユウヤには毒でしかない。時々香る甘い匂いにクラクラしかけながらも、日本人だ日本人だと意識を逸らし、唯衣を押し返すため反対側の肩を掴んだ。

「くっ…！卑怯な…！」

「いきなり殴り掛かってくるヤツの方が危ないわ…！」

暫く押し問答を繰り返していた二人だが、その体勢も終わりを告げる。

「キャッ…！」

「うおっ！？」

唯衣が足を下げた所に、乱闘の時に散らばった資料が落ちていたのだ。押し合っていた体勢のため、力を入れていた唯衣は足を思いっきり滑らせ、ユウヤを押し倒す形になってしまった。

「……………」

「あ……………」

幸い机に頭を打つことは無かったが、かわりに感じる唯衣の体温と女性特有の柔らかさにユウヤの思考が固まる。

唯衣も、異性にここまで密着したのは始めてで、ユウヤの胸板に顔を埋めた事を理解した瞬間、思考がオーバーヒートして動けなくなる。

互いに何も言わずに時間だけが流れ…

「おい、篁中尉、ブリッジス少尉！いい加減出てき…な……よ…？」

ハルトウィックのIDカードで扉のロックを外して入ってきた宗一を見て、空気が凍った。

「あ〜。三十分くらい後でいい？それくらいだったら待ってられるし、さ。大佐達にも上手く言っておくから！！」

そのまま扉を閉めると宗一はダッシュで逃げていった。

暫くして、再起動した唯衣の悲鳴と強烈なビンタの音が基地の地下に響き渡った。

トータルイクリス編十二話　↳騒乱　動き出した欲望の闇　（前書き）

トータルイクリス編十話　↳騒乱　動き出した欲望の闇　↳

入試、終了　　！！

と言っても結果次第ですが？

まあ、大きな山も超えた記念に投降です！2ヶ月ぶりです。お待たせしました！

では第十話、どうぞ！！

トータルイクリプス編十二話　く騒乱　動き出した欲望の闇く

く アラスカ　ユーコン基地　格納庫　2000年　10月1日　く
ユウヤにとつては災難ばかりだった日から一週間。いつも通りに訓練に向かうため格納庫に入ったアルゴス試験小隊の面々は、自分達の格納庫を見て、驚いて開いた口が塞がらなかった。

「な、ななな何じゃこりゃ　　ッ!!」

何時もは自分の愛機であるF-15・ACTVとF-15Eが二機ずつ、それについて先日乗り始めた訓練用のTYPE-97“吹雪”と不知火式型があるだけの格納庫に、今は二十機を超える機体が運び込まれていたからだ。しかも機体は全く統一されておらず、Su-27やMiG-21、殲撃十型・八型、EF-2000、A-10、F-15C……。世界各国の戦術機が国ごとに分けられながらも並ぶ姿は、他に見られない存在感を醸し出していた。

「よお、やつと来たか!」

「おいおいヴィンセント、こりゃ一体何の騒ぎだ? 戦術機の見本市でもおつ始めたのか?」

四人を呼ぶ声が聞こえる方を向けば、二機のF-15・ACTVとF-15Eの元で見馴れた整備兵と一緒にいるヴィンセントの姿があった。

すぐに四人ともヴィンセントと愛機の元に向かい、どうということだと早速質問を始めた。そんな中、ユウヤだけは先日唯衣に言われた内容を思い出し、コレのことかと納得しつつ目の前の光景に驚きが隠せなかった。

機体周辺を見れば、他国と思える整備兵同士が話し合い、協力し

あいながら整備をする姿も見れる。普通ならば情報漏洩で銃殺刑ものだが、ここでは違うらしい。

「ここは今、国や人種なんて一切関係なしの場所って事になっている。ここで行われた技術の提供、共有にはある程度制限があるけど、基本的にはフリー。“持てる技術をフルに使った最高の戦術機”を造れる場所なんだよ!!」

興奮を隠そうともせずに語りまくるヴィンセントに、タリサ達はあまりに現実離れた内容に若干懐疑的な視線を向けていた。

だがそれも、宗一の登場によって無くなった。所謂、ああ、コイツが黒幕か、という納得の仕方だったが。

そしてユウヤは、あの衝撃的なカミングアウトの一週間後に行われた模擬戦を思い出すのだった。

「TYPE - 97…フブキ…？何ですか、この機体は？」

朝。ブリーフィングが終わり次第唯衣と宗一に呼び出されたユウヤは、突然資料を押し付けてきた唯衣を睨みながらも目を通していった。

「……………はあ。吹雪は第三世代機の不知火を基に造られた第三世代型高等“練習機”だよ」

「練習…機！？一体何で…!!」

練習機という単語でユウヤの眉が跳ね上がった。優秀なテストパイロットとしてのプライドが傷つけられたようだ。

「落ち着いて、話は最後まで聞く！」

「くっ……了解」

「よし。じゃあ篁中尉、説明よろしく」

「はっ……こほん、吹雪の性能はF-15“C”以上、TYPE-94以下だ。が、練習機という枠組みがあるせいで主機出力が低いのが難点で、それに加えて日本製の機体は総じて主機出力がピーキーだ。上がるのも早ければ下がるときも一気に下がる。その特徴を理解してもらったための練習機だ。け、決して貴様の腕が悪いと言っているわけではない。そこを勘違いするなよ！」

「は、はぁ……」

いきなり怒鳴り声を上げた唯衣にびびったが、腕は悪くないと聞いて嬉しくなってしまう。あれほど毛嫌いしていた日本人からの言葉からでも、だ。

「機体のもつと細かい設定はヴィンセントに話してあるから、よく聞いといくこと」

「……やはり、自分が乗る……んですよね」

少し頬が引き吊るユウヤ。米軍内でもトップクラスの腕前を持つプライドが、どうしても邪魔をしているのだろっ、と宗一は当たりをつける。わからないわけでもないし、計画に支障がでないためにもより深く掘り下げて話すことにした。

「さっき篁中尉が言ってなかった？腕は悪くない、って。僕達がブリッジス少尉に練習機に乗ってもらうのは、米軍機と日本軍機と

の明確な差を理解して欲しかったからだよ」

「日本軍機との…差？」

「そう。アメリカの戦術機の運用方は？」

「…アメリカ軍は最終局面で投入する」

「で、日本だとその真逆。日本は最初から戦術機を使う正面決戦。機体をより長く使うために、米軍機みたいな力技で機体を操るやり方は合っていないだよ」

確かに、とユウヤは思う。最終局面で投入、ということは、ほとんど戦闘が終わりにかけていることを指す。だから、多少機体に負荷をかける操縦でも大丈夫だった…のだが、日本は違ったのだ。グインセントから言わせれば「今更言ってるのか？」レベルの話だが、日本嫌いのユウヤには仕方ないと言えないだろう。

「……ま、全部をここで言っても良いんだけど、後は機体に直接乗ってからだね」

「了解！」

「じゃあ、これが吹雪のデータにシミュレーターと訓練使用の許可証。あと、一週間後に本番演習として一対一の変則模擬戦をやってもらってからね」

先程とは打って変わって明るいう口調で話し始めた宗一に、コイツは何者なのだろう、と思ったユウヤだったが、模擬戦と聞いてその考えは吹っ飛んだ。

「相手は？」

「相手は篁中尉。帝国斯衛軍…つまりエリートが相手だからがんばってね」

「た、大尉！？そんな話は聞いていません！！」

「巖谷中佐からはOK貰ってるよ。折角武御雷持ってきたんだし、

訓練しなきゃ、ね？」

「くっ……！わかりました……」

それじゃあ、と言って宗一は立ち去り、唯衣もそれに少し遅れながら出ていった。…ユウヤを睨むのを忘れずに。

「…なんだったんだ、最後のは？」

ひとまず、やることのできたと気合いを入れるユウヤだった。

第二演習区画 E - 102 演習場

「こちらCP。アルゴス1、フブキの調子はどうだ？」

「今のところ問題ない。…けど、問題はこれからだ」

早速F - 15Eの整備をしていたヴィンセントとエロ話で盛り上がっていたVGを捕まえ、吹雪の訓練に付き合わせたのだ。VGにはリルフォートで酒を奢る羽目になったが、それは別の話だ。

『どうしたあユウヤ？まさか怖じ気づいたか？』

「はっ！んな訳ねえだろ。…行くぞ！」

『オーライ！かかってこいや！！』

『んじゃ……演習開始！！』

「先手はもら…なにっ！？」

開始直接。ユウヤは“米軍機を操縦”している時と同じように跳躍機を吹かしてしまった。すると、今まで大人しかった吹雪が暴れ

馬と化したのだ。

「……んの……」

すぐに操縦幹を動かし、“無理矢理”吹雪を押さえ付ける。ようやく落ち着いた機体を操り、V GのF - 15 Eを探す。が、探すために頭部を動かした途端、また機体が崩れた。

「く……っそお……」

『何遊んでんだユウヤ！このままだとヴェンテージ物は貰っちゃまうぞ！？』

「うるせえ！！んなこと言われなくても……！」

まただ。ビル影から飛び出してきたF - 15 Eに向けて突撃砲を構えるも、途端に体勢が崩れて砲弾は当たるところがかすりもない。

「クソッ、ピーキーにも程があるだろうが……！！」

今も、V Gの砲撃から避けようと操縦幹を少し倒しただけで敏感に反応して危うく転倒しかける始末。何とか体勢を立て直した所で目に飛び込んできたのは、こちらに銃口を向けるF - 15 Eの姿だった。

『ああ……ユウヤ機機体大破、演習終了。勝者ヴァリレオ・ジアコーザ』

『……なあユウヤ、もう一戦やるか？』

ユウヤは吹雪の管制ユニットの中で歯噛みする。吹雪……いや、日本の戦術機は全くの別物だ。一瞬、F - 15 Cの劣化模造品と罵り

かけて宗一と搭乗前に聞いたヴィンセントの言葉を思い出した。

「日本の…運用法…特徴……っ！そうか…！」

急いで機体のステータスを見る。特徴的なセンターマスト、鋭角的な腕のナイフシザーズ……。これから導き出されるのは…。

「っ！空力操作か！」

今まで乗っていた戦術機はアメリカ製。アメリカ製の特徴は大出力の跳躍機で強引に機体を操ること。それに比べて、日本製は出力不足と継戦能力を同時に満たすために小技を使って最小限の電力消費を抑えたのだ。

ユウヤが噴射跳躍中に頭部を動かしたことや腕を振り上げた直後に機体のバランスが崩れたのは、これが原因だったのだ。

『おっ！何か気づいたな、ユウヤ』

「おうよ！VG、もう一戦頼めるか？試したいことがある！」

『ほお、やる気満々じゃないの。よっしゃ、いっちょやりますか！…！』

すぐにVGのF-15Eは最初のポイントに移動した。ユウヤも吹雪を移動させ、弾数が少なくなった弾装を取り換える。

『んじゃ第二戦、始めるぞ？……………演習開始…！』

同じ轍は踏まない、とばかりに、ユウヤはさっきとは打って変わって綺麗に飛び上がった。頭部センサーマストを動かし、最小限の動きで機体を旋回、上昇、下降に成功させた。

「行ける…行けるぞ！」

『おんやあー？さつきとは全然違うな！こりや楽しくなりそうだし！』

接触通信が切れると、ユウヤの吹雪から見て6時方向のビルからVGのF-15Eが飛び出しながら突撃砲を乱射した。

「ぐっ…！」

腕、頭部を傾けて跳躍機を盛大に噴かす。吹雪はユウヤのイメージ通り旋回、下降し回避した。

「へっ！今までの借りだ、たつぷりと返してやる…！」

背後の射線とF-15Eが重なると、兵装担架を起動。左側の突撃砲が火を噴き、大量の36mmペイント弾が雨あられとF-15E目掛けて降り注ぐ。

『所がギツチョン…！』

予想していたのだろうVGは、機体をビル影に隠し砲弾を回避。そしてそのままF-15Eと吹雪のドッグレースが始まった。

「……で？貴様は演習だというのに熱が上がり、不注意により吹雪をビルに突っ込ませた挙句に両腕と頭部を破壊した、と。そう言

いたいのだな少尉？」

「……………はい、その通りであります」

結局、ユウヤは最後の最後で機体の操作をミスリ吹雪をビルに突っ込ませ、戦術機でリアル犬神家を披露したのだ。

因みに細かく説明すると、ユウヤはV Gの後ろを取ろうと機体を空中で捻らせた瞬間、米軍機の癖でセンサーマストの活用を忘れてしまいバランスを崩して墜落。完熟訓練すら済んでいない機体で無茶をした、ユウヤの自業自得以外の何物でもなかった。

「…で、何か掴めたか？」

「は？あ、ああ。吹雪の癖というか、特徴は掴めた気が…」

段々語尾が小さくなるのも、唯衣から絶対零度の視線を受ければそうなる。が、ユウヤの言葉を聞いた唯衣は鋭かった視線を和らげた。

「……そうか。ならば、吹雪も無駄ではなかったな」

「……………」

「それと、ブリッジス少尉が吹雪をお釈迦にしたので、私との模擬戦は延期だ。まあ、少尉が式型を使いこなせたら、その時もくるだろう……………」

唯衣が壘々と語っているなか、ユウヤの耳には全く入っていないかった。それは、一瞬だけ垣間見えた唯衣の柔らかな表情にユウヤは見とれてしまったからだ。しかも同時に、地下の会議室で偶然抱き合ったときの感触と甘い匂いが脳裏に走り、慌てて頭を降ってイメージを飛ばした。

「……………何をしている？やはりどこか怪我しているのではないのか

？」

「っ！？だ、大丈夫だ！何にも無い！！」

唯衣の下から見上げる姿に、心臓が跳ねた。慌てて何でもないと距離を取り、始末書を書くと言って格納庫から離脱した。

「何なのだ、あの男は……。全く、人が折角心配し……て……」

そして唯衣も、自分が起こした行動に顔を真っ赤にし、慌てて自室に戻るのだった。

「……あんの野郎……唯衣姫とイチヤイチャしやがって……！
！」「」

ユウヤと唯衣のやり取りを見ていた整備兵一同は大量の砂糖を吐いたり、唯衣のデレに萌え死んだり、屍が散乱していたとか……。

ちなみに更衣室で強化装備を脱いでいたユウヤは背中に走った悪寒に震えた……らしい。

長い回想から戻ると、宗一が部隊を招集している所だった。タリサ達に遅れること少し。ユウヤがたどり着くのをまっていたように、タイミングよく演説が始ま……

パ
ア
ン！！

らなかった。突如投げ込まれたスタングレネードが爆発したからだ。

中には強化装備を装備していた衛士がいたようで、すぐに立ち上がる者も数人いた。ユウヤもスタングレネードが視界に入った瞬間、目と耳を塞いで被害を最小限に抑えていた。

「くっ……一体何が？」

ふらつく体に鞭打って立ち上がると、壇上にいた宗一は銃を構え、ま複数の“兵隊”に囲まれていた。

「矢羽田 宗一だな？ 貴様を技術漏洩、戦術機の無断使用の罪で拘束する！！」

兵隊……アメリカ軍MPの声に、格納庫にいた全ての人は状況が理解できずに動くことができなかった。

「……………このタイミングでよくやるよ。というか、こんな強引に来るとは、ね」

「素直に投降したほうが、貴様の身と娘のためだぞ」

「ッ！……ミスリルに何をした！？」

ミスリルの事を出され、今まで笑顔かのほほん顔しか見せなかった宗一の顔に、激怒の表情が刻まれた。

MPは宗一の怒りなどどこ吹く風と、優位に立っている状況のためか傲慢な姿勢を崩さない。

「それは貴様次第だ。つべこべ言わずに着いてこい！！」

「テメエら待ちやがれ！！宗一が何したってんだよ！？」

「やめるタリサ！こいつらは齒向かえば容赦しない。大丈夫だから落ち着いて」

復活したタリサが近くのMPに詰め寄ろうとすると、宗一が大声を出して止めた。見れば、数人のMPがタリサに銃口を向けている。ギリギリだった。

「一つ聞かせる。これはハルトウィック大佐の指示か？」

「……………貴様の知る必要はない」

なるほど、と宗一は呟くと、そのままMPに連行されていった。

「あ、ちよつと待った」

と、出口で立ち止まるところを振り向いた。

「みんな、ごめん！ちよつと計画は延びるけど、待っててくれ！」

詳細はハ口に聞いて……、と締まりの無いドブラー効果を響かせながら、宗一は連れ出された。

トータルイクリプス編十二話　く騒乱　動き出した欲望の闇（後書き）

ね、年号が一年もずれていたとは……！申し訳ありませんでした！！

トータルイクリップス編第十三話 騒乱 動き出した欲望の闇 中（前書き）

や、やっと纏まりました。

第七艦隊の構成が変かもしれませんが、ご了承ください。

トータルイクリップス編第十三話 騒乱 動き出した欲望の闇 中

「ユーコン基地」

MP達に連れてこられたのは、統合司令部の地下にある尋問室に似た部屋だった。ご丁寧に銃を持った兵士が部屋の両サイドを固め、何かの薬を用意している軍医まで控えている。

「……………」

「さて、矢羽田大尉。今からあなたを尋問させて頂きます。もちろん基地司令からは許可をもらっているので逃げ場などはありませんのであしからず」

目の前に座っている軍人…いや、筋肉の鍛えが足りないから文官だろうか？ が鳥肌が立つような声で語りかけてきた。もう一度部屋を見回すが、ミスリルの姿は確認できない。それに気付いた文官が下卑た笑い声を上げた。

「フフフ…。娘さんならここには居ません。今頃地上の保育施設で遊んでいる頃でしょう」

「僕が反抗しない限り…ですよね」

「話が早くて助かるよ。では…」

「ちよつと待った」

腕を掴んできた軍医は注射を片手に待ったをかけた本人と文官を見る。文官が待てと言うと静かに下がった。

「どうしましたかな？大尉」

「先程基地司令の許可があると言いましたが、本当に？脅したんじゃないんですか？」

「何を言つと思えば…。なあに、アイツの親友とかいうバーのマスターをお誘いしただけさ」

「…………クソが」

「何とでも言え。我等は祖国に利益をもたらさねばならないんだよ。おい、早く薬を…」

バチンッ！

「ギヤアアアアアアア！！」

突然、青白い閃光が室内を満たした。そして響く男の悲鳴。みれば、軍医が注射を持っていた手を押さえて転げ回っていた。

何が起こったのか理解が追いつかない兵士にも、同じような現象が起こった。

「ガアッ！？」

「ぐっ…………！」

両サイドの兵士は頭に閃光…電撃が直撃し、そのまま倒れた。文官は何だ何だと同じ言葉を口にするばかりで動こうとしない。

「…………やれやれ。この能力を最初に使うのが人間だなんて…。BETA用にもらったのに悲しいよ」

「な、な、な…………」

「黙れ。僕は怒ってるんだ。次何か言えば死ぬよ？」

殺気を飛ばす。涼子達から身を守るためにも、と連れ出された実戦形式の模擬戦という名の集団リンチによる賜だった。認めたくないが、あの地獄が役に立って良かったと思ってしまう。

「さて……。全て、話してもらつよ」
「ウ、ウワアアアアアアア！……！」

そして数分後、何の連絡も来なくなつた尋問室に疑問を持った警備兵が駆けつけると、そこには泡を吹いて意味をなさない言葉を言い続ける文官と、痛みで気絶した軍医と軍人の姿‘だけ’があつた。

） アメリカ ）

日本帝国による第四世代機、ビーム兵器の開発成功。これにより、世界のBETA戦線は狂喜乱舞していた。

120mmを受け流してしまう突撃級の外郭も、同じ硬度を持つ要撃級の腕も、全てが数発の光弾で破壊できるのだ。

要塞級に至つては十発単位で叩き込まないと効果はないが、それを考えて作られたビーム砲は一撃だ。

各国はこぞつて〇一式の導入を進め、日本は苦しかった財政も潤い歓喜した。

…だが。一つの国だけは、そうはいかなかった。

「諸君、よく集まってもらつた」

ペンタゴンの一室。そこには以前、〇一式の独占を企んだオルタネイティブ5推進派と企業の重役が集まっていた。

例によって室内は暗く、互いの顔は見られない。

「今回もだが…帝国の動向がどうにも良くない。知つての通り、帝国が〇一式を公表してから我が国の産業分野の収益は低下の一方だ」

今や全ての国家が〇一式を〇一式を……。という状況な為、中華統一戦線や欧州、ソ連といった大国がアメリカの武器を買わなくなったのだ。アフリカ等財政が厳しい地域は別だが、それも日本が大量生産をし始めた今では時間の問題だ。

「それもこれも！帝国の奴等が技術者の派遣を渋っているからだろう！？しかも基を辿れば、軍部がデータ取りを優先し横浜にG弾を落としたのが原因ときている！！」

ダン！と机を殴った男に、何人かから賛同の声が上がる。彼らは皆、〇一式のライセンス生産で技術的な壁にぶつかり……。と言ってもこれは夕呼の案で、わざと壁にぶつかるようにしていたのだ。日本帝国の専門技術者が向かえば一発で解決なのだが、それを防ぎアメリカとオルタネイティブ5推進派を苦しめるため、アメリカ以外の国に先に技術者を回すよう工作を仕掛けたのだ。

先のG弾云々の件も利用し、巧みに矛先をずらし続ける様は、夕呼と帝国国民の鬱憤と怨みがわかる一面であつたと担当官は語っていた。

話は戻るが、技術的な遅れはあと一年程で解決する……。のだが、〇一式の銃口部分が四基作って二基が不発、若しくは実戦に耐えられないという現状は、かなり苦しい。いくら自国で資源を採掘でき

く 日本帝国 百里基地 く

第七戦術機甲団。百里基地に配属されている精鋭揃いの部隊。また、沙霧達首都防衛隊と共に演習を行うなど首都防衛を任務とした第302機甲大隊、第305機甲大隊がいる部隊でもある。

その第302機甲大隊、第305機甲大隊の格納庫にて、三機ずつのJG-01A（天叢雲）、JG-02A（八咫鏡）、JG-03A（八咫瓊）とF-4J/B（撃震〇一式装備型）二十七機が出撃体勢を整えていた。

少ない整備班が各々の機体の最終チェックを進めていく中、第302、305大隊の隊長両名が、今回の“ ”作戦に参加する衛士に激励を飛ばしていた。

参加する衛士の殆どが二十代後半で、中には四十代の衛士……つまり、それほど長く戦い続けてきた猛者が含まれている。そして全ての衛士に共通していることは、皆彩峰中将の処分に納得ができなかったものなのだ。

（ククク……。利用されているとも知らずに）

そして整備班に混じりながら、一人の日系アメリカ人が表情を動かさずに衛士達を笑っていた。彼こそがアメリカが放った作員の一人で、今も一機のJG-03A（八咫瓊）の管制ユニットに“仕掛け”を施している真っ最中だった。この作戦が成功すれば正式なアメリカ国民となれる。難民キャンプで厳しい生活を送っている家族を楽しむことができる。

輝かしい未来に顔を綻ばせ、若干の罪悪感を抱きながらも、次の機体に仕掛けを施しに移動を開始した。

ズズウ……ン！！

「な、何事だ！？」

管制塔の当直士官は突然起こった爆発に驚き、制服をコーヒード
真つ黒にしながらもコンソールに齧り付いた。そして気付く。基地
の右手奥にある巨大な格納庫から次々と戦術機が飛び立っていくこ
とに。

「くそ、お前ら何やってんだ！？急いで帝都にスクランブルを……」

「そこまでですよ。中尉殿」

が、ここにも既に手が回っていた。中尉と呼ばれた男の背後に作
業服姿の男が銃を突きつけていた。背後の扉から続々と銃を構えた
工員が進出し、管制塔は制圧された。

それは基地全体で起きていた。格納庫の爆煙とともに基地の各所
に潜んでいた工員が動き、反撃をする暇もなく巡回の兵士は射殺
僅か十数分程で、百里基地の機能は掌握されたのだった。

「貴様ら動くな！！」

「な、何事ですか！？ここはX F J 計画専用の格納庫、部外者は入れ……」

パン！

整備ハンガーに固定されたJ G X - 02 八咫鏡を分解・整備していた整備班長は、突然格納庫に押し入ってきたユーコン基地のMP を止めようとした途端、後方にいた別のMP に眉間を撃ち抜かれ物言わぬ骸と化した。格納庫に反響する銃声と班長が倒れる音が止むと、MP 達は一斉に銃を構え日本の整備兵達を拘束した。

「貴様らの国家、日本帝国は軍事クーデターによって政府は崩壊した！国家として体裁を持っていない国に戦術機渡すわけにはいかん！よって、ここにある機体は全て我々が徴収する！！」

「巫山戯るな！何がクーデターだ！！そんな情報何も……！」（パン！）

また一人、今度は年若い整備兵だった。胸に銃弾を受け、二、三歩進むと力尽きて格納庫の堅い地面に倒れ伏した。

「なお、少しでも抵抗の意志がある者は射殺しても良いと司令部から通達がある。……命が惜しければ黙っているのだな」

銃で脅されながらも整備兵達はMP 達を睨み付け、そして次々と入ってくるアメリカの技術者と思わしき人物達を目にし、機体を守れなかった自分たちの不甲斐なさともたしてもアメリカに好き放題される悔しさに涙するのだった。

） 日本帝国 帝都外縁部 ）

帝都守備隊の面々は、百里基地方面から戦術機二個大隊が接近中という情報が出ると、その行動は早かった。

衛士は次々と機体に搭乗し、出撃体勢が整う。整備班が瞬く間に弾薬を取り付け、武装も施していく。報告からほんの五分程で、帝都防衛軍第一師団第一戦術機甲連隊は迎撃のため帝都外縁部に出撃を開始した。

それから更に十分。防衛軍が構成した防衛線に、百里基地所属のクーデター軍が姿を表した。

戦力比は三対二。クーデター軍には第四世代が混じっているとはいえ、ほとんどの機体がF-4とF-15。つまり第一世代機と第二世代機が中心だ。それに対し帝都守備隊は、第四世代機の数と同じだが、それ以外は全てTYPE-94-1C壱型丙と2B壱型乙の第三世代機で構成されている。実際の戦力比は倍以上にかけ離れているだろう。

だがそれでも、彼らは止まらない。止まらない。自分達が仕出したことの重さを知っているから。こうでもしなければ日本は変わらないと信じているから。

何がいけなかったのか、と聞かれても、それは全てとしか答えられないだろう。日本を追い込むような工作をしたアメリカ、それを許した日本の高官達……。どこかでストッパーを務める人物が出ていたのなら、結果は変わっていたのかもしれない。

そんな後悔を胸に、クーデター軍指揮官が回線をオープンにした。

〕 太平洋沖 東京湾から三十キロ地点 〕

アメリカ合衆国海軍第七艦隊。太平洋での活動を主とするアメリカ海軍の精鋭艦隊だ。旗艦ジョージ・ワシントンを中心とした巡洋艦四隻、駆逐艦六隻、戦術機母艦二隻の総勢十三隻に上る艦隊は、ゆつくりと日本の東京湾へと近づいていた。

「艦長、そろそろ時間だ。ウォーケン少佐の部隊を発信させたまえ」

「…は？ よろしいのですか？ 未だ日本からは何の通達も無いのですが…」

思わず、出港からゲスト席に座っている“自称”外交官を見てしまふ。戦術機を他国に許可なく出すなどケンカを売するようなものだ。これ以上対米感情を悪化させたくないと考えていた艦長の瞳は、咎める色を含んでいた。

「なあに、すぐにわかる。…始まった」

そんな艦長の視線など何のその。したり顔で笑う外交官に、第七艦隊司令は眉をひそめた。いくら合衆国からの命令とはいえ、今回の行動は目に余る所が多すぎる。謀ったように“偶然”日本近海で“演習”予定だった第七艦隊がクーデターを知り制圧。子供でもわかるような策を使うなど、祖国の立場を悪くするだけだというのに。

『我々は日本帝国軍百里基地所属、第七戦術機甲団所属高城直也』

少佐だ。我等は帝都議會を牛耳り、征夷大將軍閣下の権力を悪用する国賊を捕らえるために馳せ参じた！今すぐ開門せよ！！」

「ククク、愚かな猿めが。艦長、協定は既に珠瀬事務次官が結んである。すぐに東京湾に入港、戦術機隊を発進させる！」

「……………了解。おい、ウォーケン少佐に繋げ。第66戦術機甲大隊を発進させる」

艦長は顔をしかめながらも、ウォーケンにある一言を告げてから発進させるのだった。

（ハハハハッ！！これで日本の技術は我等の物だ！）

カタパルトから射出されるF-22Aを視界に納め、外交官とは名ばかりのスパイは内心で高らかに笑うのだった。

） side ウォーケン ）

全長二十メートルにも及ぶ薄緑色の機体 ラプター を前に、ウォーケンは一人旗艦ジョージ・ワシントンの艦長アンダーソンから受けた一つの言葉を考えていた。

『祖国の本意なし』

これがアンダーソンの残した言葉だ。最初は何かの密命かと思っただが、アンダーソンの瞳に映る覚悟に似た何かを感じ取り、それだけではないとウォーケンは考えていた。

（……まさか、この作戦は一部の暴走……？いや、あり得ん。ならば日本で起きたクーデターとタイミングが良すぎる……）

「少佐、そろそろ出撃の時か……どうかしましたか？」

「ん？テスレフ少尉か。いや、問題ない。すぐに向かう」

いや、自分は軍人。祖国アメリカに忠誠を誓った、一人の人間だ。
上層部^{うえ}が決めたことに従うのが軍人の勤め……が。

（主君が迷った道に走り出したのを止めるのもまた臣下の勤め……か）

アンダーソンのメッセージに込められた意味。ウォーケン是自己
なりの解釈だが、祖国のためにできる限りの事をしようと決意する
のだった。

） 帝都外縁部 ）

『我々は日本帝国軍百里基地所属、第七戦術機甲団所属高城直隆
少佐だ。我等は帝都議會を牛耳り、征夷大将軍閣下の権力を悪用す
る国賊を捕らえるために馳せ参じた！今すぐ開門せよ……！』

今、目の前に展開しているクーデター軍のリーダーと思わしき天
叢雲が先行して近づいてくる。沙霧の後釜として第一大隊を任され
ていた士官の心は、ひどく揺さぶられていた。彼らクーデター軍が
言っている事は、数ヶ月前までいた沙霧が語っていたことと全く同

じだったからだ。

煌武院殿下の権威を蔑ろにし、お飾りとして祭り上げて帝国を好きにする議会。かの彩峰中将も、その毒牙によって殺されてしまった。……だが。

『こちらは帝都守備隊第一大隊臨時指揮官、霧島奏大尉だ。貴官らの行動は征夷大將軍閣下に対する謀反である！直ちに戦術機を停止し、機体から降りろ！！今ならまだ間に合う……！！』

『……霧島大尉、と言ったか。あの沙霧大尉の代わりを務めるだけはある。だが、我等は止まるわけには行かぬのだ！！機体を持ち出すために死んだ将兵のため……死んでいった者の達の命を無駄にしないために……！！』

『……ふざ、ふざけるな！！何が死んでいった将兵達だ！？貴様らが殺ただけだろう！こんな事をして殿下が、国民が許すわけが……』
『そのようなことは百も承知！！だがこれで我等の意思は残り、必ずや後に続く者が未来を変えてくれる筈だ！』

死ぬ気だった。彼らクーデター軍は自ら背水の陣に立ち、そうすることで後世に残そうとしたのだろう。

『……もう貴様らは、戻らないと言っただな？』

『ああ。最早、貴殿では我等は止まらぬ。殿下であれば、それもやむ無しではあったがな……』

『そうか……。全機、全兵装自由！！オールウェポンズフリー彼らは武士だ、もののふ油断するな！！』

互いにFCSが起動し、〇一式のロックオンに反応してレーザー照射警報が鳴り響く。

「帝都守備隊、並びに百里基地所属の全機に告ぐ！！戦闘は中止

せよ――！」

一触即発の空気の中、紅、蒼、紫の三色の武御雷と天叢雲が降り立った。

『な、紫……まさか！？』

クーデター軍側の機体から声が上がる。紫色の武御雷は兵装担架から長刀を引き抜くと一閃し、地面に突き立てた。

「私は征夷大將軍、煌武院悠陽。クーデター軍に告ぐ、すぐに武装をし、投降なさい――！」

『で、殿下御自ら御出陣なさるなんて……』

帝都守備隊は直ぐ様機体に膝を着かせる。それに遅れること数秒、クーデター軍も臣下の礼をとった。

先程までの空気は霧散し、悠陽の登場に戦闘の気配は鳴りを潜めるのだった。

く ジョージ・ワシントン 艦橋 く

「な、なんだこの茶番は！？何故クーデター軍までもが膝を折っている――！」

その頃ジョージ・ワシントンでは、先の外交官が先行したラプタ

ーから送られてきた映像を見て口から泡を飛ばしていた。それもそうだろう、裏切る筈だった機体までもが膝を着いているという事は、この作戦が失敗したという事だ。

（不味い不味い不味い不味い！！このままでは私の立場が……ええいこうなれば！！）

「！？外交官、一体何を！！」

アンダーソン艦長が部下の悲鳴を聞いて振り返ると、そこには通信兵を殴り飛ばしコンソールにひたすら何かを打ち込んでいる外交官の姿があった。

「貴様、一体何のつもりだ！！すぐに拘束しろ！！」

「アヒヤ、ヒヤハハハ！！もう手遅れさあ！さあ、我等合衆国の時代の復活だあ！！」

外交官は拘束しようと掴みかかった兵をかわし、エンターキーを押し込んだ。押し込んだ瞬間、ニヤリと笑い、兵に取り押さえられた。

「合衆国の時代！？貴様、今何を……」

「か、艦長、正面モニターを！！」

「まさか……！！」

最悪の展開を想像しながらモニターを見る。そこには、身動きを取れない帝都守備隊……いや、煌武院悠陽の乗る武御雷に向けて99式電磁投射砲を構える機体の姿が……。そして次の瞬間。

ズビヤビヤビヤビヤビヤビヤ

ッ……！！

腰に装備された電磁投射砲二門による夥しい数の砲弾が発射され、帝都守備隊の姿は砂煙と黒煙によって見えなくなってしまった。

「な、なんという…なんという事だ！貴様、あれは貴様の仕業か！！」

「アハハハ！そうさ！スバイに予め仕込ませておいた催眠装置で衛士を操ったのさ！！ご丁寧に『くたばれ、国賊！』という台詞も付いてな！！アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤへえ、そういう策略だったわけね』ヒヤヒヤ…？」

突然艦橋に流れた女性の声…しかも日本語という異常事態に外交官は固まり、艦長以下艦橋クルーも緊張に身を堅くした。

「今度は何だ！？どこから…」

『そんなに堅くなんなくていいわよ。ただ通信してるだけだし』

何となくだが、アンダーソンには予想がついた。裏で幾度と無く暗躍し、今のアメリカの状態に引きずり込んだ張本人…。

「……貴官は？」

『国連太平洋方面第十一軍横浜基地副司令、香月夕呼よ。さてアンダーソン艦長、先の言葉に嘘は無いわよね？実際に殿下が撃たれているのですから』

「……勘違いされては困ります。先の言葉はこの“錯乱した”外交官の妄言、近くで戦闘があるとストレスが溜まったのでしょう」
『まあいいわ。少なくとも、今展開を始めた帝国海軍は黙ってはいないわよ？すぐに回頭して本国に帰るのを勧めするわ』

「ふざ、ふざけるな！！我等合衆国軍が極東の猿ごときに負ける筈グエア！？」

「まだ喋るか貴様！！」

余計な事を口走った外交官を殴り飛ばしたアンダーソンは、後ろのモニターから流れ出した笑い声に背筋が震えた。言い様の無い恐怖、とでも言うのか、それに怯えながらもアンダーソンは振り返る。そこには、魔女がいた。

『全く…人がどれだけ苦勞して人類のために貢献してるか、わかってるのかしらね』オルタネイティブ5の刺客さんは。…まあいいわ。どうせ全部失敗なんだから』

よく見なさい、とモニターを見るように指示する夕呼。それに従い画面を見る。

未だ砂煙と黒煙は晴れず、戦術機の姿は見るできない。

「な、何だ！何が失敗だ！誰も生き残っ…て……」

が、次の瞬間。一陣の風が戦場に吹いた。瞬く間に煙が流され、そこには撃破された筈の機体達が追加装甲を構えた姿勢で悠然と立っていた。電磁投射砲の直撃を受けたはずの悠陽の武御雷に至っては、盾すら構えず右腕を突き出しただけしか姿勢が変わっていなかった。

（帝都）

突然、悠陽自らの出撃に城内省は大慌てで悠陽を止めに掛かった。だが、以前宗一との会談で聞いた内容と酷似した現状に、解決策は

自分が姿を見せることだと家臣達を説得して悠陽は出撃したのだ。
將軍家や五摂家のみに配備されることが決定した武御雷に乗り込み、戦場である外縁部にたどり着いたのはまさにギリギリのタイミングだった。

『ふう……。殿下、どうやら間に合ったようですね』

蒼色の武御雷に乗っているのは斑鳩家の次期当主だ。そしてその護衛として付いてきた赤色の天叢雲は月詠真耶が乗っていた。

「ええ。ですが、まだ油断は禁物。報告では近辺にアメリカ軍のラプターが潜伏していると。彼の国は何を起こすのか予想が付かぬ故、警戒を怠るようなことはするでないぞ」

『はっ！！』

その時だ、突如として回線が開き、声が流れ出した。兵達が困惑する中、クーデター軍の中から呻き声があがったのだ。

『伊庭、高町、どうした！？なにかあったの…』

『くた…ばれ…国賊ううう…！！！！』

『死ねえええええ！！！！』

「っ！？全軍、アルミューレ・リュミエール起動、相転移装甲準備！！」

佐渡島のG元素を使って作った試作の擬似PS装甲を装備した多目的追加装甲を構える。次の瞬間、虹色に発光した砲弾が防衛隊に向かって襲いかかった。

「うっ……！！」

『くっ…いくらシールドを張っていても、衝撃までは…！！』

武御雷にはオプションとして機体前面にだけ張れるアルミユーレ・リユミエールが装備されている。真耶は追加装甲を装備しない突撃前衛装備で出てきたため、今は悠陽と斑鳩の後ろで固まっていることしかできない。

長いようで短かった数秒間。ようやく砲撃が収まり、クーデター軍をリーダーで確認する。すると数が三機減っているのが確認できた。どうやら、こちらに向かって砲撃した機体を無力化したのだろう。

「…ッ、被害は？」

『こちら帝都防衛隊、脱落機はありません！』

『こちらは無事です、殿下』

『で、殿下！これは我等の総意ではありません！！何者かによって仕組まれたのです！！』

必死に弁明してくる高城の声。砲撃を行った機体を抑えている撃震以外は、皆戦術機から降り投降していた。

「わかっております。先の通信、後催眠暗示の類でしょう。そんならの心は、理解しているつもりです」

『あ、ありがたき幸…』

ズキーン！

一歩前に出ていたのが悪かったのか、それはわからない。だが実際、防衛隊とは別の場所から放たれたビームが高城の天叢雲を貫いた。

機体は跪いていた姿勢から横向きに倒れ、少し遅れて大爆発を起

こした。

そしてビームは一発だけではなかった。

『うわあああ………!!!!』

数条ものビームがクーデター側の機体に降り注ぎ、撃墜していく。衛士達は急いで機体を立ち上げ、多目的追加装甲を掲げてビーム防いだ。

『殿下!!』

「わかっています!! 防衛隊に命令します! 百里基地隊を援護、攻撃してきている機体を撃墜しないさい!」

『『御意!!』』

そして、ビームを撃ってきた五機のF・22Aラプターは手足を撃ち抜かれて停止。その場にいたアルフレッド・ウォーケン少佐は現場指揮官の監督不行きとして拘束、帝都での戦闘は終わりを告げた。

く ジョージ・ワシントン 艦橋く

「な、な………!？」

『ごういつことよ。因みにこの通信、ぜんぶ悠陽殿下まで届いてるから』

「……………」

スクリーンから映し出される映像は、もう悲惨すぎた。突然何も言わずに襲いかかった我が軍のF-22A。しかも五機とも生け捕りに近い形で撃墜されたのだ。もう外交官に、何も喋ることはできない。そしてアンダーソンは気付いた。彼の、この策略に荷担した者達の末路を…。

『さて……。アンダーソン艦長、もう一度言うけど第七艦隊を引き上げるなら今よ？遅すぎれば、帝国軍は総力を挙げて米軍に襲いかかるわ』

「……忠告、感謝する。おい、本国に連絡！回頭180°！」

「了解！……っ！？ダ、ダメです！艦のコントロールが効きません！……」

『ちよつと…どういうこと？』

「他艦のコントロールまで！？…か、艦長、護衛艦隊がクーデター軍に向けて砲撃準備を…！」

「まさか…この艦隊にまで小細工を！？」

床に跪き何事が口走っている男を殴り無理矢理正氣に戻らせる。殴られて数秒、正氣を取り戻した男は先程よりも醜く嗤い、とんでもないことを語り始めた。

「ハ、ハハハハ！も、もう言っただろう、手遅れだと！アンダーソン達は従わない可能性が大きかったからなく、安全策だよ！さっきの通信で、全ての主砲が一斉射するようプログラムしてあったんだよ…！」

「くっ……！解除はできないのか！？」

「ダメです！完全にコントロールを奪われてます…！」

もうダメだ、と絶望が艦橋を満たした時、夕呼が呟いた。

『ねえ、そのプログラムはずっと続くの？』

「い、いえ…一度一斉射すればコントロールは戻ります。どうやら、この男はきっかけ作りの為だけに仕掛けたみたいでして…」

『……なら、問題ないわね。鈴原、伊隅、まりも、出番よ！』

「な、何をするつもりだ！？魔女め！！」

『砲弾を全部迎撃するのよ！涼宮、ガーディアン浮上準備、全兵装起動準備！！』

何やら矢継ぎ早に指示を飛ばしているようだが、そこで通信が切れた。アンダーソンはその間も、オペレーター達に一斉射を遅らせるためにハッキングを仕掛けさせているが効果はなかった。

発射まで三十秒というところで海面が盛り上がり、蒼の守護者が現れた。

全艦艇が主砲、MLRSを起動させ、ガーディアンの浮上でできた波の揺れも計算し誤差を修正。カウントが0と共に内蔵された砲弾、ミサイルを撃ちになった。

（ side ガーディアン ）

「バリアント、ウォンバット、コリントス装填、ゴットフリート、イーゲルシュテルンチャージ開始！！ガーディアンズ隊、ヴァルキリーズ隊、クレイジードッグも順次発進させて！！」

ガーディアンは斉射二十秒前というギリギリの時間で急速浮上した。装甲の隙間に残っていた海水が上空から降り注ぎ、あたかも天

使が降臨したかのような幻想的な光景を生み出す。

が、そんな光景を木端微塵にする数多の轟音。砲弾が放たれ、後を追うようにミサイルが帝都のクーデター軍目掛けて殺到する。

数秒でガーディアン of の射程に入り、迎撃が始まった。

その巨体と防御力を活かし、砲弾の射線と垂直になるよう回頭。手始めとゴッドフリート二門が火を吹いた。

緑色の極太のビームが砲弾やミサイルが密集しているエリアを貫いた。一撃で戦艦を沈める程の威力を誇るビームが四本。元々一斉射だけだったミサイルは全滅した。

「副司令、艦前方のミサイル、砲弾群消滅！30%の迎撃に成功しました！」

「続いて艦尾ミサイル発射管、ウォンバット、コリントス、対空榴散弾頭装填完了！発射します！」

艦尾付近から左右十二基基ずつの計24発のミサイルが艦後方の目標に殺到する。

先行していた数発のミサイルは空中で炸裂、広範囲に大量の散弾をばら蒔いた。

ミサイル、砲弾共に炸裂していき空に火花が咲く。

少し遅れたコリントス、ウォンバットも残った目標に目掛けて進み、ミサイルを潰していった。

が、どうしても迎撃用なため一発で一発しかつづせない。榴散弾でも、穴は空いてしまいそこを数発の砲弾が駆け抜けていった。

「後方のミサイル群殲滅！砲弾群は未だ半数以上が健在！」

「中央ミサイル、砲弾群、来ます！！」

「くっ……！ヘルダート全弾発射、イーゲルシュテルン撃ち方始め！ゴッドフリートと榴散弾頭は装填完了次第発射！」

すぐ側まで接近した砲弾、ミサイルに対し、イーゲルシュテルンのビームの弾幕が襲いかかった。

一発でもかすれば一撃で破壊できるビームでも、射程が短いという欠点がある。艦底部のイーゲルシュテルンを加えたとしても、撃ち落とせるのは僅かだろう。

「ヘルダート直撃！……くッ！砲弾三、ミサイル二抜けられました！！」

「まりも！！」

『わかってるわ！ヴァルキリーズ、ガーディアンとデータリンク開始！精密狙撃だ！』

結局、ガーディアンの奮戦虚しくミサイルは十発、砲弾は低威力の物を含めて十数発通してしまった。が、浮上と同時に発進していたガーディアンズとヴァルキリーズ、それにまりものウィンダムが海岸線で狙撃体勢を整えていた。

ヴァルキリーズが乗っているのは、あきらの偽装型ウィンダムを除くと佐渡島で使ったストライカーパック対応型の不知火だ。ガーディアンズはストライクEとヴェルデ、全機ともストライカーパックはランチャーストライカーで出撃し、それぞれアグニを腰溜めに構えタイミングを計っていた。

「伊隅、撃ちなさい！！」

『了解！！全機、撃ち方始め！！』

みちるの号令を合図に、白い閃光が夜空を駆けた。

一条一条が必殺の威力を持った閃光は、目標にたどり着きオレンジ色の花火を咲かせた。

「……迎撃、成功しました！！」

「……ふう」

だが、安心はできない。まだまだ問題が残っていきそうな第七艦隊を見て気合いを入れ直すのだった。

「……ってか、何で私が艦長なのよ ！！」

無理矢理押し付けられた事を今思いだし、吠える夕呼だった。

トータルイクリップス編第十四話 騒乱 動き出した欲望の闇 下（前書き）

これにて騒乱は終結です。

トータルイクリプス編第十四話 騒乱 動き出した欲望の闇 下

ユークン基地 帝都クーデター鎮圧一時間前

「何だつてんだ、いきなり!？」

宗一が連行された後、タリサは荒れていた。手当たり次第に近くにあるものを蹴飛ばし、少しでも鬱憤を晴らそうとしているようだが、あまり効果は無さそうである。

「……………何かがあった、としか言えないわね。宗一大尉は帝国斯衛軍、国連軍でもあるみたいだけど、そこを突かれたのかもしれないわね」

事実とは違うが、ステラはステラなりに宗一の状況を推理してみる。いつも通りの落ち着いた雰囲気を見せ、タリサを収めようとしたのだ。

「……………なあ、ユウヤ。さっきのMPなんだが、本当にこの基地の奴等か？俺はセレスと一緒に宗一の奴が衛兵達にも餌付け…もとい懐柔してるとこ見てたんだが、確かほとんどの奴に手は回ってた。そんな奴等があんな手荒に扱うか？」

「それは……………」

そう言われればそうだ。何だかんだ言っても宗一はよくアドバイスや差し入れを持ってきた。それが衛兵レベルにまで及んでいたなら、あり得ない。

「それなら、昨日だけアリスちゃんの所の格納庫が乗っ取られちゃったの!」

「そうだぜそうだぜ！演習終わって帰って見たらさっきのMP達が居てな……」

「『お前らの格納庫は別だ！』……なんて、言われたんだよ。ね、隊長」

「ああ、その通りだ。なんでも、来週来るアメリカ軍のF-22Aの護衛だとか言っていたな」

アリス、ゼクス、エミル、リヒターと続き、全員がリヒターの証言で確信にいたった。今回の事件、その首謀者は……

「アメリカ軍（俺達）……か……」

「そうなるな。だが、お前は今アルゴスの一員だ。それを忘れるな」

「……………ああ」

「なあ、そう言えば宗一のヤツ、最後に何か言っていなかった？ハ口がどうか……」

「……ハ口？」「……」

そう言えば、と全員、ここに入った時に渡されたのを思い出して機体に走る。話を聞いていた他国の衛士もそれにつられてハ口を取り出した。

『テヤンデエ！　テヤンデエ！』

『ヤル気力！？　ヤル気力！？』

起動したハ口達の声が格納庫中に響き渡り、幾人かは耳を押さえている。暫くするとハ口達は突然喋るのをやめ、一ヶ所に集まっていく。

全員もハ口に連れられて動き、格納庫の真ん中で止まった。

パカンッ！

すると突然、一機のハ口が上下二つに割れてしまった。瞬く間に全てのハ口が割れると、一つの映像を映し出した。

く 日本帝国 く

アメリカ海軍第七艦隊の砲撃を撃ち落とした、と報告を受けた悠陽は、眼前まで運ばれた上で四肢を切り落とされ地面に転がったラプターに視線を向けた。

「聞いた通り、そなた達は利用されただけでしたね、ウォーケン少佐」

「……………」

「他の機体はどうなったのですか？」

「はっ！逃亡を謀った機体は全機中破あるいは大破状態にし拘束しております！」

精鋭揃いの帝都守備隊と改良された不知火壱型丙・乙の性能を鑑みれば、その結果も納得のいくものだった。

試験的とはいえ、宗一が持ち込んだモビルスーツの技術を使って強化されたのだ。装甲強度向上による機体の更なる軽量化に大容量バッテリーの恩恵による主機のトルク数の安定……。挙げればきりが無いが、金に糸目をつけなければ不知火でさえこれほどの性能が上がったのだ。まだ開発段階を抜けきっていない三種の神器シリーズは、それを大きく上回るだろう。

「そうですか…。大義でありました、そなたはこの者達を連れて下がりなさい。私は斑鳩と共に戻ります」

「御意！」

「……宗一殿」

遙か太平洋の彼方で苦境に立っている宗一を想い、悠陽は目を閉じるのであった。

「ユーコン基地 米軍専用格納庫 クーデター鎮圧三十分前」
十二機ものF-15Eが並ぶ格納庫には、何人もの整備兵や警備兵、衛士が倒れ、無数の銃弾の跡が地面や壁にできていた。よく見れば、銃弾を受けた機材の幾つかがバチバチと放電していた。

「ミスリル、ハッキング開始。戦術機に気絶させた衛士のデータを入れて」

「了解、艦長」

そして、死屍累々の様相を呈する格納庫で唯一動く影……宗一とミスリルの二人が、戦術機一機一機にある仕掛けを施していた。
総司令部からレポートで脱出した宗一は、あのム力つく文官からミスリルの居場所を聞き出し、呑気に誘拐兵から強請った紅茶とケーキを食べていたミスリルを回収して、それから今いる格納庫に向かったのだ。

格納庫内にいたのはこの作戦のためにだけ集められた部隊で、利

用できそうだからと強襲したのだ。

「……っし、システムのインプット終了。……ミスリル、そっちは？」

「こちらでも終わりました。何時でも行けます」

「よし、なら打ち合わせ通りに頼むよ」

「……本当に、やるんですね？」

普段、暗い感情を表に出さないミスリルが、珍しく表情に出していた。不安なのはわかるが、今更だった。

「大丈夫。僕的能力は知ってるでしょ？それに危なくなればレポートで逃げるさ」

最近撫でていなかったミスリルの頭を撫でつつ、自分が乗るF-15Eに近付く。

「……絶対、絶対無事に戻ってきてくださいね！」

そう言い残して格納庫を出ていったミスリルを見ながら、作戦が始まるまで待つのだった。

「……ミ、ミスリル！？」「」

ハ口達が映し出したのは、ミスリルの立体映像だった。立体映像自体普及していない技術なので整備兵達の目が怪しく光ったが、そ

れはミスリルが話し始めると終わりを迎えた。

『逃げて下さい』

そしてその言葉が終わると同時に、格納庫：いや、基地全体を揺るがすほどの振動がユウヤ達を襲った。固定してある戦術機でさえギシギシと怪しい音を立て、手近にあるものに掴まらないと立ってられない程の揺れだった。

「な、なんだ!？」

「まさか、BETA!？」

「地震じゃねえのか!？」

様々な憶測が格納庫の中を飛び交ったが、断続的に響いてきた爆発音でそれは止まった。

弾薬に引火したのかドゴンドゴンと爆音が響き、それに掻き消されながらも微かに聞こえてくる悲鳴。更に非常事態を告げるサイレンが鳴り響く。

複数の戦術機が跳躍機の轟音を出しながら飛行する音が聞こえ、それを最後に爆発音は止まった。

サイレンの音で冷静さを取り戻したユウヤは仲間達と目を合わせると一つ頷き、自分たちが乗る機体へと走り出した。

「セレス、何が起きてるんだ!？」

ひとまず、強化装備を着ていなかったユウヤはロッカールームに戻る道すがら、同じく着ていなかったアルゴス小隊の四人と通信機でCPにいるセレスの端末に通信を入れていた。

轟音が聞こえ後ろを振り向くと、既に中華統一戦線の殲撃八・十型が飛び立ち、それに続くようにF-15Cが追隨している。他の

部隊はもう少し掛かるようだ。

『ユウヤ、無事だったのね!』

ようやくロッカールームにたどり着くと、今まで反応の無かった端末からセレスの声が聞こえてきた。無事だったかと安堵する一同は着替えるスピードを落とさず状況を聞く。

「そつちもな…無事で良かったぜ。で、何があったんだ?」

『…わからないのよよ!!突然アメリカ軍の先遣部隊のF-15Eが格納庫から飛び出て、日本の格納庫目掛けて動き出したの!!』
「な…?!」

予想の遙か斜め上をいく事実に、一瞬ユウヤの思考は噓だと拒絶した。が、またしても響いてきた爆音に信じるしかなかった。

『基地司令部はアメリカ本国に猛抗議中。少し前にハルトウィツク大佐が撃墜を許可したのだけれど……』

セレスはそこで一旦言葉を切ると、気持ちを落ち着けるように深呼吸し、告げた。

『さつき迎撃に出たロシア、中華戦線、オーストラリアの計六個小隊が全滅。衛士は幸い脱出したお陰で生きているわ。今は同じアメリカ軍のキャンサー隊が抑えているの』

「……………まさか、暴走機は〇一式を使ったの?」

『そうよ。しかも、アイツら近くにある格納庫に手当たり次第攻撃して…ッ!』

またしても爆音が響き、着替えていたユウヤ達はバランスを崩し

て壁にぶつかる。

「っ……！全員無事か！？」

「大丈夫よ、幸い強化装備のお陰でなんともないわ」

「コツチもだぜ」

「アタシも」

「じゃあ行くぞ！奴らの狙いが日本なら不知火式型も狙ってくるはずだ。機体を餌にして演習場に出して被害を抑える！」

『……了解。近隣の部隊にも伝えるわ。基地司令部にも事後承諾になるけど伝える。で、場所は何処？』

「第二演習区画、E-102演習場だ」

『E-102……市街地戦か。わかったわ。途中で補給コンテナを出しておくから、そこから突撃砲を受け取って。敵も〇一式を使っている以上、こつちも使うわよ！支援にはラタスク小隊の五人が付く予定よ』

「助かる！……聞いてのとおりだ、行くぞ！」

「……了解！……」

強化装備を着終え、すぐに格納庫に戻って不知火式型に乗り込む。手早く起動シークエンスを終え、外にでると噴射跳躍で演習場まで飛び立つのだった。

「行ったか……。にしても、こつちの思惑通りに動いてくれるから助かったよ、ユウヤ」

ドガン、と立ち上がりかけた殲撃十型を踏みつけ、再び地に沈める。辺りには手足を撃ち抜かれ、胸部装甲を殴られたのか大きく凹ませた戦術機が何機も転がっていた。

『うわあああ――！！』

唯一無事な機体であった殲撃十型のリーダー……崔 ツイ・イーフェイ 亦菲の機体が77式近接戦用長刀を構え殴りかかってくる。直ぐさまサポート役の無人機を操作し、突っ込んでくる亦菲の機体を取り囲むようにして射撃を開始した。

長刀を持った右手が吹き飛ばされ、バランスを崩れた所に脚部と跳躍機を破壊されあつというまに頓挫する。ロシアのSu-27とアメリカのF-15Cはこれを見て畏れでもしたのか、一歩後退する。

動きが鈍ったのなら今の内に、と“宗一”は両手の〇一式搭載型突撃砲を構え連射し、全てを戦闘不能に追い込むとユウヤ達を追うため跳躍機を噴かすのだった。

『ユウヤ、奴さん喰い付いたぜ！距離……1500！？早すぎんぞ！？』

ユウヤ達が出撃してから僅か十数秒。まさかこれほど早く喰い付いてくるとは予想外であつた。

キャンサー隊は既に半数以上が落ちたものの、十二機もいた敵のF-15Eは五機にまで数を減らしていた。そのうち一機も、こち

らを追いかける過程で一機落ちたから、残り四機。数で言えば互角だが、不慣れな機体で戦う以上戦力差は向こうが上と見た方がいいだろう。

「…まだ大丈夫だ。途中で紅の姉妹も引き受けてくれる。最低でも時間稼ぎと二機は落としてくれるはずだ」

『ま、アイツならやってくれるな。で、補給コンテナはどこだ！？』

「ここから前方200だ。そこで手早く装備するぞ！」

『……見えた！』

そして各々が順次着地していき、突撃砲を掴む。ユウヤの不知火式型は仕様で長刀を二本背負い、すぐに演習場に向かうのだった。

） 第二演習区画 E-102 演習場 ）

「アルゴス2、所定位置についた。敵さんはまだなの？」

「…紅の姉妹が予想以上に粘ってくれてるわ。二機は撃墜したみたいだけど、右腕と左足が無いからもう限界みたい」

「……あの二人以上の腕前って、どんなエースだ？」

「知らねえよ。ただ、どんな敵だろうと墜とすだけだ！」

アルゴス試験小隊の四人は、演習場の中心部を基点に四力所に分散していた。まず、先頭にタリサのF-15・ACTVとVGのF-15Eが付き、その後ろにユウヤの不知火式型、そして狙撃がし易いよう演習場の奥にある高いビルに隠れるようにステラのF-1

5Eがいる、という配置だ。すでに音響欺瞞管や突撃砲の予備弾倉もバラ撒き終えているので、何時来ようと万全の状態です迎撃に徹することができる。

そんな“万全の状態”に油断があったのだろうか、戦闘開始の合図は味方の爆発だった。

「うお！？…って、アチツー！」

「っ、VG無事…！？ 逃げろ…！」

○一式のビーム“砲”による先制で、VGの機体は右肩を撃ち抜かれ腕が地面に落ちる。対レーザー蒸散塗膜はレーザーよりも密度の高いビームの前に何の役にも立たず、そして一瞬だけの接触で熱を管制ユニットまで伝えた。強化装備を着けていても感じる熱のせいで動けなかったVGの機体に雨あられとビームマシンガンの雨が降り注ぐ。

「…なろう、ナメやがって…！」

熱を気力でねじ伏せ、機体を後ろに下げる。その間に熱も引いたのか普段通りに動かせるようになったと安心した途端、地面に着地した脚部が真つ二つに折れてしまった。

「な！？」

見ると、折れた部分にビームが当たっていたようで、脆くなっていたのだ。ビーム砲とは違う小粒なマシンガンだったお陰で蒸散塗膜が抑えてくれたようだが、熱量ばかりは防げず装甲を柔らかくしてしまったのだ。

「VG、早く機体を下げてペイルアウトしろ！時間はアタシが稼

ぐ!!」

V Gを墜としたF - 15 Eをビームマシンガンで牽制し、引き離れたところで気付いた。

「もう一機は……何処だ!？」

「きゃああ!!」

「ステラ!？」

ステラの悲鳴が聞こえ、F - 15 Eを追い払ってから後ろを見る。黒煙が上がっているのと通信がそれっきりの状況から察するに、墜とされたしまったと判断して間違いないだろう。

「タリサ、前のF - 15 Eは任せた!!俺は後ろを叩く!」

「お、おい!?!まだ扱いきれない機体なのに無理す……ッ!!」

タリサの制止も、再び攻撃を始めたF - 15 Eに邪魔されて届かずユウヤの不知火式型はステラがいたエリアに向かうのだった。

） side ユウヤ ）

「ステラ、ステラ応答しろ!!」

ステラを墜としたであろう敵機を警戒しながら、最後に反応のあった地点に向かう。ステラからの通信は未だに繋がらず、最悪なビ

ジョンが頭に浮かぶが、頭を振って追い払う。

「……あの氷女がそう簡単にくたばる筈がない。通信機が壊れただけだ」

戦術機のカメラで敵機の有無を確認してから飛び出ようとした瞬間、目の前を光弾が駆け抜けていった。慌てて機体を下げ、もう一度カメラで確認する。すると、反対側のビル陰から突撃砲を構えた腕が突き出されていた。

「チツ……見つかったのか！　だがどうする？　この辺にはスモークも何も無い。かと言って飛び出せば蜂の巣は間違いない……畜生、打つ手無しか！？」

『ユ、ユウ……ヤ……聞こえて？』

「ステラ！？」

今まで反応がなかったステラからの秘匿通信に、状況を忘れて喰いついてしまう。が、ステラから語られた内容に絶句してしまった。

『ごめん……なさい。敵に撃墜された後、胸部装甲を歪められて捕まってしまったの……』

「な！？　じゃ、じゃあ今ステラは……！」

『ええ、敵に抱えられているわ』

余計に手が出せなくなってしまった。どうやって助けるか、と悩んでいたユウヤに、冷や水を浴びせるような提案がステラから告げられた。

『ユウヤ、私のことは気にせずに撃ちなさい……このままだとタリサ達まで危なくなるのよ！？　早く……！』

「だ、だが……！」

『駄菓子も菓子も無いわ！早くやりなさい！！』

判断に迷っている内に、敵機がステラの機体の胴体部と思わしきボロボロのパーツを抱えた状態で姿を現した。混乱の極みに達したユウヤに、以前宗一と唯依が見せた近接格闘戦が思い浮かんだ。

「っ！そうか、カタナならやれる！」

右手の突撃砲を左手に持ち替え、長刀を一本引き抜く。状態を確かめるように軽く振り、深呼吸をして飛び出した。

流石に馬鹿正直な特攻はして来まい、と考えていたのか、敵の射撃は全く来なかった。が、それも最初の一瞬だけ。すぐに機体を右へ左へ上へ下へとにかく動かし、ビームと実弾の嵐を避ける。

数秒後、ビームは無くなり実弾だけの嵐に切り替わった。バッテリーが底を付いたのだ。敵がリロードに入った隙に、跳躍機の出力を限界まで上げた。身体にかかるGが増し、シートに押しつけられるも目だけは敵を見続け、ここぞというタイミングで長刀を振り抜いた。

ビームを纏った刀身がステラを抱えた左腕を肘から切断し、胴体と下半身を無き別れさせる。突撃砲も振り抜くときに巻き込まれて右手ごと両断。ゆうやも左手の突撃砲を放り投げ、切り落とした左腕を掴み、全力後退。

それに遅れること数秒。敵のF-15Eは爆発。そしてタリサ達のはづからも爆発音が響き、ユーコン基地での暴動も収束するのだった。

この動乱が終わると日本帝国の動きは速く、この事態を想定していたとは思えないほどの動きの良さを見せつけた。が、アメリカのクーデター関与は誰から見ても明らかだったため、国連でもアメリカに責があると決定せざるを得なかった。

まず、アメリカは日本帝国に多額の賠償金、並びに資源、食糧の大幅支援を確約された。アメリカも難民を抱えている現状から食糧に関しては準備でき次第、という事になったが、実質払わなくてもいいものとして日本帝国の親米派の議員が提案したのだ。もちろんこれを提案、賛同した議員は更迭され、これにより議会の膿出しは完了。夕呼も悠陽も、ついでに鎧衣も安堵のため息をついたのだった。

そして更にだが、クーデター直後に日本に派遣した第七艦隊は、そっくりそのまま日本のものとなった。元々ろ獲扱いとアメリカの不利が祟り、多数のF-22Aも含めた空母1、駆逐艦3、巡洋艦5隻の計九隻が帝国海軍に回されることになった。最初はアメリカの船など…といていた現場の兵士も、数週間も乗り回している内にそんな感情は無くなったとか。ちなみに名前は全て日本名に変えられている。

更にユーコン基地での暴動にまで責が及ぶ……までには行かなかった。これは完全に部隊の独断、と政府は蜥蜴の尻尾切りを断行し難を逃れたのだ。といっても、破損した基地施設ならびに迎撃に出た部隊の戦術機の補充や修理諸々の金は払うことになり、アメリカは各地に軍の派遣や今回の首謀各である政治家や企業から金をむしり取ること、ギリギリのところで経済破綻を防いだのだった。

「はあ……。やっと基地も落ち着いてきたなあ」

以前宗一が各国の部隊を集めたアルゴス小隊の格納庫で、タリサは訓練で堅くなった身体をほぐすため伸びながら隣にいるVGとステラ、ユウヤに話しかける。

管制ユニットから救助されたステラは意識を失っていて、しかもユウヤには通信を入れていないことがわかるなど混乱があったものの、今は怪我も治りこうして訓練に参加していた。

「だな。一時は死傷者数に冷や汗もんだったが、何とかなるもんだな……」

「そうね……」

「……なあ、本当に宗一の奴、見つかってないのか？」

そう、いつも陽気に振る舞っているVGでさえこの頃表情に影ができる原因、それは矢羽田宗一の失踪が原因だった。

あの暴動のさなか、宗一を連行した歩兵はもちろん、尋問しようとしていた者達まで薬物を用いた厳しい尋問にあったのだが、全くわからないのだ。宗一を知っている人が聞いたら、殆どが生きているのでは、と言うのだが、実際に生きている可能性は限りなく低いだろう。

「皆さん、訓練お疲れ様です」

「うん、お疲れお疲れ！今日も良い成績だったじゃん、ユウヤ！」

そうした暗い雰囲気を纏った四人を出迎えたのは、今までCPをしていたセレスとミスリルの二人だ。

ミスリルは基地の衛兵に倒れている所を保護され無事だったのだ。大した外傷も無く、医者から大丈夫だと判断され、こうしてアルゴス小隊のサポートを勤めている。

「……皆さん、父さんの事、考えているのですか？」

「……っ！……」

「大丈夫……私は大丈夫です。あの人は生きてる、そう信じていますから」

「ミスリル……」

「それに、帰ってきたらとんでもない罰ゲームを与えるだけです！だから……だから……！！」

静かに涙を流すミスリルをステラはそっと抱きしめ、慰める。

全員が何とも言えない空気になりながら、今日も終わるのだった。

トータルイクリップス編第十四話 騒乱 動き出した欲望の闇 下（後書き）

第七艦隊の数は適当だったりします。一応艦隊を手放すぐらいの痛手は被って欲しかったからこうなっただけ……。あれ、もしかしてウォーケン少佐がこっちに来る！？と期待された方、申し訳ないですが人員までは……。ですが、一応フラグだけは立ててあつたり。

（悠陽と話したとか）

色々と伏線を出してみた今話。次話は横浜に視点が移動する予定です。では、これにて失礼します！

新章！？ 横浜編 年号修正（前書き）

皆様、おはこんばんちわー！！大学に繰り上げで受かって有頂天のヨシヒロです！！

ひとまず、宗一が消えた横浜、という観点から書いてみました。

では、どうぞ！

新章！？ 横浜編 年号修正

（ 横浜基地 B - 19フロア 執務室 2000年 10月15日 ）

「ガーディアンズは揃ったわね。じゃ、今から新しい任務を伝えるわ」

「……了解」

全世界を震撼させた日本のクーデターが終わって二週間。事後処理もあらかた片付き、日本帝国は元の通り復興支援を続けていた。佐渡島ハイヴをほぼ無傷で占領することに成功したおかげで、G元素を大量に入手した帝国はこれをバンクーバー協定に基づき国連に提出。だが佐渡島ハイヴは実質日本帝国のみで攻略された、という点を考慮され、一定量の提供とハイヴの調査団派遣で残りのG元素については不問となった。そして一定量を払ってもまだまだ大量にあり、一部をPS装甲生産用に確保しそれ以外は売却。それによってできた資金を使い〇一式の生産ラインを整え、売却してまたラインを整え…の繰り返しにより、ようやく復興の目処が立ったのだ。

また、国内からハイヴが消滅したことへの後方支援国認定も、一年以内に二つのハイヴ攻略戦による消耗を考慮し、三年後からという決定が国連総会でなされた。

九州戦線も、ろ獲した第七艦隊の空母を使った輸送 - 操る船員の大半を、技術廠が開発したということにしたハ口達を使っても、人員不足を解消できなかったせいで、輸送しかできなかったのだ - を行い、迅速に戦力を送ることに成功し、ようやく完全と言える防衛線の構築に漕ぎ着けた。これも、悠陽が行っていた斯衛軍の派遣も大きな要因の一つだろう。

「……………矢羽田が行方不明で心配なのはわかるけど、今は任務に集中しなさい。アイツも、そう言うはずよ」

「……………わかって…ます」

「なら、続けるわ。アメリカのバカが色々やってくれたお陰で、オルタネイティブ4は大分動きやすくなったの。で、前々から矢羽田の提案にあつたオリジナルハイヴ攻略作戦…通称桜花作戦の決行が国連総会で決定したわ」

「……っ！……っ！……」

そして、その復興は日本だけではなかった。宗一はアポーツで金塊や希少金属を出し、それを使いオーストラリア等の後方国家に合成食糧を作るプラントの資金を出して世界に輸出させたり、中東諸国に国連軍から、という偽装を行って現地仕様に回収した〇一式を横流ししたりなど、史実に比べ戦力の温存、増強に力を入れていた。それがようやく形になってきていたのだ。

「ただ、流石に条件を付けられたのよね。アンタ達ガーディアンズをどこでもいいから廻せ、って条件がね」

「……………ということは、条件を出させたのはソ連ですね？アメリカは発言力、影響力を著しく減衰している以上、今一番発言力を持っているのはあの国ですし、その条件なら納得できます」

「流石は鈴原、説明の手間が省けるわ。一応、矢羽田がユーコン基地で進めててくれた“戦術機MS化計画”は順調に進行中で、その後押しもあつたわね…。と、話がずれたわ。とにかく、今世界中の戦術機が強化されつつあってもアンタ達ガーディアンズが保有するガンダムが最強ということに変わりないわ。明星作戦でも目に止まったらしいから、技術奪取の目的で何かやらかされるかも知れないけど……………計画のため、やってくれるわね？」

「……はっ！……っ！……」

「よし、良い返事ね。……………矢羽田の件は、私も全力で探してあげ

るから、がんばなさい」

「あ……！ありがとうございます、副司令……！」

「ありがとうございます……！」

「はいはい、いいから行きなさい！私は忙しいのよ」

「まったく、面倒事を押しつけて……帰ってきたらとつちめてやるからね」

入ってきたときに比べ、幾分か明るくなったガーディアンズを送り出した夕呼は一人、執務室でそうこぼした。

） ユーコン基地 ）

一部の軍が私欲に走り暴走。これが、アメリカ政府が公表した公式見解だ。もちろん、この公表は世界各国に様々な波紋を呼んだが、そこは世界一の大国。物資の融通などを盾になんとか押し切ったのだ。が、アメリカ軍の風当たりは最悪と言っていいほどにまで低下し、世界各国の国連軍基地でさえもそれが起こるほどだった。

「……………」

「……………」

が、ここユーコン基地では少しだけ違った。元はといえ、同じアメリカ軍が事件に終止符を打ったことと、X F J 計画で宗一がもたらしていた効果でユウヤ達に対する風当たりは厳しくなかったのだ。

そして午後の訓練に備えて昼食を取っていると、先程から何か捜し物があるのかPXをうるちよろしていた銀髪の少女が、今度はこちらをじっと見つめているのだ。俺がその捜し物だったのだろうか？

「……………なあ、俺に何か用か？」

「……………そーいちがどこにいったか、知らない？」

「っ……………アイツは……………故郷に、日本に戻ったんだ。だから暫く会えないんだよ」

苦しかった。泣きじゃくるミスリルの姿が目の前の少女とかぶり、嘘をつくのが精一杯だった。近くにセラスも居らず、泣かせたら明日以降冷たい視線に晒されることになりかねない。

（なんとか誤魔化さないと……………!）

「……………そーいち、帰っちゃたの？イーニヤ、そーいちと約束したんだよ……………？また、どらやき……………くれるって……………」

「うつ……………!? な、泣くな！アイツはすぐに帰ってくる！どうせまたひよっこりと顔を出すから……………!」

「ほんと……………!？」

「ああ、本当だ。だから、それまで良い子にして待ってるんだぞ」

少女……………イーニヤの頭をわしわしと撫でると、初めは逃げていたが気持ちよさそうに笑ってくれた。なんとかなかったか、と油断していたところで、ふとPXの時計が目に入り……………。

「ああ……………!？しまった！今日は中尉と模擬戦だった……………! 悪いイーニヤ、俺はもう行くな」

「……………うん、ユーヤもがんばってね!」

「おう……………!」

手を振って見送ってくれたイーニヤに手を振り、ふと何で名前知ってたんだ？と、思ったが唯依の雷怖さにそんなことは忘れて猛ダツシュで格納庫に向かうのだった。

が、奮戦虚しく三分遅刻してしまい、その場で唯依の雷を落とされたのは別の話…。

「あつちやゝ、予想以上に影響出ちゃってるな、これ」

真つ暗な室内。唯一の光源は言葉を発した男の目の前にあるモニターの青白い光りだけだった。その微かな青白い光りだけ浮かび上がった室内は意外に狭く、椅子のようなものがいくつもあるくらいしか見ることができない。

「……帝国はこのまま行けば2001年までには生産能力が回復、ハイヴも幾つかは‘コレ’で殲滅できるはずだし……」

カタカタとキーボードを打ち込み、新たなウィンドウを開く。それには、横浜基地地下にある鏡純夏の脳髓が映っていた。

「……英雄を、呼び寄せさせてもらう、かな」

不気味に光る脳髓を見つめながら、男はコンピューターの電源を落とした。

新章！？ 横浜編 年号修正（後書き）

追加設定ですが、三咲はユーコン基地に機体の受領が終わり次第横浜に戻っていた、と言う設定です。そして前話の最後のF-15Eに乗っていたのは……君です。

悲しみに暮れながらも任務に向かうオレンジ小隊もといガーディア
ンズ三人娘。ロシア行きの便に機体ごと積み込み、到着したのはな
んと、アルゴス小隊がくる基地だった！

ソ連のジャール大隊と来て早々の出撃を余儀なくされる三人娘が見
た光景とは！？

そしてモニター前でブツブツ喋る危険君の目的とは一体……！？

次回、掲載予定は未定です。作者の実力不足故本当にごめんなさい
！！

新章第二話 北に守護者は舞い降りる（前書き）

一ヶ月ぶりの更新……。理由は多々ありますが、大学が本格的に始まったのと引越しの片付けに時間を取られてこつも遅れてしまいました。

最新話です。では、どうぞ！

新章第二話 北に守護者は舞い降りる

〽 横浜基地 B - 19 フロア 霞の部屋 2000年 10月2
1日 〽

鏡純夏の脳が安置されている霞の部屋。その部屋の中に、三人の人影が集まっていた。一人は言わずもなが、霞本人である。そして、その横に佇むように立っているのは夕呼だ。

「社、準備は良いわね？」

「……はい、博士。いつでも大丈夫です」

「……あれ、僕には無しですか？」

「誰がアンタの心配なんかすんのよ」

「……準備、いいですか？」

「ありがとう、味方は霞だけだよ」

「はいはい。コントはその辺にして、とっとと“英雄”を呼んじやいましょう」

「了解。じゃ、いくよ霞」

「……はい！」

霞、そしてもう一人の男が純夏の脳髓が入っているシリンドーに手を向ける。

「思い浮かべるのは、白銀武。霞は純夏さんからリーディングした情報を逐一反芻させて」

「……はい」

「……起きろ、この世界の鍵。そして呼び出せ、世界を救いお前を助ける“英雄”を……！！」

ドクン

シリンダーの光が一層輝いた。と同時に、純夏の意識が活性化し、霞達が顔をしかるほどの声を発しだした。

『…………タ…ケル…チャン…………タ…ケル…チャン！タケルちゃん武チャンタケルチャン…………！！！！！！！！』

「…………成功、したのね？」

「…………はい。後は、武を迎えるだけです。ですが、呼び出された武が“どの”武か分からない以上それは本人と会ってからにしましょう」

「そうね…。じゃ、私は次元転送装置の制作に戻るわ。あと社を私のソファに運んでおきなさい、もう一人の“英雄”さん」

〔 戦術機輸送機ムーリヤ リメントリーシエル 再突入殻内 2000年 11月5日〔ソ連に向けて飛び立ったムーリヤは二機。それぞれに再突入殻を二基ずつ引つ提げ、それに追従する形で中型の輸送機が飛行している。〕

「固定用拘束具正常、推進剤、燃料、バッテリー共に問題なし…。三咲、陽菜、そっちは？」

『こちら二号機（陽菜）、機体に不調は見られず。あるとすればこれから向かう先かしらね』

『三号機（三咲）、こっちも計器類まとめて含めてオールグリー

ンですう。あう…寒いのは三咲が一番苦手なのですよ」

ムーリヤの再突入殻内に搭載されているのは三機のMSに一機の戦術機だ。内分けはストライクE（陽炎型偽装装甲付き）二機にラ
トランスフェイズシフト
ミネート装甲部をTP装甲に換装したヴェルデガー（撃震もどき偽装装甲付き）、それと今年の三月頃に開発された最初の八尺瓊、JGX-03八尺瓊試作型である。

『あゝ、そう言えば三咲、寒がりだったもんねえ。前に赴任先が北海道になりかけて上官に泣きついたとか…』

『あああー！ー！ー！そんな言葉は聞！こーえーないー！ー！ー！ー！』

相も変わらない二人の会話を聞きながら、思い出すのは今から二日前。夕呼からソ連派遣命令を受けた日だ。事前に命令を受けていた整備班により瞬く間に涼子達の機体は運び出されていた。そしてそこで、涼子は整備兵達に励まされここにいる。

「全く、ガーディアンズの副隊長ともあろう者が、情けなかったわ」

反省を込め、もう一度目を閉じ、心を落ち着かせる。

「……………」

『先輩？せんぱい。せーんぱいー！ー！』

「！ど、どうしたの三咲、何かあったの？」

『何か、じゃないわよ！いきなり黙り込んで、私達が話しかけても反応ないんだから』

「…ごめんなさい、ぼんやりしてただけよ。さて、派遣先の基地

まであと二時間ね。三咲、陽菜、二人とも基地まで寝てなさい。昨日、準備と訓練のせいであんまり眠れてないでしょ？」

「うーん……わかった。けど一時間したら交代するわよ。疲れてるのは小隊長殿も一緒ですからね」

「そうですねー。涼子先輩、寝る前に必ずと言っていいほどお肌チェックしてますし……」

ぴくつ、と涼子の眉が跳ねた。三咲が話した内容には誰にも知られないようにこっそり行っていたはず……何故、三咲は知っているのか？

「……へえ。三咲、よく知ってるわねえ。私、誰にも話したこと無いんだけど？」

「それはもう先輩の部屋に仕掛けた盗聴機と盗撮さ……つ……」

「……降りたら覚悟しなさい、まりも直伝の基礎訓練をコピーしてあげるわ」

「……あー、三咲。なんか遺言とかある？ 巖谷中佐と簗中尉、それと宗一用にも」

「……私は……先輩も宗一さんも愛してる両刀なんですー！！だから私は後悔してません！！あと唯依ちゃんにはちゃんとブリッジス少尉をゲットして、って伝えといて下さい！」

はあ、とコックピットの中でため息を吐く涼子と陽菜。そっち系だったのがノーマルに戻りかけたのは良かったのだが、戻りかけた反動でよりおかしい方向に進化を遂げたようた。

「はあ。処置なし……ね」

「ま、何時も通りで良いじゃない。私達らしくてさ」

おやすみー、と言って眠り始めた陽菜に、私もよと心の中で呟く涼子だった。

）ゲラドグルブ基地　　）

基地の中は騒然としていた。燃料を積み込んだトレーラーが走り、簡易整備車両が戦術機ごと移動していた。

「…何だか、キナ臭い空気ね」

「あっち（ソ連）側が機体に乗ってきてくれて言ったわけ、ようやくわかったわ。こんなに騒がしいんじゃない絶対事故ってたもん」

「さ、さむいいー！」

各々の機体を専用格納庫に運び終えたガーディアンズの三人は、強化装備の上に防寒コートを羽織り基地を見渡していた。

今も目の前を戦車が数台通り過ぎ、反対側では対地ミサイルを積み込んだ車両が武器庫から出てきた。まるで出撃直前の様相を呈する基地に、なにか嵌められたような気がしてきた涼子達だったが、突如目の前に止まった軍用ジープに視線を集中させた。

「国連太平洋方面第十一軍、横浜基地所属特殊戦術機甲部隊ガーディアンズの皆様ですね？自分は案内役を仰せつかったルカ・イワノヴィチ少尉であります！」

ジープから降りた少年、ルカは三人の前に立つと敬礼する。

「出迎え感謝する。私はガーディアンズの副隊長の鈴原涼子、階級は大尉だ。後ろにいるのが残りの隊員の牧野陽菜中尉に宮野三咲中尉だ。三人共々、暫くの間だが世話になる。よろしくな、ルカ少尉」

「はっ！此方こそよろしく願います！では、司令部までお送りしますのでお乗りください」

三人が乗り込むとルカも運転席に座りジープを出す。

ジープはガーディアンズ専用の格納庫から離れると反転、基地の中心部に向けて走り出した。

ガーディアンズ専用格納庫はHST発着場のすぐ側にあり、基地の外れに位置している。そこから中央の戦術機格納庫郡を抜け、ようやく司令部へと辿り着くのだ。

戦術機格納庫郡に入ると、そこは基地外縁部以上に慌ただしかった。数十機のMiG-21とMiG-27が指揮車両を引き連れて歩き、戦術機が起動状態でこれだけの数で動いている光景は、涼子達が基地の現状を察するのに十分だった。

五分ほど走り、格納庫郡を抜けたジープは司令部へと到着した。

司令部は光線級対策のためそこまで高くなかったが、周囲が異常だった。

まず、司令部屋上と壁面に無数に配置されている機関砲。これは、少しでもBETAを足止めするために設置されたものと予想できるが、普通はそんなことはしない。BETAが襲いかかってくれば全て破壊されるからだ。

絶対死守。

その意志を司令部が表しているようだった。

ルカ少尉が駆るジープは司令部のエントランス前に停車した。

「ここが司令部です。お降りください」

「わかったわ。……って、何で少尉は降りないの？」

そう、ルカは降りるよう促した後、ぴくりとも運転席から動いていない。真面目そうに見えて実はそういう輩だったのかと視線を陰しくしかけた陽菜だったが、答えは向こうからやってきた。

「ルカ、お疲れさま。後は私達が案内するから、貴方はジープを車庫に戻ってきて」

「了解、フラン姉、レミリア姉」

「もう、任務中でしょ？ルー兄さんが聞いたら拳骨ものよ？」

と、ルカと同じ綺麗な銀髪をショートカットにした少女がたしなめる。そして後ろに立っていたブロンドの長髪の美少女が一步前に出て、二人の頭に拳骨を落とした。

「「いったあああ！?!？」」

「貴方達、いい加減になさい！フラン、貴女もルカの事を言えないと自覚しなさい！……コホン、下の妹弟達が情けないところをお見せしました。私はレミリア・イワーノヴィチ大尉、今は三人だけの白死神小隊の隊長を勤めています」

「あたた……。ワタシはフラン・イワーノヴィチ中尉、白死神小隊の副隊長をやってるの」

「名字でわかると思いますが、僕達三人は姉弟なんです。血は繋がってませんが……」

「そうなんだ……。私は鈴原涼子だ、三人とも、よろしく頼む」

「よろしく！」

「よろしくですう！というか先輩、そろそろその堅い口調止めた方がいいと思います。無理してるのバレバレですよ？」

「そ、そうだったの…？まあそういうことなら、三人とも、改めてよろしくね」

「……はいっ！」「」

「では、改めまして指令室までご案内します。こちらへ」

レミリアとフランに先導され、三人は地下へと通じるエレベーターに乗り込んだ。地下七階に着くとエレベーターは止まり、そこから通路に出て歩くこと数分。あるドアの前に立つと、レミリアがインターホンを押した。

「レミリア・イワーノヴィチ大尉です。国連軍のガーディアンズをお連れしました」

『わかった。入れ』

「はっ！失礼します！！」

司令室は、こざっぱりとした物だった。壁際にあるソファア、部屋の置くには趣味なのかウイスキーのボトルが飾られていた。

「ご苦勞、イワーノヴィチ大尉、中尉。下がりたまえ」

「「はっ！！」」

「さて……ガーディアンズの諸君、ようこそ我がゲラドグルブ基地に。歓迎しよう。私は基地司令のゲルト・M・ビューレッシュだ」

「私達は「紹介は飛ばしてくれて構わん。既に書類で確認しているからな。それよりも、何か聞きたいことがあるのではないのかね？」……」

涼子達を試す用に見つめるビューレッシュ。基地のこの慌ただしさ、戦術機に乗っての現地入り。大体の予想は付いていたが、確信を得るためと後ろの二人とアイコンタクトを取り、ビューレッシュに向き直った。

「では、遠慮なく。…このゲラドグループ基地ですが、明日明後日には出撃するのですか？」

「そうだ。諸君にも参加してもらおう予定だ」

あまりにも理不尽な命令、態度。だが、いつも短気な陽菜でさえ怒ることもせず、ビューレッシュの話を聞いていた。それはなぜか？それは、ビューレッシュの顔に苦渋の色が見えたからだ。

「党からの命令でな。おそらく、諸君の第四世代機のデータ欲しさにこのような暴挙に出たのだろう…」

それでも出撃^{でて}くれるか、と瞳で語るビューレッシュに、今度こそ陽菜がフン！と鼻を鳴らした。

「私たちは佐渡島ハイヴから生き残った部隊ですよ？…余裕で生き残って、その党とやらをギャフンと言わせてやります」

「ふふ…頼もしい限りだな。作戦内容は後ほどイワーノヴィチ姉弟たちに送らせる。ついでだが、諸君に同伴する部隊も彼女等だ。明日までも知れんが、交流を深めておいてくれるとありがたい」

「…はっ！…」

最後に浮かべたビューレッシュの顔は、子供たちを心配する親の顔であった。

作戦は、ハイヴから出現したBETA群の間引き作戦だった。ゲラドグルプ基地の他にもペトロパブロフスク・カムチャツキー基地のジャール大隊ほか戦車・戦闘ヘリ部隊も参加するかなり大規模な作戦である。

BETA侵攻ルートは直線コースにゲラドグルプ基地が入っている。下手に戦線が下がるようなことがあれば基地に被害が出かねない危険なものだ。

ジャール大隊の機体はユーコン基地で改良が為されたMig-21S、Mig-23S、Su-27S、Su-37Sの初期生産型が主体の部隊だが、実力はソ連内でも指折りの部隊らしくだからこそ先行して配備されたとも言えるだろう。

「CPから各部隊へ。作戦開始時刻まで残り三十分、所定の場所まで移動せよ。尚、カムチャツキー基地のジャール大隊は整備トラブルにて発進が遅れている。作戦開始の初期段階はジャール大隊無しとの戦闘となる。注意されたし」

「……って、ホントにキナ臭くなってきたわねえ。整備トラブルってところが余計に」

CPからの通信に、陽菜はやれやれといった具合にため息をついた。これには涼子も同意したいところだが、通信が他部隊の隊長陣と繋がっているため不要な発言はできない。

「はいはい、無駄口言わないの。それよりも私たちの受け持ち先が決まったわ。ここから東に15kmの地点、BETAがわんさかやってくる激戦区よ」

「……申し訳ありません、鈴原大尉。私たちには余裕がないので

す」

そういつて、しおらしく通信を入れてきたのはレミリアの乗るS
U-27だ。彼女たち白死神隊はS U-27で統一された部隊のよ
うで、着任当初からこの機体を乗り回してきたと聞く。

「大丈夫よ。私たちの機体、見てくれは旧式でも“中身”は最新
式だから」

まあ、嘘は言っていない。最新は最新でも、異世界の最新なだけ
だし。

「さて、そろそろ移動するわよ？全機、NOE！」

『『『了解！！』』』

ガーディアンズと白死神隊の受け持ち場所に着くと、すでにそこ
には戦車大隊と自走砲群が臨戦態勢で配置されていた。邪魔になら
ないよう少しコースを取りながら近づくと、戦車大隊の大隊長か
ら通信が入った。

『こちら、カムチャツカー基地の第三戦車機甲大隊だ。白死神の
嬢ちゃん達とは久しぶりだが、見慣れない砲撃機持ちがガーディ
アンズか？』

「そうです。こちらこそ、今日はよろしく願います！」

『おう、こちらもよろしく頼むぜ？ま、ゲラドグルブ基地の奴ら

と俺達はソ連軍でもはみ出し者の集まりだから、他の部隊じゃこうはいかん。そこんとこ、わかつとくと後が楽だぜ?』

「……ご忠告、感謝します」

『ま、気にすんな。…さて。そろそろ時間だな。第一、第七、第九戦車隊前進開始!』

土煙を上げて前進を開始する戦車部隊。それに続くよう自走砲もゆつくりだが前進する。

そして数分後。自走砲群の砲撃が始まり………地獄が始まった。

新章第三話 北の大地にて勾玉は光る（前書き）

えへ、お久しぶりでございます。バイトが始まるなどで執筆時間が減るなど色々あって遅れましたが、ようやく形になったので投稿します。

お知らせですが、TE編第五話の〇一式発表のシーンを変更しましたので一読いただければ混乱は少ないかと。

新章第三話 北の大地にて勾玉は光る

『H Q、こちら第九戦車中隊！B E T Aの数が想定以上だ！支援は無理なのか！？』

『こちらH Q、現在整備の完了したジャーナル大隊が急行中だ。それまで戦線を維持せよ』

『…チツ、了解！』

戦闘開始から数十分。B E T Aの数は減るところが増える一方だった。

既に戦車大隊の二割がB E T Aの波に呑み込まれ壊滅、戦術機隊にも少なくない被害が出ていた。

「ガーディアン2、フォックス1！」

「ガーディアン3、フォックス2！」

「ガーディアン4、フォックス4！！」

ノワールストライカーのリニアガンが突撃級を正面から撃ち抜き、I・W・S・Pの単装砲と115mmレールガンが周囲に散在する中・小型種を纏めて吹き飛ばす。おまけとばかりにヴェルデガ1のミサイルポッドから八発のミサイルが放たれ、要撃級を葬り足止めする。が…

『クソッ、第二中隊の反応途絶！戦線を下げるぞ！！』

『H Qから大隊長、それは許可できない。支援砲撃を開始するのでその間に戦線を立て直し、維持せよ、繰り返す戦線を立て直し維持せよ！』

「無茶苦茶過ぎる！ここの部隊を食い潰すつもりなの！？」

あまりにも理不尽な命令に、コンバインシールドのガトリング機関砲を斉射しながら通信機に吠えた。支援砲撃といっても、殆どは遠く離れたハイヴに固まっている光線級に撃ち落とされ効果が薄いのだ。それなのに…

「先輩、今から八尺瓊を八口で呼び寄せましょう！あの子なら問題なく辿り着けます！！」

肩のガンランチャーとビーム砲で纏めてBETAを吹き飛ばしていた三咲から意見が出される。確かに、あの面制圧力があれば時間稼ぎもできる。

「…わかったわ。三咲、お願いね！」

「了解！……“H・A・R・Oシステム”起動確認、パープルハ口とのリンク成功……来ました！」

「よし！HQ、こちらガーディアンズ！今からこちらの第四世代機を投入する。問題ないな？」

「……ゲラドグ룹基地から発進する機体を確認した。増援感謝する」

「こちら大隊長！そいつの性能、信じて良いんだろうな！？」

通常通信から、戦車隊の隊長から切羽詰まった声が響く。その中には、僅かな希望にも縋りたい、という思いが見え隠れしていた。

「ご安心を。日本の…あの機体を造った者達の力を信じて下さい」
「……了解！残存戦力に通達！あと数分で強力な援軍が来る、それまで何としても耐えきれえ！！」

『『『了解！！』』』

そこからの戦車大隊は凄まじかった。熟練の衛士でも狙うのが難

しい突撃級の足を撃ち抜き転倒させ、BETAの流れを塞ぎ止め同士討ちさせる。さらにそこから超低空飛行で駆け付けた戦闘ヘリ部隊がロケット砲やガトリング砲を容赦なく撃ち込んでいく。

「す、すごい…！」

三咲がアンチビーム爆雷を上空に散布しながら、感嘆の声を上げる。戦術機が殆ど存在しない戦場でみた戦車隊の戦果は、我等が主役だと言わんばかりの活躍ぶりだった。

『っ！？こ、こちら第八戦車隊、要塞級を視認！！対処を…！』

「ガーディアン4、フォックス1！！」

要塞級と聞くと、三咲は腰のM9009B複合バヨネット装備型ビームライフルを連結させ、高威力のビーム砲を放つ。緋と白のビームは真っ直ぐ要塞級に向かい、射線上のBETAを絶命させながら要塞級の頭部から腹までを貫いた。

通常配備され始めた〇一式とは一線を超えるその威力に、ソ連側の部隊は一様に目を剥く。

「来た！HQ、こちらの第四世代機が間もなく来るわ。射線確保のため戦車隊を後退させて！早く…！」

『……HQ了解。今後退指示を出した。戦果を期待する』

通信が切れるとすぐに、後ろから地上をホバリングで進んできた八尺瓊が停止した。ホバリングを切り、機体固定用のパイルバンカーが撃ち込まれる。後退しながら全力射撃を行っている戦車隊から好奇の視線を受けながら、八尺瓊は両腰の試製99式電磁投射砲と両肩のビームガトリングのチャージとアイドリングを始めた。ギリギリと電圧を高める音が響き、電磁投射砲の砲口から火花が散る中、

八尺瓊はすべての準備を整えた。

「八尺瓊、射撃準備完了！何時でも撃てるですう！」

「よし！八尺瓊、電磁投射砲、ビームガトリング砲、射撃開始！

」

『薙ぎ払ウゼ！ 薙ぎ払ウゼ！』

瞬間、八尺瓊は太陽と化した。

腰からはプラズマ光を発しながら超光速で発射される120mm砲弾がBETAに襲い掛かり、それより早くビームガトリング砲のビームがBETAに突き刺さる。

ビームが頑強な突撃級の外殻に穴を開け、脆くなった外殻に120mm砲弾が突き刺さり貫通。一発で数十体ものBETAを葬り去った。

僅か十数秒足らずの斉射。しかし撃ち出される砲弾は秒間十発前後だ。それだけで地表に展開していたBETAの80%が消え失せた。

『『『『うおおおおおー！！！』』』』

爆発音かと間違えかねないほどの歓声。それは、ソ連軍側の戦車隊や戦闘ヘリ隊から上がっていた。戦術機隊も今の光景が信じられないのか、砲撃が止まっていた。

が、それもすぐに終わる。電磁投射砲の被害を免れた後続のBETAが押し寄せてきたからだ。が…

バシユシユシユシユシユ

！！

第二斉射。初期の99式とは違い、砲身内に部分的だがPS装甲を使用した電磁投射砲は一撃で壊れるなんてことは無くなっていた。

電力をチャージし終えた八尺瓊はもう一度トリガーを引き、今度も同じように左右から中心に向かって銃口を移動させ、BETAを削る。

結局、”遅れに遅らされた”ジャール大隊が到着するころには、BETAの死骸の除去作業に入った後方部隊がいるのみであり、その作業を手伝わされる羽目になったのであった。

）ゲラドグルブ基地 PX（

『それでは、我が基地の部隊を救い、多大なる戦果を上げた』

「大隊長、前置きはいいいんでさっさと始めましょうぜ!? 料理が冷めちまう!」

「「「そうだそうだー!」」」

『お前らちったあ我慢せんかあ

! !』

何時もはもつと余裕のあるであろうPXの中は、基地中の人が集まりすさまじいほどの込み具合であった。司会、もとい盛り上げ役を買って出た戦車大隊大隊長が立っている舞台が高くなけれ大隊長が見えないほどに。

「な、なんだか、今まで持ってたソ連軍のイメージがガラガラと崩壊する光景ね…」

「ですう」。友達の友達から聞いた話と全然、それはもう360。違つてて何がなんだか…」

「三咲。それじゃあ一回転して元通りじゃない!」

と、この宴会の主役であるはずの涼子達ガーディアンズは目立たないよう壁の花となっていた。大隊長からはステージに上げれと声をかけられているが、今一壇上に上る気になれない。

「ま、ここまで、99式の戦果」に喜んでくれるとは、予想外だったけどね」

99式電磁投射砲。アラスカで0一式とともに公開された兵器だが、その存在は今まで日陰者扱いされていた。0一式のインパクトが余りにも強すぎたため、ただ、実弾を毎分800発連射できる、程度の実弾兵器に各国はさしたる興味を示さず、光学兵器ばかりに目が行ってしまっていたのだ。

が、日本の最前線では0一式よりも99式の量産を声高に叫んでいる部隊が居る。そう、佐渡島ハイヴ攻略戦を生き残った兵士と、九州防衛線にて八尺瓊に取り付けられた専用99式電磁投射砲の威力を身近で感じた兵士たちからであった。

0一式は、光学兵器ではあるが粒子兵器ではない。密度の薄いビームマシンガンだと貫通できて2〜3体。最も柔らかい部分に当たり続けて5体が限界なのだ。中刀のビーム砲は出力が桁違いなので別だが、毎分800発…つまり秒間一発弱で放たれる120mm砲弾が数十体ものBETAを貫通し殲滅する威力は十分すぎるほどののだ。だが、砲弾にかかるコスト、整備性の悪さなどの諸問題が解決していないことから99式の実用は八尺瓊と海神のみに収まっているが、上層部はいずれ0一式の生産ラインを売り払って99式を全面的に押し出そうとしている…ようだが、詳細は一仕官でしかない涼子達には窺い知れぬところで、実際は違うのかもしれないが…。

「そうね。彼らが喜んでるのは“99式電磁投射砲”の戦果！私達はおくまでもおまけ」

この宴会が始まる前に挨拶にきた政治将校を思い出し、ため息が出た。人類存亡の危機だというのに、彼等はまだ政争などという馬鹿げた争いを内部に抱えているのだ。信用しろというのが土台無理なことなのだ。

「……まあ、少なくともあの男は純粹に、貴殿らの戦果に感謝している。そこはわかってやれ」

と、涼子達の横合いから声かけられる。振り向けば、端正な顔立ちに鋭い目付き。クールビューティーとは彼女を表すためにだけあるような金髪の美女が立っていた。

「……あなたは？」

「貴様、中佐に向かってなんて言葉遣いだ!？」

陽菜が突然話しかけてきた女性にぶっきらぼうで返すと、副官と思わしき少女が飛び出てきた。階級は……大尉だ。

「ターシャ、口を慎め!それでも我が隊の苦勞を減らしてくれた恩人だ」

「……申し訳、ありませんでした」

「ま、あたしは心が広いから、許してあげないこともないわよ?ター・シャ・ちゃ・ん」

「くっ……」

会って早々、陽菜とターシャは額をつき合わせて唸り始めた。またか、という表情でため息を吐いているガーディアンズとは違い、ラトロワ中佐は驚いたような顔をしていた。

「なにかありましたか？」

「……いや、ターシャがここまで素直に感情を表に出すのを初めて見て、な。少し感じる部分があったただけだ」

どこか憂いを感じさせるその表情に、何ともいえなくなる涼子。
が、そんな二人の微妙な沈黙は三咲の悲鳴によって破られた。

「り、涼子先輩……！陽菜先輩を抑えるの手伝ってください……！！
このままだと……！！」

「……お前も、苦労しているのだな」

「そうですね。でも、そこが私たちガーディアンズですから！」

そついった涼子の顔はとても晴れやかで、自信にあふれるものだった。

そして、陽菜とターシャ……ナスターシャはそれぞれの上官に拳骨を喰らいPXの冷たい床に崩れ落ちるのだった。

それから二日後。ソ連側の軍上層部は日本側に99式電磁投射砲の技術提供を打診してきた。が、日本帝国側の対応は冷たいものだった。

それは拒否。もちろんアメリカ側も積極的ではないものの交渉を持ちかけてきたが、それも全て悠陽の勅令により一刀両断された。理由は、以前〇一式の使用規約に関する条約と同じものだった。

強力すぎる力は争いを呼び起こす。しかもまだ試作兵器の域を出ていない、という建前を盾に強引にソ連の矛先をずらしたのだ。その影に、少々怪しいおじさんの暗躍があったと噂されるが、詳細は

不明である。

が、こんなことで諦めるほどソ連は素直ではない。限りなく黒に近いグレーな手だろうと使ってくるのが明白だったと外交担当官からの知らせを受けた悠陽は、その報告を聞いた後いずこかに連絡を取るのだった。

そして二週間後。寒冷地耐用試験、並びに実戦でのデータを取るという名目でユーコン基地から不知火・貳型のソ連軍、ペトロパブロスク・カムチャツキー基地への派遣と、ガーディアンズの本拠地への派遣が決定したのは同じ日にちだった。

新章第四話 西と東は闇に包まれる（前書き）

一ヶ月以上経ってしまいました…。申し訳ありません、としか弁解のしようががががが。

では、遅れに遅れた最新話、どうぞ！

新章第四話 西と東は闇に包まれる

「 アラスカ ユーコン基地 統合司令部 十二階 プロミネンス
計画本部 」

「 …… カムチャツカー基地での実戦テスト。それは、確定事項なのでしょうか？ 」

「 いえいえ、ただこちらは“一緒にどうですか？”とお誘いしているだけですよ、ドゥール中尉 」

唯衣とイブラヒム他、基地司令のハルトウィック、サンダークとその副官、それにフランク・ハイネマンの六人だけが集まった会議室には、重苦しい空気が流れていた。

「 …… こちらは開発責任者の一名が行方不明な上、その代わりとして簗中尉が臨時で入っている。そのような余裕があるとお思いですか？ 」

「 おや？ 私の聞いた話だと、矢羽田大尉の計画は“事件”前に八割方終わっていると聞いておりますが。それに、残っているのは実戦テストのみ。ならば丁度良い機会ではないですか！ 」

先程からしゃべっているのはサンダークの副官だ。確かに、彼の言う通り宗一の計画は最終段階に入っている。厳しい環境下でどれだけ性能が上下するかのデータがあれば、完成と言って良いほどだ。

「 それに加え、此度の試験には正規軍の護衛が付くという好条件！ こんな待遇、滅多に無いことですぞ？ それも、日本帝国が第四世代機でゲラドグルブ基地を救ってくれたからこそなのです 」

「 その恩をそこで返そう、という事でよろしいのかな？ 」

「ええ、ドゥール中尉の仰るとおり。既に欧州、南アフリカ、中華統一戦線も参加を決定しております。……ああ、そういえば。貴^{アメリカ}方も精鋭部隊を派遣させるそうで？ 確か……」

「ええ。我が国が誇る最新鋭機、F-22を駆る第65戦闘教導団『インフィニティーズ』です。……あの忌々しい事件の後、我が国に対する風当たりは相当なものでしてね。もう形振り構ってはいられないですよ」

F-22。その機体名を聞いて、唯依とサンダークの顔が驚きに染まった。日本が第四世代として公開した三種の神器シリーズは、その開発……もとい改良スピードの速さもあって、実戦配備はされているものの滞っている状態だ。が、F-22に関しては、既に一部の精鋭部隊には配備されて、実戦でも使われている。

実戦に関しては、こちらも似たような状況だが、それはハイヴ内や限定的な地上戦のみ。世界各地で分散させ、その分機体のデータを収集していたF-22のほうで、完成度言えば圧倒的に上なのだ。性能は別として。

だがそれを差し引いても、アメリカが“たかが”共同試作機の実戦テストのためだけにこんな部隊を動かすのは……おかしい。

何か裏がある、と警戒する唯依だったが、それも徒労に終わってしまう。会議の終わった翌日、衛星を介した長距離通信で巖谷から正式にアルゴス試験小隊の実戦テストが決定してしまったからだ。

『すまん、唯依ちゃん。こっちでも止めようとしたんだが、抑えきれなかった……』

「お、おじ様……」

『だが、只では転ばんよ。不知火・弍型用の電磁投射砲兼〇一式対応新型兵装……覚えているだろう？』

「え！？ ですがあれは、まだ試作段階だと……！」

『つい先日だが、横浜のミスリルちゃんから届いたんだよ。この

事はまだお偉いさんも知らない、開発局の現場でしか知られていない情報だ。だから、持って行って敵に奪取されん限り問題ない」

「ですが、そのようなことをしてはおじ様の立場が…！」

『なあに。娘が困っているんだそれを助けないで何が親だ。…俺はな、唯依ちゃん。あいつから唯依ちゃんを託されたときから、何があろうとも唯依ちゃんを守ると決めてたんだよ。俺の立場一つで唯依ちゃんお安全が確保されるなら、安いもんさ』

「おじ様…いえ、巖谷中佐、ご協力ありがとうございます！」

『うむ。では、任務の成功、期待しているぞ』

何時も通りと変わらない、巖谷とのやり取り。それがどれだけ心強いことか…。

祖国を離れ、海外に一人派遣された唯依は、任務に対する責任と重圧に押しつぶされかけていた心が、ふっと軽くなるのを感じるのであった。

〃 日本帝国 帝都 〃

「これで、いいんだな？」

「ええ。ありがとうございます、中佐」

「ふんっ。今まで音沙汰無かった奴が突然現れて、謝りも無くこれだ。よほどの事情があったんだろう？今回は貸しにしないとやるが…今まで俺たちにかけた心配、どうやって返すつもりだ？」

「それはもう、“ハイヴをこの地上から消滅させる”以外に何がある？」

「……変わったな、お前も」

「…ええ。そうじゃなきゃ、やってられませんよ」

「ふう…。あとの諸々の手続きは任せろ。お前はさっさとソ連に行つてあの娘達を守りに行つてやれ」

「はい。では…」

音も無く、背後に立っていた男の気配が消える。初めてあつたときとは違い、その男は甘さというものを極力排除した戦闘マシンのようになっていた。そうさせたのが自分達だと自覚しているからこそ、尚性質が悪い。

「…せめて、彼にも幸あらんことを」

今の巖谷にできることは、それだけであつた。

〔 原子力戦術機空母 曙 あけぼの 旧名ジョージ・ワシントン 艦橋 〕
横浜基地に程近い軍港に、先のクーデターで接收し帝国軍所属となつた空母、曙の姿があつた。

国旗が日の丸になつた以外に、英語だつた文字が日本語になつていたり、多少の変化は見られるものの、見る人が見れば一発で元の艦名がわかつてしまうほどの改修の無さだつた。

そんな曙のブリッジに、日本帝国に亡命したアンダーソンとその副官、部下たちは、次々と横浜から運び出されるコンテナを見て目を丸くしていた。その全てが新兵器の交換パーツや試作機の強化パーツと聞かされていたからだ。

「アンダーソン艦長、物資の搬入、八割が終了しました！」

「よし。本艦は物資搬入完了後、すぐにでもこの港を出港し、先
行している強襲戦術機揚陸艦ミトロファン・モスカレンコと合流を
急ぐ。各員、いつでも出航できるよう待機せよ！」

「了解！！」

『了解！ 了解！』

「……なあ、スノー大尉。君はあのハ口とかいう機械をどう思う
かね？ 私はいまだ、あのようなボールがこの艦を動かしている乗組
員の一人とはどうしても思えないのだよ」

「それを自分に聞きますか、艦長？」

アンダーソンは部下とともに返事を返してきた色取り取りのハ口
達を見つめ、後ろに控えていたマールカス・スノー大尉に話しかけた。
元はウォーケン少佐の部隊に所属していた彼だったが、先のクー
デターの一件でアメリカを見限り、日本に亡命した一人だった。

「はは、なあに。この老体では新しいことに慣れるには時間がか
かるのでな。まだわしより若い大尉なら、と思ったまでだ」

「……はあ。それなら、ウォーケンに聞いたほうが早いでしょう。
あいつ、何故か緑色のハ口を自分専用とか言って部屋に持ち込んで
る位なんですから」

「……は？」

『嘘ダ！ 嘘ダ！ 嘘ダ！』

「いや、本当の話さ。……まあその話はおいといで。自分的にはい
いと思っています。この世の中、ここまで人間に近い人工知能を搭
載した物があるなら、有効に使うべきです。我等亡命組に与えられ
た戦力は少ない。戦術機とてラプターは本国……いえ、アメリカが持
つていきましたから、あるのはF-15やF-14。ウォーケンや
俺なんかは、実力があるってことで第四世代機の試作機なんか回さ
れましたが、そんな状況です。ある一定水準以上の能力を持つハ口
たちはありがたいことはあっても困ることはありません」

「そうか…。すまなかつたな、変な事を聞いてしまつて」

「いえ。艦長のお役に立てたならよかつたです！」

いつも通りの会話。一時は諦めていたその光景に涙し、この光景をもう一度見せてくれた日本政府に、アンダーソンは感謝するのであつた。

それから三十分後、曙は軍港を出港すると、進路をソ連へと向けるのだつた。

「少佐、緑のハ口のどこが気に入つたんですか？」

「っ！？テ、テストフ中尉、なぜそれを！！」

後日。艦内の食堂で噂を聞きつけたテストフに詰め寄られ、顔を青くしたり赤くしたりと大慌ての少佐が見られたとか…。

新章第四話 西と東は闇に包まれる（後書き）

Chronicles 02、友人に借りてプレイしました！
01を未プレイだったので、今度宝島で中古でも探してプレイします！

…にしても、憧憬は হচ্ছেましたね。

新章第五話 古き縁は良縁になる（前書き）

長い…長かった。最近が月一更新になっているので話が全然進みません…。プロット上ならとくに完結してるはずなのになあ…。書こうとしたらあれやこれやと色々な考えが邪魔をして……

などという作者の愚痴はともかく、最新話です。

新章第五話 古き縁は良縁になる

ソビエト社会主義共和国連邦・カムチャツカ州 アヴアチャ湾
近海

ミトロファン・モスカレンコに搭乗していたユウヤ達XFJ計画の主要メンバーと、ユーコン基地から合流したアメリカ陸軍精鋭部隊『インフィニテーズ』のレオン・クゼは、日本の増援として派遣された空母曙を見て、微妙に表情を引き攣らせていた

所々は改装されていたものの、その殆どが空母ジョージ・ワシントンと同じなのだ。元とはいえ自国の失態によって日本帝国が接收したのは知っていたが、それを目の前で実際に見るのと聞くのでは受けるショックは桁違いだったのだ。

「……はあ。ホントーに、日本に接收されてたんだな、ジョージ・ワシントンは」

「だな……」

そんな風にモスカレンコの甲板上から眺めていると、曙のほうに動きがあった。戦術機を載せたエレベーターが起動し、機体がせり上がって来たのだ。

「あれは……F-14Aか？」

「……だな。だがなんであの機体が日本に……？」

競りあがってきた機体は二機。二機ともアメリカが開発した最初の二世世代機のF-14（トムキャット）だ。両肩に大型クラスターミサイル“フェニックス”の運用を目的としたアタッチメントを装備したこの機体は、今はそのミサイルケースを取り外し見慣れぬ装備を突けて大空へ飛び立とうとしていた。

「発進シークエンスも終わってる…何が目的でここから出るんだ？」

「先に基地に行つて挨拶……はありえないな。視察なんかか？」

仲睦まじげに話しているこの二人は、実を言えば再開した時は凄まじく仲が悪かったのだ。それがここまで回復するとは…と、何が起こつたのか一部始終を見ていたヴィンセントは目をつむつた。

） シアトル フォートルイス基地 ）

ユーコン基地から輸送機に機体ごと積み込まれたユウヤ達アルゴス試験小隊の面々とイーダル試験小隊、暴風試験小隊、スレイヴニル小隊、ガラム変則試験小隊、ドゥーマ小隊の計六小隊が、フォートルイス基地の滑走路に降り立っていた。理由はもちろん、戦術機を艦に載せて輸送するためである。

航空輸送のほうが速いのではないか、という意見が格小隊から出されたが、それは輸送に掛かるコストとアメリカ側が出した要望に答えるために却下された。その要望というのが…。

「インフィニティーズ…か」

案内されたフォートルイス基地のPXで、ユウヤはヴィンセントとセレスと共にこの基地で合流することとなつたインフィニティーズに関する資料を眺めていた。その傍らには、甲斐甲斐しくも試験小隊の衛士全員分のお茶を配っているミスリルがいた。

日本の第四世代戦術機に関してもこの実地試験に関わっていたよ

うで、その開発にも実際に関わっていた彼女がついてくる事を知ったときは驚いたものだった。

見た目がエレメンタリースクール生にしか見えない少女が戦術機開発に関わっている…それを言えば〇一式の基礎をほぼ単身で開発した宗一もそうなのだが…。

「はい、ユウヤさん、ヴィンセントさん。コーヒーです」

「お、サンキュ！気が利くねえ」

「ありがとう、ミスリルちゃん」

笑顔で飲み物を配っているミスリルの表情には暗い影は見られない。隠しているのか、本当に克服したのかはわからないが、その健気な姿はこの試験小隊全員のハートを掴むには十分だったのだろう。今では全員が笑顔で迎え入れるほどになっていた。

閑話休題。話は戻るが、アメリカ軍が対戦術機戦を想定して創設した特殊戦教導部隊…インフィニティーズ。資料によれば、構成されているのは全て先行量産型F-22Aラプターで、ラプターを実戦運用する部隊とされている。

明らかにBETA戦後の事を考えられて作られた戦術機に部隊。G弾推進派と呼ばれるユーコン基地と日本帝国でクーデターを画策した一派がなくなっても、アメリカの戦術ドクトリン…もとい考えが変わる筈もない。

BETAに対抗するために作り上げた戦術機は世界各国に散らばり、今ではその国独自の技術や戦術ドクトリンで作られた戦術機も存在する。戦術機を生み出したアメリカとはいえ、その広めた戦術機によって本土が脅かされる可能性が否定出来ない…そう考えた上層部の意見に答えて作られたのがF-22Aだった。

そのことは悪いとはいわない。確かに起こりえる可能性の一つとして考えなくてはならないが、今はそんなことをやっている場合ではない、というのが格小隊の殆どの意見だった。

「アメリカさんが寄越した護衛、か…。それにしちゃ、随分とまあ豪勢なことだねえ」

何時もと変わらない飄々とした口調で、V Gがそうもらす。今回同行する試験小隊の殆どが集まった中、誰も喋らず静かになっていたところにV Gの声はよく響いた。

「…ま、仕方ないだろ。アメリカさんは、今じゃどこの基地に行つたつて邪険に扱われる。それほどの失態を取り返すには、これくらいじゃまだたりないんだろう」

「でも、これはこれで有難いつすね。なんせ、生でF - 22 Aが見られるなんて滅多にないんすから!」

その呟きに答えたのは、ガルム小隊に所属している2番、ラリー・フォルク中尉。そしてそれに乗るように明るい口調で喋ったのは3番のパトリック・ジエームズ・ベケットだ。

「はあ…。相変わらずお前は気楽だな。その性格が羨ましくなるぜ」

「いやあ、それほどでも!」

『『』ぜってえ誉めてないから、それ』』』

そう思った一同だった。

「でもま、機体がすごくてもパイロットがへボじゃねえ。な、ユウヤ! …ユウヤ?」

「……………」

「おい! 聞いてんのか? ……………おい!」

資料に目を向けたまま、全く動こうとしないユウヤに苛立ち、声を掛けていたタリサが切れて怒鳴りつけたのだ。

「!？ な、なんだよチョビ、いきなり怒鳴るな！」

「ユウヤが無視するからだろうが！ああ!？」

「何か気になることでも書いて……ああ、コイツのことが」

「どれどれ…？ ああ、あの二人のことね」

何かあったかともう一度資料を深く読み直したヴィンセントとセスが見つけたのは、資料の一番最後に書かれたパイロットのことだった。そこに書かれていたのは四名。小隊長のキース・ブレイザー中尉に続き、小隊員のガイロス・マクラウド、そして…。

「レオン・クゼに、シャロン・エイム……か。また懐かしい名前が出たな、ユウヤ」

「……ああ」

「？ 誰だ？」

「……別に、ただの」

「同僚で、恋人だっただけ。そうよね、ユウヤ？」

恋人。その単語が見ず知らずの女から飛び出した途端、タリサはメデューサに睨まれ石化した旅人のように固まってしまった。そしてユウヤも、突然自分とは反対側のPXの入り口から響いてきた懐かしい声に、しまったと体を硬直させてしまった。それが運の尽きとも知らずに。

「うん？うん??? なあ諸君、今、“恋人”と聞こえなかつ

たかね？あの堅物ユウヤに!!」

「な、待てVG……」

「へえ」。あの紅の姉妹を落とした戦術機に勝ったエリート様に

も、そんな一面があったとはね」

「……まあ、がんばりなさい」

「……はあ。もう知らねえ。格納庫行って機体の整備でもしてくるわ」

「あ、ならわたしも付き合っわ」

「おおっ！ 恋話か！？ こいはなこれは乗らなきゃ損ですよ隊長！」

上から順にV G、ユウヤ、崔 亦菲、ステラ、ヴィンセント、セレス、スレイヴニル小隊の女性衛士だ。さっきまで静かだったP Xが一瞬で騒がしくなり、ユウヤはどう收拾をつけるべきかと頭を抱えた。

「ふふ…楽しそうな部隊ね。さて、冗談はさておき…久しぶりね、ユウヤ。元気そうだなによりだわ」

「……お前もな、シャロン」

豊かに広がる金髪をなびかせて、シャロン・エイムはにっこり笑うとユウヤに近づくのだった。

「……で、何でわたしはあなたと一緒にココにいるのかしら？」
「お前が変なこと言ったせいだろうが！」

場所は戦術機格納庫…の裏。あの後怒涛の質問責めにあったユウヤはなんとか隙を作り、これ以上噂を広めかねないシャロンを引っ張りここまで連れてきたのだ。

「あら。ユウヤのことだから部隊に溶け込めてないだろうと思っ
たわたしの親切心だったのだけど？」

「余計なお世話だ！……お前が心配するようなことにはなっ
てない。もう、あいつらとは戦友だからな」

あら、とシャロンは驚いた顔でユウヤの顔をしげしげと眺めた。
自分と別れる前の彼であつたら、まず見せないであろう表情をして
いたからだ。そのことに嬉しくなると共に、少しばかり胸の奥がチ
クリとなるのだった。

「……そう。本当に良かったわ。これならレオンも安心するわ」

「…そういえば、あいつも来てるんだったな」

「ええ。それにしても驚いたわ。あの日本嫌いのユウヤが日米共
同の戦術機開発のテストパイロットになっているなんてね。レオン
も驚いてたわよ？まそれ以上にまたあなたと戦えることを喜んでた
みたいけどね」

もう一人、このシャロンと共にこの基地に来ている昔の仲間、レ
オン・クゼ。自分とは違い日本人としての誇りを第一にした、日系
アメリカ人だ。日本嫌いの俺とは真っ向から違ったレオンのことは、
関わればこつちが切れることがわかっていたので無視していたが、
まさかそう思われていたとは思わなかった。なんとも言えない微妙
な心境だ。

「あ、いい忘れる所だったわ。わたし、今レオンと付き合ってる
のよ」

「へえ、それはよかった……ちょっと待て！今あいつと付き合っ
てるのか！？」

「ええ」

「…よく俺の前に出てこれたな。気まづくないのか？」

レオンと付き合っている。その事実には驚くと共に、心の中ではやはり、と思う部分もあった。こんなに良い女をあいつが放っておくわけもないし、今思えばこんな暗い性格の男よりはレオンのほうがシャロンとお似合いだ。

「別に大丈夫よ？レオンにはちゃんとやってあるし。それに、レオンだってそんな細かいことで怒ったりしないわ」

「……………」

何故か、シャロンがそう言った瞬間シャロンの尻に敷かれるレオンの姿が思い浮かんだが、すぐにそのイメージを消した。流石にそれはないだろう、と想着。

「それに、もうそろそろここに来るしね」

「は…？」

今、コイツは何といった？もうすぐここに来る？一体誰が？まさか…。

「そう、レオンよ。この前のクーデター事件のせいでアメリカ軍の心象は最悪でしょう？だから、今はどの部隊でも部隊員に発信機を持つことを義務付けられてるの。…安全のために、ね」

「…そうか」

「で、こんな人気のない妖しい場所にわたし一人だけ…。さあて、レオンはどう判断するんでしょうね？」

「……………」

マズイ。非常にマズイ。下手したらここに武装した守備隊が押し

寄せてくるかもしれない。しかも格納庫という巨大な建物の影にな
っている場所に引き込まれたとしたら…。

「…ロン！ シャロン！！ 無事……か……？」

「レオン……」

「ユウヤ…？お前、なんでここに？」

「…クス」

このとき、ユウヤは見逃さなかった。いつもは柔らかな笑顔をた
たえていたその顔に、悪戯を思いついた少女のような笑顔が浮かん
でいるのを…。

「レオン、助けて！ユウヤったら、わたしがレオンと付き合っ
ていつた途端ここに…！」

「な、ちよつと待て！俺はそんな…！」

「……ほお。ユウヤ、お前がそんなことをする奴だったか？俺の
記憶だと、お前はこんなことをするような奴じゃなかったはずだっ
たんだがなあ…。覚悟はいいか？」

「…ッ！ 待てレオン！俺の話を聞け！」

「問答…無用…！」

容赦なく放たれる右フック。その鋭い一撃を顔を傾けることで何
とか避け、距離を取ろうと下がるが…

「甘い！」

「クッ…！」

獲物に喰らい付く獵犬の如く、一瞬で距離を詰めてきたレオン。
そのまま左右右左…と息つく暇を与えぬ連続ラッシュにユウヤは後
退を余儀なくされ、遂に壁際まで追い詰められてしまった。

「へっ！もう逃げられねえぞユウヤ！いい加減観念しろ！」

「ッ！だからお前の勘違いだつて言ってるだろ！後ろのシャロンを見る！！」

「…………勘違い？」

「ああ！」

あまりに必死なユウヤの言い訳と、自分の頭に浮かんだ嫌な予感が合わさって冷静さを取り戻したレオンは後ろを見る。するとそこには、さっきまでPXにいた筈の試験小隊の面々と警備兵達にトトカルチョを持ちかけていたシャロンの姿があった。

「……………」

「……………わかったか？」

無言で構えを解くレオン。顔は俯いたままだが咳払いを一つ付くと顔を上げ……

「よっ、ユウヤ！久しぶりだな！元気そうで何よりだ！」

先ほどの殴り合いが無かったかのように笑顔でそう宣った。

「……………（ピクピク）」

「ははっ、やっぱりお前があんなことするわけ無いよな！？悪かったからその拳を降ろせ！！」

「……………はあ。まあいい。久しぶりだな、レオン」

「…おう。お前、変わったんだな」

「ああ。シャロンにも言われたよ」

そこまで話して、互いに示し合わせたように笑いあう。その光景

を見て、シャロンは優しい笑みを浮かべるのだった。

くミトロファン・モスカレンコ 甲板 く

突如、上空で響いた轟音にヴィンセントは意識を現実へと戻した。見上げれば、曙の甲板にいた二機のF-14Aが上空をフライパスするところだった。やはり何のために？という疑問が尽きなかったが、それはアヴェエチャ湾から近づいてくる光点を確認して納得した。万が一のための護衛だったのだろう。

近づいてくる光点は四つ。F-15J（陽炎）に似たフォルムの機体が二機、どこか八尺瓊に似たF-4J（撃震）が一機に、八尺瓊が一機飛行しながらこちらに向かって来ているのだ。

「おお！？おい見てみるよユウヤ、レオン！あのF-15J、宗一が作ったSシステムの実証試験機だぜ！」

「お、ヴィンセントか。いつの間に後ろに居たんだ？」

「……そりゃねえだろ……レオン」

「Sシステム？何だそれ？」

ユウヤのあまりにも、な答えに、ヴィンセントはその場でずっこけた。

「お、お前なあユウヤ！お前ユーコン事変の時格納庫に居ただろ！？」

「お、おお……」

「思い出したな？ならそんな時、格納庫には何があった？」

「それは……あ」

「わかったか？あの時集められた機体はSシステム…ストライカーシステムの実証試験機の為に集められたんだぜ」

ヴィンセントが言うには、Sとはストライカーと呼ばれる兵装モジュールの事で、これは天叢雲が装備していた物がこれに当たると言う。

戦術機の背中にある兵装モジュールを全て取り払い、しかもストライカーユニットと連結するためのコネクタ部分の完全統一化という難問もあったが、そこは〇一式関連のパーツのライセンス生産の価格引き下げで押し通したそうだと。実際、最初は参加に難を示していた二大国が手のひらを返すようにすんなりと認めたことからそれは事実だそうだと。

「へえ…。俺は当事者じゃないからよくはわからんが、結構すぐえ計画だったんだな」

「いや、計画自体は矢羽田大尉が独自で進めてたらしくてな？生産ラインの調整以外は設計段階まで全部終わってたんだよ。ぜってえ、何年も前からこの計画を立ててないと無理なスピードだぜ。ま、これがあったから一発でGOサインがでたんだろうな」

宗一がもたらした戦術機の新たな姿。四機の機体が曙に着艦するのを眺めながら、ユウヤたち三人はそれが終わるまで眺め続けるのだった。

新章第五話 古き縁は良縁になる（後書き）

うゝむ。名前を見て「これはまさか…」と思った読者様は友と呼ばせていただきたいです。あのシリーズは良いものだ…。

と、話は変わりますが気づけばこの小説、130万ヒット超えてました。自分でも見て何の冗談だ？と思って何度も見直しました。

そこで……！

いつの間にか130万超えてたよ？ な短編を書こうと決定しました……！

具体的には、第一候補にオリキャラ（宗一、涼子、陽菜、三咲、ミスリル）×原作キャラのギャグ。

もしくは宗一がオリジナルの戦術機を引っさげて別の時代（クロニクル02はもうやったのでそれ以外）に飛んで、その時代の人と仲良くやる……は、かなり時間がかかるとは思いますが、一応第二候補に。

第三は、作者自身が初挑戦のオリキャラ同士の甘甘ラブストーリー。カップリングは…ノーマルオンリーですがなんとか書けるとは思います。

では、この三つで投票したいと思います。期限は次の話が投稿されるまで！……いつになるか凄くわかりませんが、それをお願いします。

途中経過などは活動報告で上げようと思っています。

では、これにて失礼します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0889/>

Muv-Luv ALTERNATIVE ~ 救済 ~

2011年8月17日23時47分発行